

永 納 山 城 跡

— 平成14年度～16年度調査報告書 —

2005年3月

西条市教育委員会

永納山城跡-平成14年度～16年度調査報告書- 正誤表

頁	行	誤	正
1	29	愛媛県埋蔵文化財センター	愛媛県埋蔵文化財調査センター
182	29	見えたである。	見えたのである。



永納山城跡遠景(南から)



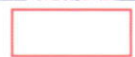
永納山山頂から見た今治平野・燧灘



永納山山頂から見た道前平野



永納山城跡 近景（上が北）



遺跡範囲

序 文

西条市では、市北西部に位置する古代山城「永納山城跡」の保存・整備・活用を目指した第一歩として、旧東予市において平成14年度から3ヵ年をかけ、確認調査を実施してまいりました。その結果として、城壁構造の検出やそれを基とした遺跡範囲の確定など、多くの成果をあげることができました。

古代から愛媛県東予地域が地理的環境に恵まれ、歴史的にも重要な地であったことは様々な記録からも窺えることではありますが、近年、各地で実施されております発掘調査によってもその様相が明らかになりつつあります。そして、永納山城が古代史の中で果たしてきた役割の大きさも再認識されてきたように思われます。今回の調査においても、その一端が明らかとなりました。

本書が古代史研究の一助となることのみならず、地域文化教育、文化財保護活動の向上に寄与するものとなることを願ってやみません。

末筆とはなりましたが、調査を実施し多くの成果をあげることができたのも、関係者各位のご理解とご協力を賜ったおかげであります。深くお礼申し上げます。

平成17年3月

西条市教育委員会

教育長 星 加 映 二

例 言

1. 本書は、西条市教育委員会(平成16年10月31日までは東予市教育委員会)が、平成14年度から平成16年度にかけ実施した永納山城跡発掘調査(国庫補助事業)の報告書である。
2. 発掘調査にあたっては、地権者をはじめとした地元の方々、愛媛森林管理署の協力を得た。
3. 調査範囲中、今治市に属する地域の調査にあたっては今治市教育委員会と共同で調査を実施した。
4. 本書に使用した座標系は世界測地系であり、方位は座標北を示す。
5. 遺跡の基準点設置及び、永納山城跡地形測量図(S=1/500)の作成は委託業務として実施した。
6. 現西条市は平成16年11月1日に西条市・東予市・小松町・丹原町の二市二町による合併により発足したため、報告書中に表記する「市」とは特に断りのない限り、旧東予市を示すものである。
7. 本書の執筆は、渡邊芳貴・半沢直也が主となり行った。なお、本文中以下に記す箇所に関しては、永納山城跡調査指導委員会委員の先生に執筆を頂いた。
第2章 第2節 岡田敏彦委員
第3章 第3節 長井數秋委員
第6章 白石成二委員
狩野 久委員
石松好雄副委員長
第7章については下條信行委員長と渡邊が共同で執筆した。
また、第1章 第1節は長井委員に発見当初の状況を詳細に助言いただき、報告書全般については、下條委員長に助言を頂いた。
各報告については、渡邊・半沢が十分に議論したことは言うまでもないが、文責として主担当者名を文末に記した。本書の編集は、渡邊・半沢が共同で行った。
8. 出土遺物及び関係資料は西条市教育委員会 東予郷土館で保管・管理している。

本文目次

第 1 章	調査の経緯と経過	1
第 1 節	発見から再確認調査に至る経緯	
第 2 節	調査組織	
第 3 節	調査の経過	
第 2 章	遺跡の環境	7
第 1 節	地理的環境	
第 2 節	歴史的環境	
第 3 章	昭和 52 年度～54 年度調査の概略	15
第 1 節	調査の経緯と経過	
第 2 節	調査の成果	
第 3 節	西部調査の成果	
第 4 章	遺跡の調査	21
第 1 節	調査概要	
第 2 節	南西部の調査	
第 3 節	南部の調査	
第 4 節	南東部の調査	
第 5 節	東部の調査	
第 6 節	北東部の調査	
第 7 節	北部の調査	
第 5 章	これまでの調査成果	149
第 1 節	外郭線の特徴	
第 2 節	永納山城跡の年代	
第 6 章	各 論	161
1.	古代伊予国における永納山城	
2.	山城と大宰・総領と「道」制	
3.	北部九州の神籠石から見た永納山神籠石	
第 7 章	ま と め	177

写真図版目次

巻頭図版 1 永納山城跡 遠景

巻頭図版 2 永納山城跡からの風景

巻頭図版 3 永納山城跡 近景

図版 1	土塁版築状況 1	図版 25	南部調査状況 13
図版 2	土塁版築状況 2	図版 26	南東部調査状況 1
図版 3	永納山城跡出土土器 1	図版 27	南東部調査状況 2
図版 4	南西部調査状況 1	図版 28	東部調査状況 1
図版 5	南西部調査状況 2	図版 29	東部調査状況 2
図版 6	南西部調査状況 3	図版 30	東部調査状況 3
図版 7	南西部調査状況 4	図版 31	東部調査状況 4
図版 8	南西部調査状況 5	図版 32	東部調査状況 5
図版 9	南西部調査状況 6	図版 33	北東部調査状況 1
図版 10	南西部調査状況 7	図版 34	北東部調査状況 2
図版 11	南西部調査状況 8	図版 35	北東部調査状況 3
図版 12	南西部調査状況 9	図版 36	北東部調査状況 4
図版 13	南部調査状況 1	図版 37	北東部調査状況 5
図版 14	南部調査状況 2	図版 38	北東部調査状況 6
図版 15	南部調査状況 3	図版 39	北部調査状況 1
図版 16	南部調査状況 4	図版 40	北部調査状況 2
図版 17	南部調査状況 5	図版 41	北部調査状況 3
図版 18	南部調査状況 6	図版 42	北部調査状況 4
図版 19	南部調査状況 7	図版 43	北部調査状況 5
図版 20	南部調査状況 8	図版 44	北部調査状況 6
図版 21	南部調査状況 9	図版 45	北部調査状況 7
図版 22	南部調査状況 10	図版 46	北部調査状況 8
図版 23	南部調査状況 11	図版 47	列石崩落・保護状況
図版 24	南部調査状況 12	図版 48	永納山城跡出土土器 2

第1章 調査の経緯と経過

第1節 発見から再確認調査に至る経緯

(1) 発見から昭和52年度～54年度調査の経過

永納山城跡の発見は、記録に残るものを見ると昭和52年4月に遡る。当時の東予市文化財専門委員による遺跡分布調査中に、東斜面において列石の一部が発見されたのが、そのきっかけであった。この付近は当時、山林火災により樹木が焼失しており、見通しがきいたこともこの発見に幸いしたといわれる。しかし、この発見に遡ること16年前の昭和36年、現・永納山城跡調査指導員の一人である長井數秋氏によって永納山南西部の踏査が行われ、一段からなる石列の存在が確認されていた。その後、昭和40年に長井氏によって再踏査が行われ、この石列が神籠石ではないかと認識されるようになったものの、それ以降に本格的な調査が実施されることはなく、この遺跡が古代山城であると周知されるには、昭和52年の発見と調査を待たねばならなかった。

発見後、間もなく同年7月に最初の試掘が行われるとともに、奈良国立文化財研究所(現・独立行政法人奈良文化財研究所)・愛媛県教育委員会の指導の下、東予市教育委員会により昭和55年2月まで断続的に2次にわたる調査が実施された。これらの調査は主に列石線の確認、土塁構造の確認を中心とした外郭線の調査であったが、この時点で古代山城としての多くの所見が得られた(詳細は第3章にて説明を行う)。これらの結果から、永納山城跡が全国的に見ても重要な遺跡であるとの認識は市民の中にも広がり、調査後史跡申請への動きも自然と湧き上がってきた。市においても調査後、指定に向けた準備を進めていたが、諸事情により、この時点での史跡申請は断念せざるを得なくなった。また、それに伴うかのように遺跡についても、その後継続的な調査が実施されることはなかった。その間、現在に至るまでに永納山城跡は幾度となく開発による遺跡消失の危機にさらされ、その結果一部では採土が列石間際まで及んでいる場所もみられる。このような状況を目の当たりにし、市民の中に遺跡の保護・保存を求める声が次第に高まってきた。

また、永納山城跡に限ったことではなく、文化・文化財に対する市・市民の関心はここ数年で一段と大きなものとなっていた。しかし、その一方では開発事業との共存という問題も抱え、市内の遺跡分布状況・現状を正確に把握することが急がれた。このような中、平成11年度から13年度にかけ、国庫補助事業として市内遺跡詳細分布調査が実施された。分布調査の実施にあたっては愛媛県教育委員会及び愛媛県埋蔵文化財センターの指導を受けると共に、多くの地元住民もボランティアとして調査へ参加し、文化財に対する認識を深めた。この3ヵ年におよぶ調査の成果として、市内の遺跡数はそれまでの約2倍となる315件に増加し、今後の遺跡保護活動へ向け一歩前進した。また、これらの調査を通し市内の遺跡分布状況が明らかになった中で、市では地域の歴史的環境を再認識するとともに、永納山城跡を改めて市の重要遺跡であると位置付けた。そこで市としては、当山城の保存・整備そして地域での活用を目指した事業へ取り組むこととし、その第一歩として、国史跡指定を目指した確認調査を平成14年度から実施することとなった。

第2節 調査組織

調査の組織は次の通りである。

永納山城跡調査指導委員会

委員長	下 條 信 行	愛媛大学教授
副委員長	石 松 好 雄	下関市立考古博物館館長
委員	狩 野 久	元・岡山大学教授
委員	長 井 數 秋	愛媛考古学研究所所長
委員	岡 田 敏 彦	愛媛県埋蔵文化財調査センター
委員	白 石 成 二	愛媛県立小松高等学校教諭

オブザーバー：文化庁・愛媛県教育委員会文化財保護課

事務局の体制

	東 予 市 平成14年度	東 予 市 平成15年度	東 予 市 平成16年度(11月まで)	西 条 市 (11月以降)
教育長	三村 哲雄	三村 哲雄	三村 哲雄	安永 壽(1月24日まで) 星加 映二(1月25日から)
教育委員会管理部長	飯尾 正	飯尾 正	飯尾 正	飯尾 正
文化財室長	武田 秀孝	武田 秀孝	武田 秀孝	武田 秀孝(東予郷土館館長)
調査担当 学芸員	山村 芳貴	渡邊 芳貴	渡邊 芳貴	渡邊 芳貴
臨時学芸員		半沢 直也	半沢 直也	半沢 直也

作業員及びボランティア

青野 秀太郎・櫛部 八郎・高瀬 遵・田島 信恵・利根 千代美・豊田 良郎・日浅 繁隆・楨 重信・三好康夫・村上 修二・渡邊 實 (50音順)

また、3ヵ年にわたる調査期間中には、調査現場に内外にかかわらず下記の方々・機関にご指導・ご助言いただきました。記して感謝の意を表します。

阿部 義平・梅木 謙一・江浦 洋・亀田 修一・木下 良・葛原 克人・狭川 真一・柴田 昌児・成正 鏞・田崎 博之・田中 正日子・坪井 清足・千田 剛道・津野 仁・出宮 徳尚・林部 均・日野 尚志・平岡 岩夫・松尾 洋平・真鍋 昭文・三吉 秀充・向井 一雄・村上 恭通・村上 幸雄・門田 誠一・矢野 祐介・山元 敏裕・渡辺 正気 (50音順・敬称略)

今治市教育委員会・愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター・愛媛大学考古学研究室・熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城 温故創生館・古代山城研究会・坂出市教育委員会・総社市教育委員会・大平村教育委員会・高松市教育委員会・東予市文化財専門委員・奈良県立橿原考古学研究所

(50音順)

第3節 調査の経過

各地区での詳細な調査経過は、第4章にて説明するところではあるが、ここでは3ヵ年の調査の概略を述べておく。

平成14年度 東予市では、年度当初の4月から、3ヵ年にわたる調査体制を磐石なものとするべく、永納山城跡調査指導員会の設置準備を進めていた。そして、調査開始約1ヵ月前となる7月19日に県内外の研究者からなる「永納山城跡調査指導委員会」を開催する運びとなった。当日はあいにくの小雨模様であったが、午前中に委員・事務局全員による現地での視察を行い、午後から調査計画案の報告、今後の調査方針の協議が行われた。ここに平成16年度中の国史跡指定申請を目指した永納山城跡発掘調査の第一歩が踏み出されることとなった。また、現地調査へ備え、8月には委託業務として、南西部から南部へかけての基準点の設置を行った。

そしてむかえた平成14年9月3日、調査員1名・調査作業員5名の調査体制に加え、数名のボランティアの協力を受け、いよいよ現地調査がスタートした。調査地域は遺跡南部から南西部であったが、現地は長い年月を経て生い茂った樹木やシダ類のため、全く見通しがきかず、現在の地形の把握すら困難を極めた。従って、調査開始からの約1ヵ月は発掘調査とはいうものの、樹木の伐採と草刈りによる現地確認作業が連日実施された。そして、この草刈り作業には、その後も調査期間中、トレンチ調査と並行しながら最も時間が費やされることとなった。しかしながら、天候にも恵まれ、調査開始から1ヵ月を経た10月1日からは、ようやくトレンチを設定し、埋没している城壁外郭線の確認調査を開始することができた。その後も北西部に向けトレンチ調査を進め、結果的には7ヵ所にトレンチを設定した。これらのトレンチのいくつかでは、古代山城に特徴的な列石と土塁による城壁を確認でき、また、従来から指摘されていた外郭線への自然地形利用を示す列石と岩盤との接続部を確認することができた。さらにH14-2トレンチでは土塁崩落土中からであるが、数点の土器が出土した。時期決定に有効な資料の少ない古代山城の中で、これらの土器の出土は大きな成果であった。この間、11月18日には第2回調査指導委員会を開催し、調査状況の報告を行うとともに、現地での視察、来年度調査への協議を実施した。特に、外郭線の構造把握のための断割り調査や、外郭線不明確部への追跡調査に関する提言を受け、調査後半は主に土塁構造の把握を目的とした調査を実施することとなった。

調査期間終盤の12月1日には地元住民を対象とした現地説明会を開催し、約150名の参加を得た。その後は、一部のトレンチを除いて埋め戻し作業を行い、現地調査を終了した。

平成15年度 平成15年5月7日から平成16年3月30日までの約11ヵ月間をかけ、調査を実施した。調査開始当初には一部南西部の追加調査を行い、次第に南部・南東部へと調査を展開していった。南部では、2段積みとなる列石の検出や列石と岩盤の明確な接続部の確認を行い、南部突出部では、過去調査でも特に不明確であった外郭線の確定を目的に複数のトレンチを設けた。この南部では永納山城の外郭線とともに、丘陵斜面に岩盤を掘り込んで造られる性格不明の溝が複数検出されたため、長期にわたり調査を継続した。さらに、このトレンチ調査と並行し、南東部へ向け草刈り作業を実施していたところ、南東部頂上から東部頂上へ続く尾根では、次第に視界が開けてくる中、眼下に燧灘が広がる様を目の当たりにし、改めて当山城が海に近接して築かれ

ていることを実感させられた。

7月には調査状況の報告とともに史跡指定範囲を協議するため、当年度の第1回調査指導委員会を開催した。この際には文化庁からも調査官に出席いただき、協議を進めることができた。委員会では、この先、東部へ向け外郭線確認を行うと共に、確認調査の課題の一つでもある北西部の医王山での城壁確認を早急に行う必要があるとの指摘を受けた。年度当初から、この医王山の調査は視野に入れていたもの、急峻な岩山であり、さらに国有林であることに加えて一部が隣接する



写真1 草刈作業風景

今治市に属するという理由から、いかに調査を進めていくか頭を悩ましていた場所であった。しかし、調査を実施しないことには、遺跡範囲の確定も行えないため、年を越した平成17年1月に調査を実施することとした。このような日程としたのは、単に協議調整に時間を要したためではなく、永納山以上に生い茂り背丈を越えるシダ類のため、夏場の作業は危険が伴うと判断したためである。また、調査にあたっては愛媛森林管理署の協力を得、今治市域に関しては今治市教育委員会と合同で現地確認を実施した。

委員会以降も引き続き調査を進めた南西部では、H15-12トレンチで、本遺跡で初例となる列石前面の柱穴を検出した。この中穴は列石・土塁との関係を踏まえた上で、今後外郭線構造の一端を解明していくために重要な成果であった。さらに、年の瀬も迫った12月には北部丘陵部に調査地区を移し、外郭線確認を目指した。この丘陵は当初より列石と思われる石が転落したように散在している状況であったため、元位置を保つ城壁痕跡を確認することが目的であった。明確な外郭線の確定は次年度に持ち越されることとなったが、調査の結果、医王山との関係も踏まえ、北部地区での外郭線を考える上で多くの所見を得た。

当年度は、例年に比べ天候不良の日が多く、当初計画よりも現地調査がさらに長期化した。梅雨空や秋の長雨には度々作業を中止させられ、また、北部の調査を実施した冬季には、北の谷から時には小雪も混じり吹き上げてくる強風に苦心させられたが、多くの成果をあげることができた。

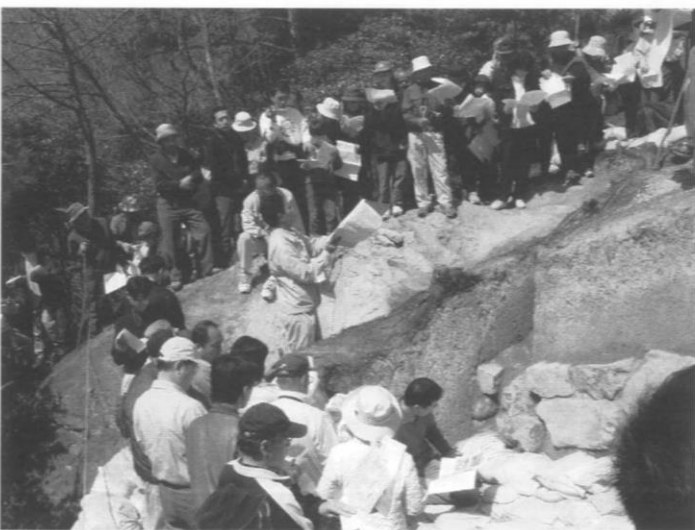


写真2 現地説明会風景

特に、本年度の調査によって、すでに

露出している列石を含めると、ほぼ全域で外郭線の再確認が行えたことが最も大きな成果であった。

また、調査期間の延長に伴い、まさに年度末ぎりぎりとはなったが、16年3月25日には、第2回調査指導委員会を開き、調査成果の報告を行うと共に、現地指導及び、今後の補足調査に対する意見をいただいた。引き続き、3月28日には現地説明会を開催し、15年度調査成果を一般公開することができ、約250名の参加を得た。

なお、調査期間前半には委託業務として、1/500スケールでの地形測量を実施した。

平成16年度 調査最終年度となる平成16年度は、現地調査は東部から北東部・北部を中心に実施した。調査期間は平成16年4月末から7月末の約3ヵ月であった。

東部から北東部にかけては、2ヵ所で石積みによる外郭線を確認し、これまでの列石や自然地形利用とは異なった外郭線の様相が明らかになった。また、H16-2トレンチでは外郭線の中に列石は存在するものの、土塁が存在しないといった状況が確認された。北東部はすでに露出している列石が長距離で並んでいるため、その一部で外郭構造を明らかにするためのトレンチを設定した。その結果、今回の調査では最も残存状況のよい版築土塁を検出することができ、列石や地山との関係を把握する上で良好な資料を得ることができた。このような状況を受け、6月18日に第1回調査指導委員会を開催した。今回の委員会では史跡指定に向けた準備も佳境に入っており、文化庁から再び調査官の参加を得た。現地視察では、様々な外郭線の存在する可能性を指摘され、列石しか認められない外郭線に関しては、近隣地点での追跡調査の必要性、良好な土塁に関しては、一部を断割り背面構造の把握をすべきであるといった点等について指摘を受けた。調査後半では、これらの課題を解決するとともに、北部での外郭線調査を実施した。

北部は、JR線路を挟んだ両尾根で谷の開口部(水門推定地)へ向かう外郭線の確認が急がれていた地区でもあった。この内、西側丘陵では昨年度一部でトレンチ調査を行っていたが、東側丘陵は未だ手付かずの状態であった。しかし、調査終盤に至り、ようやくこの部分へもトレンチを設定して調査を実施することができた。その結果、両斜面において列石を検出することができ、水門推定地へ向かう外郭線の一端が明らかとなった。

(渡邊)



写真3 調査指導委員会風景

第2章 永納山城跡の環境

永納山城はいかなる背景の下にこの地に築かれたのか、この点を明らかにするためには当時の情勢も踏まえながら様々な角度からみた総合的な評価が必要である。本章ではその前提となる周辺環境の一端を、永納山城を取り巻く地理的環境と歴史的環境からみていくこととする。

第1節 地理的環境

永納山城跡の国土座標上の位置は遺跡の中心部で北緯33度58分39秒、東経133度3分10秒である。行政上の位置は愛媛県西条市河原津・楠であり、遺跡の北端の一部は隣接する今治市に含まれる。以下では(1)瀬戸内地域全体からみた永納山城跡の立地的特徴、(2)この地を形成する地質的特徴、(3)永納山の地形に分けて述べていく。

(1)立地的特徴 永納山城の地理的環境を広範囲で捉えると、東西約450kmに及ぶ瀬戸内海の中南部南岸に位置する。朝鮮半島から海を渡り関門海峡を抜け瀬戸内海に至ると、そこには大小多数の島が広がり当然ながら多くの海峡・水道・瀬戸が存在し、これらによって瀬戸内地方はいくつも

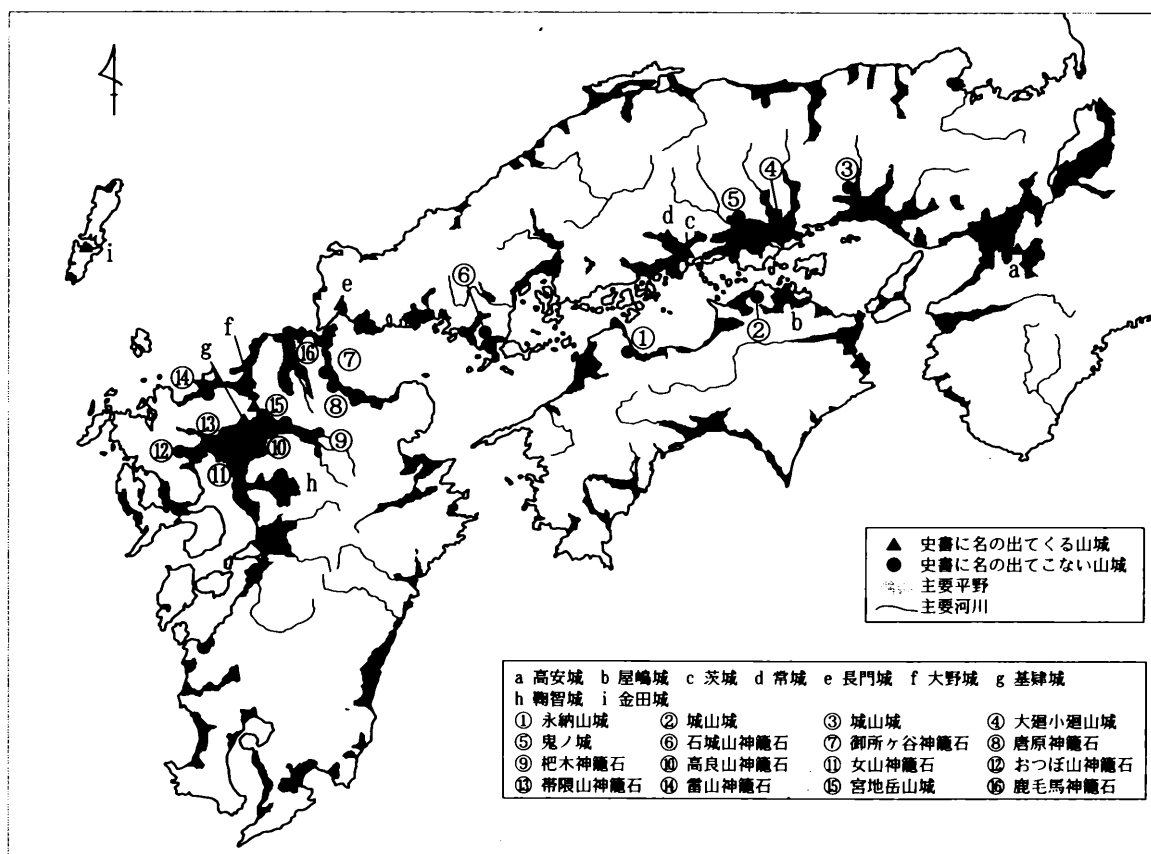


図1 日本の古代山城（訂正）



図2 瀬戸内海の地形と沿岸の古代山城 (S = 1/1,000,000)

の小地域に分けられる。そして瀬戸内中部には、瀬戸内海中でも特に島の密度が高い芸予諸島が海の関所のように存在する。また、この周辺は潮流も複雑な様相を示し、芸予諸島と高縄半島によって分断される安芸灘と燧灘をつなぐ来島海峡は、古くから瀬戸内海の交通・軍事等の要衝であり、最大の難所ともなっている。現在では本州と四国を結ぶ「しまなみ海道」がこれらの島々を結んでいるが、この愛媛県側の起点となるのが高縄半島であり、永納山城はその付け根に位置する。

さて、次に陸地部に目を向けると、永納山城の南方眼下には県下第二の広さを誇る道前平野が広がる。道前平野は中山川及びその支流や大明神川などの河川からなる典型的な沖積平野であり、平野中央から北部にかけては古くから人々の活動痕跡が見受けられる。詳細は歴史的環境で述べるところであるが、永納山城が築城されたであろう古代の道前平野に関しても、その様相が近年の発掘調査成果により次第に明らかにされつつある。さらに北方には当時の国府推定地のある今治平野を望み、先に述べた芸予諸島の一部やその向こうに広がる斎灘も見渡すことができる。遅くとも律令期には整備された南海道が、永納山城の西麓を通り道前・今治両平野をつなぐという点からみても、この地が陸上交通においても重要な地であったことが窺える。

また道前平野の海岸部は、当平野をつくり上げてきた河川より流れ出る土砂が長い年月をかけながら遠浅の海や干潟を形成してきた。現在、海岸線はこの干潟を利用し江戸時代に行われた干拓や昭和期の開発により海側に移動しており、当時の姿は残していない。しかし、いったん山城

の東側尾根に立つと、そこから正面にはたちまち海が目前に開け、さらに足元を見下ろすと現在は陸地となっているが、ふもとはいまだ入江状を呈しており、眼下に燧灘を見下ろす場所に築城されていた永納山城の当時の姿が、さらに鮮明に浮かびあがってくる。

中国・四国地域に築かれた古代山城が瀬戸内海沿岸に点在することは周知の事実であるが、これらは瀬戸内をその両岸から挟み込むように各重要地域を見据える要衝に築かれたとも捉えうる。中でも永納山城が瀬戸内海に極めて近接しているという点は非常に特徴的であり、また瀬戸内海を西から東に向け進んできた場合、最大の難所を抜けた直後の死角的な位置に存在している点が注目される。これらの環境は永納山城がまさに海を意識した山城であったことを示している。

(2)地質的特徴 永納山城跡の所在する西条市北部は県下第2の広さを誇る道前平野北端に位置する。当平野は、北西に高縄山系の山々、南には石鎚山脈を控え、北東は瀬戸内海に面するというように自然環境により近隣地域と分離される。当平野はこれらの山地を水源として流れ出した中山川や大明神川、あるいはその支流となる河川により形成された典型的な沖積平野である。

道前平野周辺の地質的には、中央構造線により西南日本内帯と外帯に分けられ、平野北部は内帯の領家帯に属する。よって当然ながら、永納山自体も含め、遺跡周辺には領家花崗岩類が広く分布する。この地質的特徴も考慮し、当山城に用いられる列石石材がすべて花崗岩であることを考えると、広い意味で地元の石材を利用していたことも十分想定できる。

(3)永納山の地形 永納山城は独立山塊に築かれる。通称、永納山と呼ばれるこの山塊は、東西780m、南北970mの大きさであり、中央には北へ向け開く大きな谷が存在する。また城域の特徴の一つとして、遺跡北西部に位置するもう一つの独立山塊である医王山を取り込むことがあげられる。永納山の標高は、永納山山頂が最高所であり、標高132.3mとなる。また、この城域内には北西部の医王山を含めると計7ヵ所の頂上があり、山の稜線はこれらを結ぶように大小のアップダウンを繰り返しながら連なる。今回、永納山城跡発掘調査にあたり、これらの頂上を次のように呼称することとした。最高所についてはこれまで通り永納山山頂と呼び、医王山に関しては独自の名称がつけられているため、それを生かし医王山山頂と呼ぶ。他の頂上部については位置する場所から、それぞれ東部頂上・南東部頂上・南部頂上・南西部頂上・西部頂上とする(図3)。

その地形的特徴を見ていくと、南西部から南部、東部にかけては尾根筋から尾根斜面にかけ岩盤の露出が顕著であり、中には垂直に切り立った露岩により絶壁となる場所もみられる。これらに対し、北東部や北部は永納山山頂から尾根が比較的緩やかな傾斜で延び、北の谷へ向かい下っていく。次に西部は多少の起伏はあるものの比較的緩やかに尾根が延び、岩盤はさほど顕著には見られない。しかし、この西部頂上から北西は医王山方向へ向かい急傾斜で尾根が下っていく。その先の医王山との間には現在、県道が通過しているが、その下に流れる小川の存在などから、当時は小さな谷によって分けられていたであろうことがうかがえる。遺跡北西に聳える医王山は標高131mを測り、永納山山頂とほぼ同じ高さである。山肌には各所に岩盤が露出し、特に中腹より上ではこれらの岩盤が、場所によっては垂直に切り立っており、まさに岩山という言葉が当てはまる山塊である。

以上のように永納山は様々な地形的特徴を示すものの、ほぼ全域に共通する特徴として、尾根外側斜面から尾根筋に登ると、そこからはたちまち中央の谷へ向かい下っていく斜面が現れ、外

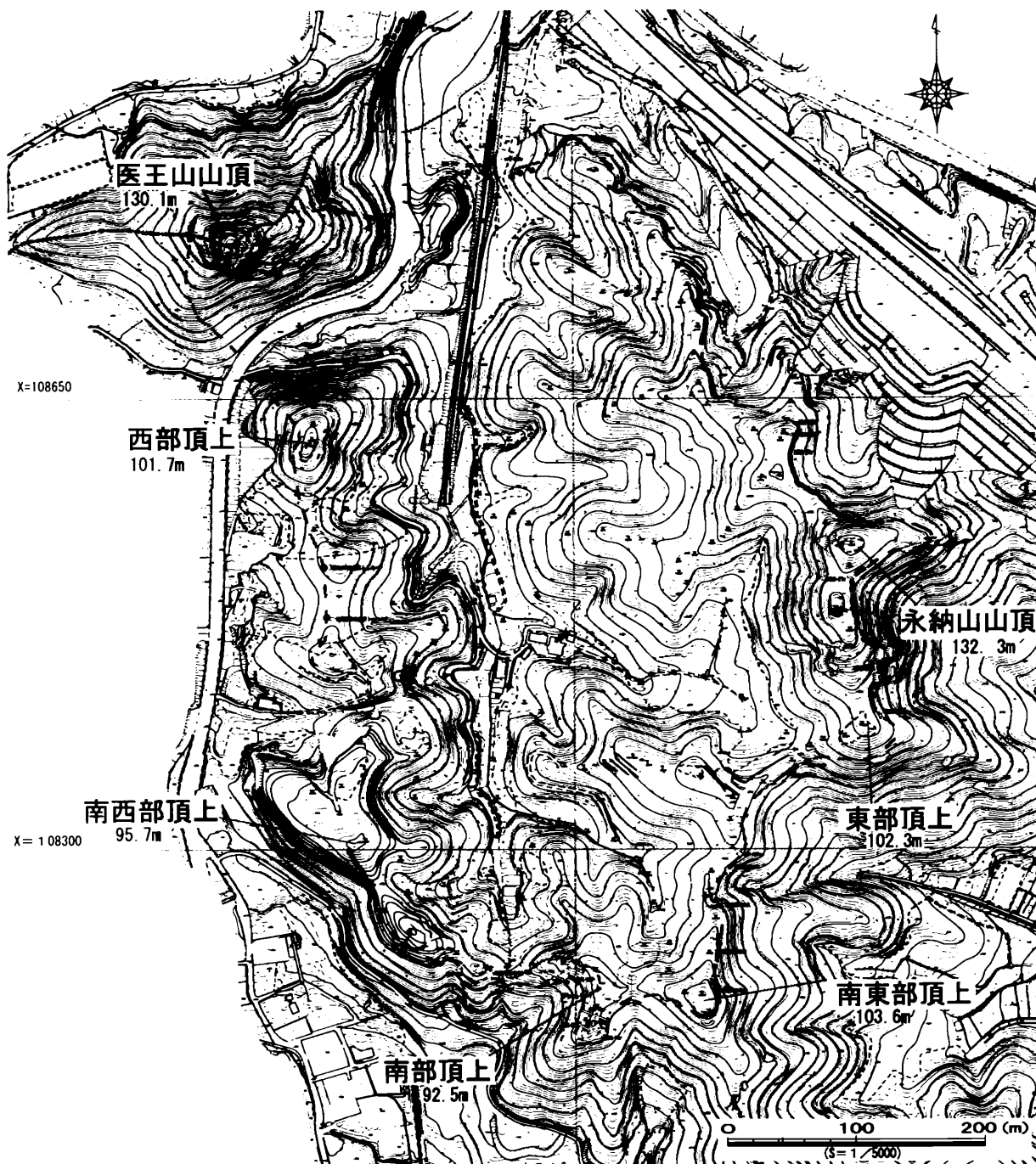


図3 永納山城跡 地形図

郭線が巡る尾根筋には全くといってよいほど広い平坦面がないという点をあげることが可能である。

ただし、内側へ下っていく斜面の中には、谷を挟むように小さな丘陵が八手状に延びて若干の平坦面を形成するところもみられる。 (渡邊)

参考文献

鹿島 愛彦 1988『愛媛の自然をたずねて』

東予市史編纂委員会 1987『東予市史』

第2節 歴史的環境(古墳時代後期～古代)

永納山城跡は高縄半島の東側、今治平野と道前平野を分けるように西から東に伸びた丘陵地帯の中に位置しており、周辺には多くの遺跡が存在している。

道前平野北端となる永納山の南西部裾には、縄文時代後期初頭の標識土器である六軒家Ⅰ式土器が出土する遺跡群が広がり、周辺の山々には中世の山城も残されるなど、時代の異なる多くの遺跡が分布する地域であるが、今回は永納山に古代山城が構築された前後の時期、古墳時代から古代にかけての遺跡の状況を見てみたい。

(1)周辺の古墳 永納山から東に伸びた丘陵の一部は今治小松道路工事のため削り取られ、工事に先駆けた発掘調査により古墳時代前期から中期の土坑墓2基・石槨2基の調査が行われている。周辺の丘陵にも箱式石棺・土坑墓を含む古墳群が広がっており、永納山周辺は今治平野の南端、道前平野の北端という立地から古墳時代には墓域として利用されていた状況を窺うことができる。

道前平野北部の古墳分布は前期から中期にかけて西条市上市周辺に集中した状況があり、副葬品に鋳留短甲・剣・大刀など武器・武具が多く、武人的な要素を強く持つ集団の居住を示唆し、周辺に『旦之上』の地名が残ることと合わせ興味深い地区である。後期になると実報寺・天神の東谷・椎木・甲賀原など多くの古墳群が造営され、西側の世田山との間の低地にも六軒家・世田山古墳群が形成されているが、ほとんどの古墳は農耕により墳丘を失っており、周辺の畑には須恵器の破片が広範囲に散布している。旧東予市域では古墳の発掘調査はほとんど行われていない状況であるが、唯一、世田山Ⅳ号古墳で発掘調査が行われ、6世紀初頭に構築され後半まで追葬が行なわれていたことが判明している。

北に目を転じると霊仙山と海岸線の丘陵に挟まれた猿子川谷底平野が細く延びており、この低地を挟んだそれぞれの稜線に旦・長沢・菜切谷・向山・湯ノ浦・孫兵衛作など多くの古墳群が造営されている。特に菜切谷古墳群には当地域の盟主墳となる菜切谷前方後円墳も立地している。

(2)周辺の遺跡 永納山周辺の海岸線は埋め立てや道路工事により旧地形が失われているが人工海岸ではない部分において製塩土器が採集され、周辺に集落が営まれたことを示唆している。また、旧東予市域は遺跡詳細分布調査により多くの遺跡が確認され、さらに、大明神川以北の河北地区では近年多くの発掘調査が行われ、実報寺高志田遺跡や長網Ⅰ・Ⅱ遺跡など6世紀後半から7世紀初頭の竪穴住居や建造物が多く検出されており、集落が平野部の高台に広がっていたことを示しているなど古墳時代から古代の集落の一端が見えつつある。

(3)今治平野側の古代の遺跡 永納山の北に広がっている今治平野は、『伊豫』国府の置かれた平野であるが、正確な位置確定はできていない。現状で『八町説』『中寺説』『上徳説』『高市説』『出作説』『古国分説』の諸説が並立している。

今治平野には越智郡が置かれ、朝倉・高市・桜井・新屋・拝志・給理・高橋・鴨部・日吉・立花の10郷に分かれており、永納山北側の猿子川谷底平野は桜井郷に属していたと考えられる。

古代の遺跡としては阿方春岡遺跡・旦遺跡・宮ノ前遺跡などにおいて建造物などの調査を実施しており、阿方春岡遺跡は灰釉陶器・緑釉陶器が多く出土し、9世紀後半から10世紀初頭の豪族居館と推定している。別名端谷Ⅰ遺跡では鍛冶炉や建造物群から円面硯や銅印が出土し、7世紀

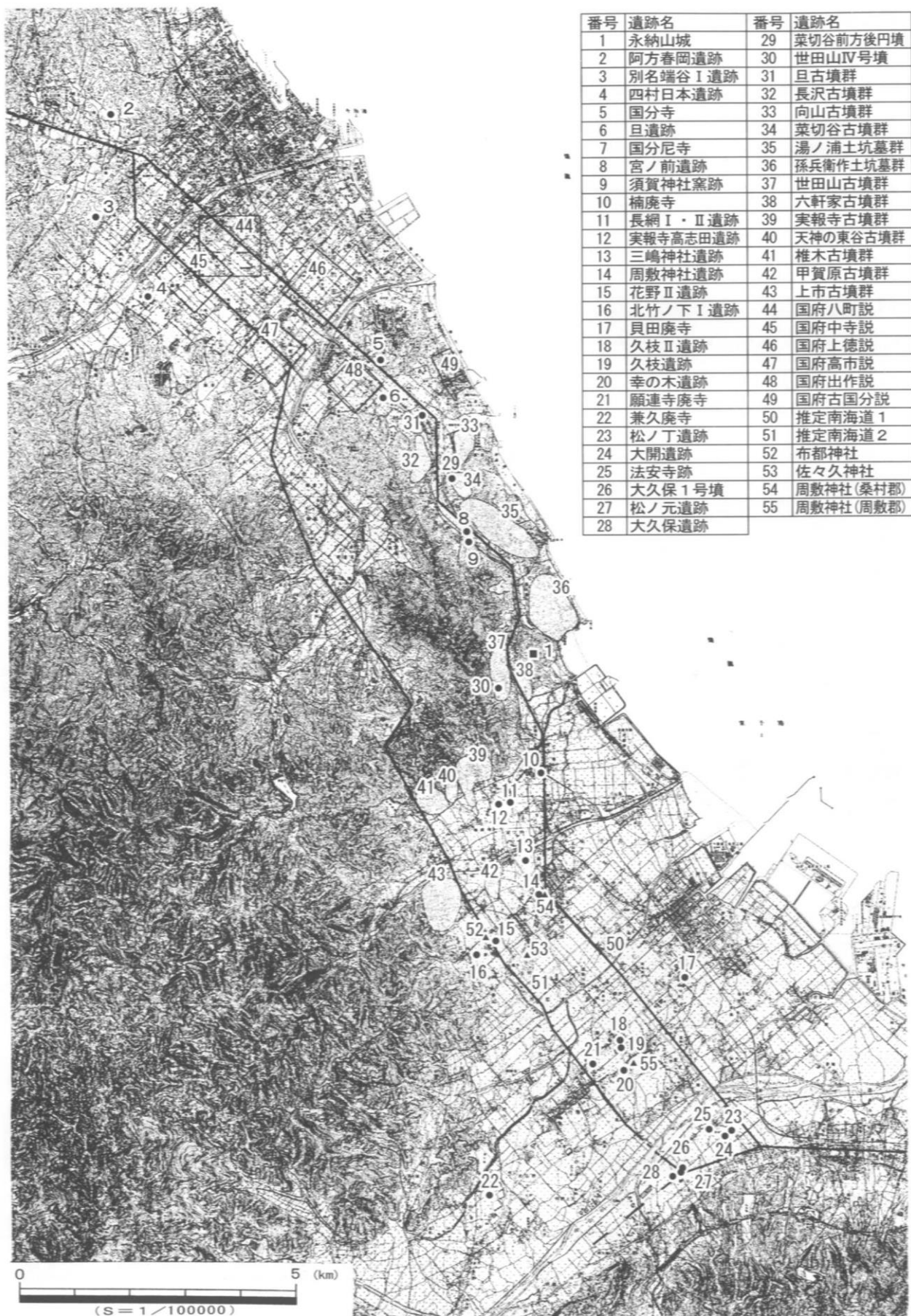


図4 永納山城跡周辺遺跡分布図

から8世紀にかけて集落遺跡から生産遺跡への空間利用の変化を窺わせている。旦遺跡では正方位の主軸を持つ建造物の調査が行われ上層の中世遺構面との関係で12世紀以前の遺構であるとされている。宮ノ前遺跡は猿子川谷底平野の狭小な平坦部に立地する遺跡で須賀神社窯跡に関係する工房跡であり、重弧文軒平瓦の出土から国分寺・国分尼寺に瓦を供給したことが判明している。また、倒位均整唐草文軒平瓦の出土により国分寺・国分尼寺だけでなく道前平野の真導廃寺にも瓦を供給していたと考えられている。

(4)道前平野側の古代の遺跡 道前平野は北から桑村郡・周敷郡の2郡が置かれた平野である。桑村郡には籠田・御井・津宮の3郷、周敷郡には田野・池田・井出・吉田・石井・神戸・余戸の7郷があったといわれ、永納山周辺は桑村郡津宮郷と考えられている。

道前平野のうち旧東予市域は遺跡詳細分布調査が行われ古代の遺物散布地が広範囲に広がっていることが分かっている。そのうち、道前平野内の郡衙推定地として桑村郡衙は奈良時代前後の遺跡が面的に広がっていたところと考えられ、7世紀後半から8世紀の遺物散布地である花野Ⅱ遺跡・北竹ノ下Ⅰ遺跡や、8世紀の遺物の広がりがある三嶋神社遺跡・周敷神社遺跡を中心とする範囲に比定できる。周敷郡衙は発掘調査により8世紀の官衙関連施設を検出した久枝Ⅱ遺跡や、石帯が出土した久枝遺跡、10世紀前後の官衙関連施設または豪族居館と考えられる幸の木遺跡を中心とした範囲に比定できる。これらは延喜式内社の分布や『駅路』『伝路』との関連を含め検討する必要があり、延喜式内社では桑村郡に周敷神社・布都神社・佐々久神社の3座が記されている。しかし、周敷神社が周敷郡ではなく桑村郡に鎮座することや7郷の周敷郡に1座もない状況をどう考えるかの問題はある。寺院跡では兼久廃寺・願連寺廃寺・貝田廃寺・楠廃寺があり、中山川を南に越えた所には県内最古の法安寺跡があるなど古代においては国府のおかれた越智平野と遜色のない地域であったと考えられる。発掘調査を実施した遺跡については現在整理報告書作成作業が行われており、より詳細な状況が把握できると考えられる。

(5)官道 古代の交通網としては海上交通だけでなく古代官道である『南海道』の位置が重要となってくる。現在想定されている駅路は西条市小松町南川から西条市桑村を通り永納山の西側の低地を抜けて今治平野に入るルートであるが、想定している屈曲点よりさらに西側の松ノ元遺跡の発掘調査ではN-41°-Wの方向に延長120m・幅6mの道路遺構が調査され、このラインを延長し、椎木峠を経て今治平野に抜けるルートも想定されている。松ノ元遺跡検出の道路遺構は南東端で三叉路状を呈している。道路遺構の西に広がる大久保遺跡では「コ」字状配置の建造物群があり、駅路関連の官衙遺構ではないかと考えられ、さらに道路遺構東側の大開遺跡でも同じく「コ」字状配置の建造物群の調査が行なわれている。さらに大開遺跡東に隣接する松ノ丁遺跡では7世紀代の竪穴住居や建造物群の調査が行なわれ、近接する法安寺跡との関連も念頭においた整理作業が行われている。

律令国家における『伊豫国』の範囲は現在の『愛媛県』域と考えられ、郡についてもその範囲は想定されている。永納山北側の今治平野は『越智郡』、南部の道前平野は『桑村郡』『周敷郡』『新居郡』となっており、今治平野は1平野1郡、道前平野は1平野3郡である。県内では松山平野と道前平野が複数の郡に分かれている。また、律令体制前夜の体制である『国造』制では『伊余』『怒麻』『久味』『小市』『風早』の五国が置かれたとされ、今治平野には『小市』国、松山平野に

は『伊余』国・『久味』国の2国、この二つの平野の間にあり西側を海に面した高縄半島西海岸には今治平野北辺の丘陵および平野部分に『怒麻』国、さらに『風早』国が置かれている。これらの国の範囲には前方後円墳があるなど古墳時代の墓制で道前平野に対する優位性が指摘されてきた。しかし、発掘調査により、中山川以南に初期前方後円墳である大久保1号墳が見つかり、古代寺院跡だけでなく古代の遺構も多く発見されるなど永納山城跡築造前後、古墳時代から古代にかけての道前平野の動向は伊予に置ける律令体制確立の過程を究明する重要な地域となっている。

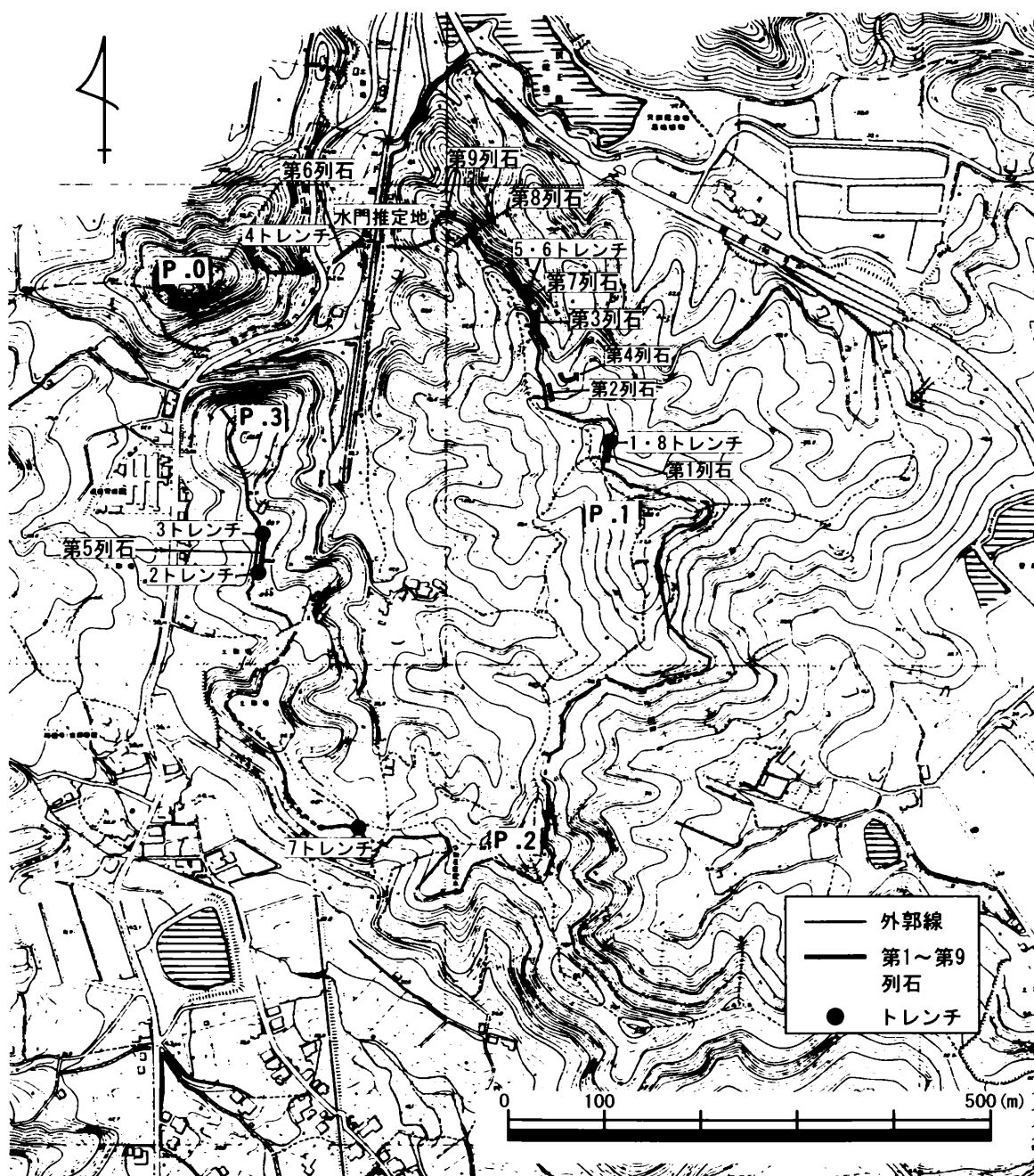
(岡田 敏彦)

《参考文献》

- 池尻伸吾・大庭美鈴 2003「別名端谷Ⅰ遺跡」『愛比売―平成14年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 伊豫田孝幸 2001「長網遺跡」『愛比売―平成11年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 愛媛県教育委員会 1991「愛媛県内古墳―分布調査報告書―」愛媛県教育委員会
- 岡田敏彦 2001「愛媛県内における首長墳素描」『紀要愛媛』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 岡田敏彦・作田一耕・西岡信次・長井數秋 2001「東予市中部の遺跡 第2集―東予市国安・吉岡・庄内地区詳細分布調査―」東予市教育委員会
- 岡田敏彦・作田一耕・西岡信次・長井數秋 2002「東予市南部の遺跡 第3集―東予市壬生川・周布・吉井・多賀地区詳細分布調査―」東予市教育委員会
- 小黒裕二・橋本貴登 2000「阿方春岡遺跡」『一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 河野しのぶ 2001「長網Ⅰ遺跡2次調査」『愛比売―平成12年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児・岡部正史 1998「久枝Ⅱ遺跡」『愛比売―平成7～10年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児・田本克彦 2000「大久保(大久保・竹成地区)遺跡」『愛比売―平成11年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児 2001「松ノ元遺跡」『一般国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書 第1集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児 2002「大久保遺跡・大久保1号墳」『一般国道11号小松バイパス埋蔵文化財調査報告書 第1集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児 2002「幸の木遺跡」『一般国道196号今治小松道路埋蔵文化財調査報告書 第2集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 柴田昌児 2004「伊予国」『日本古代道路辞典』八木書店
- 谷若倫郎 1998「四村日本遺跡」『県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 長井數秋・岡田敏彦・作田一耕 2000「東予市北部の遺跡 第1集―東予市楠河・三芳地区詳細分布調査―」東予市教育委員会
- 長井數秋 1987「東予市の原始・古代」『東予市誌』東予市
- 長井數秋 2003「兼久庵寺遺跡」『畑地帯総合整備事業『高松閑屋地区』基幹農道(兼久工区)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』丹原町教育委員会
- 中野良一・廣田秀久 1995「八町Ⅰ号遺跡」今治市教育委員会
- 西川真美 2003「長網Ⅰ遺跡」『愛比売―平成14年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 宮崎雅延 2001「大久保(大久保・竹成地区)遺跡」『愛比売―平成12年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 三好裕之 2000「旦遺跡・宮ノ前遺跡」『一般国道196号今治バイパス埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 三好裕之 1998「永納山遺跡」『愛比売―平成7～10年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山下隆一 2001「長網Ⅰ遺跡3次調査」『愛比売―平成12年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山下隆一 2002「長網Ⅰ・Ⅱ遺跡4次調査、実報寺高志田遺跡」『愛比売―平成13年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 山下隆一 2003「旦の上遺跡」『愛比売―平成14年度年報―』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター

第3章 昭和52～54年度調査の概略

永納山城跡は昭和52年4月に発見され、その後まもなく東予市教育委員会により二次にわたる確認調査が実施された。今回の確認調査はこれらの調査成果を基礎とした再確認調査であり、範囲確定にはこれらの成果に負う部分も多い。そこで、今回調査成果の報告に移る前に若干ながら調査の概要を述べておく。なお、列石の位置等の呼称は報告書で用いられているものをそのまま引用する(図5)。



(東予市教育委員会 1974 永納山城跡遺構概報より転載・一部加筆)

図5 過去調査 トレンチ等配置図

第1節 調査の経緯と経過

遺跡の発見 昭和52年4月 東予市文化財専門委員の遺跡分布調査中に永納山北面稜線上で約20mにわたる列石(第1列石)が発見された。これは数年前に起きた山林火災により見通しが良くなっていたことも幸いしたとされる。その後もここを基点として列石の発見範囲は広がり、7月までには計300mが確認された。

1次調査 昭和52年7月～12月 1次調査の主な調査内容は列石の確認及び3ヵ所のトレンチ調査である。列石は10月末までに遺跡北半部を中心に第1～第9列石まで発見され、調査終了までには西稜南部においても列石が確認された。また、これらの市教育委員会による調査以前に当時の愛媛県教育委員会文化課職員であった長井數秋氏(現・永納山城跡調査指導委員)の調査により南部地域にも一部で列石が確認されており、計1200mにわたる列石が谷を囲むように廻ることが明らかとなった。

2次調査 2次調査は昭和53年5月～54年3月までの前期調査と54年4月～55年2月までの後期調査に分け実施された。

前期調査の内容は委託業務による地形図作成と外郭線の確認・実測作業であった。外郭線確認では遺跡北西部に位置する医王山へも列石が廻らされることが明らかにされた。

後期調査ではそれまでに確認した外郭線の構造・機能を明らかにするという目的の下、トレンチ調査を中心とした調査が実施された。正確なトレンチ数は現在では把握できないが、当時の資料を整理することにより少なくとも8ヵ所以上にトレンチが設けられていたことが確認できた。確認したトレンチは第1列石に1ヵ所(1・8トレンチ)、第5列石に2ヵ所(2・3トレンチ)、第7列石に2ヵ所(5・6トレンチ)、南西部に1ヵ所(7トレンチ)、医王山に1ヵ所(4トレンチ)である(図5)。

第2節 調査成果概要

調査の主な目的は、今回同様に遺跡の範囲確認すなわち列石・土塁を確認し外郭線を結ぶことにあり、列石の発見を主眼とした調査が実施された。調査結果は「永納山城遺跡調査報告書」としてまとめられ、その成果が昭和55年3月に報告されている。以下では報告書に沿いながら、外郭線の概要・トレンチ調査に基づく外郭構造・その他の遺構に分け、成果を述べることとする。

なお、西部地域に関しては2ヵ所のトレンチ調査成果がすでに報告されているが、第3節において、当時の調査に携わっていた長井數秋氏に未報告所見も取り入れ、改めて報告をしていた。

1. 外郭線の概要 永納山城は東西470m、南北720mで北に開口する谷を囲む包谷式の山城である。列石は基本的に山の尾根から外方へやや下った斜面に巡らされ、東部の永納山山頂(標高132.4m)を最高部とし、尾根の傾斜に沿うようなかたちで城内を取り囲む。そして、その全長は推定

2554.3m(調査当時現存2310m)と報告される。また城域の特徴の一つとして、北西部の医王山を取り入れることがあげられる。

その他、1次調査時に確認された第4列石、第8列石は外郭線上からそれぞれ外側・内側に逸れたものである。この地点に関しては確かに現在散石が残るが、このような散石は外郭ラインの内外に多々見られるため、現状からこれが列石であるかどうかの判断は難しく、今後の調査が望まれる。

2. 外郭構造 報告書によると外郭線の内、岩盤利用部分以外に関しては「永納山城は土築山城で石垣積は存在しない」とされるように、列石を並べその上に土塁を積み上げる構造が主体をなす。

その具体的な構造については、今回再整理により報告書掲載未掲載を含め7ヵ所のトレンチ実測図を確認したので、これらをもとに外郭線の構造をまとめておく。

列 石 石材は花崗岩の粗割石もしくは自然石を使用し、小口面を正面(外側)に向け奥行きを長く据えるという点で共通した特徴を有する。石の大きさは幅40cm程度のものが多いが1m以上のものも見られる。奥行きはトレンチ断割りで長さを確認できるものでは70～90cmを測り、厚さは25cm以上が主体である。列石の背面には、列石に比べやや小振りの礫を配置する。礫は材質的には列石同様に花崗岩の粗割石・自然石であるが、その大きさは20cm～80cm程度とまばらであり、形も不整形で統一性は見られない。

これらの列石・礫は地山面を水平にカットして面を形成し、盛土(報告書中では夯土と表現される)をなした上に据えられるとされるが、この盛土については図面上では確認できない。

土 塁 流土のため原状を明らかにできない4トレンチを除く各トレンチで土塁が確認される。特に1～3トレンチにおいては版築の残存状況が良好であるので、以下では1～3トレンチの成果をもとにした土塁の状況をまとめる事とする。

土塁は1～10cm程度の厚みを一層とし、ほぼ水平に積み上げられる。これらの各層は15mm以下の砂利、砂、粘土の混合土であり、非常に固くつき固められる。その硬さは報告書中に「土木工事用のドリル(直径4cm)を使用したが一層に届くと空転して入らなかった」と表現されるほどであり、版築の強固さがうかがい知れる。

以上の特徴は各トレンチに共通するところである。加えて1トレンチでは土層中に灰の混入した層が確認されており、その混入具合は下層にいくほど顕著になる(写真4)。

また列石が土塁によって覆われるか否かの問題は、他の山城調査成果でも状況の異なるところであるが、この点に関しても若干の報告がなされる。まず第5列石に設けられたト



写真4 第1トレンチ 列石・土塁検出状況

レンチ(2・3トレンチ)の所見では列石が版築土塁によって被覆されているとの所見が得られている。しかし、第一列石他東部(1トレンチ周辺)での調査によると列石は露出しており、トレンチ調査においても列石の被覆は認められていない。この状況から土塁の流れ落ちを考慮しながらも、築城当初から列石を見せる意図があったのではないかと想定がなされている。この列石露出・非露出問題は今後の調査課題の一つである。

その他、以下の点についても報告がなされている。

屈折点 外郭線はすべて折れ構造をなし、折れ部分は148ヵ所で確認されたとされる。

列石の勾配 列石線中では35°が最大勾配であり、12°～26°の範囲の勾配が最も多い。

岩盤利用 岩盤が露出し自然地形の険しい場所では、外郭線にそれらを利用する場所が見られる。

ただし、これらの点に関しては文章による記述が主であり、図面、写真等による詳細な報告はなされていないため検証の必要性が残された。

3. その他の遺構 上記のように1・2次調査では外郭線確認が主体であったが、それと同時にその他の関連遺構についても候補地が推定され、その点に関し言及されている。

水門 水門は北部に1ヵ所、北東部に城門あるいは水門推定地として2ヵ所が想定されている。この内、北部水門推定地は永納山城内中央に位置する谷の開口部にあたる。残念なことに国鉄(現JR)予讃線のトンネルにより原状は留めないが、水門が構築されていた可能性は高い。後者2ヵ所に関しては東北部の小さな谷状地形に想定されているが、その詳細については述べられていない。

城門 城門は南部に1ヵ所想定される。地形的には東西両サイドから尾根が緩やかに下ってきた鞍部に位置する。報告書では、露岩を打ち欠き整形した石造遺構とされ、階段状の加工がなされると評価される場所であり、この形態と所在位置から一応南城門と推定されるとしている。

なお、城内の遺構については本格的な調査はされておらず、今後の課題として残された。(渡邊)

第3節 西部の調査

第2トレンチと第3トレンチの発掘は、昭和53年発行の『永納山城遺跡調査報告書』によると、昭和52年8月8・9日に行われたと記載されている。筆者が両トレンチの測量を行ったのは昭和53年1月4日(土)・19日(日)と同年2月5日(日)の3日間である。測量した時のトレンチの状態は、発掘時と同じであり、平面図を正確に測量するため列石や裏込め石の周囲を整理したり、トレンチの壁面の削り出しをした記憶がある。一度発掘したトレンチを埋め戻し、再び測量前に発掘当時の状況に戻したのかもしれない。詳細なトレンチの平面図と堆積層序図は報告書に記載されていないので、本書でその測量図を提示し、今後の調査の参考にしていただければ幸いである。

1. 第2トレンチ

第2トレンチは、西部丘陵上の標高88.7mの円丘状の頂上部から、西部へ約5m下った標高85mの地点に、南北4.5m、東西の奥行き3mの範囲に設定したものである。列石はすべて土砂で被覆

されており、発掘によって初めて姿を見せたものである。列石は地山を水平に削った上に置き、列石の前面が尖っていたり、直線的なものがあって凹凸が認められた。列石は奥行きを長く縦位に並べられていた。列石は斑状黒雲母花崗岩の自然石で、周縁は角が取れて丸みをもっていた。列石の幅は40～68cmで、奥行きは63～75cm、厚さは50～60cmが中心であった。列石と列石とは部分的に接していたが、密着するものは認められなかった。



写真5 第2トレンチ 列石と土壘版築状況

列石の背後に列石よりやや小振りの自然石や割石を裏込め石として置いていたが、単に投げ込んだだけであり、規則性は認められなかった。列石並びに裏込め石上には、3～5cmの厚さの版築層が南北側面で11枚前後、裏込め石上では17枚前後堆積していた。このことから、列石の前面から少なくとも奥行き150cmまでは版築が行われていたとすることができる。

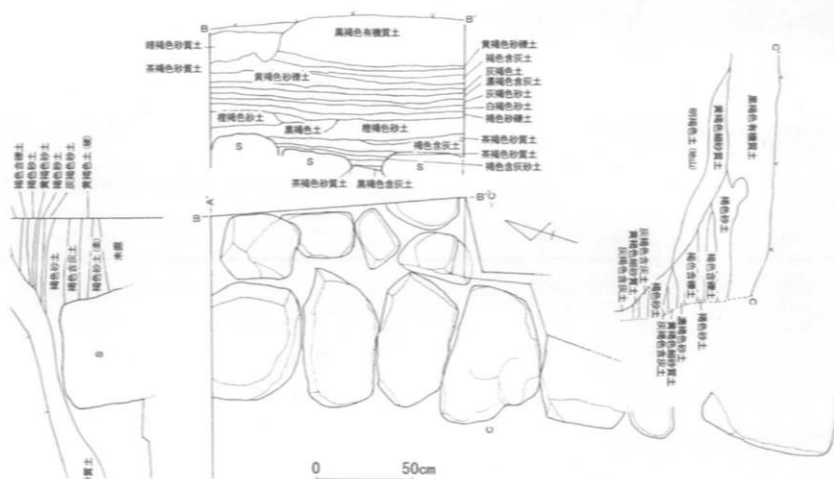


図6 第2トレンチ列石平面図と土壘の堆積層序図

これらの版築層中には炭や灰を含んでおり、その表面に8～10cmの丸太の小口による築き固め跡が顕著に残存しているのが認められた。その築き固めのためか、ツルハシで発掘するのも容易ではなかった。列石はすべて版築土砂で強固に被覆されているため、前面に凹凸があってもよかったのかもしれない。

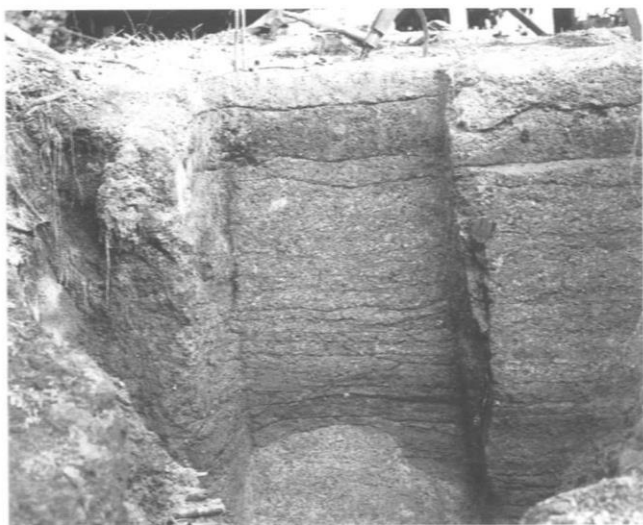
2. 第3トレンチ

第3トレンチは円丘と円丘を結ぶ稜線中央部にあり、標高は82mである。トレンチの規模は、列石前面の南北幅0.5m、土壘側1m、東西の奥行き4.25mで、列石より下部の調査は行っていない。列石は地山面を水平に掘削し、そこに幅50cm、長さ7cm、厚さ40cmのものを、その北側に人頭大の小さな斑状雲母花崗岩の列石を配していた。列石と列石は部分的に接していたが、前面は尖っており、直線とはなっていない。列石の背後には、列石と同じ大きさの裏込め石が存在した。西に向かって傾斜する裏込め石上は東西幅70cm、深さ90cmのタコツボ(肥料用土坑)が穿たれていたが、



裏込め石までは達していなかった。列石上は少なくとも、厚さ5cm前後の版築層が12枚以上堆積していた。裏込め石の奥行き63cm、列石前面よりの奥行き125cmの地点の地山上には、15枚前後の版築層が認められた。ただ、表土層近くは戦後の開墾でかなり攪乱を受けていた。丸太で築き固められた層の厚さは、薄いもので2～3cm、厚いもので8cm前後であった。中には、2層や3層のように13cmの厚さのものも存在した。

各層中には、灰や木炭片を含むものと、含まないものがあつたが、下部は含灰土の割合が多くなっていた。中には1～2cmの厚さの酸化バンドを挟んでいたが、これは盛土した土砂の上に水を撒いて築き固めたからであろう。第2トレンチでも認められたように、各層上面には直径8～10cmの丸太の築き固め跡が残存していた。各層はほぼ水平であつて、列石前面に版築が認められることから、列石、裏

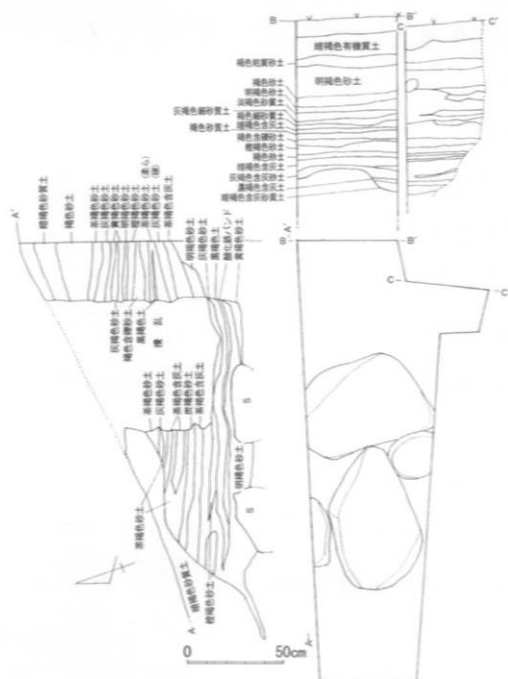


込め石とともに完全に版築で被覆されていたものとみてよい。版築の範囲がどこまで及んでいるのかなど、今後さらに追求すべきであろう。

(長井 数秋)



写真8 第3トレンチ 土塁側面版築状況



第 4 章 遺 跡 の 調 査

本章では、3 ヶ年にわたり実施した調査成果について地区ごとに報告していく。報告に際してはまず第1節で調査の概要を述べ、その後、第2節から第7節において各地区での調査状況を詳細に述べていくこととする。

第1節 調査概要

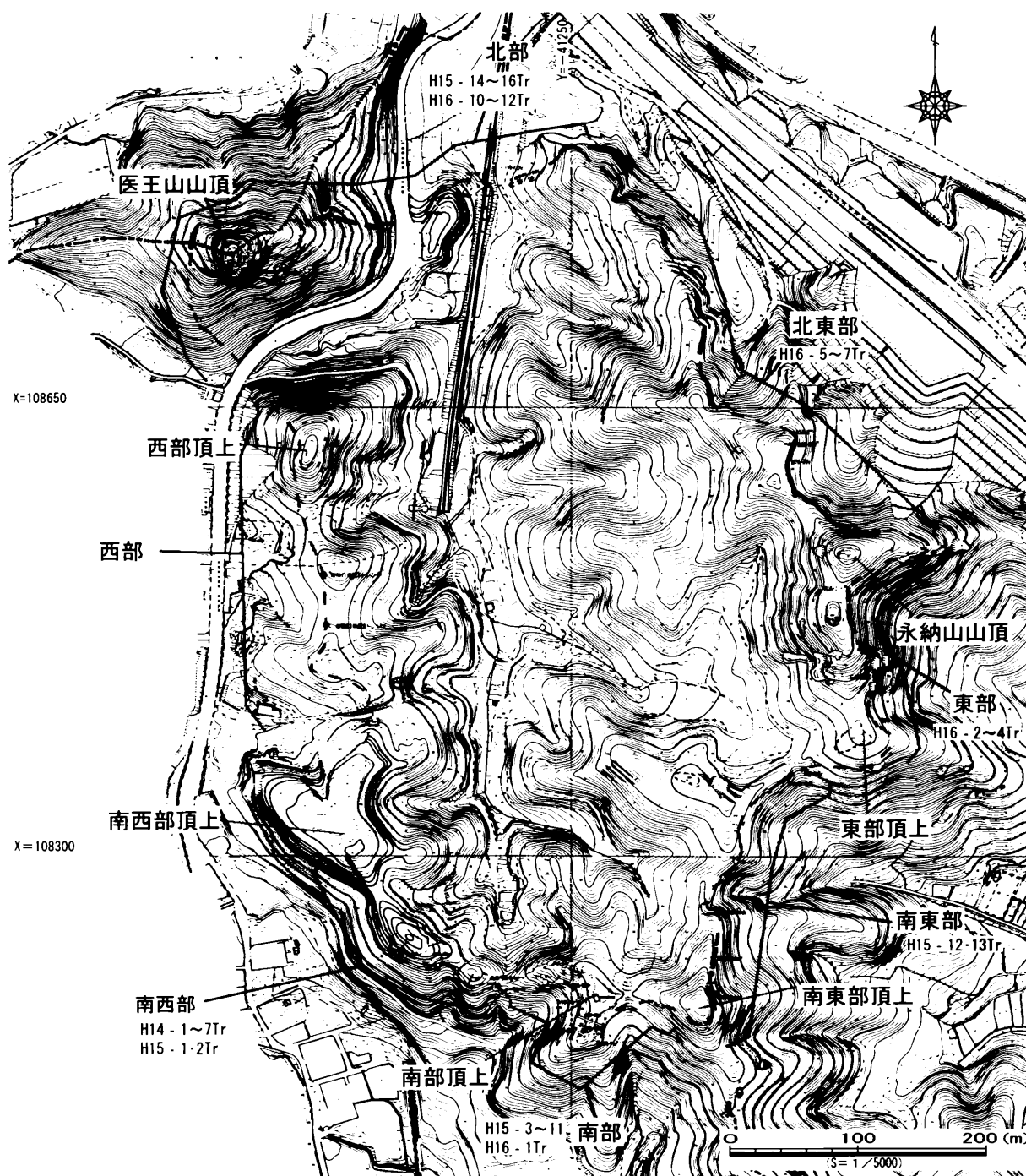


図8 永納山城跡 調査地区概要図

今回の調査の主目的は外郭線の再確認を中心とした遺跡範囲の確定であった。最初に調査概要を述べておく。なお、調査地区および、各年度のトレンチと調査地区との対応関係は図8に示している。また、調査期間中使用していたトレンチ名と今回報告にあたり新たに整理したトレンチ名との対応は、表1に示すとおりである。

平成14年度は南西部で調査を実施した。前調査により、永納山城跡の外郭線はすでに推定されていたが、南西部についてはその詳細な記録が残っておらず、また踏査を行っても現状では列石を確認できなかったため、より確実な外郭線の確認を目指し最初に調査を実施することとした。調査前半は現状把握のための草刈・清掃に時間を費やしたが、これにより現在も露出する列石を部分的に確認することができた。調査後半にはこれらを基準として7ヵ所にトレンチを設定し、外郭線の検出、列石・土塁による外郭構造の確認を行った。

平成15年度は、本年度で外郭線の再確認を終えることを目的として外郭線の不明確な地域を幅広く調査することとした。現地調査に最も長期間を費やした。調査前半は14年度に実施した南西部で補足調査を実施したが、調査の主体は南部であり、順次東側に向け調査を進めていった。さらに調査後半には、今回調査の大きな課題の一つであった北部地域での外郭線確認を実施した。特に医王山を城域として取り込むか否かは遺跡の範囲の確定にも大きく関わることであった。

このように本年度調査は多地区に及ぶが、南西部に1ヵ所、南部に9ヵ所、南東部に2ヵ所、北部3ヵ所のトレンチと場合によってその拡張区を設定し調査を進めた。その結果、各所で外郭線を確認することができたが、特に南東部での一連の城壁構造(列石・土塁とともに列石前面の柱穴)の確認と医王山での列石確認は大きな成果であった。

平成16年度は調査最終年度であり、調査の中心は東部から北東部にかけての地区であった。当地区は以前から長距離にわたって列石の露出が確認できている場所が多いため、トレンチは外郭線の不明確な部分で外郭線を確認するためのものと城壁構造の把握を目的としたものを東部に3ヵ所、北東部に5ヵ所設定するに留めた。また、北部では北に開口する大きな谷へ向かう内側斜面での外郭線確認調査を実施した。

表1 新旧トレンチ名対応表

旧トレンチ	新トレンチ	旧トレンチ	新トレンチ	旧トレンチ	新トレンチ
1 トレンチ	H14- 1 トレンチ	13 トレンチ	H15-11 トレンチ	25 トレンチ	H16- 2 トレンチ
2 トレンチ	H14- 2 トレンチ	14 トレンチ	H15- 7 トレンチ	26 トレンチ	H16- 5 トレンチ
3 トレンチ	H14- 3 トレンチ	15 トレンチ	H15- 8 トレンチ	27 トレンチ	H16- 6 トレンチ
4 トレンチ	H14- 4 トレンチ	16 トレンチ	H15- 2 トレンチ	28 トレンチ	H16- 7 トレンチ
5 トレンチ	H14- 5 トレンチ	17 トレンチ	H15- 9 トレンチ	29 トレンチ	H16- 8 トレンチ
6 トレンチ	H14- 6 トレンチ	18 トレンチ	H15-12 トレンチ	30 トレンチ	H16- 4 トレンチ
7 トレンチ	H14- 7 トレンチ	19 トレンチ	H15-11 トレンチ	31 トレンチ	H16- 3 トレンチ
8 トレンチ	H15- 1 トレンチ	20 トレンチ	H15-14 トレンチ	32 トレンチ	H16-11 トレンチ
9 トレンチ	H15- 3 トレンチ	21 トレンチ	H15-15 トレンチ	33 トレンチ	H16-10 トレンチ
10 トレンチ	H15- 4 トレンチ	22 トレンチ	H15-13 トレンチ	34 トレンチ	H16-12 トレンチ
11 トレンチ	H15- 5 トレンチ	23 トレンチ	H15-16 トレンチ	35 トレンチ	H16- 9 トレンチ
12 トレンチ	H15- 6 トレンチ	24 トレンチ	H16- 1 トレンチ		

第2節 南西部の調査

(1) 概 要

南西部は平成14年度及び15年度の前半にかけ、外郭線の確認を目的とした調査を実施した。調査範囲内は旧南門推定地から西の約400mの距離である。

当地区の地形は、旧南門推定地が尾根の鞍部で標高が最も低くなり、そこから北西に向け尾根

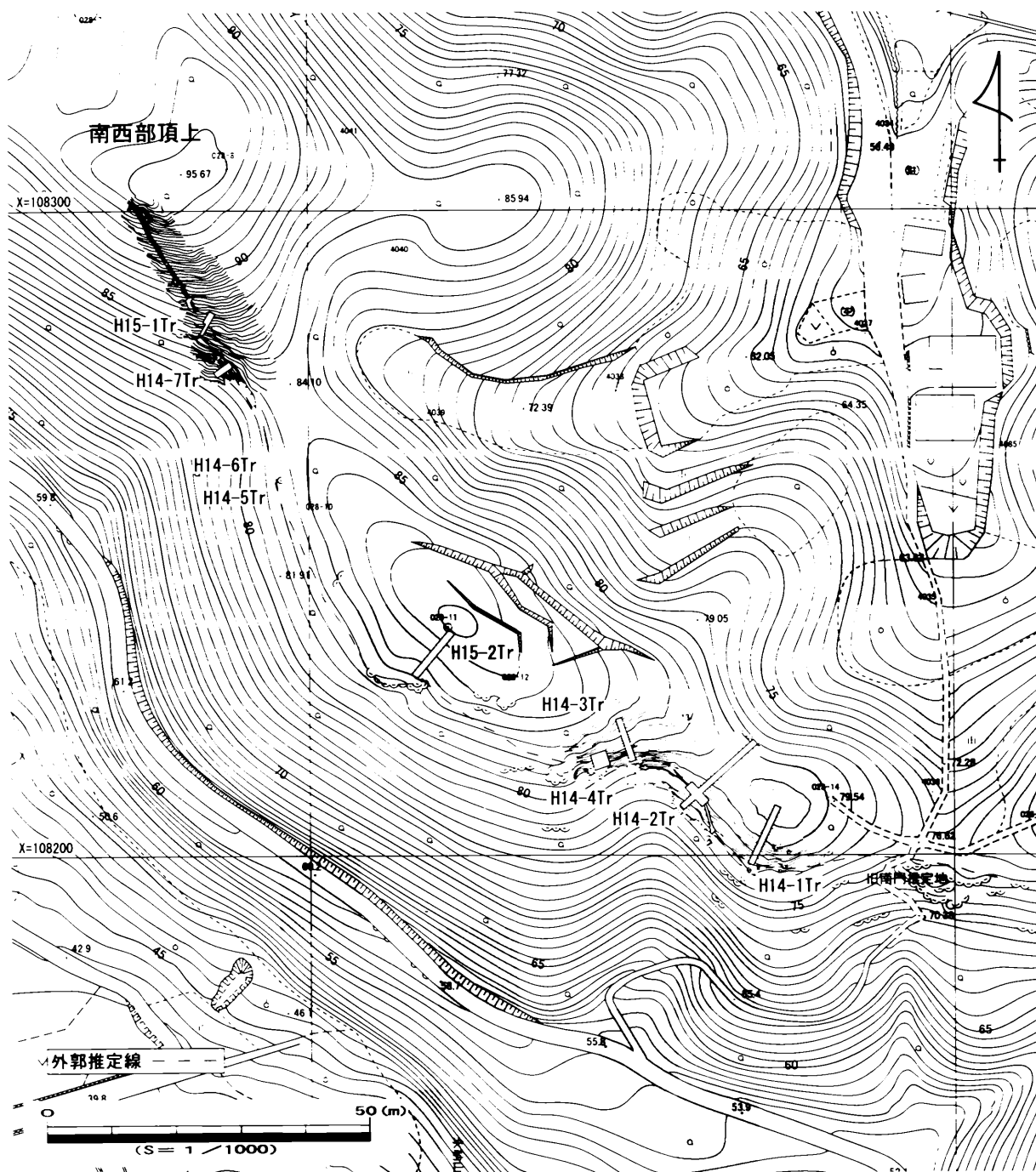


図9 南西部 地形図及びトレンチ配置図

が緩やかに高まる。北西へ向かう尾根中部付近には岩盤の露出が目立つ平坦面があり、そこから尾根はいったん降下し小さな鞍部を形成した後、再び急傾斜で南西部頂上へ向け上っていく。

この一帯は尾根から少し下った斜面に一部で列石が顔をのぞかせる場所があるものの、その大半は腐葉土が厚く地表を覆っているか、あるいは岩盤が露出しているという状態であり、表面観察による外郭線の確認は困難であった。そこでまず現状ですでに露出している列石をもとに外郭線を推定した上で、トレンチを設定して外郭線のつながりを追いかけた。平成14年度はH14-1～4トレンチ、中部の平坦面をはさみ西側にH14-5～7トレンチを設定した。さらに平成15年度にはH14-7トレンチの北側にH15-1トレンチを設定し、南西部頂上へ向けて列石確認を行った。またH14-4・5トレンチ間に関しても岩盤部での外郭線確認のためH15-2トレンチを新たに設定した。

その結果、H14-2～4・6・7・H15-8トレンチで列石及び土塁を確認した。またH14-1・5・H15-2トレンチでは列石は確認できなかったが、周辺地形や他のトレンチとの関係で外郭線として岩盤を取り込んでいることが明らかとなった。

(2) H14-1～4トレンチ周辺

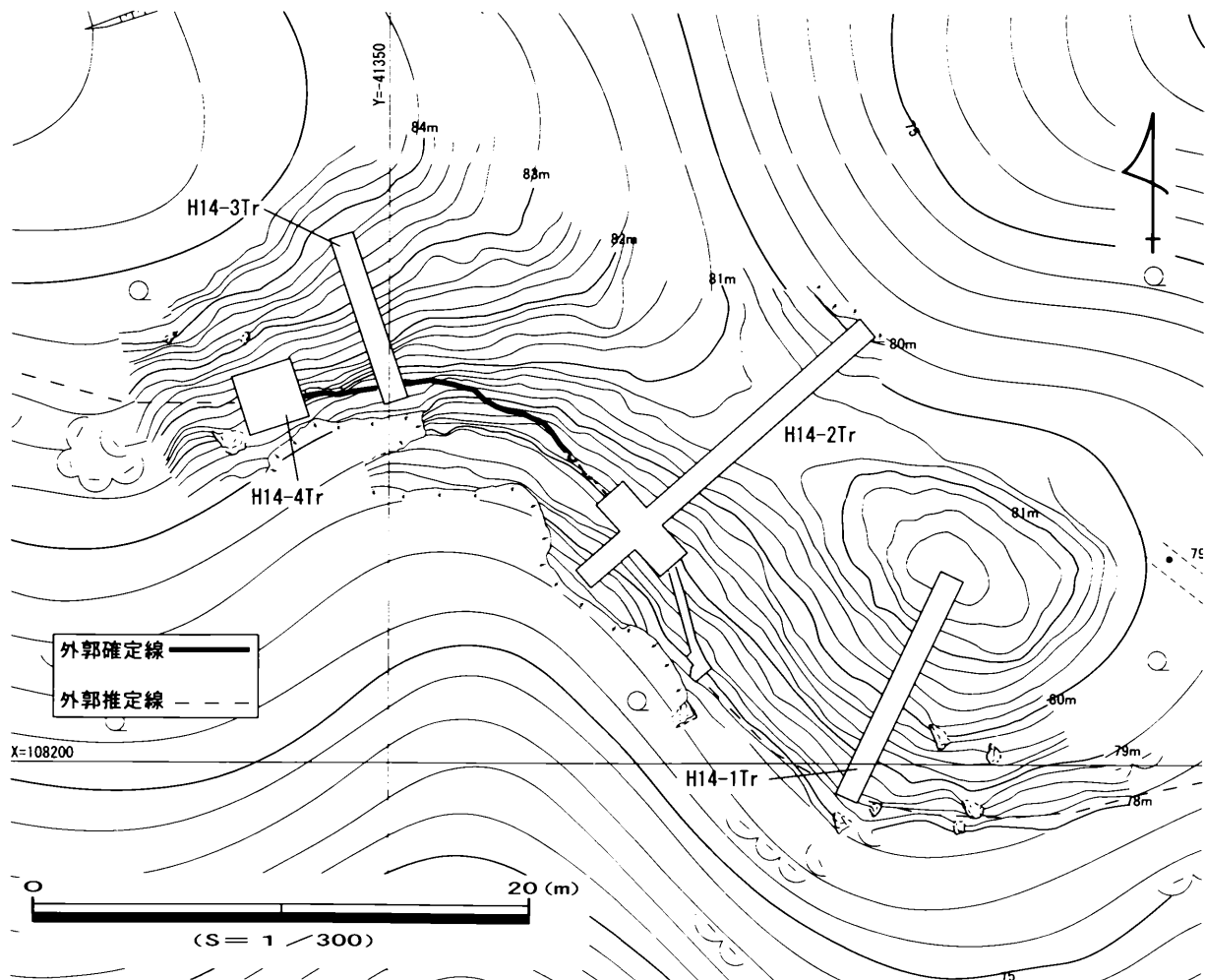


図10 南西部 H14-1～4トレンチ周辺地形図

H 14-1 トレンチ (図 11)

H 14-1 トレンチは、南の尾根鞍部から西へ向かったところに現地表面が土塁状に盛り上がった場所があったため、そこに土塁が残存することを想定し、その確認を目的として設定した。トレンチの規模は東西 1 m × 南北 10 m である。

表土は 2 ~ 30 cm 前後の厚さで堆積していたが、これを除去するとトレンチ全体に 30 度前後の急傾斜の岩盤が現れ、列石・土塁は確認されなかった。またトレンチ内の岩盤には風化していることもあるが、何らかの加工を施した痕跡はみられない。

このような状況に加えて、トレンチのすぐ下には急傾斜に切り立つ岩盤が広がることから、この岩盤自体が防壁の役割を果たしていたと考えられる。(渡邊)

H 14-2 トレンチ (図 12 ~ 15)

H 14-1 トレンチの約 12 m 北西に位置する。本トレンチ設定前に周辺を清掃し

たところ、尾根筋よりやや下った斜面に露出する 2 個の列石を発見したため、この列石を手がかりとして外郭線の確認を目的に H 14-2 トレンチを設定した。トレンチは尾根に直行するように長辺をとり、逆 T 字形に設定し、土塁の確認とともに列石の方向性を追っていくこととした。当初のトレンチ規模は東西 6 m × 南北 4 m であった。その後、調査の進展状況により南・東・北へ拡張した。

また、トレンチ内の土塁崩落土中から若干の土器が出土した。

列石・列石線 列石は当初、トレンチ幅の 4 m の範囲で検出した。しかし、H 14-1 トレンチで列石が確認されなかったこともあり、2 つのトレンチ間で列石が岩盤に接続するのではないかと考え、トレンチを東側へ拡張した。その結果、拡張部では 4.1 m の長さで列石が続き、その東端が岩盤に接続することが明らかとなった。

個々の列石は横幅 20 ~ 100 cm ・ 厚さ 40 cm 程度の花崗岩の自然石あるいは粗割石が用いられる。また、石材は小口面を外へ向け奥行きを長くするように置かれていた。なお、断割り部分で確認した列石は横幅 42 cm を測るのに対し、奥行きは 66 cm であった。

これらの列石は直線的に並べられており、東拡張区で 1 ヲ所「折れ」構造を確認した。この折れは外折れであり、その角度は 150 度を測る。

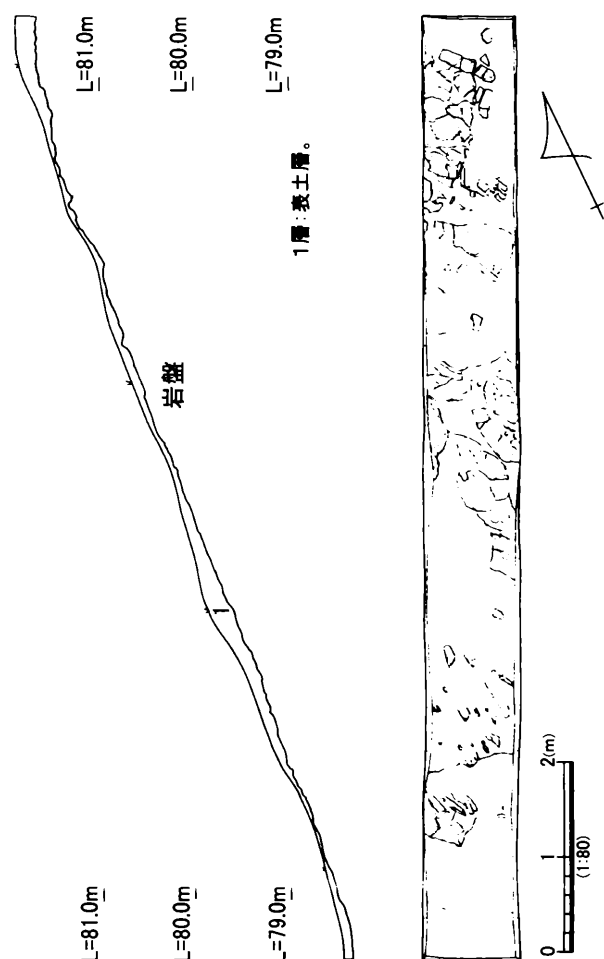


図 11 H 14-1 トレンチ平面・断面図

裏込め状石 土塁の一部を断割った結果、列石の背後に裏込め状に置かれる石を検出した。石は列石同様に花崗岩が用いられ、その法量は横幅20～30cm、奥行き20～50cm程度と列石に比べ小振りである。また、これらの石には大きさや形に統一性が見られず、その配置に関しても規則性は見られない。

土塁 土塁は内側を尾根斜面にもたせかける内托土塁である。高さは現状で列石上面から約1.8mであり、土塁の厚さは最も厚く積まれるところで地山面から90cmを測る。

土塁の積み方は、本来の土塁とその基盤となる層を含めると3工程が認められる。まず第1工程は39層～57層であり、地山直上から積まれる層である。各層は20～30cmの厚さで積み、その構成土は、浅黄橙色や灰白色で非常にキメの細かい土が固くたたきしめられたものである。また、これらの各層間には幅3cm前後の縦方向の層が見られる。この層は周りの層と比較した場合、色彩的には類似するものの、土自体にしまりがなく、ボサボサと崩れることから明らかに別の層と捉えられる。この縦層は短いところで約20cm、長いところでは約40cm間隔でみられる。これらの縦層は根による攪乱も考えられるが、上層からの貫入が見られない点、ある程度の規則性を持つ点等から判断すると、その可能性は低いと思われる。

第2工程は26層～38層であり、土塁の基盤層となる。これらの各層は淡黄橙色、浅黄橙色の固くしまった層である。層によっては砂粒の混じりが多く、やや粗い層も見られる。この中の38層は列石付近で急角度に下がり、緩やかに傾斜するテラスとなり、この層の上に列石が置かれる。

第3工程は土塁の層である。10層～25層である。これまでの層に比べると、土のキメは若干粗くその硬さはないが、全体的には固くしまった土である。この中には、わずかに粘性を持った層も見られる。これらの各層は厚さ10～20cm程度と薄く、レンズ状に積み重ねられる。

これらのうち、第1工程にみられる縦層は基盤層築造の際の堰板的なものを想定することもできるが、現在のところこのような状況はH14-2トレンチのみでしか確認されていない。今後、平面的な確認や周辺での調査が必要である。

列石前面の調査 トレンチ断割りで明らかになった基盤層の延長を追うことを目的として、トレンチを南に2.4m拡張した。その結果、列石前面においても基盤となる盛土を確認した。

盛土 列石前面の盛土に関しても基盤層として2工程が見られる。まず、最初に地山の直上から、厚さ20～30cm前後の非常に固くたたき締められた層が積まれる(17～26層)。また、これらの層には列石背面同様に縦層がみられるが、その間隔は50～70cmと幅広く、積み方に関しても列石背面の基盤層に比べるとやや粗い。

次に行程で積まれた層が10層～16層である。これらの層は、列石が置かれる基盤層の延長であり、ほぼ水平に積まれる。

さらに、その上に10cm前後の厚みを持った層(7～9層)が列石よりやや下がったレベルで、水平に堆積しているが、これらの層はしまりがなくボロボロと崩れることから、後に堆積した層である可能性が高い。1層～6層は表土及び崩落土である。

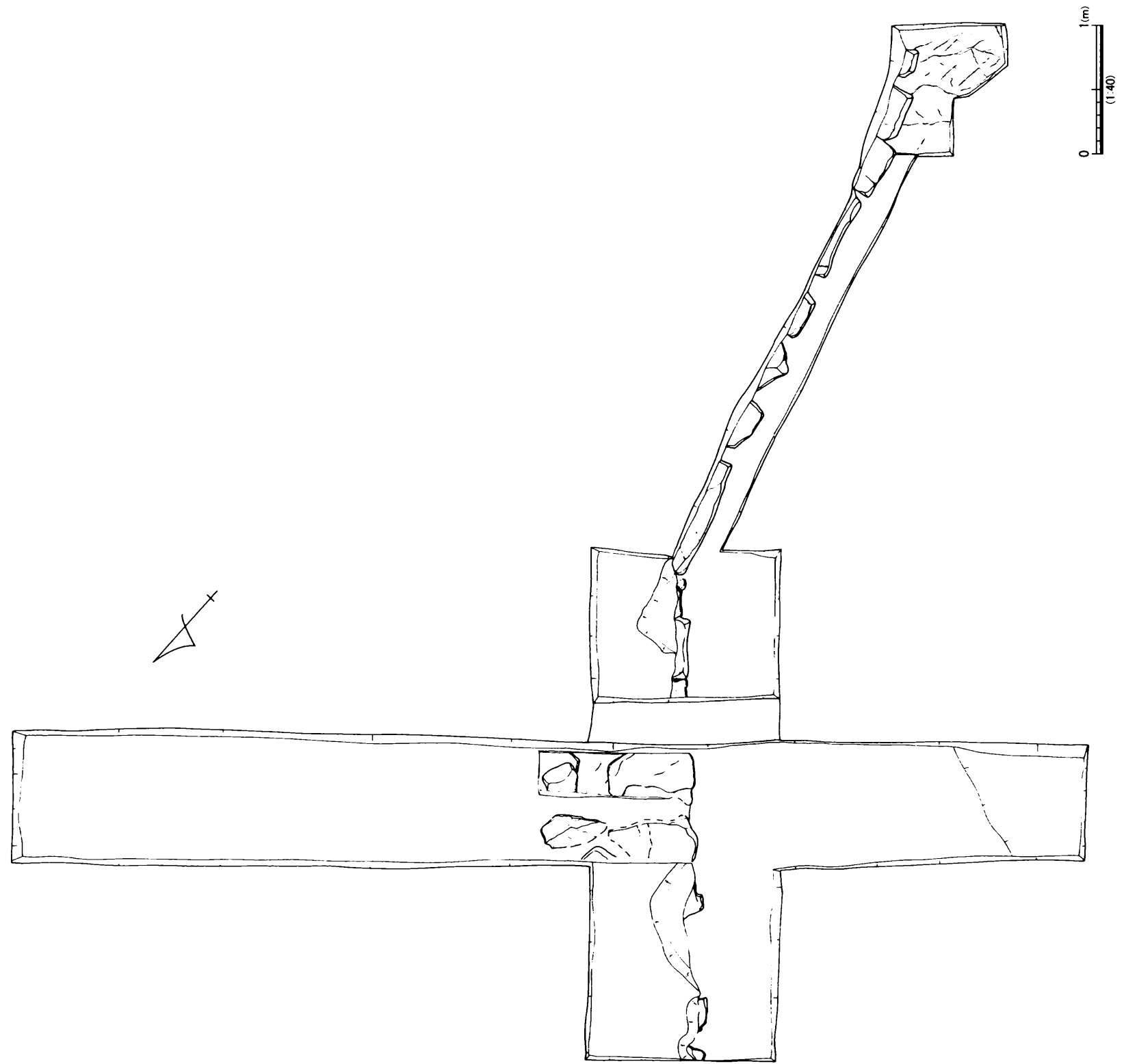
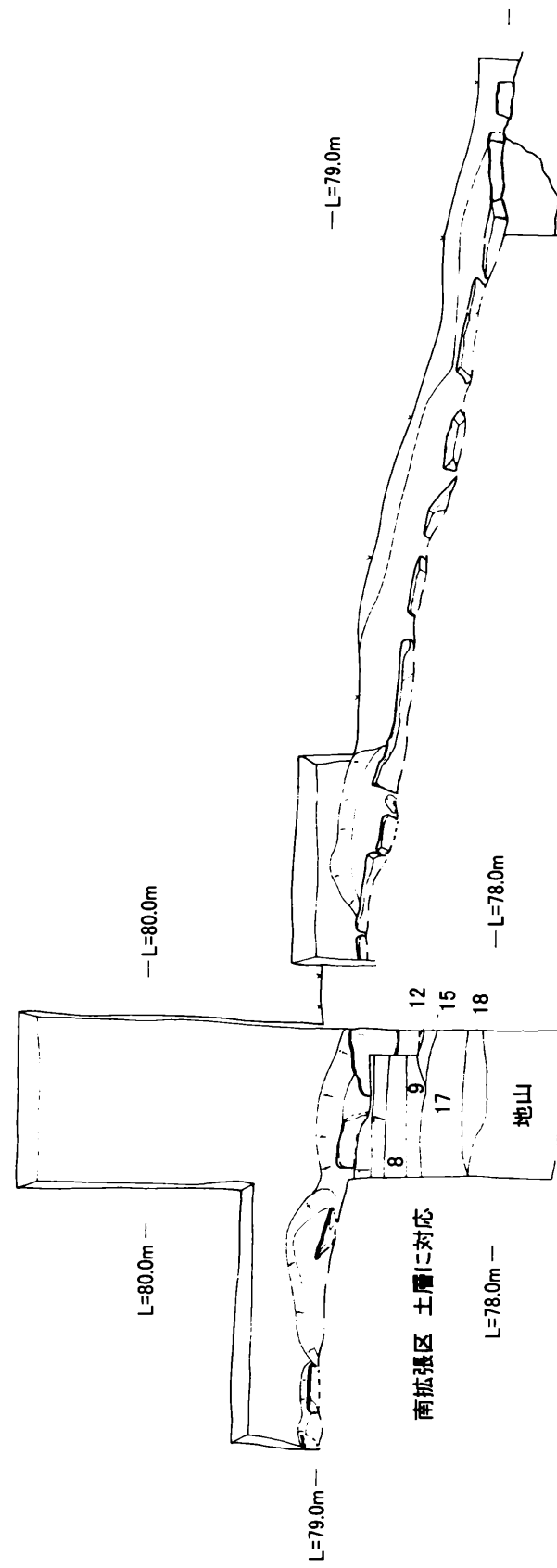
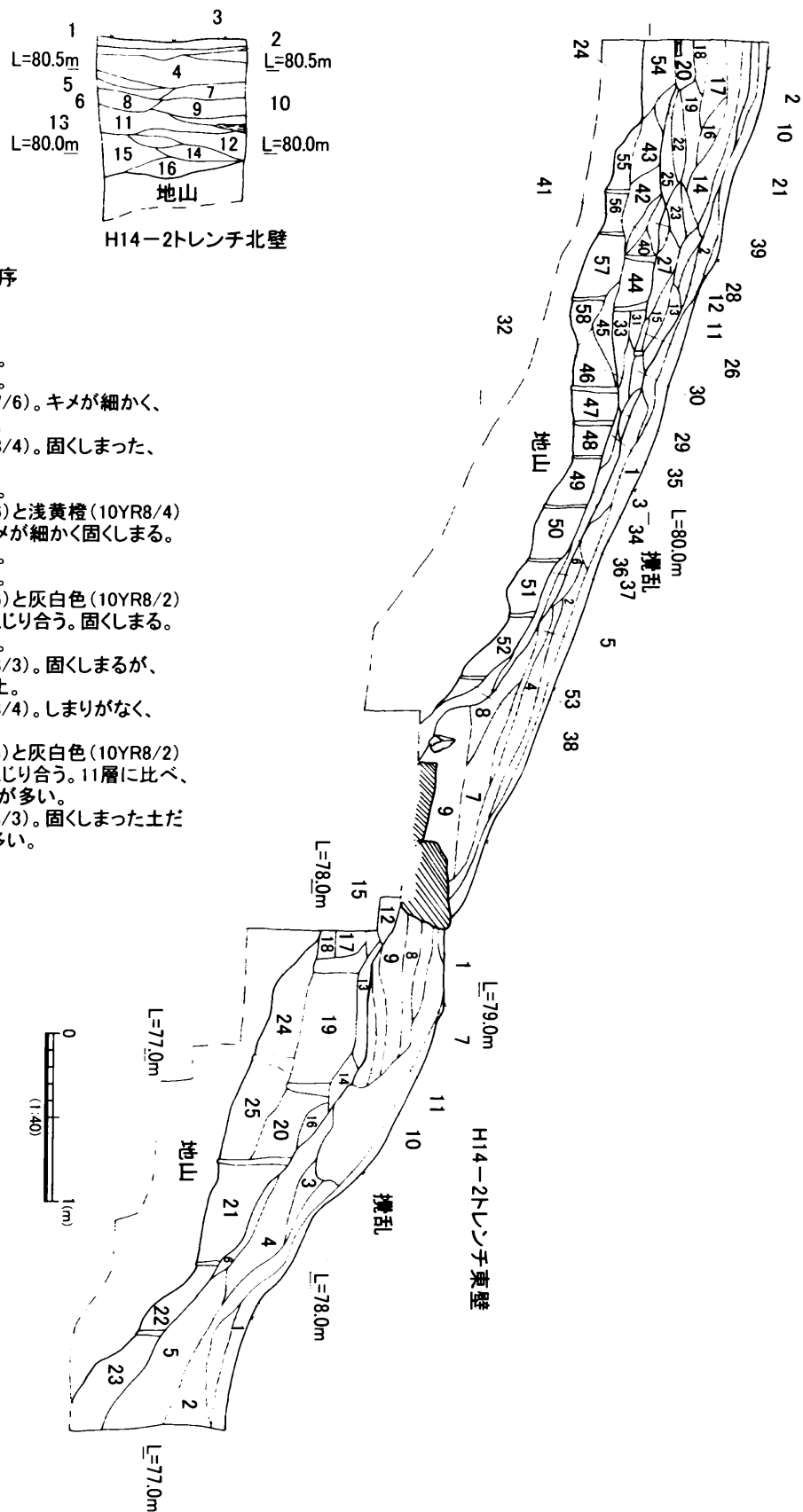


図12 H14-2 トレンチ平面・立面図



H14-2トレンチ北壁層序

- 1層：表土。
- 2層：崩落土。
- 3層：東壁10層に対応。
- 4層：東壁14層に対応。
- 5層：明黄橙色(10YR7/6)。キメが細かく、弱い粘性を持つ。
- 6層：浅黄橙色(10YR8/4)。固くしまった、キメの細かい土。
- 7層：東壁17層に対応。
- 8層：黄橙色(10YR8/6)と浅黄橙(10YR8/4)が混じり合う。キメが細かく固くしまる。
- 9層：東壁18層に対応。
- 10層：東壁20層に対応。
- 11層：黄橙色(10YR8/6)と灰白色(10YR8/2)がブロック状に混じり合う。固くしまる。
- 12層：東壁54層に対応。
- 13層：浅黄橙色(10YR8/3)。固くしまるが、ややキメが粗い土。
- 14層：浅黄橙色(10YR8/4)。しまりがなく、ぼろぼろ崩れる。
- 15層：黄橙色(10YR8/6)と灰白色(10YR8/2)がブロック状に混じり合う。11層に比べ、黄橙色土の割合が多い。
- 16層：浅黄橙色(10YR8/3)。固くしまった土だが~3cmの礫が多い。

図 13 H 14- 2 トレンチ断面図

H14-2トレンチ 層序

1層：表土。	35層：25層と同様。
2～9層：崩落土。淡黄褐色、黄橙色のしまりのない土が斜めに堆積する。	36層：25層と同様。
10層：淡黄色(2.5Y8/4)。固くしまった土で、わずかに粘性を持つ。若干、炭が混じる。	37層：23層と同様。
11層：浅黄橙色(10YR8/4)。固くしまりあり。2mm前後の砂粒が目立つやや粗い土。	38層：25層と同様。列石が置かれる層。
12層：浅黄橙色(10YR8/4)。固くしまりあり。2mm前後の砂粒が目立つやや粗い土。11層に比べると粘性が強い。	39層：淡黄色(2.5Y8/3)。非常に固くしまるキメの細かい土。
13層：黄橙色(10YR8/6)。固くしまり、弱い粘性を持つ。若干炭が混じる。	40層：灰白色(10YR8/2)。非常に固くしまり、混じりの少ないキメの細かい土。
14層：黄橙色(10YR8/6)。弱い粘質土で、11層に比べるとかたさは弱い。	41層：浅黄橙色(10YR8/3)。固くしまるが、砂粒の混じりが多くやや粗い。
15層：黄橙色(10YR8/6)。弱い粘質土に砂粒が混じる。	42層：灰白色(10YR8/2)。40層に比べ、ややかたさが無い。
16層：淡黄色(2.5Y8/4)。弱い粘性をもちしまりのある土。14層に比べ砂粒の混じりは少ない。	43層：40層と同様。
17層：淡黄色(2.5Y8/3)。非常に固くしまる。弱い粘性を持つ。	44層：40層と同様。
18層：黄橙色(7.5YR8/8)と淡黄色(2.5Y8/4)が細かく混じる。しまり強い。	45層：41層と同様。
19層：淡黄色(2.5Y8/3)。粘質土に細かい砂質土が混じる固くしまった土。	46層：浅黄橙色(10YR8/3)。41層に比べ、さらに固くしまる。砂粒の混じりは少ない。
20層：黄橙色(10YR8/6)。粘質土と粗い砂質土が混じる。硬いがバラバラと崩れる。	47層：46層と同様。
21層：浅黄橙色(10YR8/4)。固くしまる。12層と類似するが、炭の混じりが多い。	48層：46層と同様。
22層：淡黄色(2.5Y8/4)。キメ細かく、固くしまる。	49層：浅黄橙色(10YR8/3)。48層と類似するが、5cm前後の黄橙色ブロックが混じる。
23層：浅黄橙色(10YR8/4)。21層に類似するが、全体的に土のキメが細かく、しまりがある。	50層：浅黄橙色(10YR8/3)。46層に類似するが、3cm程度の礫を含みややバラバラする。
24層：淡黄色(2.5Y8/4)。22層とほぼ同じ土であるが、1cm前後の礫が混じり、やや粗い。	51層：灰白色・浅黄橙色土が細かく混じり合う。固くしまった土。
25層：淡黄色(2.5Y8/4)。固くしまるが、22層に比べやや砂粒の混じりが多い。	52層：51層と同様。
26層：にぶい黄橙色(10YR7/4)。砂質土。きめ細かく固くしまった土。	53層：51層と同様。
27層：浅黄橙色(10YR8/3)。キメの細かい砂質土。固くしまる。	54層：浅黄橙色(10YR8/3)。固くしまるが、土のキメは粗い。
28層：浅黄橙色(10YR8/4)。27層に類似するが、砂粒の混じり具合が多く、やや粗い。	55層：46層と同様。
29層：11層と同様。	56層：46層と同様。
30層：黄橙色(10YR8/6)。弱い粘性をもつ、固くしまった土。	57層：46層と同様。
31層：30層と同様。	58層：46層と同様。
32層：23層と同様。	59層：地山。
33層：25層と同様。	縦層：黄橙色(10YR8/6)。土塁基盤層の間に見られる層。土にかたさやしまりはなく、明らかに基盤層と区別できる。
34層：23層と同様。	

H14-2トレンチ南拡張区 層序

1層：表土。	15層：浅黄橙色(10YR8/3)土と灰白色(10YR8/2)土が混じり合う5mm以下の小礫も混じるが、固くしまった土。
2～6層：崩落土。	16層：浅黄橙色(10YR8/3)。固くしまるが、下層に比べやや粗い土。
7層：にぶい黄橙色(10YR7/4)。ぼさぼさとしたしまりのない土。後世の堆積土。	17層：橙色(7.5YR6/6)土に灰白色が混じる。弱い粘性をもつが、非常に固くしまる。
8層：明黄褐色(10YR7/6)。キメが細かく7層よりは硬い。後世の堆積土。	18層：浅黄橙色(10YR8/3)。～2mm程の砂礫が目立つが非常に固くしまった土。
9層：明黄褐色(10YR6/6)。8層に比べ、しまりがなく、キメの粗い土。後世の堆積土。	19層：灰白色(10YR8/2)。わずかに砂礫が混じるが、キメが細かく非常に固くしまった土。
10層：明黄褐色(10YR7/6)。キメが細かく固くしまった土。しかし、下層に比べるとやや粗い。後世の堆積土の可能性が高い。	20層：19層と同様。
11層：浅黄橙色(10YR8/3)。キメが細かく、固くしまりのある土。12層以下に比べると、少しバラバラと崩れやすい。基盤層が崩れた可能性が高い。	21層：19層と同様。
12層：淡黄色(2.5Y8/4)。非常に固くしまりのある土。わずかに炭が混じる。2トレンチ基盤層38層の延長と捉えられる。	22層：19層と同様。
13層：灰白色(10YR8/2)。固くしまりのある土で砂礫の混じりもほとんど見られない。	23層：19層と同様。
14層：浅黄橙色(10YR8/3)。キメが細かく、固くしまりのある土。11層と類似するが、よりかたさがある。	24層：橙色(7.5YR6/6)。～2mm前後の砂礫が混じり、ややキメは粗いが固くしまった土。
	25層：24層と同様。

土塁城内側の調査 以上のように城外側に土塁が築かれることを確認し、次に尾根頂部及び城内側での土塁確認のためにトレンチを北側へ6.5m拡張した。その結果、尾根頂部には僅かであるが盛土と考えられる固くしまった土を検出した。城内側斜面では腐葉土・崩落土を除去すると岩盤が現れ、城外側にみられたような土塁の痕跡は確認されなかったが、岩盤には内側斜面で奥行き80cm程度のテラス状平坦面が見られた。この平坦面は傾斜変換の角度が急なこともあり、人工的なものであることは明らかである。しかし、城内側については、これ以上調査範囲を広めなかったため、この平坦面が永納山城に伴うものかは現状では不明である。(渡邊)

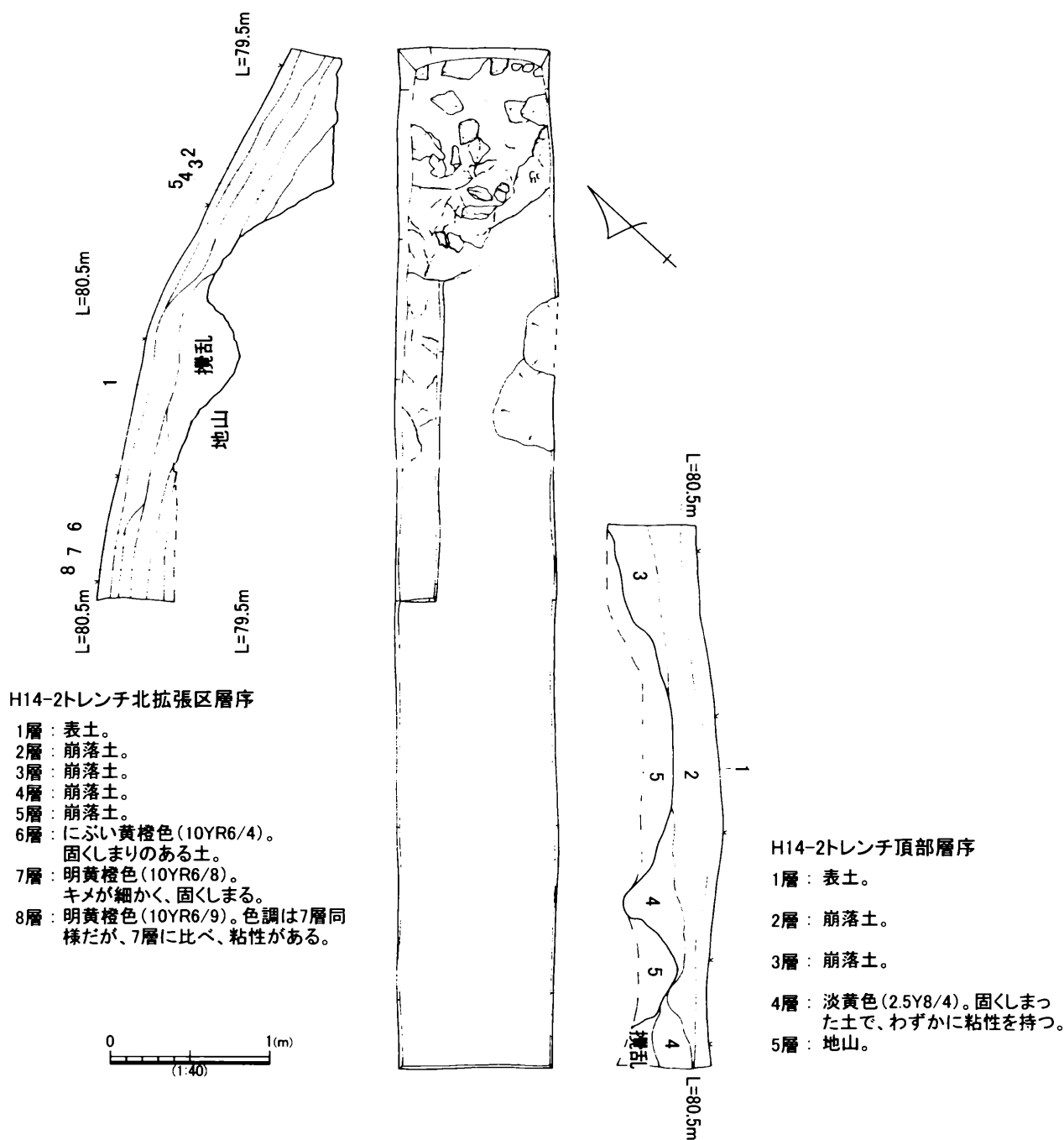


図 14 H 14- 2 トレンチ北拡張区平面・断面図

出土遺物 トレンチ内からは若干の遺物が出土しており、それらについて説明を加えておく。土器は土塁東半分の断割り調査中に出土した。なお、出土は崩落土中からであり、取り上げ当初は正確な層位は確認できなかった。しかし、取り上げ時に記録したレベルと後に分層を行った土層断面とを比較すると、崩落土9層から出土したことが明らかとなった。平面的には、列石及び裏込め状石の上面である。 (渡邊)

土師器(図16-1~7)

1、2は坏である。1は体部下位から口縁端部にかけての破片接合資料である。口縁部約5分の1、体部約4分の1が残存し、復元口径18cm、復元器高4cm前後を測る。体部は、下位から内湾気味に緩やかに立ち上がり、その後、中位でやや強く

屈曲し体部上半で垂直気味に外反した後、短く外反する口縁部へと至る。口縁部は内面に幅約1.5mmの段が作られ、端部は丸く収まる。体部外面は、中位の屈曲部から下は横方向のヘラケズリの後ナデが施される。体部中位から口縁端部の外面には横ナデが施され、特に口縁の屈曲部下方1cm程の幅で布ないし板状工具によるやや強い横ナデによって微弱な段が付く。内面は体部上位から口縁部の段にかけて横ナデの後、斜め方向の放射状暗文が一段施される。なお、体部下半内面の屈曲部付近には横または斜め方向の微細な工具痕がみられる。口縁端部内面には横ナデが施される。他の土器に比べ、精製土が使用され、焼成も特に良好である。畿内系の土師器であり、平城Ⅱ~Ⅲ期に比定できる。2は底部外縁から体部下位にかけての破片と体部上位から口縁端部付近までの破片である。復元口径15.8cm、復元底径10.4cm、復元器高5.1cmを測る。体部は、ほぼ平底の底部から一旦ゆるく立ち上がった後、底・体部境で強く立ち上がり、直線的に外傾しながら体部上位へ至る。ここを体部最大径として口縁部へ向かってわずかに内傾し、口縁部は緩やかに外反する。なお、口縁端部は欠損しており、形状は不明である。調整は、底部外縁から体部下位にかけては内外面ともナデの後ヘラミガキが施され、体部上位から口縁部にかけては内外面ともに磨滅が顕著であるが、外面にはわずかに丁寧なナデないしヘラミガキの痕跡がみられる。なお、体部上位屈曲部内面に赤色塗彩の痕跡が残る。当部位だけに塗彩が施されたとは考えにくく、体部上位から口縁部へかけての内面にも塗彩がなされていた可能性が高い。

3は皿または坏の底部から体部下位にかけての破片である。復元底径は12cm強で、平底を呈す



図15 H 14-2 トレンチ土器出土状況

る。底部内面は中央に向かって次第に厚みを増す。外面は全体的に磨滅が顕著であるが、底部・体部下位ともナデの痕跡がわずかに観察できる。内面は全体的にナデ調整が施され、底部と立ち上がりの境目に指による強い横ナデが施されており、凹線状に窪む。焼成の甘い須恵器の可能性もある。

4、5は鉢である。4は胴部上半から口縁部にかけての破片で、残存高6.5cmを測る。胴部は、中位から肩部にかけて内湾気味に立ち上がり、肩部上端を最大径として、口縁屈曲部へ向けて内傾する。屈曲部はわずかに外湾した後、短く外反する口縁部へと至る。口縁端部は面をもち、横ナデによって凹線状にくぼむ。胴部の外面は磨滅が顕著だが、横方向のハケメとナデの痕跡がわずかに残る。内面は斜め方向のヘラケズリないし強いナデが施される。屈曲部は、外面はやや強い横ナデがみられ、内面は磨滅が顕著であるがわずかにケズリの後ナデがみとめられる。口縁部は全体的に横ナデがみられるが、特に内面は強い横ナデが施され、口縁端部を上方にやや突出させる。焼成は若干甘く、焼きの不良な須恵器の可能性もある。5は大型品で、底部外縁から口縁端部までの約4分の1が遺存する。復元口径30cm、復元器高10cm前後を測る。底部外縁は胴部に向けて緩やかに開き、底・胴境で強く屈曲して直線的に立ち上がりながら胴部上半へと至る。その後、口縁部は緩やかに外反し、口縁端部は先細りつつ丸く収まる。胴部外面には胴部の成形に伴う強い指ナデや指頭による凹凸が顕著にみとめられる。また、指頭痕は、底部から胴部下位にかけての内面や口縁端部外面の直下にも顕著にみられる。調整は、底部外面は斜め方向の粗いハケメの後ナデ消し、内面はナデが施され、胴部下位においては、外面は斜め方向の粗いハケメの上にヨコ方向の粗いハケメが加えられ、内面にはナデが施される。胴部中位から上位の外面には指頭による強い横ナデや押圧の後、縦方向主体の粗いハケメが加えられ、内面にはヨコ方向主体の粗いハケメが施されている。口縁部は内外面とも横ナデが施されているが、部分的に胴部のハケメが及んでいるところもある。口縁端部は横ナデが施されている。胎土は砂粒を多く含み、やや粗い。

6、7は器種不明の胴部片で、傾きは任意である。6は外面にナデが施され、内面は磨滅が顕著であるが、ハケメとナデの痕跡が残る。色調は内面及び破断面が淡黄色を呈するのに対し、外表面のみ灰色を呈する点が特徴的である。7は外面にハケメの痕跡がわずかに残るほか、横方向に細い沈線状の線条が1条みとめられる。ただし、後者が意図的な施文であるか否かは不明である。内面は磨滅が顕著であるが、布ないし板状工具によるナデの痕跡がわずかに残る。

須恵器(図16-8)

8は壺または甕の胴部片で、傾きは任意である。外面はタテ方向およびヨコ方向のタタキ目が交差し、内面は青海波文がナデ消されて薄く残る。焼成は堅緻で、色調は外面が灰白色、内面が灰色を呈する。
(半沢)

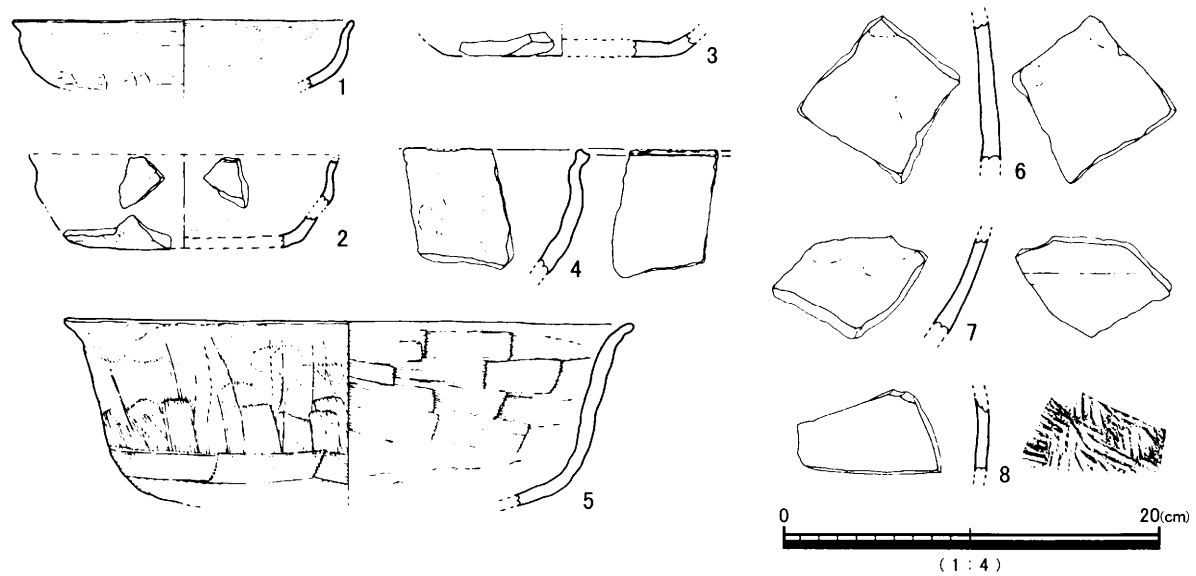


図 16 H 14- 2 トレンチ出土土器

表 2 H 14- 2 トレンチ出土土器 観察表

No.	出土位置	種 別	器 種	部 位	法 量	形状・調整・施文・胎土などの特徴	焼 成	色 調	遺物登録番号
1	2 トレンチ 土壘断割部		坏	体部下位～ 口縁端部	口径〔18cm〕 器高〔4cm前後〕	口縁端部内面やや下方に沈線状の凹みが1条廻る。内面に暗文状のヘラミガキあり。胎土は、1～2mm前後の白色・褐色砂粒、0.5mm以下の黒色砂粒、0.1mm前後の金雲母粒子を含む精製土。	良好	外面：橙色 内面：橙色	ENS3-1
2	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器	坏	底部外縁～ 体部下位、体部 上位～口縁部	口径〔15.8cm〕 底径〔10.4cm〕 器高〔5.1cm〕	体部上位の屈曲部内面に赤色塗彩の痕跡残る。胎土は、0.5mm以下の黒色砂粒をやや多く含み、1mm大の長石と0.1mm前後の金雲母粒子をわずかに含む精製土。	良好	外面：浅黄褐色 内面：浅黄褐色	ENS3-2
3	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器	皿 または坏	底部～ 体部下位	底径〔12cm強〕 残存高1.3cm	胎土は、0.5mm以下の黒色砂粒をやや多く含み、1.5mm以下の暗褐色砂粒や0.1mm以下のキラキラ輝く微細な粒子をまばらに含む精製土。	良好	外面：浅黄褐色 内面にふい黄褐色	ENS3-3
4	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器 (焼きの悪い 須恵器の可 能性あり)	鉢	胴部上半～ 口縁部	残存高6.5cm	口縁端部は面を持ち、わずかに凹線状にくぼむ。口縁部内面の強いヨコナデにより端部内面はやや突出する。胎土は、0.5～1mm前後の白色・暗褐色砂粒、0.1mm前後の雲母粒子を比較的多く含み、1～2mm前後の褐色砂粒をまばらに含む、精製土。	やや甘い	外面：黄灰色 (磨減部分：浅黄 褐色)、 内面：淡黄色	ENS3-4
5	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器	鉢	底部外縁～ 口縁端部	口径〔30cm〕 器高〔10cm前後〕	胴部外面には成形に関わる強い指ナデや指頭圧痕により凹凸が顕著。胴部中位から上位の外面にはタテ方向主体の粗いハケメ、内面にはヨコ方向主体の粗いハケメが残る。胎土は、1～4mm大の褐色砂粒や2mm以下の白色砂粒、1.5mm以下の黒色砂粒を多く含み、やや粗い。	良好	外面：橙色 内面：橙色 (部分的ににぶい 黄褐色)	ENS3-5
6	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器 (焼きの悪い 須恵器の可 能性あり)	不明	胴部	—	0.5～1.5mmの暗褐色砂粒を多く含み、0.1～0.3mmの黒色砂粒と0.1mm前後のキラキラ輝く微細粒子をまばらに含む精製土。	良好	外面：灰色 内面及び破断面： 淡黄色	ENS3-6
7	2 トレンチ 土壘断割部	土 師 器	不明	胴部	—	細い沈線状の線条1条あり。胎土は、1mm以下の黒色・暗褐色砂粒を多く含み、1mm大の長石、0.1mm以下のキラキラ輝く微細粒子をまばらに含む精製土。	良好	外面：浅黄褐色ないしにぶい黄褐色 内面：黄褐色	ENS3-7
8	2 トレンチ 土壘断割部	須 恵 器	壺 または甕	胴部	—	外面は、タテ・ヨコのタタキ目が交差。内面に青海波文がナデ消されて薄く残る。胎土は、0.2～0.8mmの白色砂粒を多く含み、0.2～0.6mmの黒色・暗褐色砂粒と0.1mm以下のキラキラ輝く微細粒子をまばらに含む精製土。	良好	外面：灰白色 内面：灰色	ENS3-8

(法量の〔 〕は推定復元値)

H 14－3 トレンチ(図 17)

H 14－2 トレンチ西側に露出した列石からさらに西へむけての約8.5mの区間では、列石は腐葉土により覆われているが、そのつながりを追うことができた。しかしながら、それ以西は岩盤地帯の近くということもあり表面調査による列石の推定が困難となったため、この区間の西端にH 14－3 トレンチを設定し、外郭線の確認を目指した。トレンチの規模は東西1m×南北7mである。

調査の結果、トレンチ下端付近で2個の列石を検出し、列石・土塁からなる外郭線がH 14－2 トレンチから続くことを確認した。

列石・裏込め状石 列石は東側のものが横幅55cm・厚さ20cm、西側は横幅40cm・厚さ20cmで、共に花崗岩の粗割石である。石材は小口面を外側に向け、奥行きを長くとり並べられる。また、列石背面には大きさは30～40cmの礫が置かれる。

これらの列石・裏込め状石は地山をカットした上におかれ、列石下に盛土はみられない。

土塁 列石上部は表土を除去した時点で硬化面が現れたため、当初この面を現存する土塁上面と理解した。しかしながら列石付近で一部断割り確認を行ったところ、この硬化面は本来の土塁面ではなく土塁の崩落土であること、さらに断面の観察から、土塁は地山から10数cmしか残存しないことが判明した。

土塁は列石上面からわずかに残存するのみであったが、厚さ3～5cmの固くたたきしめられた花崗岩風化土と粘質土が互層堆積する状況が確認できた。土塁の傾きは列石とともに尾根の傾斜に沿うように緩やかに傾斜する。

本トレンチでは列石の検出による外郭線の確認が目的であったため、これ以上の掘り下げは行わなかった。(渡邊)

H 14－4 トレンチ(図 18)

H 14－4 トレンチはH 14－3 トレンチの西側、尾根が岩盤の露出する平坦面へ向かい次第に高まる場所に位置する。H 14－2 トレンチからH 14－3 トレンチまで確認できた列石がこの周辺から不明確になるため、列石と岩盤との関係を確認する目的でH 14－4 トレンチを設定した。トレンチ規模は2.5×2.5mである。

調査の結果、列石とともに列石が岩盤へつながる部分を検出することができ、外郭線への岩盤利用の一端が明らかとなった。

列石・列石線 列石はトレンチ東側に露出する2個を含めると約2mの長さで確認できた。これらの列石は尾根から3m程下がった斜面に並べられ、尾根が北西部へ向かい高まっていくのに沿うように緩やかに傾斜して並び、トレンチ途中で岩盤に接続する。

個々の列石は花崗岩の粗割石や自然石が用いられ、その大きさは横幅20～60cm程度で小・中型のものが目立つ。

土塁 列石の上にはキメが粗くしまりのない土が堆積しており、土塁の痕跡も確認されなかった。また、トレンチ途中からみられる岩盤部においても土塁は検出されなかった。(渡邊)

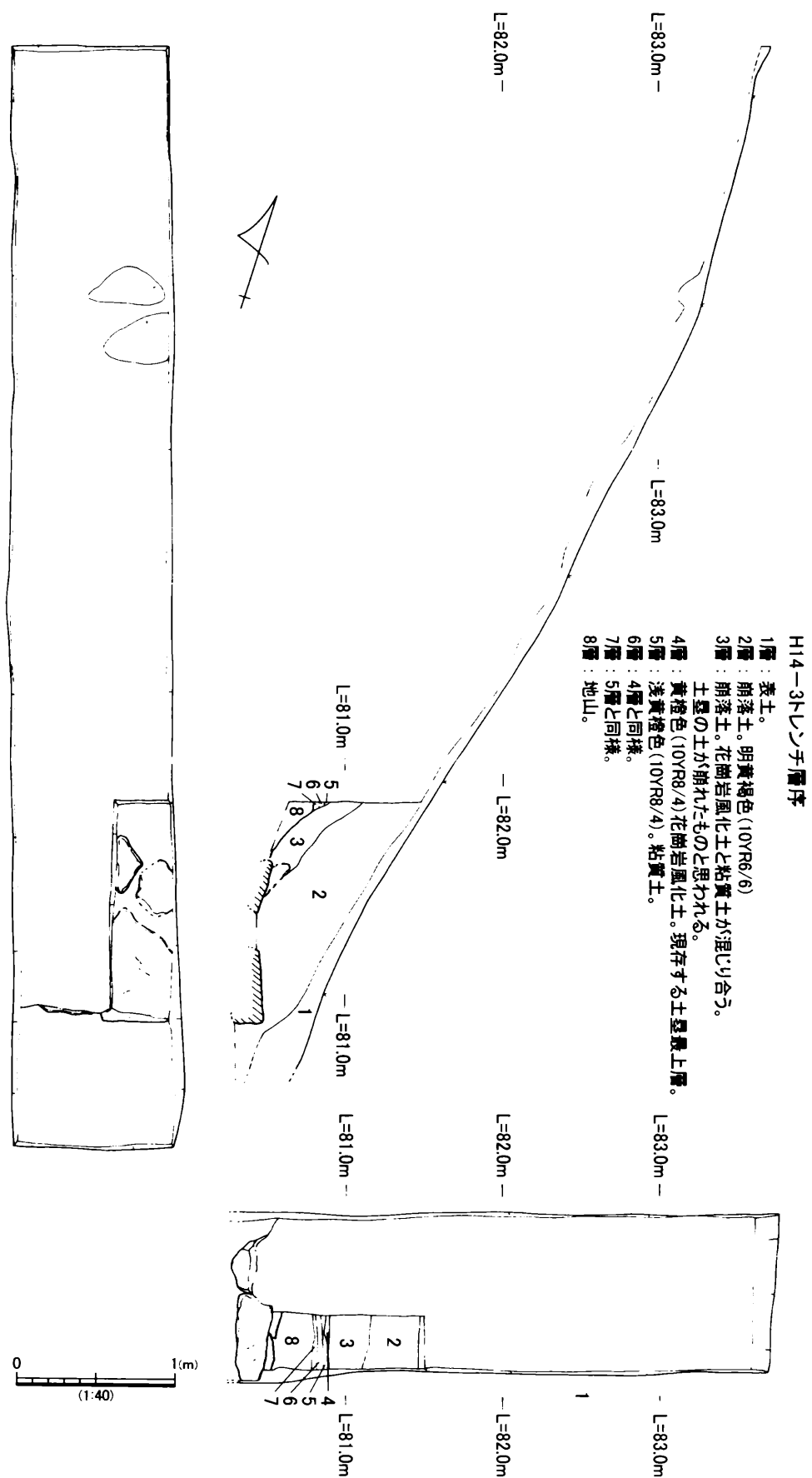


図 17 H 14- 3 トレンチ 平面・断面・立面図

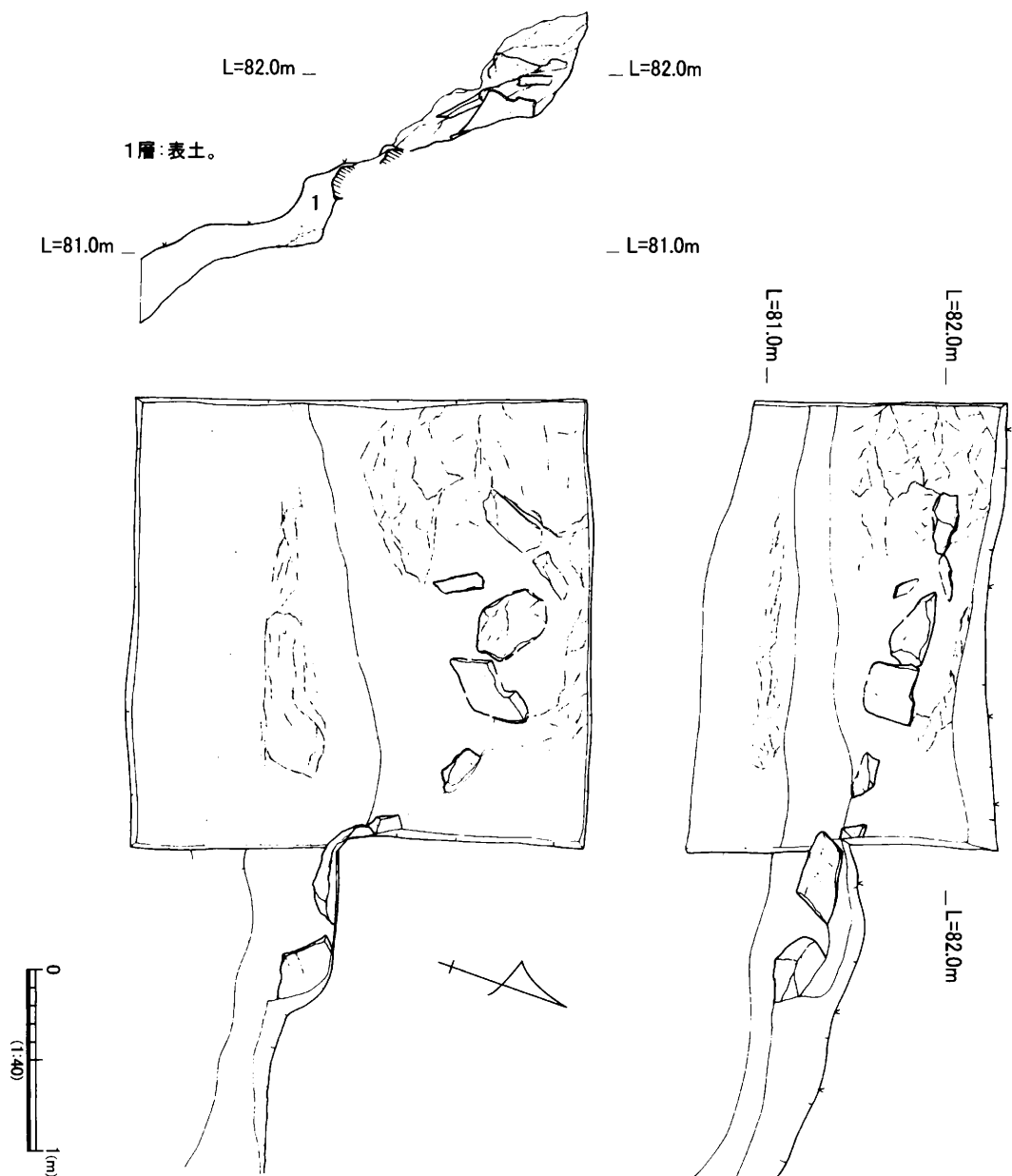


図 18 H 14- 4 トレンチ 平面・断面・立面図

(3) H 14 - 5 ~ H 15 - 1 トレンチ周辺

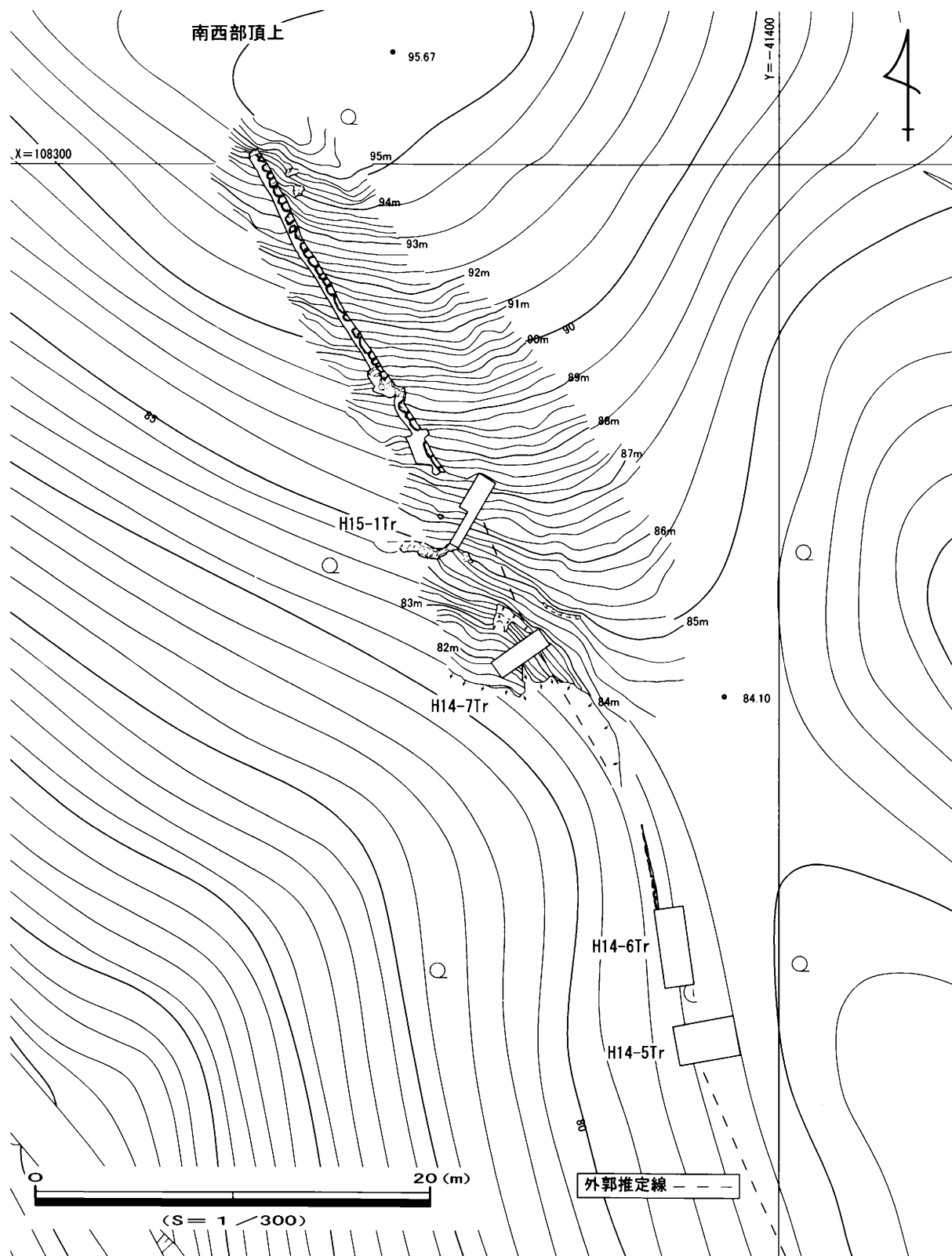


図 19 南西部 H 14- 5 ~ H 15- 1 トレンチ周辺地形図

H 14－5 トレンチ(図 20)

H 14－5 トレンチはH 14－4 トレンチ周辺から続く岩盤地帯を北西に進み、丘陵平坦面を越え再び下っていく尾根の斜面に設定した。この周辺では踏査により再び数個の露出列石を確認していたため、これらとH 14－4 トレンチから続く岩盤との関係を把握することを目的とし、列石と岩盤の間にトレンチを設定した。トレンチは列石がどのように伸びるのが不明であったため幅 2 m × 長さ 3 m と幅広に設定した。

表土は 10 ～ 20 cm 程の厚さで堆積しており、これを取り除くとトレンチ全体に岩盤が広がり、土塁・列石といった人工的な外郭構造は確認されなかった。また岩盤自体に何らかの加工を施した痕跡も認められない。

(渡邊)

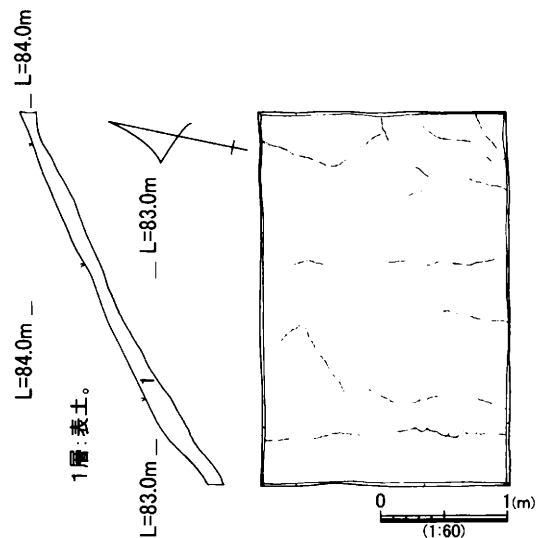


図 20 H 14- 5 トレンチ平面・断面図

H 14－6 トレンチ(図 21)

H 14－5 トレンチの調査で列石・土塁が確認されなかったため、すでに露出している列石に接する位置からH 14－5 トレンチ側へ向けH 14－6 トレンチを設定することにより、列石と岩盤との関係の把握を試みた。トレンチは当初、幅 3 m × 長さ 1 m で設定したが、トレンチ内に列石が確認されなかったため、幅を 1 m 拡張した。またトレンチ外であるが、露出列石から北西側に向け、外郭線を追うことを目的に 4.5m の距離で列石の表面検出作業を行った。

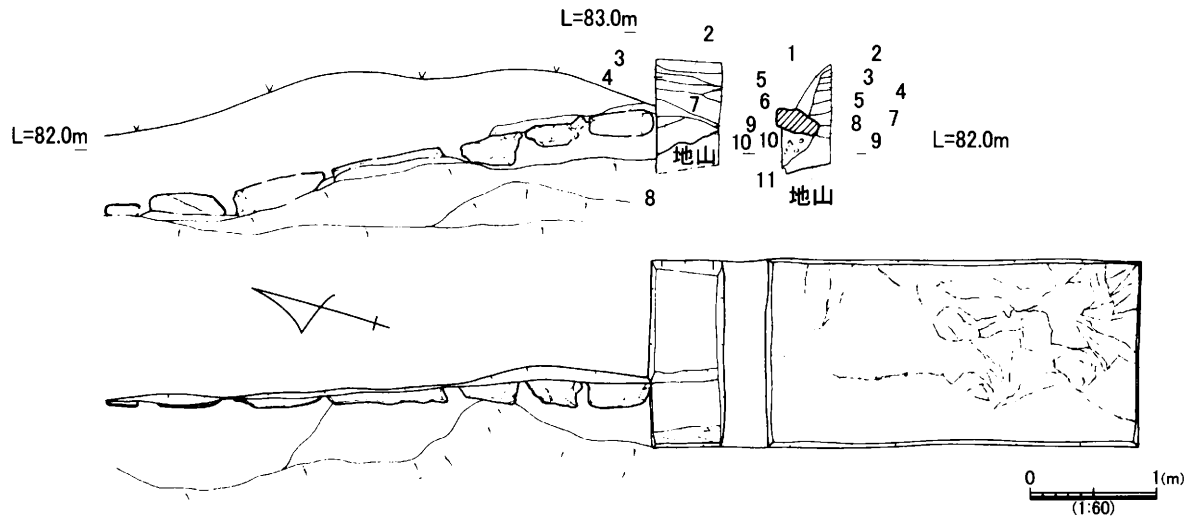
トレンチ全体に薄く堆積する腐葉土を除去した結果、トレンチ内には露出列石に接する所からすでに列石が存在していなかったが、平面・断面の観察からいくつかの所見を得ることができた。

列石・列石線 トレンチ内には列石が見られなかったが、露出列石及び面出しを行った列石からその特徴を説明する。石材は花崗岩の粗割石が用いられ、丁寧な加工はなされない。しかし、これらの列石は比較的平坦な面を正面に向け並べられる。列石の大きさは横幅 30 cm から長いものでは 90 cm 程度のものまであり統一性は見られない。また、石材の厚さはトレンチ断面にかかる列石を見ると 20 cm を測る。これら列石は北へ向かい 5 ～ 15 度程度と緩やかな傾斜で下っていく。

また列石下には列石を据えるために盛土が置かれるが、その盛土は 10 cm 前後の礫を多く含む粗い土であり、H 14－2 トレンチでみられた固くしまりのある盛土とは様相が異なる。

土塁・岩盤 トレンチ内はほぼ全体に岩盤が広がるが、北側では岩盤の上に部分的に土塁が残る場所が見られた。土塁は花崗岩風化土が 5 ～ 10 数 cm の厚さを持ち水平に積まれる。これらの層は基本的にはほぼ同質の土を用いているが、礫の含み具合、土のしまり具合により分層できる。また土塁下方の土は、上方の土に比べ厚みがあり 10 cm 前後までの礫が混じるなどやや粗い土が使用される。

(渡邊)



H14-6トレンチ層序

- | | |
|--|--|
| 1層：表土。 | 7層：2層と同様。 |
| 2層：灰白色(10YR8/1)と明黄褐色(10YR7/6)花崗岩風化土が混じり合う。～5cm程度の礫を含む、固くしまった土。 | 8層：2層に類似。しかし、礫をほとんど含まず、2層に比べ、さらに固くしまった土。 |
| 3層：2層とよく似た色調をなすが、きめが細かい。固さは2層に比べ弱い。 | 9層：明黄褐色(10YR7/6)礫をほとんど含まず、粘性の強い土。 |
| 4層：2層と同様。 | 10層：明黄褐色(10YR5/8)。弱い粘質土に花崗岩風化土が混じる。～10cmの礫が多く含まれる。 |
| 5層：土のしまり具合や礫の混じり具合において、3・4層の中間的な層。わずかに粘性がある。 | 11層：2層と同様。 |
| 6層：4層と同様。 | |

図 21 H 14- 6 トレンチ平面・断面・立面図

H 14- 7 トレンチ(図 22)

H 14- 1 ～ 7 トレンチが設定された南西部尾根は、H 14- 6 トレンチの北西付近で短く「馬の背」状の地形を形成した後、さらに北西方向に伸び、既に北半分を採土によって破壊されている南西部頂上へと至る。H 14- 6 トレンチから南西部頂上までの外郭線のつながりを確認するために長さ 3 m × 幅 1 m のトレンチを設定し、H 14- 7 トレンチとした。調査の結果、トレンチの上端付近で列石および版築土塁を確認した。また、土塁の状況及び列石下部の土層の状況を明らかにするためにトレンチ北側に幅約 45 cm の断割り部を設けて調査した。尚、当トレンチからの遺物の出土はなかった。

列石・列石線 トレンチの上端付近で腐葉土(1層)と崩落土(2・3層)を除去したところ連なった列石 2 個を検出した。2 個の列石は、断割り部の調査の結果、まず岩盤風化土である砂礫土(6層②)及び小礫を多く含むしまりのない明黄褐色砂礫土(6層①)上にややしまりのある明黄褐色砂礫土(5層)を置土として積んだ後、その上に設置されたことが判明した。列石は、正面から見て凡そ 20 ～ 25 度の傾斜で斜めに連なって設置されており、H 14- 6 トレンチ西方検出の列石線は H 14- 7 トレンチに向かって急角度で上がってゆくことが分かった。検出した 2 個の列石の内、北側の石は、石材は花崗岩の粗割石で、露出している前面・上面はかなり平坦でしっかりとした面をそれぞれ前方・上方に向けている。その法量は、横幅 80 cm 超、厚さ 22 cm を測り、奥行は現況で約 30 cm を測る。一方、南側の石については、石材は花崗岩であると分かるが、片隅が見えているだけであるため法量などの詳細は不明である。これら列石上面には前面端部から幅 10 cm 程度を残して土塁が積まれており、土塁が列石を押さえ込むような状況を示している。

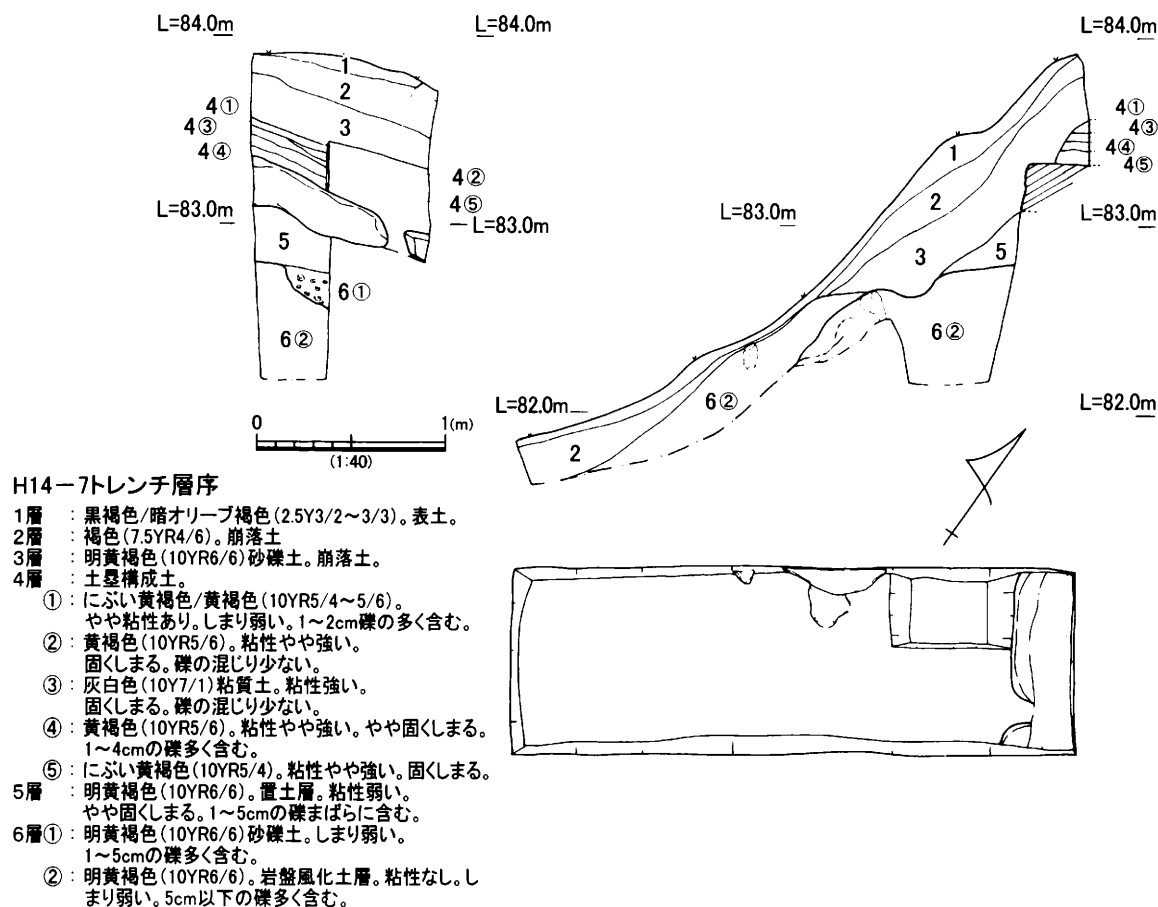


図 22 H 14- 7 トレンチ平面・断面・立面図

土塁 トレンチ上端付近において 1～3 層の腐葉土・崩落土を除去していったところ列石を押さえ込むように見える硬い土の堆積が検出され、土塁であると判断した。この土塁は検出時点から横方向の縞模様が見え、単一の堆積ではないことが考えられたので、上述のように断割り調査を行ったところ、比較的しまりが良く、灰白色粘質土や粘性の強い黄褐色土を主体とする五層の堆積層のまとまり (4 層①～⑤) が確認できた。土塁先端部のみの調査であるが、各層の厚みは最も薄い部分で約 4 cm、最も厚い部分で約 8 cm を測り、少なくとも北壁断面でみる限り、各層が奥に向かってほぼ水平に堆積していることが分かった。また、正面から見ると、土塁各層は、概して 20～30 度の傾斜で積まれている。当トレンチで検出された土塁は、版築工法によって築かれた土塁であることが確認できた。

地山(岩盤および岩盤の風化土層) トレンチ上半部における列石下の置土層 (5 層)、明黄褐色崩落土層 (3 層)、トレンチ下半部における厚い褐色堆積土層 (2 層) の下層には、露出した岩盤を含む岩盤風化土層 (6 層) が厚く堆積しており、これを地山とみなした。トレンチ北壁断面を見ると、トレンチ下端から中間地点 (約 1.6m の所) まではこの地山層が 45 度前後のほぼ一定の傾斜を示しているが、中間地点付近ではかなり水平気味に傾斜が変換していることから、列石前方の地山を人為的に削平した可能性も考えられる。

(半沢)

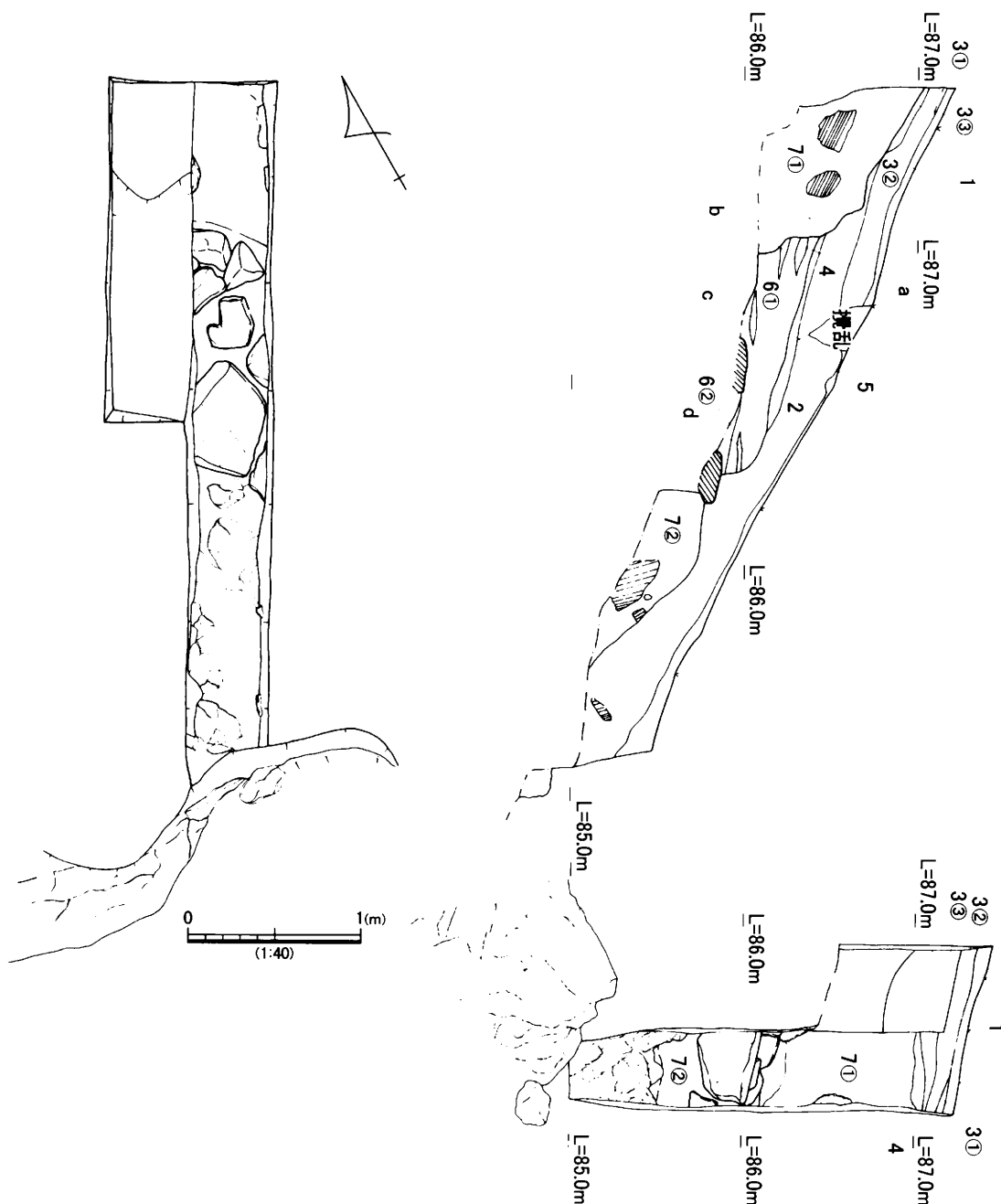
H 15- 1 トレンチ(図 23)

H 14- 7 トレンチから北方に向けての列石・土塁のつながりを確認する為に設定したトレンチである。H 14- 7 トレンチで検出した 2 個の列石の方向性を踏まえ、そこから南西部尾根をさらに約 8 m 北上した位置に長さ 2 m × 幅 1 m のトレンチを設定し、H 15- 1 トレンチとした。腐葉土を除去し掘り進めた結果、しまりの良い黄褐色土(トレンチ南壁 3 層②に対応)が面的に広がり、その下層にしまりは弱いが粘性は比較的強い褐色土層(同 3 層③)、さらに下方にしまりの無いにぶい黄褐色土層(同 4 層)を検出した。前 2 者の土が土塁に関係する可能性を考えたが、4 層との関係を含め、より詳細な層序を明らかにする為にトレンチの南側を幅 50cm で断割ることとした。

断割り調査の結果、トレンチ上端から西方約 70～90cm 以内の範囲では 3 層②ないし 4 層の下に明黄褐色の固い岩盤風化土層が検出され、さらに西方では 4 層の下でしまりの無いにぶい黄褐色砂質土層(5 層)、さらに固くしまる黄褐色砂質土を主体とする厚さ 30cm 前後の土層堆積(6 層①・②及び 6 層 a～d)を確認した。また、トレンチ西端では、列石と思われるやや大型の平石を検出した。そして、この平石の背面を更に精査した結果、人頭大の角礫 5 個が平石の背後を面的に埋めるように密集して配されている状況が明らかになった。これらの状況から、大型の平石と背後の角礫群はそれぞれ列石とその裏込め状石であると判断した。また、6 層が風化岩盤層を削平して造られたテラス状平坦面及び列石・裏込め状石に乗っている状況から少なくとも 6 層全体を土塁と判断した。

トレンチ西端で列石の一部を検出したことを受け、列石を前面まで掘り出すとともにトレンチ西方約 2 m 付近の地形の急な落ちがみられるところ及び同 2～2.5m 付近に露出している岩盤付近までの土層の状況を明らかにする目的で上述の断割り部をその落ちの部分および露出岩盤に当たるまで西方に拡張した。これにより幅 50cm × 長さ約 2 m の拡張区が付加される形となった。これを掘り進めた結果、大型の列石のほぼ全体形が明らかになると同時に、その南側に隣接する列石の一部も検出された。拡張区下端までの土層の状況をみると、腐葉土層(1 層)の下に厚い褐色砂質土層(2 層)が堆積しており、土塁・列石およびにぶい黄橙色ないし明黄褐色のしまりのない砂質土層(7 層②)に乗っていることがわかった。詳細は下に述べる。尚、当トレンチから遺物は一切出土しなかった。

列石・列石線・裏込め構造 上述のように当トレンチでは列石 2 個と裏込め状石 5 個が検出された。ほぼ全体が検出された比較的大型の列石について述べると、石材は花崗岩で、横幅は 50cm 前後と推定され、奥行きは 60cm 強、前面・上面ともに平坦でしっかりとした面を持つ。もう一方の列石は北端部分のみの検出であり、やや不整形であるため詳細は不明である。これらの列石は正面から見ると左肩上がりに緩やかに連なっており、平面的には北西方向へ列石線を形成することが少なくとも確認できた。また、上述のように列石背後には人頭大の石 5 個が背後を面的に埋めるように密集していた。列石線が北西方向に伸びていることを踏まえると、これらの石は列石線と平行するように列石背後前方に 3 個、後方に 2 個がほぼ整然と二列を成しているように見て取れる。また、正面からみると、これらも列石同様に左肩上がりに配置されていることがわかり、列石・裏込め石が大きくみて一体のものとして配置されていることが明らかである。列石背後付近は、トレンチ南壁断面の土層観察も合わせて考えると、明黄褐色風化岩盤層(7 層①)を断面 L 字



H15-1トレンチ層序

- 1層 : 黒褐色/暗オリーブ褐色 (2.5Y3/2~3/3)。表土層(腐葉土)。
 2層 : 褐色 (10YR4/6)。崩落土。
 3層① : にぶい黄褐色 (10YR5/4)。粘性弱い。ややしまる。5~10mmの礫の多く含む。
 ② : 黄褐色 (10YR5/6)。粘性わずか。固くしまる。5mm前後の礫まばらに含む。
 ③ : 褐色 (7.5YR4/6)。粘性やや強い。ややしまる。5mm以下の礫まばらに混じる。
 4層 : にぶい黄褐色 (10YR6/4)。粘性なし。しまりなし。2~5mmの礫の含み、キメ細かい。
 5層 : にぶい黄褐色 (10YR6/4)。粘性なし。しまりなし。ほとんど礫混じりなく、キメ細かい。
 6層① : 黄褐色 (10YR5/6)。土塁の主体。粘性なし。固くしまる。礫混じり少なく、キメ細かい。
 ② : 明黄褐色 (10YR6/6)。土塁最下層。粘性わずか。しまりなし。
 5mm以下の礫混じるが、キメ細かい土を主体とする。
 a : にぶい黄褐色 (10YR6/4)。土塁構成土。粘性なし。しまりなし。
 礫混じり少なく、キメ細かい。
 b : にぶい黄褐色 (10YR6/4)。土塁構成土。粘性なし。しまりなし。
 5mm大の礫混じるが、キメ細かい土を主体とする。
 c : にぶい黄褐色 (10YR7/3~7/4)。土塁構成土。粘性なし。
 固くしまる。礫混じり少なく、キメ細かい。
 d : 明黄褐色 (10YR6/6)。土塁構成土。粘性なし。固くしまる。
 礫混じり少なく、キメ細かい土。
 7層① : にぶい黄褐色/明黄褐色 (10YR6/4~6/6)。風化土。岩盤ブロック混じる。
 粘性なし。しまりなし。
 ② : 明黄褐色 (10YR6/6)。風化岩盤層。粘性なし。しまり強い。

図 23 H 15- 1 トレンチ平面・断面・立面図

形にカットし、ある程度平坦なテラス状の面(奥行き1.3m前後と推定)を作った後、最前列に列石を配置し、その背後に裏込め状石を二列に並べたとみられる。

土塁 明らかに土塁と判断した6層の成り立ちをみると、列石と裏込め状石の隙間を埋める様にしまりのない明黄褐色土(6層②)が置かれ、土塁の中心層である6層①が固く積まれる。また、6層①には、にぶい黄褐色や明黄褐色の土が部分的に薄いブロック状に入り込んでいる。なお、6層の厚みは断面で見ると、現状では30～40cm程度しかなく、これだけで土塁として成立しうるのが問題となる。そこでその上の3～5層に目をやると、5層はしまりのないにぶい黄橙色砂質土、4層もしまりのないにぶい黄褐色砂質土であり土塁構成土とは考えにくい。一方、3層①は、比較的しまりが強く、小礫まじりのにぶい黄褐色砂礫土、3層②は、粘性はわずかだがしまりの強い黄褐色土、同3層③は3層②よりしまりは弱い、粘性が比較的強い褐色土であり、3層の内、少なくとも3層②～③は、調査途中で土塁の可能性を考えたくらい土塁的である。そこで、5層は確実な土塁である6層の傾斜に沿うように薄く堆積していること、4層は20cmもの厚みを持つしまりのない層である点が問題だが、断面L字状にカットされた明黄褐色風化岩盤層(7層①)の切り落としの上端付近まで覆うように堆積しており、固くしまる3層②を乗せている点を積極的に評価すると、3～5層を土塁の一部とみなすことも可能である。

地山 トレンチ上端から約1mの範囲では、土塁の一部の可能性もある3層・4層の下に地山とみなせる明黄褐色風化岩盤層が確認され、この岩盤層が断面L字状に削られてトレンチ上端から1mの地点から奥行約1.4mのテラス面を作り、列石・裏込め状石が設置されたとみられる。一方、列石から西側では、2層の下ににぶい黄橙色ないし明黄褐色のしまりのない砂質土層(7層②)がみられ、列石直下から前面にかけて40cm前後の幅で緩やかに傾斜した後、強く落ち込んでいく。7層②には岩盤ブロックが含まれるが、下層に行くにつれ固い岩盤が露わになってくる。全体的な状況から、7層②を固い岩盤層ではない地山の岩盤風化土層とみなした。なお、列石の前面においては地山をやや水平気味に削った可能性が指摘できる。

(半沢)

H 15- 1 トレンチ北方列石(図 24)

H 15- 1 トレンチの調査において列石・裏込め状石及び土塁で構成される外郭線が検出されたのを受け、北西方向への外郭線のつながりを明らかにするために列石の表面検出作業を行った。H 15- 1 トレンチ西側検出で検出した列石から約1.5m北西で最初の列石を検出し、そこから平面距離で約19mの範囲を調査した結果、途中岩盤部分や列石の欠落部はあったものの、全範囲にわたって列石が連なっているのが確認できた。この一連の列石をH 15- 1 トレンチ北方列石とした。まず、最初の列石から途中で露わになった岩盤部分にかけて北西方向へ列石が直線的に連なるのを確認した。これらの列石は、前面も上面も比較的しっかりとした面を、それぞれ前方・上方に向けており、特に上面に関しては、正面から見て直線的に左上がりに連なっていくように平坦な面をほぼ揃えて設置されていた。これらの列石のつながりは、岩盤の脇で一旦途絶えたが、その後岩盤北側の一部に乗るように接続された列石1個が検出された。この列石は、岩盤の凹みに厚さ20cm程の置土を施した後に正面から見てほぼ水平に置かれていた。これを含め少なくとも3個の列石が高さを違えて同様に置かれており、言わば階段状に列石が連ねられているような状況がみ

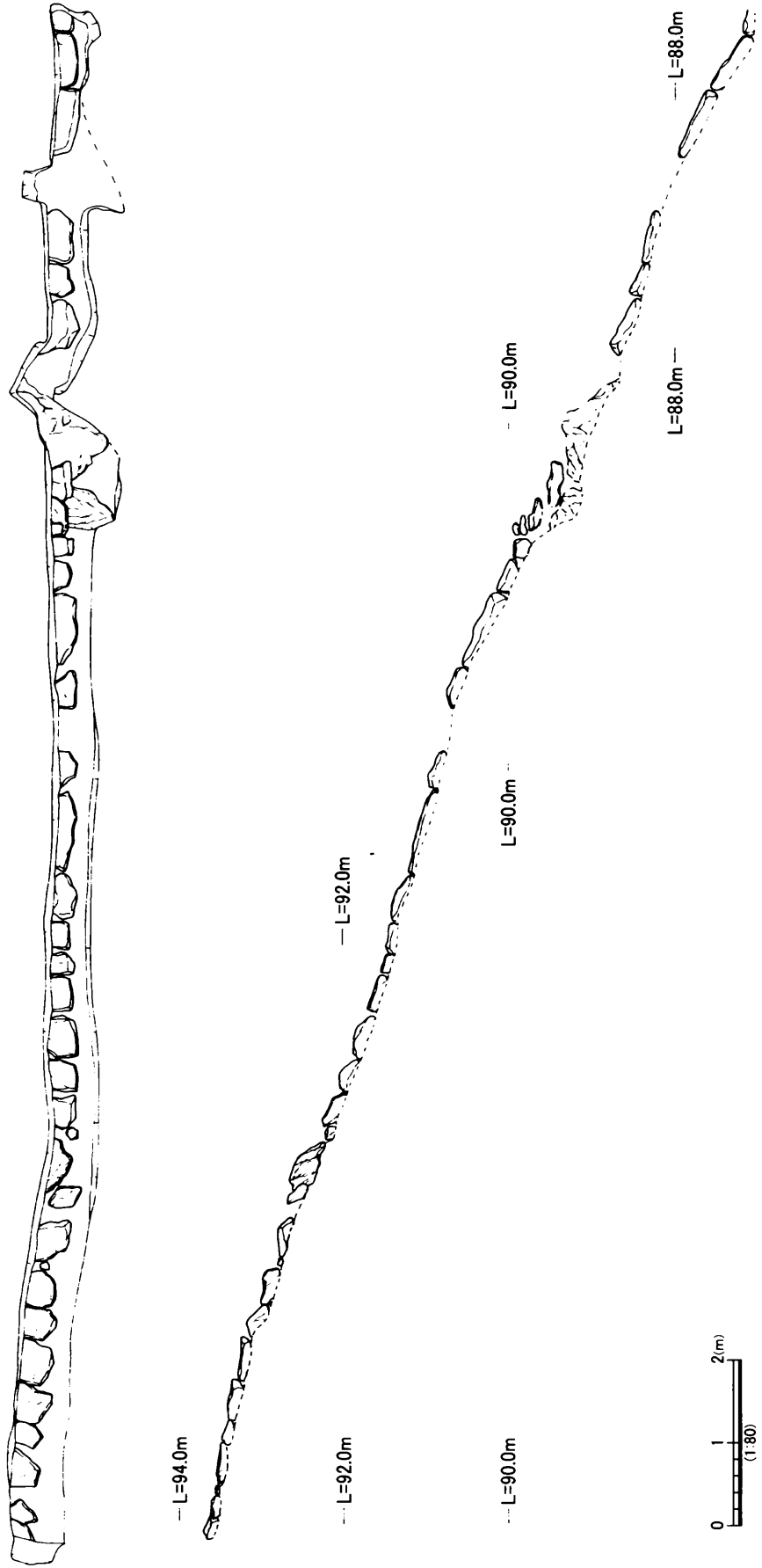


図 24 H 15- 1 トレンチ北方列石 平面・立面図

とめられた。岩盤部の南東側でみられた列石を斜めに揃えて連ねる並べ方が当遺跡の外郭線で通常一般的に見られるものであるのに対し、このような列石の連ね方は非常に特異であり、これを「階段状列石」と呼んでおく。また、ここで検出した岩盤部分はそれほど大きくなく、列石が途切れる範囲も短いことから、外郭線の岩盤利用としては小規模と言える。この岩盤部分で検出された階段状列石は3個程度で終わり、その西側の列石から平面距離で約7.5m北西に位置する不整形で岩盤の一部である可能性の高い石までは、通常の列石の連ね方が継続的にみとめられた。そのラインは正面からみると、尾根筋の傾斜に沿うように20度前後の緩やかな傾きで上がって行く。また、平面的には、南東端の列石から途中の岩盤部分を挟み上記の岩盤の可能性のある石までほぼ一直線に並ぶ。そして、この石を以って列石線はわずかに「くの字」状に折れ、平面距離約4.5mにわたり直線的に伸びて南西部頂上付近の調査範囲北西端の列石に至る。この範囲においては、折れ部のすぐ北西側にまず小型の転落石一個がみとめられ、次いで少なくとも5個の列石がほぼ階段状に連なり、その後再び通常の列石の連ね方に戻り、北西端に至る。

階段状に列石を連ねる方法は、基本的には正面から見て列石の傾斜が強くなってしまう場所や露出した岩盤などの凹凸が顕著な場所に列石を並べる必要が生じたような地形的条件の下で高さの調整と列石の安定を図って採られたものと考えることができる。今回岩盤部分で検出したものは、外郭線がやや強い傾斜で尾根筋を上ってゆく途中の地点に位置しており、岩盤とより上方の列石線を無理なく接続するためにこの連ね方が採られたものと推測される。ただし、北側で検出した階段状列石は列石線の傾斜が前者ほど急ではないにも関わらずこの方法が採られており、列石下部の地山・岩盤の凹凸が顕著であったなどの背景を推測せざるを得ない。この視点に立てば、この階段状列石から見て南東側下方に位置し、ちょうど折れ部分に当たっている上記の石は、埋もれている岩盤の一部であった可能性も指摘できよう。

当所で使用された石材は、全て花崗岩の粗割石とみられる。法量は、横幅40～60cmと中型の石を主体とするが、部分的には40cm以下の比較的小型の石もあるほか、80cmを超える大型のものも数個使用されており、規格性はあまり認められない。

なお、今回の調査範囲内では土塁の確認調査は行わなかったが、H15-1トレンチの状況を参考にすると、全範囲に及ぶかは分からないが、列石の背後側で土塁かその痕跡が検出される可能性はあると思われる。

以上をまとめると、H15-1トレンチ北方の調査成果としては、尾根斜面の等高線を切るように斜交して上がっていき南西部頂上付近へ至る列石のつながりを確認できたこと、岩盤利用の外郭構造を検出できたこと、また2ヵ所で階段状列石の部分がみとめられたことが挙げられる。(半沢)

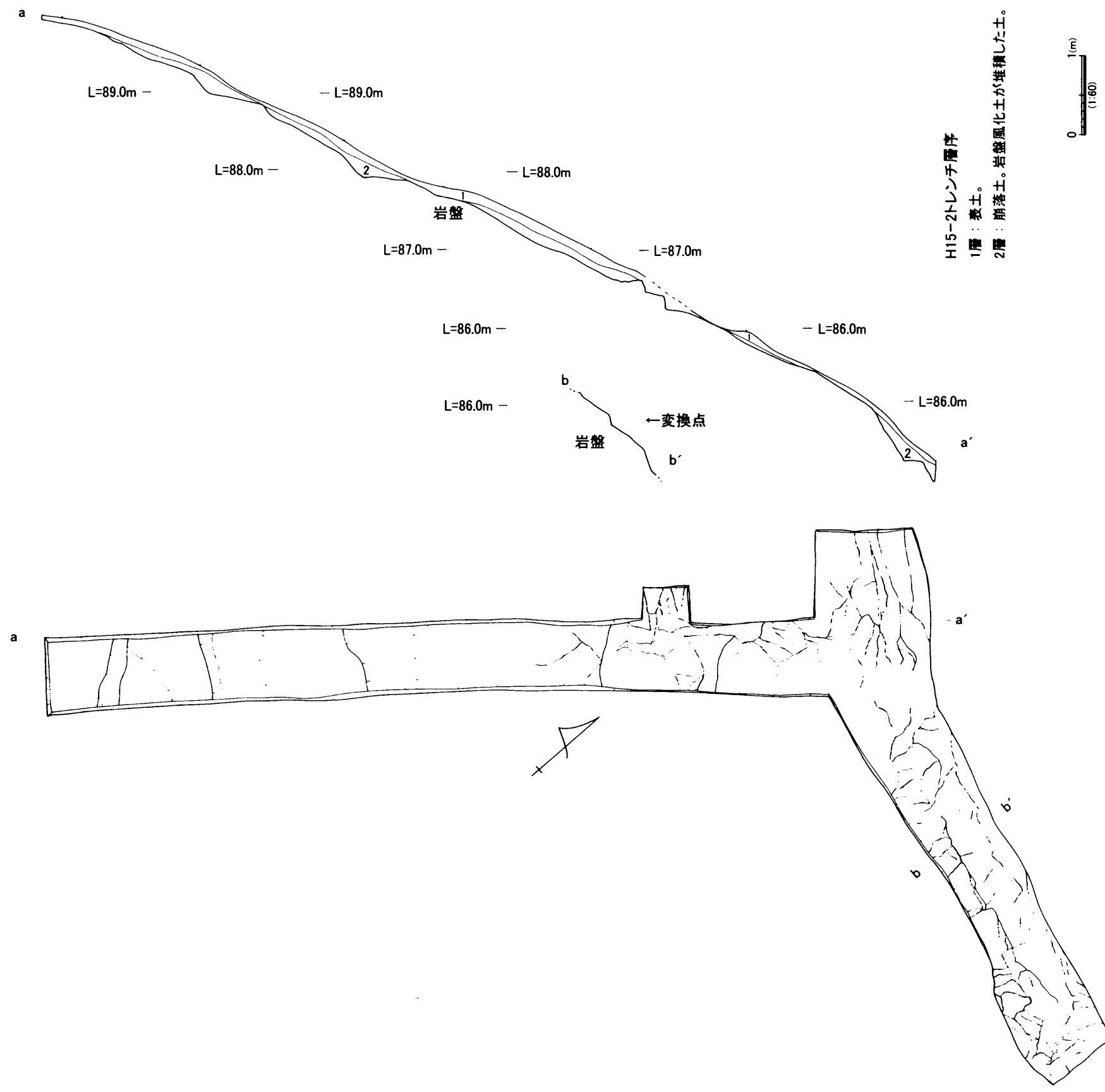


図25 H15-2 トレンチ平面・断面図

H 15－2 トレンチ(図 25)

H 15－2 トレンチ H 14－4・5 トレンチ間の岩盤地帯に設定したトレンチである。この周辺は当初から岩盤の露出が多く、岩盤を外郭線として取り込んでいると推定できたが、その詳細が不明確であったため改めてトレンチを設定し、外郭線の調査を実施した。

トレンチは尾根に直行するように 1×10m で設定した。表土層とその下の岩盤風化土層を取り除くとトレンチ全体に岩盤が検出され、列石・土塁は認められなかった。しかしトレンチ下部において、岩盤が急傾斜に落ち込む傾斜の変換点が見られたため、この変換点の広がりを確認するためにトレンチを東へ 1 m、西へ約 6 m 拡張した。その結果、岩盤の変換点は 5 m 程続くことが明らかになり、場所によっては岩盤が列石状に加工されたかのようにみえる地点もある。しかしながら、この変換点に伴う明確な加工痕は確認できなかったため、これが風化や崩れによるものであるのか、人工的になされたものであるのか現状では判断できない。

結果として、この拡張区においても列石・土塁は検出されなかったため、この一帯が外郭線として列石・土塁を築かず、岩盤を利用している可能性が高まった。そこで H 14－4・6 トレンチの列石ラインとの関係も踏まえ、この変換点を岩盤利用の外郭線と捉えたい。(渡邊)

第3節 南部の調査

(1)概 要

南部は旧南門推定地から南部頂上一帯までの地区である。当地区の地形をみると、旧南門推定地は尾根の鞍部であり、南部では最も標高が低くなっており、そこから尾根は南部頂上へ向かい緩やかに高まっていく。頂上から南方へは丘陵が舌状に突出し、東へ向けては再び尾根が下り小さな鞍部を形成する。以降は旧南門推定地から南部頂上までの地区を南部頂上西方尾根斜面、頂上から南方へ伸びる丘陵を南部突出部と呼称する。

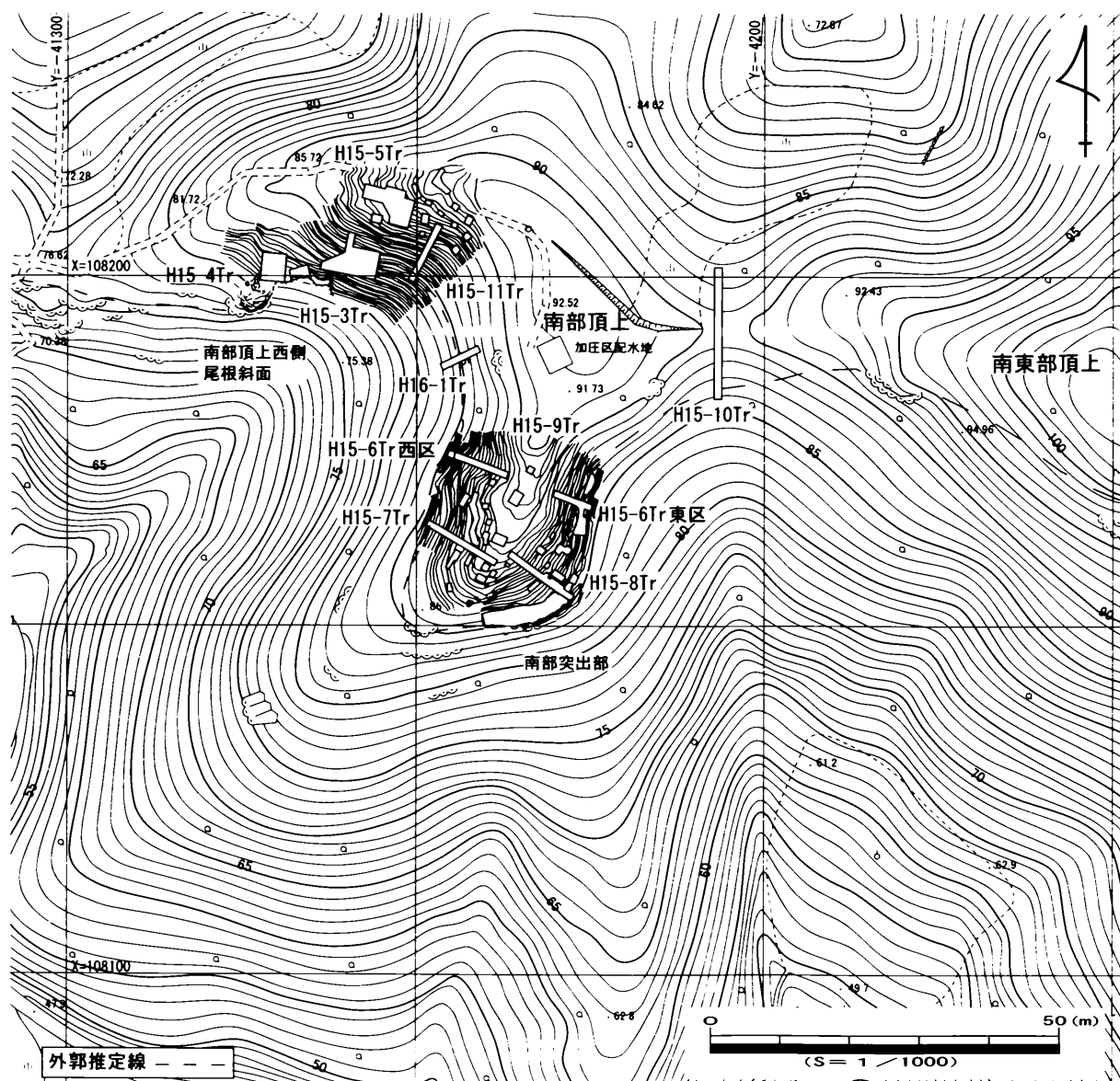


図 26 南部地形図及びトレンチ配置図

平成15年度中は9ヵ所のトレンチ及びその拡張区を設定し調査を実施した。また、16年度に補足としてトレンチを1ヵ所設定し、外郭線の確定を目指した。当地区は南西部同様に岩盤の露出する部分が多く、列石・土塁と岩盤との関係を捉えながら外郭線を結ぶこと目的とした。特に南部突出部に関しては過去調査で結ばれた外郭推定線が外方へ向け不自然に突出していることもあり、その再検証が必要であった。

調査は南部頂上西方尾根斜面から開始した。まず周辺の草刈・清掃により現地形を確認したところ、列石と思われる石を数点発見したため、それを基準としてH15-3トレンチを設定した。その後、H15-4トレンチをその西側に設けることにより、列石の方向性を追うことを目指した。結果としてH15-4トレンチ内で列石が岩盤へつながる状況を検出し、そこを起点として東(H15-3トレンチ方向)へ向かい尾根筋の傾斜に沿うように列石が並んでいることを確認した。

南部突出部に関しては、その付け根付近に尾根と直行するかたちでH15-6トレンチを設定し、尾根を挟み東西2区に分け、両斜面で外郭線の調査を実施した。その結果、東区においては列石が転落した状態で検出されたが、西区では列石・土塁は確認されなかった。そこでさらに突出部での外郭線構造を明確に捉えるため、H15-6トレンチ西・東区の南にそれぞれH15-7・8トレンチを設け、外郭線の把握に努めた。これらのトレンチにおいても列石・土塁といった明確な外郭構造は確認できなかったが、東斜面に位置するH15-8トレンチでは列石の可能性が高い石、及びそれを据えていたであろう平坦面を検出した。またH15-8トレンチ南方の突出部先端ではトレンチの設定は行わなかったが、岩盤部分を清掃し現状を確認した結果、岩盤に傾斜の変換点を検出した。

これらの調査成果から、南部突出部での外郭線は従来想定されていたラインよりも内側を廻るという理解に至った。

平成16年度には、この南部2ヵ所(H15-3・4トレンチと南部突出部)で確認した外郭線を結ぶためにH16-1トレンチをその間に設定した。しかし、明確な外郭線構造は確認されなかった。

また、突出部の調査中、H15-7・8トレンチ内においてトレンチを横断するかたちで幅約40cm前後の溝を検出した。そこでトレンチ周辺でもピンボールによる確認を行ったところ、両斜面及び尾根頂部に同様の溝が掘られていることが判明した。そこで、各トレンチ拡張区及びH15-19トレンチを設定し、これらの溝の概要把握を目指した。さらに南部頂上西方尾根斜面において、土塁の確認を目的としてH15-3トレンチの延長上に設定したH15-5トレンチにも同様の溝を検出していたことから、H15-5トレンチ周辺においても拡張区およびH15-11トレンチを設定し状況の把握を行った。

(渡邊)

(2) 南部頂上西方尾根斜面

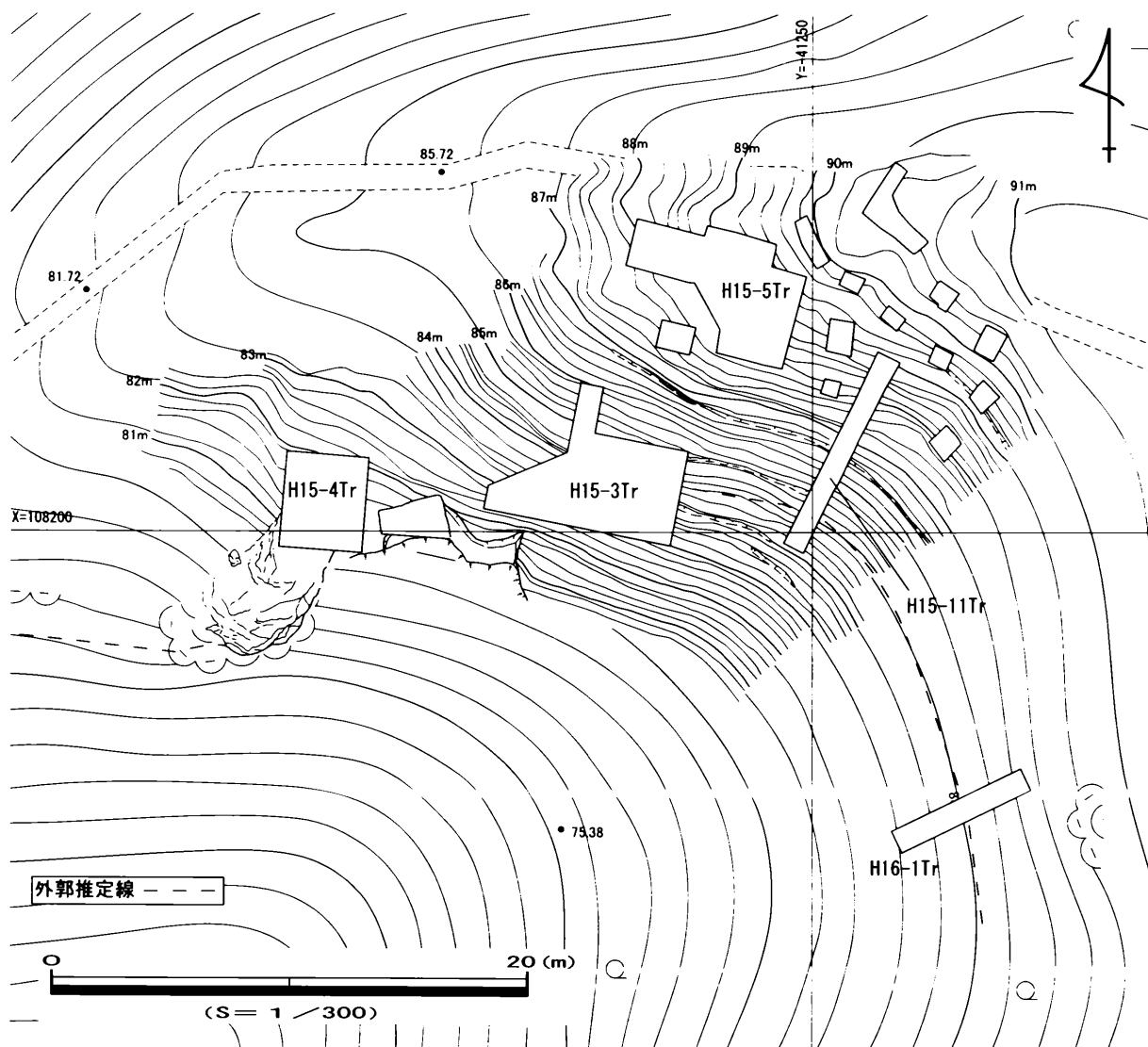


図 27 南部頂上西方尾根周辺地形図

H 15 - 3 トレンチ (図 28)

H 15 - 3 トレンチは尾根から約 13m 下った斜面に表面清掃中に見つかった 2 個の列石を基準として、外郭線の確認を目的に南北に長く 1 × 6 m の大きさで設定した。調査の結果、2 個の列石とその上にわずかに残る土塁を確認した。そこで、外郭線の方角性を捉えることを目的にトレンチを東西に拡張し、列石を検出した。また、土塁の一部を断割り、外郭構造の把握を行った。

列石・裏込め状石 列石はトレンチ内で 10 個、距離にして 5.5m の長さで検出した。これらの列石は尾根の傾斜に沿うように西から東へと約 25 度と緩やかに高まっていく。列石は西へ向けてはトレンチ端まで確認でき、さらに続くことが予測できたのに対し、東側では拡張区の途中で途切れており外郭線が不明確となる。個々の列石は横幅 40 ～ 70cm、厚さ 20 ～ 40cm 程度のやや小振りのものが用いられる。奥行きは断割り部の石で 70cm を測り、これまで同様に奥行きを長くとり、据えられている。

H15-3トレンチ西拡張区 土層層序

- 1層：黄橙色(10YR7/6)花崗岩風化土。粘性はなく、非常に固くしまる。～2cmの礫を含む。
2層：灰黄褐色(10YR5/2)砂質土。きめが細かく固くしまった土。
3層：黄褐色(10YR5/6)粘質土。～10cm前後の礫が多く混じり、きめが粗い。
4層：2層と同様。
5層：3層と同様。

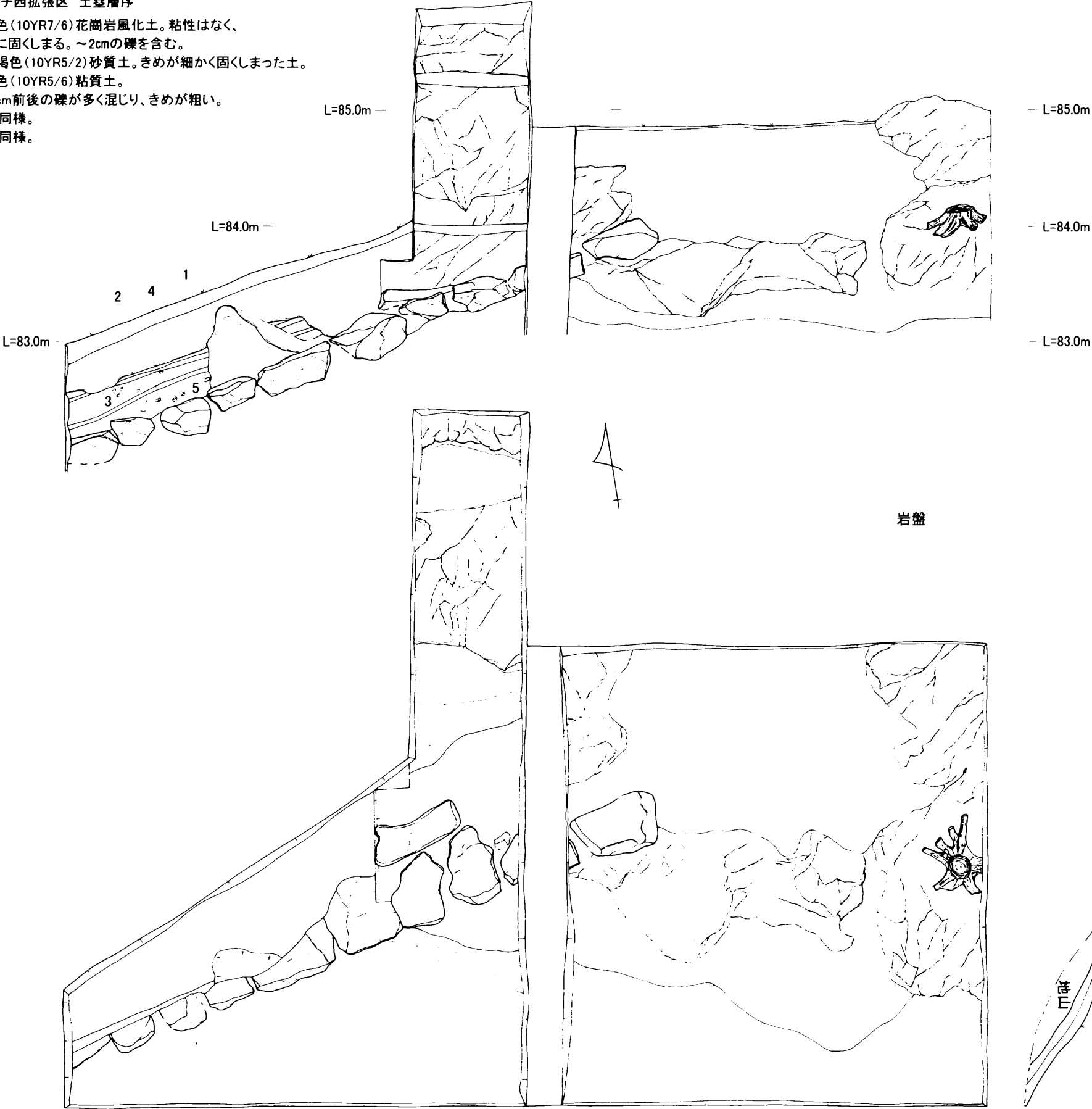
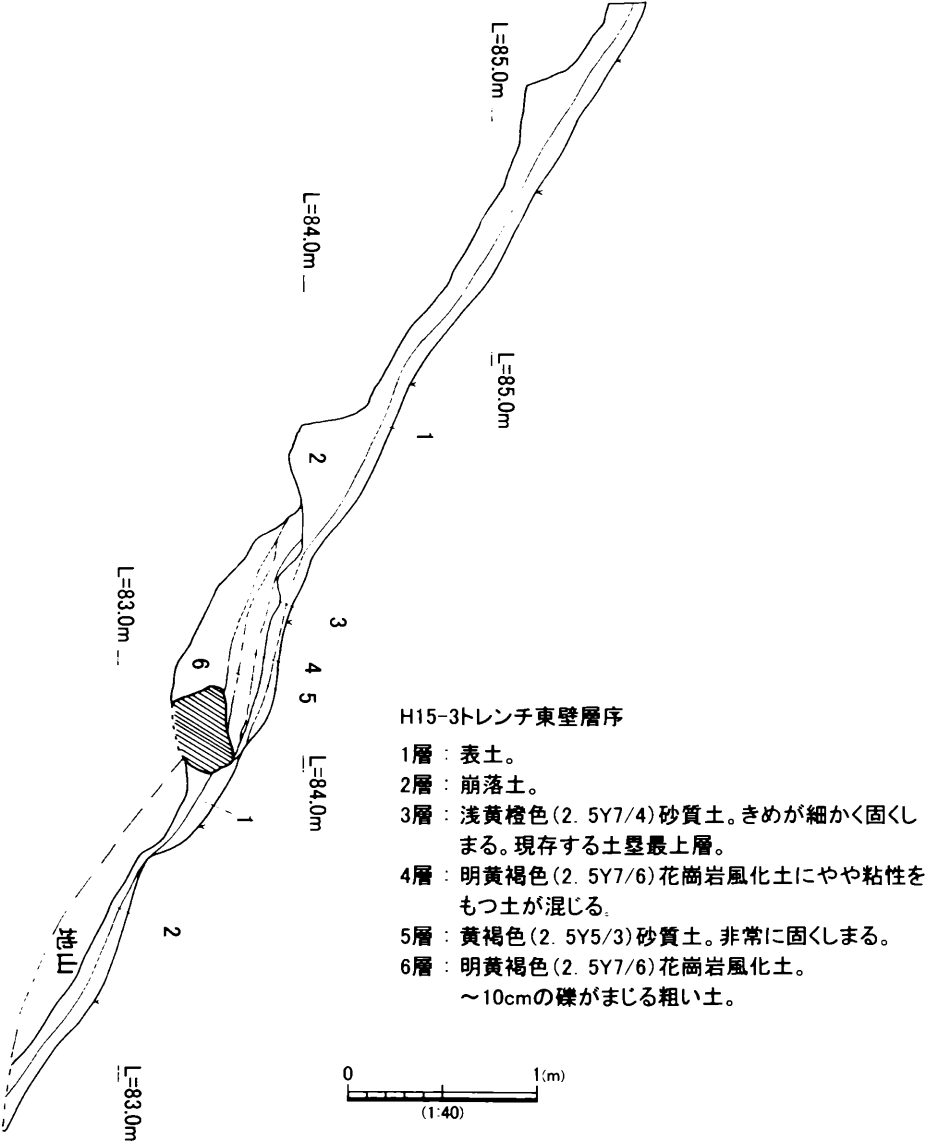
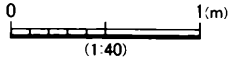


図28 H15-3 トレンチ平面・断面・立面図



H15-3トレンチ東壁層序

- 1層：表土。
2層：崩落土。
3層：浅黄橙色(2. 5Y7/4)砂質土。きめが細かく固くしまる。現存する土壘最上層。
4層：明黄褐色(2. 5Y7/6)花崗岩風化土にやや粘性をもつ土が混じる。
5層：黄褐色(2. 5Y5/3)砂質土。非常に固くしまる。
6層：明黄褐色(2. 5Y7/6)花崗岩風化土。～10cmの礫がまじる粗い土。



また、列石背後に裏込め状に石が置かれることはこれまでのトレンチと共通するが、横幅80cm・奥行き26cmと横長の石を据えており、これまでに検出した裏込め状石に比べ大きなものを用いている。さらに確認できた石はこの1点のみであり、列石背後には石を配置しない空間も広くみられる。

これらの列石・裏込め状石は地山をカットして作られた平坦面の上に直接据えられる。なお、この平坦の奥行きは約90cmである。

土塁 土塁は断割り部分で確認した結果、高さ50cm程度が残存するのみであり、トレンチ上方には土塁は全く見られなかった。この土塁は版築により積まれており、断割り部断面と西拡張区の一部でその状況を観察することができた。

断割り部断面では、まず最下層として列石背面に10cm前後の礫混じりの土が30cm程度の厚みで見られる(6層)。他のトレンチ調査成果では多くの場合、裏込め状石が置かれる場所である。次に、その上に固くしまった砂質土と花崗岩風化土混じりの粘質土が5～10cm前後の厚さで互層状に積み上げられる(3～5層)。また、これらの各層は水平ではなく、斜面の傾斜に沿うように奥へ向かいやや斜めに上がっていく。

一方、西拡張区では5層の版築層が確認できた。この版築層は互層となり、10cm前後の礫混じりの粘質土(3・5層)と固くしまった灰黄褐色砂質土(2・4層)・同じく固くしまった黄橙色土(1層)が列石の傾斜に沿うように斜めに積み上げられる。各層の状況を見ると、礫混じりの3・5層が厚さ10～20cmと厚く積まれるのに対し、2・4層は5cm前後と薄く、層の質の違いによる厚さの違いが顕著であった。

なお、断割り部断面と西拡張区での層の対応関係は、西拡張区1層が断割り部断面4層に、断割り部断面5層が礫の混じり具合等から西拡張区3層と対応する。

また、トレンチ上方には土塁の痕跡は残っておらず、土塁の有無は不明であるが、岩盤の傾斜は30度と急傾斜をなしている。このような状況をみると、列石の上に残る土塁が斜面途中で収束し、上部は自然地形を利用していた可能性も十分考えうる。

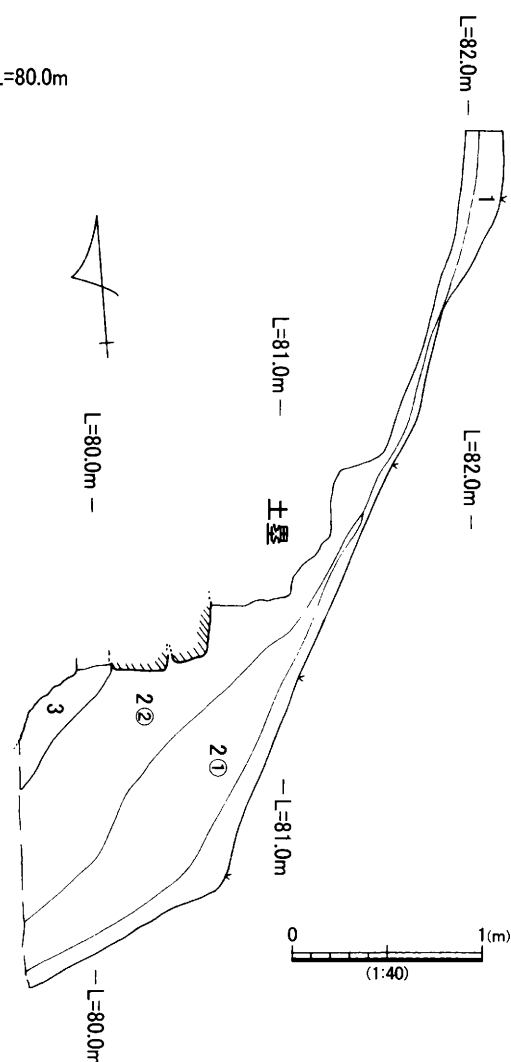
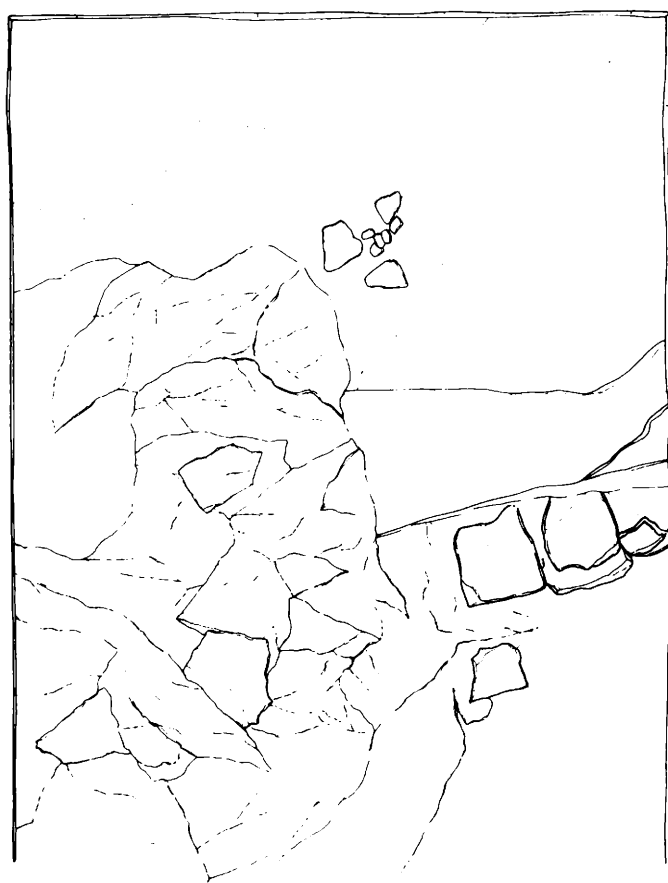
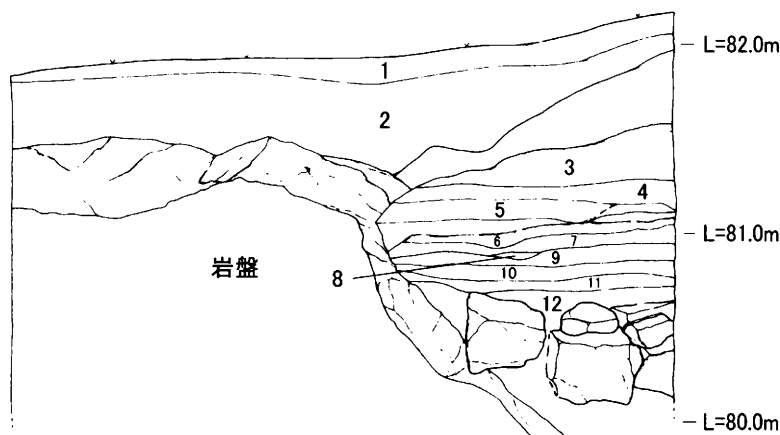
なお、トレンチ内には岩盤をカットして造ったテラス状の平坦面が2段でみられるが、その時期・性格については不明である。(渡邊)

H15-4 トレンチ(図29)

H15-4 トレンチはH15-3 トレンチの西端からの外郭線の延長を予測し、外郭線への岩盤利用状況を確認することを目的に、その延長線が露出している岩盤へつながる場所に設定した。トレンチの規模は当初東西2×南北3mであったが、その後一部を拡張し、列石・土塁と岩盤との接続部を確認した。

列石 列石はトレンチ東壁からほぼ水平に1.1mの長さで西へ続き、その先は絶壁状に切り立つ岩盤へつながる。また本トレンチで検出した列石は二段に積まれており、これまでの一段の列石とは異なった様相を示す。列石の石材は横幅30～40cm程度の花崗岩粗割石が用いられ、H15-3 トレンチと共通する。

これらの列石は、最大で厚さ約80cmの盛土を行った上に据えられるが、盛土前面は崩れており



H15-4トレンチ北壁層序

- 1層：表土。
- 2層：崩落土。明黄褐色(10YR6/8)。断面2②層に対応。
- 3層：明黄褐色(10YR6/8)土と黄褐色(10YR7/6)土が混じり合う。非常に固くしまった土。(現存する土塁最上層)
- 4層：明黄褐色(2.5Y7/6)土。かたい層ではあるが、砂質土層のような硬さはない。
- 5層：黄褐色(10YR5/6)粘質土。きめが細かく硬い。
- 6層：明黄褐色(10YR6/8)土と黄褐色(10YR7/6)土が混じり合う。非常に固くしまった土。
- 7層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。固くしまりのある土。炭がわずかに混じる。
- 8層：明黄褐色(10YR6/6)粘質土。
- 9層：暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土。非常に固くしまった土。炭がわずかにまじる。
- 10層：黄褐色(10YR5/6)粘質土。きめが細かくかたい。
- 11層：にぶい黄褐色(10YR5/4)土。固くしまりのある土。炭がわずかに混じる。
- 12層：明黄褐色(2.5Y7/6)土。固い層ではあるが、砂質土層のような硬さはない。

H15-4トレンチ東壁層序

- 1層：表土。
- 2①層：崩落土。明黄褐色(10YR7/6)。
- 2②層：崩落土。明黄褐色(10YR6/8)。
- 3層：列石盛土。明黄褐色(2.5Y7/6)。崩落土に比べるとしまりがあり、列石下にこの層が潜ることから盛土と判断。

図 29 H 15- 4 トレンチ平面・断面・立面図

テラスの幅は復元できない。盛土は土のしまりは弱いがわずかに粘性を持つため、上層の崩落土と区別できる。

土塁 土塁は版築によって築かれており、残存状況の良好なところで列石上部から90cmの高さまで確認できる。土塁の各層は厚さ5～10cm前後で堆積し、固くしまった砂質土と粘質土が互層をなし、水平に積まれる。ここではH15-3トレンチと比べると10cm前後の小礫の混じりはなく、各層の厚みもほぼ均等である。(渡邊)

H15-3・4トレンチ間の列石(図30)

前2ヵ所のトレンチ調査により、H15-3トレンチでは一段であった列石がH15-4トレンチでは二段へと移行していくことが判明したため、この移行過程を確認することを目的としてH15-3・4トレンチ間で列石の表面検出を行った。

その結果、新たに2.6mの区間で列石を検出した。その内、西側1.2mで列石が二段に積まれており、H15-4トレンチと合わせ2.4mの区間で列石の二段積みが行われていることが明らかとなった。また、これらの列石は東側では岩盤の上に積まれるが、西側では盛土を行った上に据えられることも確認できた。

この区間では地山が列石同様に東から西へ向け傾斜しながら下っているが、その傾斜は列石が全体的に20度前後となるのに対し、地山は西に向かうに従い40～60度と急傾斜となる。そのため、列石の二段積みや盛土はこの傾斜の差を埋めていくために行われた可能性が高い。ただし、二段積みに関しては、個々の列石の厚さが一段列石の半分程度であることから、石材のサイズの都合上、二段となったとも考えられる。(渡邊)

H15-5トレンチ(図31・41・42)

H15-3トレンチ内で土塁が途切れてゆく状況がみられたことから、同トレンチ北側上方に位置する尾根上付近における土層状況や土塁の痕跡の有無を確認する目的で長さ2m×幅2mのトレンチを設定し、H15-5トレンチとした。

腐葉土・風化土を除去してゆくとすぐに岩盤が現れ、これを面的に検出していったところ、しまりの弱い浅黄色土による幅30～40cmベルト状の染みが検出された。この浅黄色土を掘り下げた結果、岩盤を掘り抜いて形成されたと見られる溝状の掘り込み(検出長1.5m)であることが判明した。ただし、この時点では1ヵ所だけの検出であり、遺物なども出土しなかったため性格不明の溝として一旦調査を留めた。しかしながら、後述するように南部突出部でも同様の溝が数条検出されたことから再度この溝も見直され、トレンチを拡張することになった。

H15-5トレンチ(拡張後)および南拡張区 当初発見された溝のつながりを追いかけるため南東方向に拡張を行い、ピンポールによってボーリング調査したところ、周辺に別の溝が存在する見通しが得られたため、さらに東西両方向および北方へと再拡張を繰り返し、最終的に図31のような東西7.5m、南北最大幅約4.5mを測るトレンチとなった。また、当初のトレンチの南方に1.8m離して他の溝検出のための拡張区を設定し、H15-5トレンチ南拡張区とした。H15-5トレンチ及び同南拡張区の調査の結果、岩盤を掘りぬいて造られた3条の溝状遺構と1基の土坑状遺構を検

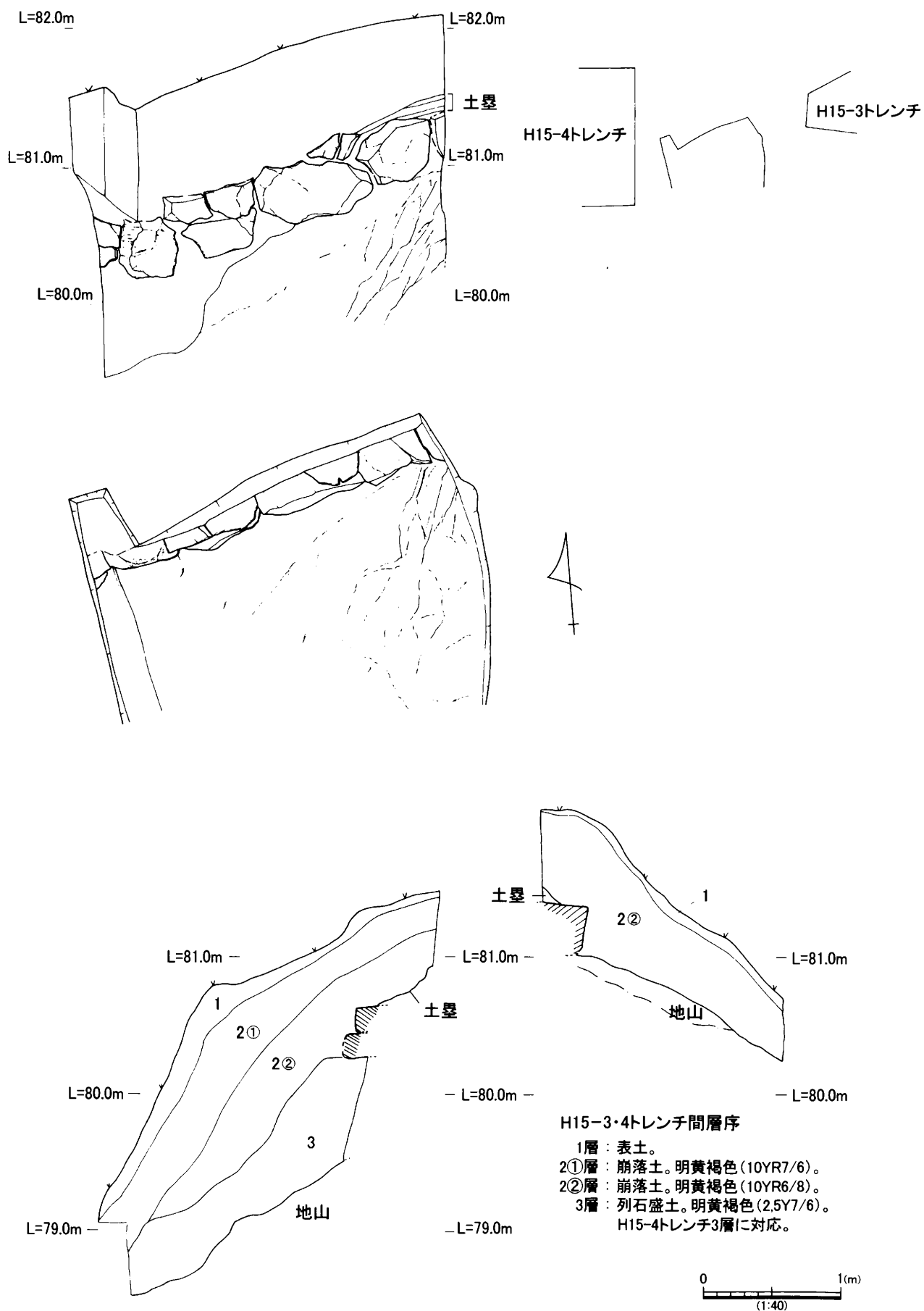


図 30 H 15- 3 ・ 4 トレンチ間列石平面・断面・立面図

出した。

溝状遺構(A 1号溝・A 2号溝・A 3号溝) 3条の溝は、平面的にみると、お互い最も狭いところで1.1m、概してほぼ1.7～1.8m前後の間隔を取りながら並列しており、下から順にA 1号溝・A 2号溝・A 3号溝とした。A 1号溝・A 2号溝では、ともに両方の端部が検出できたが、A 3号溝は北側端部のみが検出され、トレンチ外の東方へ続くことが分かった。

土坑状遺構(H 15-S X-1) H 15-5 トレンチ拡張後の調査の過程においてちょうどA 2号溝の南側端部とA 3号溝の間に挟まれた所で岩盤を掘削して作られた不整円形プランの土坑状遺構を検出し、H 15-S X-1とした。掘り方は、北西-南東方向の最大幅約1.3m、北東-南西方向の最大幅は約1.2mを測る。土坑底は、ほぼ水平な平坦面をもち、長軸1m×短軸0.75m前後の不整楕円形のプランを呈する。断面形は、逆台形状を呈し、深さは南側(斜面下方)の浅い方で25cm前後、北側(斜面上方)の深い方で70～90cmを測る。掘り方の外周には大小の礫が配されているように見える部分もあるが、これらは岩盤が崩壊・剥離して出来た自然礫であるとみられる。埋土は、底面上に固くしまるが粘性の無い浅黄色砂質土が約5～6cmの厚みで堆積するほかは、4cm以下の小角礫混じりのややしまりのあるにぶい黄橙色ないし明黄褐色の砂質土で占められる。埋土中には、部分的に樹木による攪乱が顕著に見受けられるしまりの弱い浅黄色土が混じる。なお、底面ほぼ直上の浅黄色砂質土から時期・器種不明の軟質の土器底部片1点が出土した。

また、H 15-S X-1はA 2号溝の南側端部と切り合わず、約30cm間隔で隣接し、両者の南側で岩盤の落ちが見られ、やや南に傾斜した平坦面が広がることが分かった。

H 15-5 トレンチ東拡張区1区～11区・溝状遺構(A 4号溝・A 5号溝)・テラス状平坦面(南部テラス1・テラス2) H 15-5 トレンチ検出のA 3号溝がトレンチ東方へと続くことが確認され、その端部を探す必要があったが、他にも当トレンチ北東部のボーリング調査によって更に少なくとも2条の溝が存在する可能性が高まった。そこで、それらを確認する目的で当トレンチ東側に計11個の小拡張区を設け、H 15-5 トレンチ東拡張区1区～11区とした。調査の結果、4区～7区を貫く溝と1区～3区を貫く溝を新たに検出することができ、南から順にA 4号・A 5号溝とした。さらに9区では、A 3号溝の続きを検出し、後述するH 15-11 トレンチの北端付近で検出した端部へとつながることが確認できた。また、7区では、地山(岩盤)をカットしたテラス状の平坦面が溝を切るように接続されている様子が見られ、この平坦面が8区検出の平坦面に連続していることが分かった。さらに、10区・11区でも別のテラス状の平坦面を検出したが、これは位置関係からみて、上述のH 15-S X-1の南側で検出した平坦面および後述するH 15-11 トレンチ北端から2m南方付近で検出した平坦面と一連のものであると判断した。これら2つのテラス状平坦面を標高の高いものから順に南部テラス1・テラス2と呼んでおく。

以上、H 15-5 トレンチ及び南拡張区・東拡張区各区における調査においては、表土・崩落土の下に岩盤(地山)の斜面が検出されるのみで、土塁の痕跡など明確に古代山城の外郭線に伴う構造は確認されなかった。時期・性格の不明なテラス状の平坦面2面(南部テラス1・2)と溝状遺構5条(A 1～5号溝)を検出したが、これらの詳細と評価については後述する。また、これらとの関係で土坑状遺構についても合わせて評価したい。

(半沢)

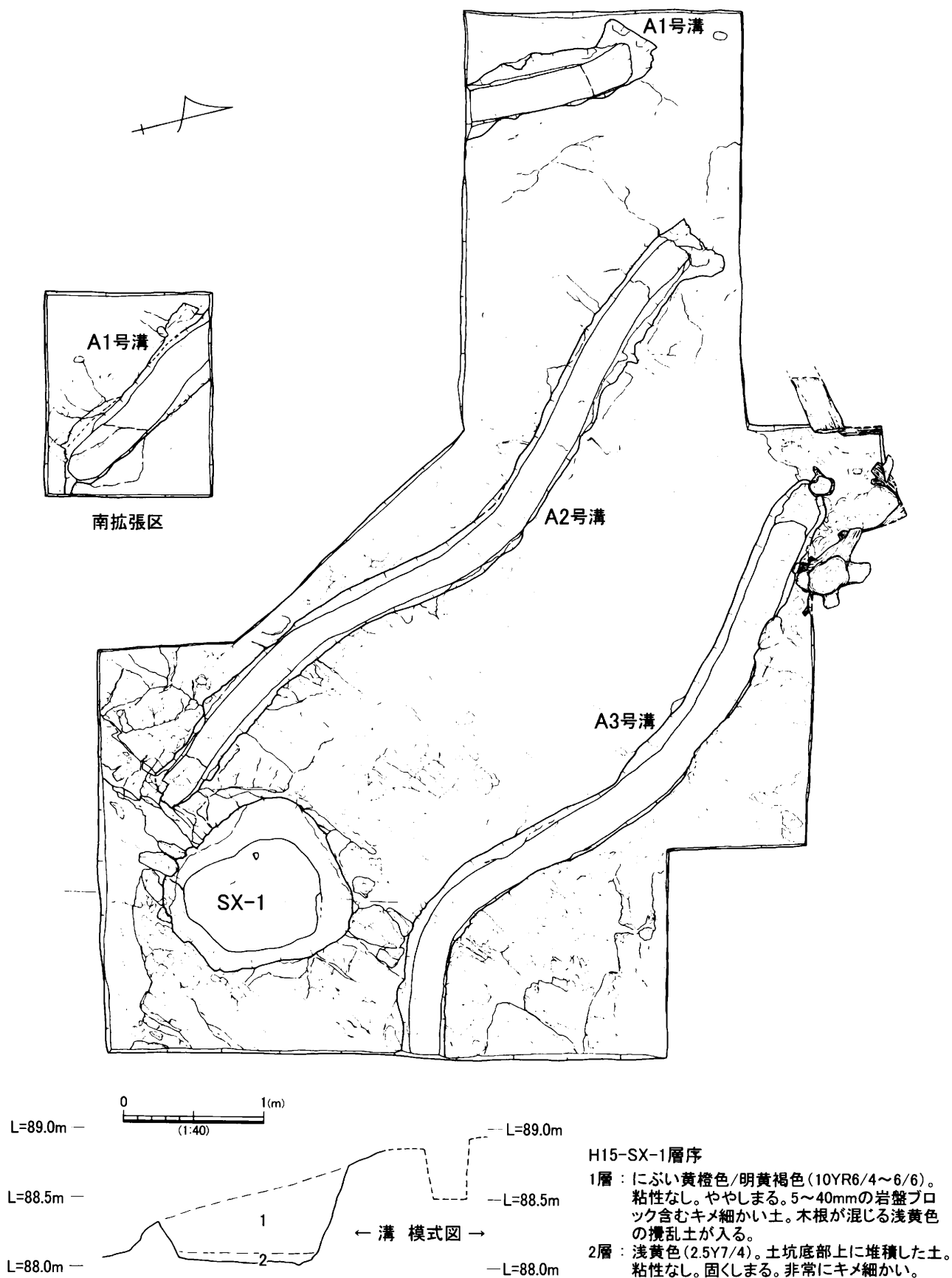


図 31 H 15- 5 トレンチ及び南拡張区平面図・S X - 1 断面図

H 15-11 トレンチ(図 32)

H 15- 3 トレンチおよびH 15- 5 トレンチの南東方面における土塁痕跡の有無、テラス状平坦面のつながり、溝状遺構の範囲を明らかにすることを目的として、H 15- 5 トレンチ東方約 4 m 付近の斜面に南北に伸びる長さ 9 m × 幅 1 m のトレンチを設定し、H 15-11 トレンチとした。

腐葉土・崩落土を掘り下げた結果、トレンチ北端間際で、H 15- 5 トレンチ東拡張区 9 区からつながる溝状遺構(A 3 号溝)の南東側端部を検出した。

また、トレンチ北端から南方 2 m 地点付近と 4 m 地点付近で地山である岩盤層が断面 L 字状に削平されて出来たテラス状の平坦面 2 面をそれぞれ検出した。年月の経過によって崩れているところもあると考えられるが、平坦面の奥行き幅は、前者で約 30 ～ 60 cm、後者で 50 ～ 75 cm を測る。また、前者は位置関係・標高からみて、H 15- 5 トレンチ東拡張区 10・11 区で検出された南部テラス 2 と一連のものであり、後者を南部テラス 3 としておく。

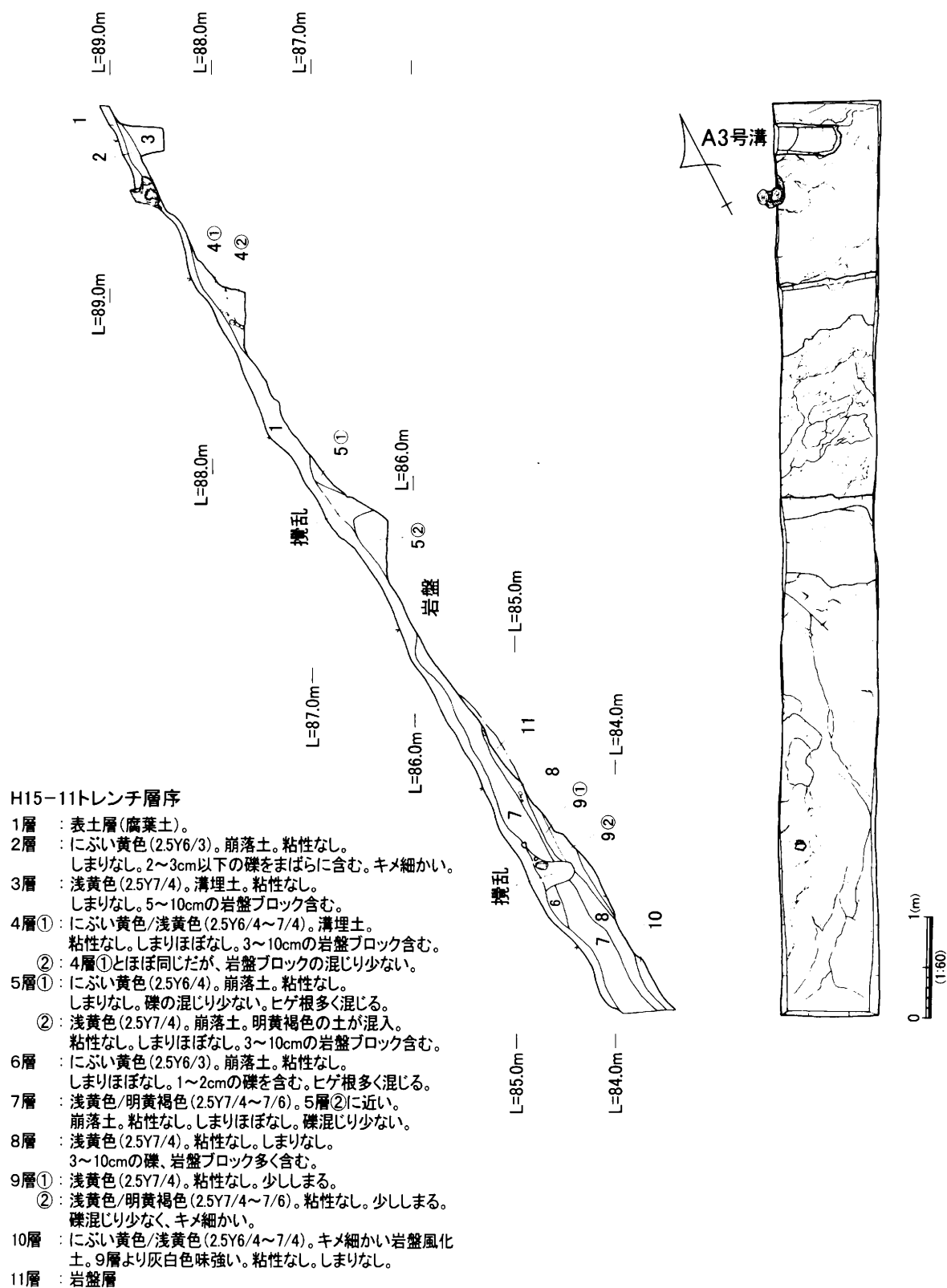
遺物 トレンチ北端から南 7.3 m 地点付近の崩落土中から土器(羽釜?)片 1 点が出土している。以上のように、当トレンチの調査では列石や土塁の痕跡は検出されなかった。なお、当トレンチで検出した溝状遺構・テラス状平坦面の詳細と評価については、後でまとめて述べたい。(半沢)

H 16 - 1 トレンチ(図 33)

平成 15 年度に実施した H 15 - 3 トレンチと南部突出部西斜面との間での外郭線が不明確であったため、新たにトレンチを設定した。トレンチは当初尾根に直行するように南北 1 × 東西 3 m で設定したが、トレンチ内に時期・性格不明の平坦面を 2 段検出したため、さらに上方へトレンチを 3 m 拡張し、さらなる平坦面の確認を行った。

腐葉土と岩盤風化土を除去すると、その下には岩盤が検出され、列石や土塁は認められず、その岩盤には拡張部も含めると先に述べた平坦面を 3 段確認した。これらの平坦面の奥行きは約 80 cm である。この平坦面は H 15 - 3 トレンチ内で検出した 2 段の平坦面と同様であり、南側斜面に数段に渡って見られる。

以上のようにトレンチ内には明確な外郭線構造は認められなかったが、南部突出部の岩盤利用状況と H 15 - 3 トレンチ内で途切れる列石との関係を踏まえると、H 15 - 3 トレンチ以東から人工的な外郭線を造らず、自然地形を利用していた可能性も十分考えられる。(渡邊)



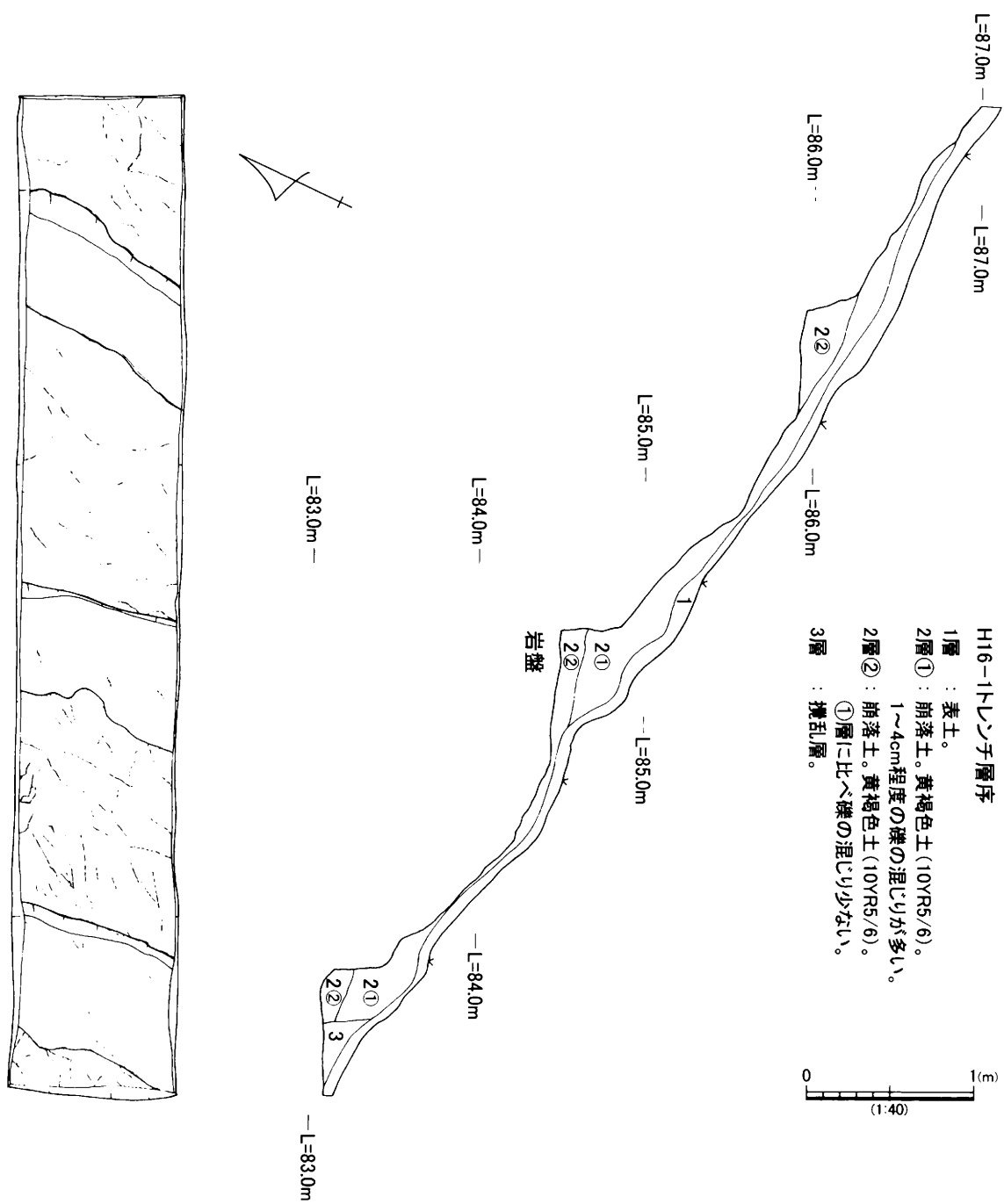


図 32 H 16- 1 トレンチ平面・断面図

(3) 南部突出部

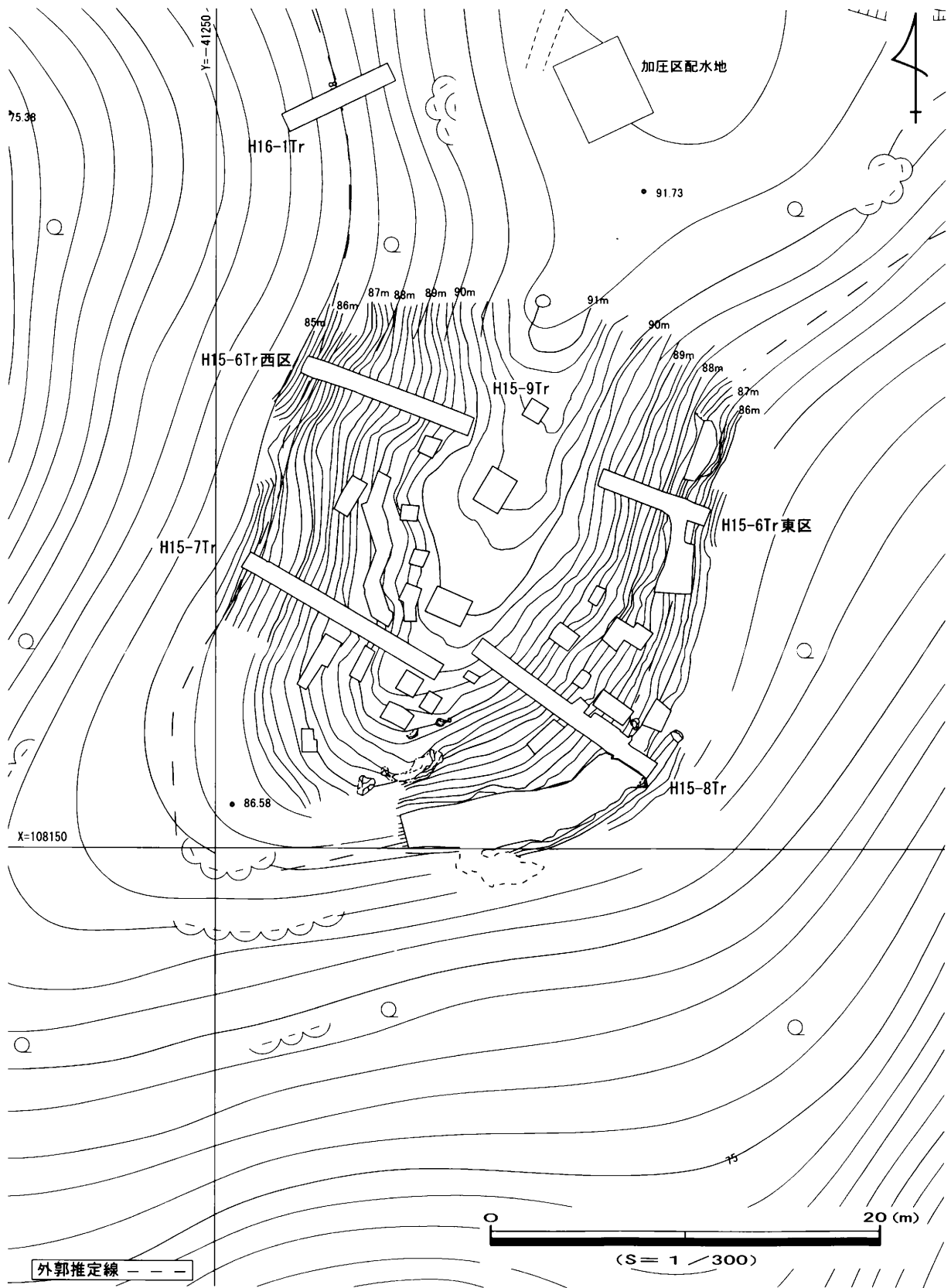


図 34 南部突出部 地形図

H 15- 6 トレンチ

H 15- 3 ～ 5 トレンチの調査では、列石・土塁からなる外郭線が途中で途切れ、岩盤のみが見られる状況が分かった。そこで、それらの東南側の状況、即ち南部突出部における外郭線、列石・土塁の確認を目的として南部突出部の尾根を東西に横断する長いトレンチ(長さ 19m × 幅 1 m)を設定し、H 15- 6 トレンチとした。尾根の頂部付近に当たる長さ 7 m の部分を残し、西側 6 m を「西区」、東側 6 m を「東区」としてそれぞれ掘り下げた。なお、西区は調査の過程でさらに西方へ 3 m 拡張したため、長さ 9 m の調査区となった。以下、西区・東区に分けて詳述する。

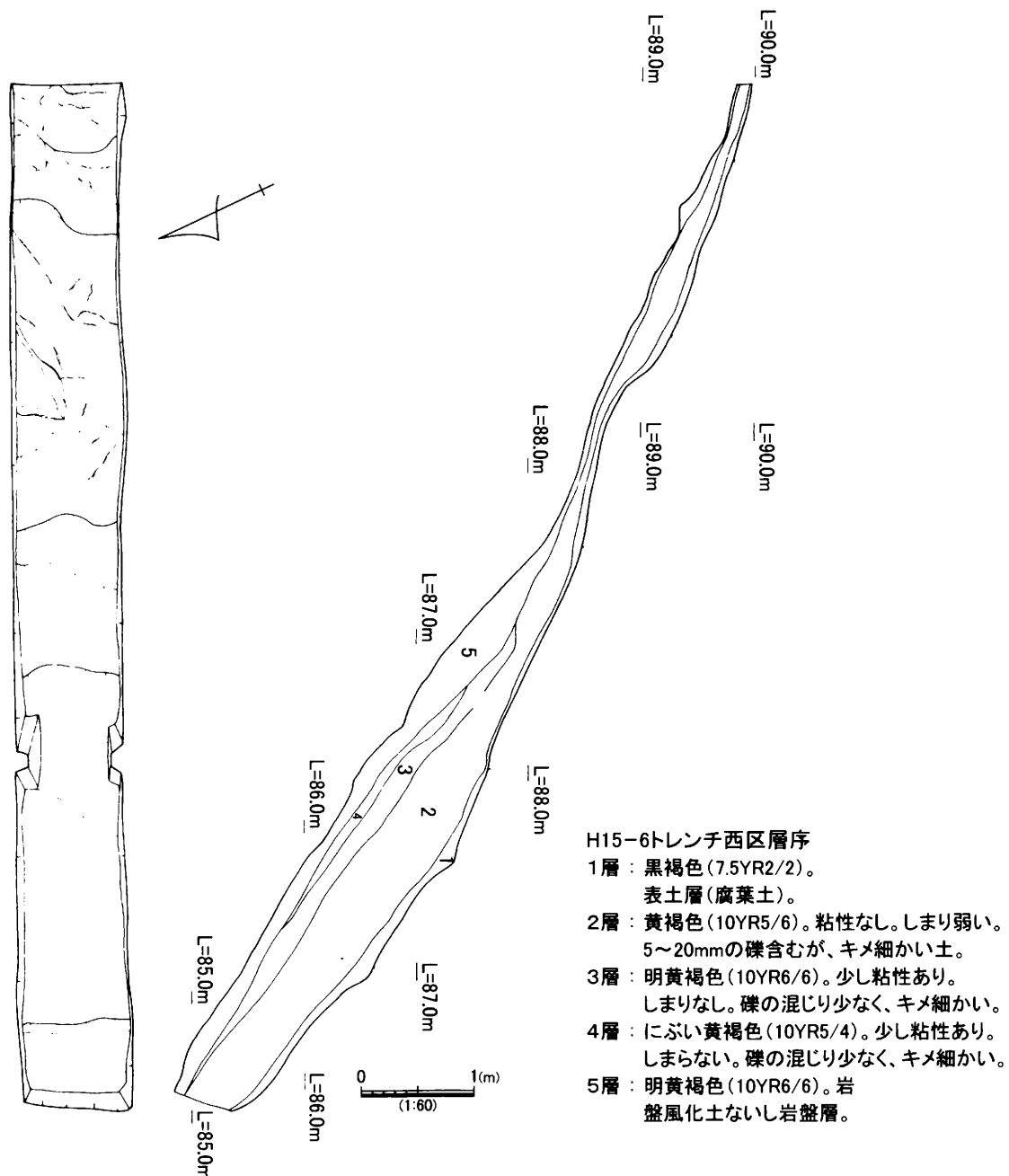


図 35 H 15- 6 トレンチ西区平面・断面図

①H 15- 6 トレンチ西区(図 35) 調査の結果、腐葉土層(1層)の下にしまりのない黄褐色砂礫土(2層)が流れ落ちて堆積しているのがみとめられ、調査区東(上)端から5m西方地点付近までは、その下に地山と考えられる明黄褐色の岩盤層あるいは岩盤風化土層(5層)を検出した。5m地点付近から調査区西(下)端付近にかけては2層の堆積が非常に厚くなっていくが、2層の下に少し粘性はあるが、しまりがなくボサボサした明黄褐色砂質土(3層)が堆積しており、一部では3層の下にやや黒く汚れたようなしまりのないにぶい黄褐色砂質土(4層)が斜堆積していることが分かった。いずれも最下層で明黄褐色岩盤風化土層(5層)を検出した。結局、当調査区内では、列石や土塁の痕跡は検出できず、明確なテラス状の平坦面なども見つからなかった。なお、遺物は一切出土しなかった。

②H 15- 6 トレンチ東区(図 36) 南部突出部中央の東側斜面に位置する6m×1mの調査区である。掘り下げて行くと、腐葉土層(1層)下に数層のしまりのない砂礫土ないし砂質土層(2層～4層)を確認し、これらを掘り進めるうち調査区西(上)端から東方4～5m地点付近で列石2個を検出した。さらに列石背後の堆積土(4層②・③)および岩盤風化土(5層)を除去した結果、岩盤を断面L字状に削平したテラス状の平坦面を確認した。

列石・テラス状平坦面・裏込め構造 列石は、2個とも東下方へ前のめりに傾いた状態で検出された。法量は、全体形の明らかな南側のものが最大幅約70cm、奥行き約50cmを測り、厚さは20cm前後と推定され、北側のものは奥行き約70cmで、厚みは20cm強と推定される。検出したテラス状平坦面の奥行きは、現状から推測すると約50cmとみられる。列石は、この平坦面に設置されていたものが、土砂の崩落に伴い傾斜して現在の状態に留まったものと考えられる。列石背後には30cm前後のスペースが空いているが、現状では裏込め状石は確認されなかった。列石の奥行きがテラス状平坦面の奥行きとほぼ同じ長さであるとみられることから、この部分には裏込め状石が元々無かった可能性が高い。

土塁 列石の背後には崩落土とみられるしまりのない堆積土しか検出されず、列石に伴う土塁はみとめられなかった。

遺物 トレンチ南側の列石の直ぐ南東脇にあった切り株を除去している時に時期・器種不明の土師器口縁部片1点が出土した。トレンチ北壁2層に相当する土層からの出土とみられる。

H 15- 6 トレンチ東区南拡張区 東区の南隣における列石の有無を確認するために、当初東区の列石が検出された部分から約50cm間隔をあけて東西約1.0m×南北約1.5mの範囲を掘り下げたところ、傾斜した岩盤を確認した。東区の完掘後、東区で検出された列石がその岩盤とどのような関係にあるかをより詳しく確認する目的で、この調査区を東区とつなげた上でさらに任意に拡張を行い、H 15- 6 トレンチ東区南拡張区とした。

腐植土・崩落土を除去した結果、拡張区北端で東区のテラス面からつながる平坦面を検出、その西側で20cm大の角礫を検出し、さらに平坦面の東側でやはり東下方へ前のめりに傾いて留まっている50×30cmの角礫を検出した。後者は平坦面の東側に落ち込んでいることから列石の可能性が高く、前者も大きさや位置からみて裏込め状石の可能性の高いものと判断した。平坦面の南側は、拡張区の南端までほぼ一様な岩盤斜面が広がっていることを確認した。これらの状況からみ

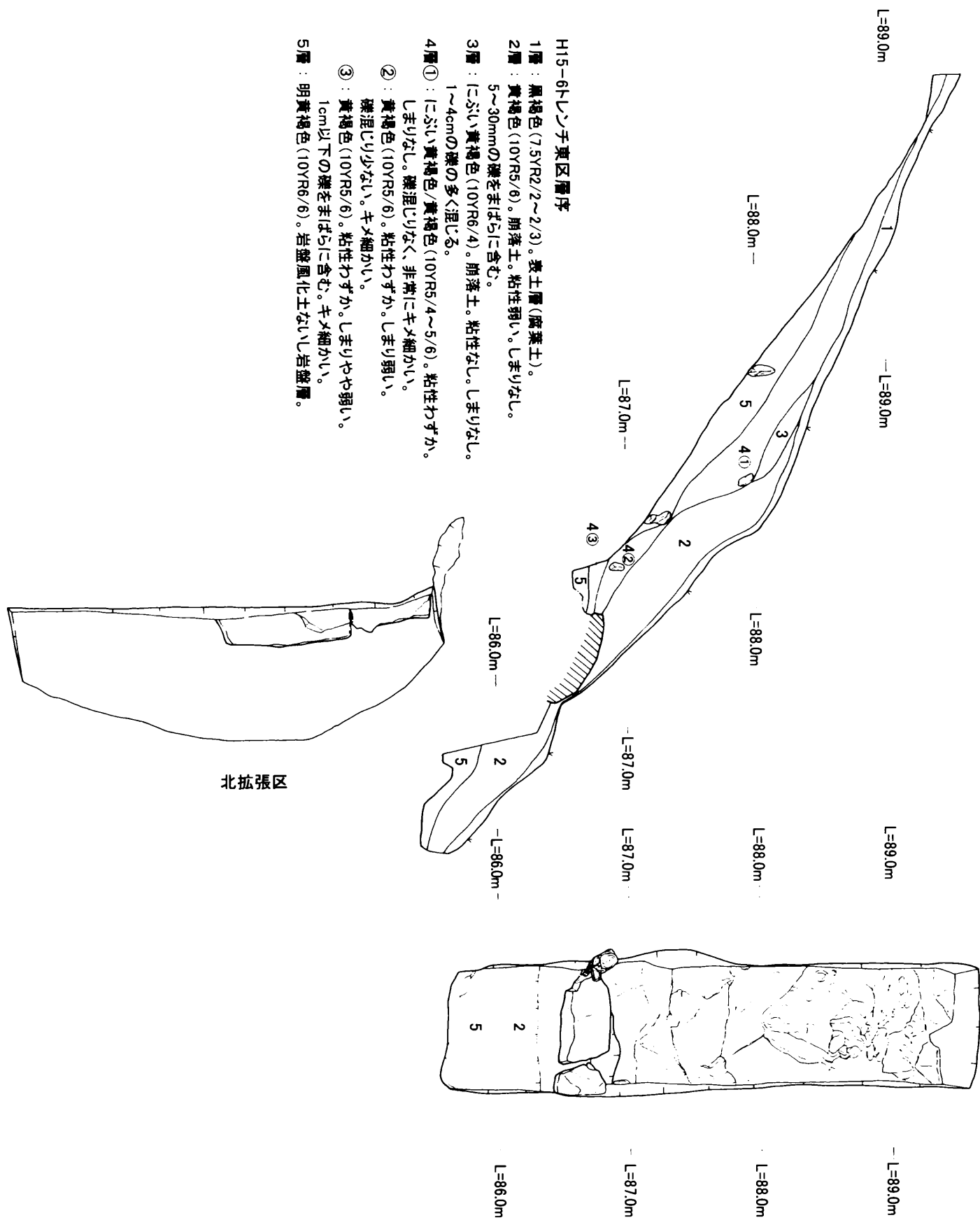
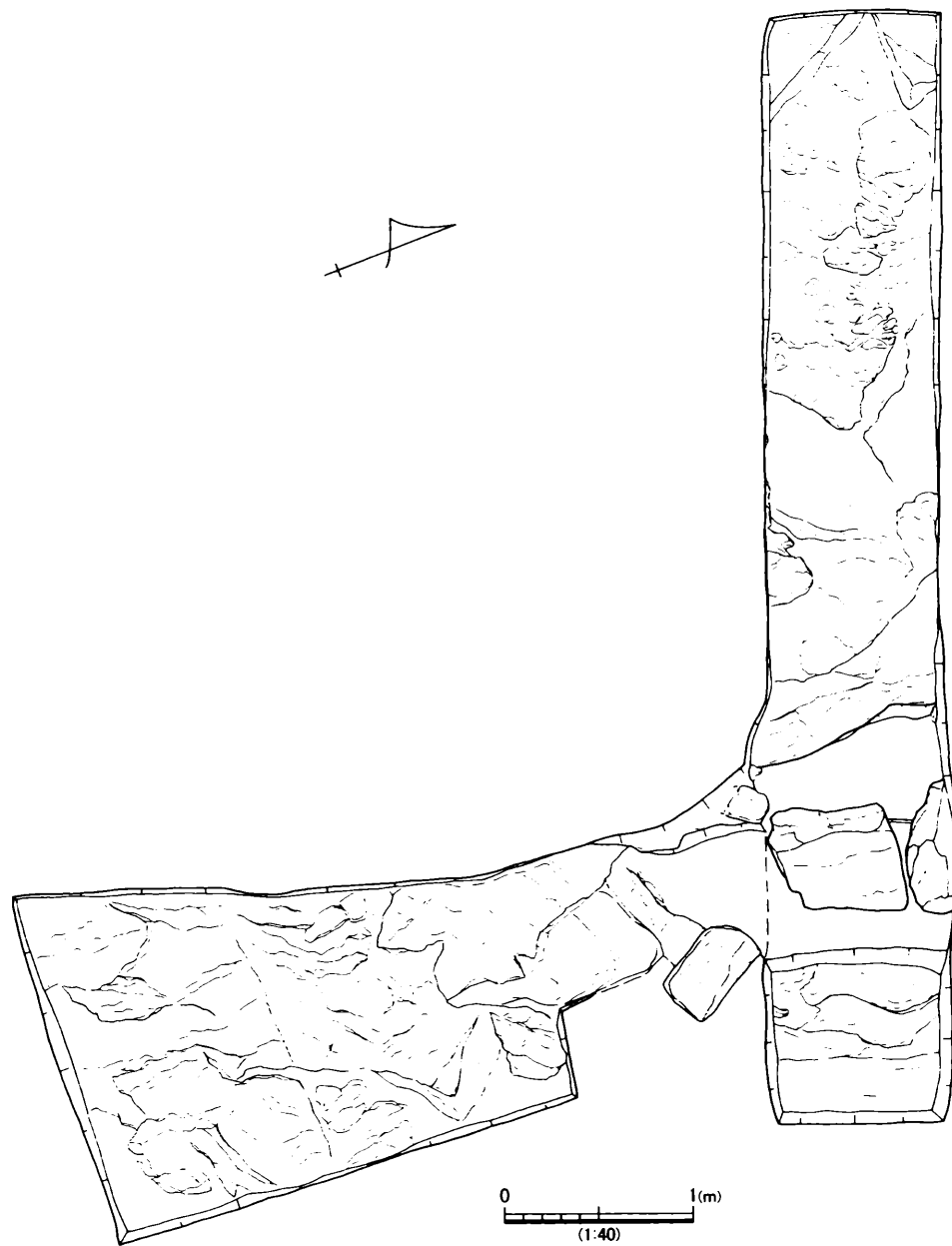


図36 H15-6トレンチ東区平面・断面・立面図



て、当所では、列石線が途絶え、岩盤利用の外郭線へ変わったと考えられる。

H15-6 トレンチ東区北拡張区 H15-6 トレンチ東区の北方斜面においてピンポールによるボーリング調査を行った結果、東区内で検出した2個の列石の延長線上2.5m先に列石が存在する可能性を得た。そこで、これを明らかにするために任意で調査区を設け、H15-6 トレンチ東区北拡張区とした。調査の結果、南北に連なる2個の列石を検出した。完全に掘り出していないためこれら列石の奥行き・厚さは不明であるが、横幅は、南側の列石で約100cm、北側の列石で約60cmを測る。両者とも石材は花崗岩の粗割石で、比較的平らな上面を呈し、前方に傾くことなく上面を真上に向けている。また、どちらも正面から見ると、南から北へ向かって10度程度の傾斜で右上がりに設置されている。なお、ピンポールによるボーリング調査の限りでは、北側の列石より北方の斜面に列石の存在は確認できなかった。また、南側の列石は、H15-6 トレンチ東区検出の北側の列石とは少なくとも2m余り離れているが、その間の列石も確認できなかった。東区での傾斜した列石検出状況から見て、その間の列石は既に転落してしまったものとみられる。(半沢)

H15-7 トレンチ(図37・図43)

H15-6 トレンチ西区の調査では列石や土塁の痕跡は検出できず、明確なテラス状の平坦面も見つからなかった。そこで、さらに南方の斜面でも同様の状況が見られるのかどうかを確認するために突出部先端近くの西側斜面に長さ9m×幅1mのトレンチを設定し、H15-7 トレンチとした。なお、掘り下げの過程で西側下方の状況をより詳しく知るために更に1m西へ拡張し、最終的に長さ10mのトレンチとなった。

調査の結果、トレンチ東端から約2m西方地点付近でトレンチ長軸に直交する溝状遺構1条を検出し、さらに東端から約4～5m西方地点付近でトレンチ長軸に斜交する溝状遺構1条を検出した。2条の溝を下(西)方から順にB1号溝・B2号溝とした。いずれも岩盤を掘削したものである。また、東端から約7～7.5m地点付近で岩盤を断面L字状に削平したテラス状の平坦面を検出した。表土の腐葉土と地山(岩盤)との間の堆積土は、しまりが弱く粘性のない崩落土で占められており、列石および土塁の痕跡は一切検出できなかった。

テラス状平坦面 東端から約7～7.5m地点付近で検出された岩盤斜面を断面L字状にカットしたテラス状の平坦面である。斜面の切り落しの高さは15～22cm、平坦面の奥行き幅は、65～90cmを測る。平坦面の標高は 86.75m 前後である。

本トレンチ完掘後、B1号溝・B2号溝の南北方向のつながりと端部を明らかにするためにトレンチの南北両側でピンポールによる事前ボーリング調査を行い、複数の拡張区を設けた。

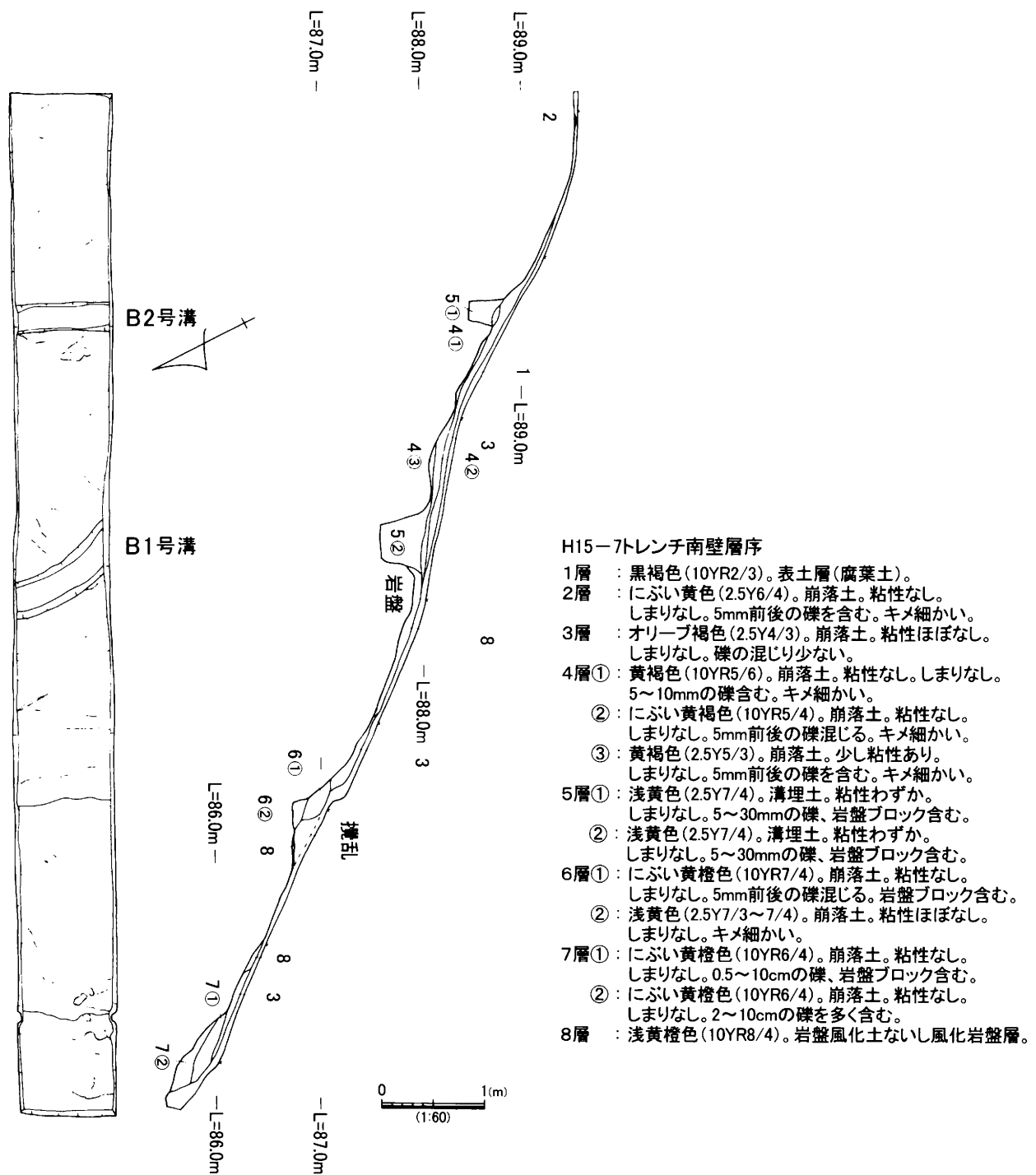


図37 H 15- 7 トレンチ平面・断面

H15- 7 トレンチ南拡張区 1 区および同北拡張区 1 区・溝状遺構(B 2 号溝) B 2 号溝の南北方向のつながりを追うため、H15- 7 トレンチをはさんで南北にそれぞれ任意の調査区を設定し、南側のものをH15- 7 トレンチ南拡張区 1 区、北側のものをH15- 7 トレンチ北拡張区 1 区とした。前者は、南北1.8m×東西約0.65mのほぼ長方形の調査区であり、直線的に南へ伸びて収束するB 2 号溝の南側端部を検出した。一方、後者は、拡張を重ねた結果、直線距離で長さ約8 mをも測る蛇

行・屈折した細長い調査区となり、4ヵ所(大きな屈曲で数えた場合)～6ヵ所(細かい屈曲で数えた場合)の屈曲部を有するB2号溝とその北側端部を検出した。

H15-7トレンチ南拡張区2・3区および同北拡張区2区・溝状遺構(B1号溝) B1号溝の南北方向のつながりを追うため、H15-7トレンチをはさんで南北にそれぞれ任意の調査区を設定し、南側のものをH15-7トレンチ南拡張区2区、北側のものをH15-7トレンチ北拡張区2区とした。南拡張区2区については、当初B2号溝南側端部の位置から推測し、B1号溝もそれほど南には伸びないであろうと予測して設定したが、調査の結果、さらに南方に溝が伸びることが分かり、別に南拡張区3区を設けて調査した。北拡張区2区については、B2号溝のつながり方から見て、北方へ溝が伸びることが予測されていたが、調査期間上の制約からH15-7トレンチ北壁から4m北方に東西1m×南北2mの調査区を設定し、溝の北側端部を検出するに留めた。

南拡張区2区の調査の結果、H15-7トレンチ内でトレンチ長軸に対し南東方向へ斜交するB1号溝は、当調査区北端の北側付近で大きく屈曲し、直線的に1.8m前後やや南西方向へ伸びた後、再び屈曲し、南東方向へ直線的に1.6m程伸びて調査区南東隅に至ることが分かった。

B1号溝は、更に約2m東南方向へ直線的に伸び、南拡張区3区へ至ると見られた。同3区の調査の結果、調査区北端から約70cmの間、直線的に南東方向に伸びるB1号溝とその南側端部を検出した。また、北拡張区2区の調査の結果、調査区南東隅から北西方向へ直線的に伸びるB1号溝とその北側端部を検出した。

以上のように、当トレンチの調査では列石・土塁が確認されず、H15-6トレンチ西区から当トレンチにかけての明確な外郭線のつながりを明らかにすることはできなかった。時期・性格の不明なテラス状の平坦面1ヵ所と溝状遺構2条(B1・B2号溝)を検出したが、これら溝の詳細と評価については後でまとめて述べたい。(半沢)

H15-8トレンチ(図38～40)

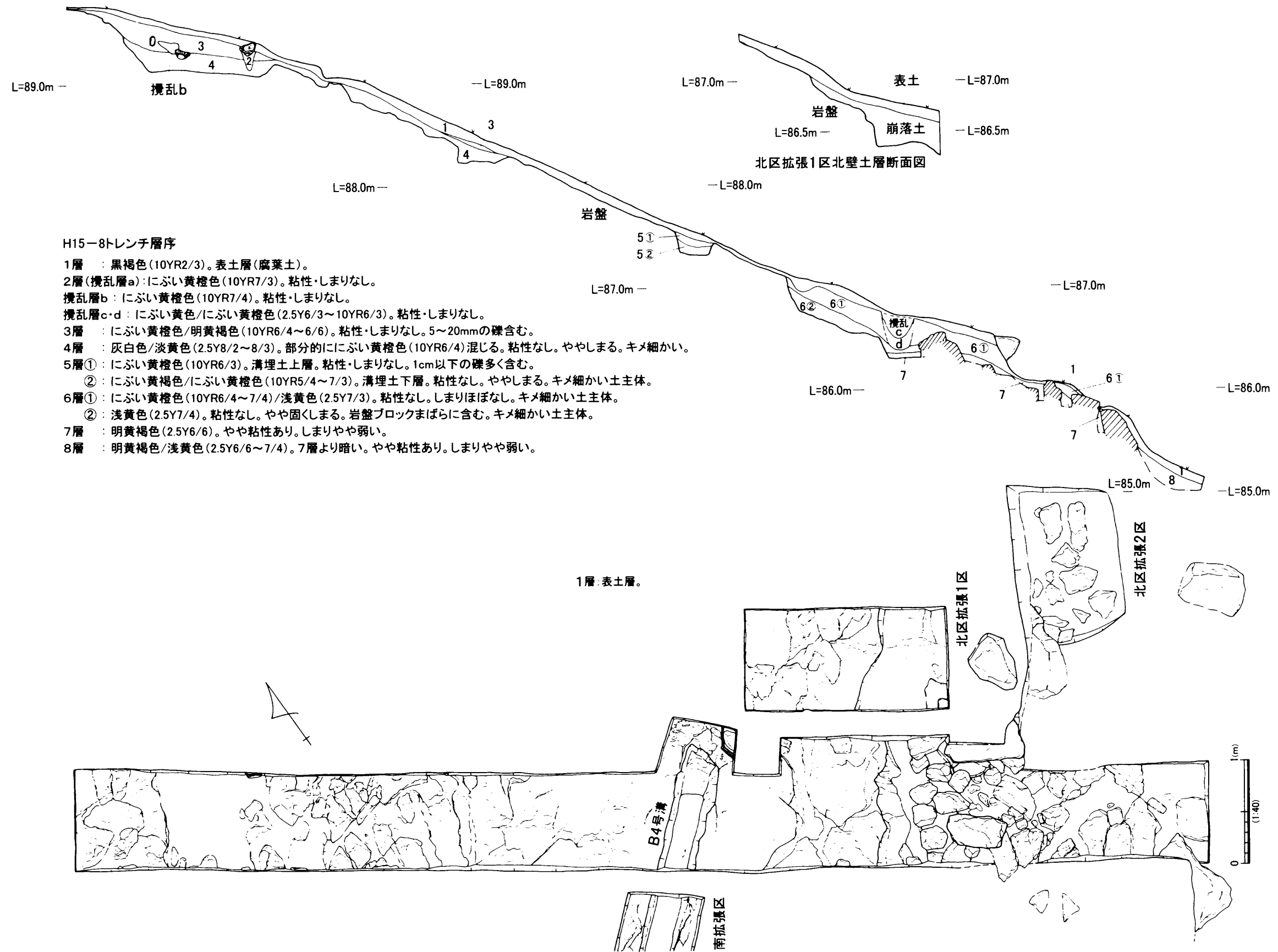
南部突出部東側斜面におけるH15-6トレンチ東区の調査では列石・テラス状平坦面を検出し、その南隣には岩盤斜面が広がることが確認できた。そこで、更に南方の斜面ではどのような外郭線となっているのかを確認するために突出部先端近くの東側斜面に長さ11m×幅1mのトレンチを設定し、H15-8トレンチとした。なお、本トレンチ上端(西端)から9m東方地点付近の北側(トレンチ外)には、調査前から前面が表土斜面から露出している石と表土中に埋まっているが上半部が完全に露出している石が見えており、これら2個の石が列石である可能性を踏まえての調査区設定となった。トレンチ長が11mと長く、調査の結果、表土下の状況も場所によってだいぶ異なっているため、便宜的にトレンチ上端(西端)から東方5m地点までをトレンチ上位、5m～6.5m地点までをトレンチ中位、6.5m地点からトレンチ下端(東端)までをトレンチ下位として説明する。

まず、トレンチ上位では、およそ10～25度前後の緩斜面を表土層が形成しており、その下に崩落土(3層)や地山の可能性のある岩盤風化土(4層)が堆積している。4層の下はやや硬い岩盤層である。トレンチ上端から0.8～2m地点付近では一見岩盤層がテラス状を呈しているように見えるが、その表面は4層のうちの灰白色の強い部分が硬化したような岩盤であることや、4層の堆積状況を勘案すると、風化の程度によって4層と岩盤層が分離されるにすぎず、共に地山とし

てとらえた。なお、4.3m地点付近から下方は、表土層のみが堆積している状況でこれを除去するとすぐに岩盤斜面が検出された。

トレンチ中位では、上位から引き続き表土の下に直ぐ岩盤層が現れていたが、トレンチ上端から6m地点付近で岩盤斜面を垂直気味に削り込んで作られた溝状遺構(B4号溝)を検出した。当溝はトレンチの長軸に対してやや斜行して直線的に伸びているが、トレンチ北壁付近で収束しかかっているのが分かったため、現状の記録を取った後、北壁の一部を任意で約0.5m北方へ拡張した。その結果、当溝の北側端部を完全に検出することができた。当トレンチでも、溝が検出されたことを受け、この溝の南側のつながりを追うためにトレンチ南側にH15-8トレンチ南拡張区を設定するとともに、ピンポールによる周辺一帯のボーリング調査を行った結果、トレンチ北方に別の複数の溝の存在を確認できた。そこで、H15-8トレンチ北拡張区1～4区を設定し、掘り下げを行った。これら溝関係の調査結果については後で述べる。

トレンチ下位の調査では、トレンチ上端から7m地点付近において、中位で見られた薄い表土層の下にすぐ岩盤斜面が現れるという状況が一変し、岩盤斜面が一旦大きく落ち込み、表土下に6層①のような崩落土が厚みを持って斜めに堆積するようになる。8m地点付近までは、6層①の下にややしまりの強い浅黄色土(6層②)の斜堆積が見られた。注目すべきは、8m地点付近の西方で再び検出した岩盤斜面の落ちである。この第二の落ちは、前者と違い、落ちきった後テラス状の平坦面へつながることが分かった。この平坦面は、灰白色味の強い風化岩盤であり、その上にしまりはそれほど強くないが粘性がやや強い明黄褐色土(7層)が5cm程の厚みでほぼ水平堆積し、さらにその上部に上述のややしまりの強い浅黄色土(6層②)が堆積している。さらに9m地点付近まで崩落土を除去してゆくと、切り落としの下端、即ち平坦面の奥のラインからおおよそ10～30cmの間隔を空けて、面を埋める様に密着した15～35cm大の角礫数個を検出した。しかも、これらの角礫は、単に密集しているわけではなく、平面図や横方向からの観察でも明らかな様に、テラスの奥側に少なくとも一列の礫の並びを作っており、部分的にはその前方に2列目を形成していることが分かった。さらにこれらの北側に前面部だけ露出していた列石状の石の奥行きとその下位及び背後の状況を明らかにするため、トレンチ北壁の一部を北方に拡張して調査した。その結果、この石が上面を水平に保つ列石であること、当列石背後のテラス面に角礫が一個はまっていること、列石前部の下に角礫がはまり、列石を支えていることが判明した。また、トレンチ内のテラス面上、中央やや南寄りの一個の角礫前方において奥行60cm前後、横幅30cm余を測る上面・前面がほぼ平らな礫を検出したが、この礫は前が少し下方(東方)に傾いた状態になっており、ひび割れた岩盤によって先端部を支えられて止っていた。このやや大きめの礫も先の列石と比べると表面に細かい凹凸があってゴツゴツした岩状ではあるが、検出状況・大きさ・形状からみて、これと同様に列石であると判断される。そして、これら列石の背後に列状をなして並ぶ礫群は、列石の裏込め状石状のものであると認めることができる。また、列石の直下は、岩盤ないし風化した岩盤の破碎礫となっていた。なお、これらのテラス・列石・裏込め状石による構造の斜面下側(東側)では、大小の礫が一見斜面を形成しているように見られるが、これらは一体の岩盤斜面が風化・崩壊して分離して形成された礫やひび割れ状の岩盤であると見られる。このようなひび割れた岩盤や礫の隙間には明黄褐色土(7層)が堆積している。この7層は、テラス上面にも堆積し



H15-8トレンチ層序

- 1層 : 黒褐色(10YR2/3)。表土層(腐葉土)。
 2層(攪乱層a): にぶい黄橙色(10YR7/3)。粘性・しまりなし。
 攪乱層b: にぶい黄橙色(10YR7/4)。粘性・しまりなし。
 攪乱層c・d: にぶい黄色/にぶい黄橙色(2.5Y6/3~10YR6/3)。粘性・しまりなし。
 3層 : にぶい黄橙色/明黄褐色(10YR6/4~6/6)。粘性・しまりなし。5~20mmの礫含む。
 4層 : 灰白色/淡黄色(2.5Y8/2~8/3)。部分的ににぶい黄橙色(10YR6/4)混じる。粘性なし。ややしまる。キメ細かい。
 5層①: にぶい黄橙色(10YR6/3)。溝埋土上層。粘性・しまりなし。1cm以下の礫多く含む。
 ②: にぶい黄褐色/にぶい黄橙色(10YR5/4~7/3)。溝埋土下層。粘性なし。ややしまる。キメ細かい土主体。
 6層①: にぶい黄橙色(10YR6/4~7/4)/浅黄色(2.5Y7/3)。粘性なし。しまりほぼなし。キメ細かい土主体。
 ②: 浅黄色(2.5Y7/4)。粘性なし。やや固くしまる。岩盤ブロックまばらに含む。キメ細かい土主体。
 7層 : 明黄褐色(2.5Y6/6)。やや粘性あり。しまりやや弱い。
 8層 : 明黄褐色/浅黄色(2.5Y6/6~7/4)。7層より暗い。やや粘性あり。しまりやや弱い。

ており、列石や裏込め状石の置土ないし充填土であった可能性が高い。なお、現状から判断して、テラスの奥行きは、80～100cmに収まるものとみられる。

H15-8トレンチ北拡張区1区 H15-8トレンチにおいて岩盤斜面のカットによるテラス面、裏込め状石、列石を確認したことを受け、これらの北側での状況を明らかにする目的でH15-8トレンチ北隣に東西2m×南北1mの調査区を設定し、H15-8トレンチ北拡張区1区とした。調査の結果、調査区上端(西端)から約0.5～0.7m東方地点で岩盤斜面に最初の落ちを検出し、さらに1.1～1.3m地点で二つ目の岩盤の落ちのラインを検出した。最初の落ちと二つ目の落ちの間は平坦面を持たず、緩やかな斜面をなしているが、二つ目の落ちの下端からは調査区北東部で見られるように岩盤の平坦面が形成されている。岩盤の落ちが二回見られ、二度目の落ちでテラス状の平坦面が形成されている点は、H15-8トレンチの7～8m西方地点付近で確認されたものと同様であり、位置関係からも一連の構造をなすものと判断できる。なお、調査区南東部は本来平坦面が広がっていたと思われるが、現状ではボロボロした岩盤風化土が広がっており、やや硬い岩盤の一部が所々に露出している状況である。また、南東隅では、岩盤ないし礫状の固まりの上にやや浮いた形で別の礫の端部が被さっている状況を検出した。それらの標高や位置関係を勘案すると、前者の礫状のものはテラス状平坦面の岩盤の一部であり、その上位の礫は、H15-8トレンチ北壁部で確認した列石の後端部である可能性が高い。

H15-8トレンチ北拡張区2区 H15-8トレンチ調査中に同トレンチ北方外側に露出していた2個の列石状の石の下方(東方)をピンポールによりボーリング調査したところ列石らしき礫の存在を確認した。そこで、周辺の表土下を任意に掘り下げた結果、北側の列石状の石の下方東側で横幅90cm余の大型礫を検出した。後に、この大型礫の北側周辺の状況を明らかにする目的で、礫に隣接する東西約1m×南北約1.5mの範囲を掘り下げ、これをH15-8トレンチ北拡張区2区とした。調査の結果、大型礫の下や周辺の風化土の下から岩盤を検出した。これらの岩盤は、おそらく自然の攪乱によって角礫状に分離したものであり、大型礫と下位の岩盤の差は曖昧であった。これらの状況と列石と考えられる西側の石が大型礫の上に乗っている状況、H15-8トレンチ内の列石・テラスの下方に岩盤が斜面を形成する状況を総合的にみて、当所で検出した大型礫は、列石ではなく、風化・破碎した岩盤の一部であると判断した。

H15-8トレンチ南方岩盤部 H15-8トレンチ下位における調査によって岩盤斜面を切り落したテラス面、列石、裏込めのセットを検出し、その下方に再び岩盤斜面が続く状況が判明したことを受け、さらに南方の状況を明らかにする目的で南部突出部先端部の南東斜面中腹に該当するH15-8トレンチ下位南方に任意に調査区を設けた。調査区西端から帯状に東方(やや北東方向)へ伸び、東部が北東方向へ曲がりH15-8トレンチ下位に接続する形をなす東西10m余の調査区である。表土を除去するとすぐに岩盤が現れ、それが調査区全体に及ぶことを確認したため、この調査区をH15-8トレンチ南方岩盤部とした。当調査区の調査の結果、次のことが判明した。

調査区西端から東西4m位の範囲は30度前後の傾斜を持つ単純な傾斜をもつ岩盤であるのに対し、そこから調査区東端までの範囲では岩盤の切り落しが線的につながっていることが分かった。また、特にその範囲の西側5mの部分では、最大幅0.5mを測る犬走り状のテラス面を確認した。調査期間の関係で当調査区東端部の上方(北西側)は掘り下げなかったが、H15-8トレンチで検出

した列石に付随する岩盤切り落としラインは、もし続いているとしても当調査区の上方を廻る可能性が高い。しかも、当調査区一帯は、表土下に崩落土がほとんど堆積しておらず、すぐに岩盤斜面が検出される状況を勘案すると、H15-8トレンチでみられた列石・裏込め状石と奥行きのある平坦面で構成される外郭線(列石線)は、当調査区北端で途切れ、再び岩盤利用の外郭線へ転じた可能性が高い。このことを積極的に考慮すれば、当調査区検出の岩盤切り落としライン及び前面の奥行きの短い平坦面は、両者あいまって岩盤利用を以って城内外を画する外郭線構造であると判断できる。

ピット状遺構 調査区東端部の岩盤切り落としラインの直ぐ上方においてかなり緩やかな岩盤斜面を削り抜いて造られたピット状遺構を検出した。その上端の平面形は不整形円形とも不整形丸方形とともとることができ、底面は、平面形が方形で、岩盤の割れによる凹凸が顕著である。断面形は概して深鉢状を呈している。また、法量は、上端幅約44～70cm、底部約16×24cm、深さ約30cmを測る。なお、当調査区付近で他に同様の遺構が検出されておらず、当遺構の性格や外郭線構造との関係は、現状では不明であると言わざるを得ない。

H15-8トレンチ南拡張区・溝状遺構(B4号溝) H15-8トレンチ南拡張区は、B4号溝の南方のつながりを追うためにH15-8トレンチの南側に設定した約2m×0.7mの調査区である。調査の結果、H15-8トレンチから直線的につながるB4号溝とその南側端部を検出した。

H15-8トレンチ北拡張区3・4区・溝状遺構(B5号溝) H15-8トレンチ北壁ラインから北に約0.8～0.9m離して任意で設定した東西約0.6m×南北0.9mの調査区(H15-8トレンチ北拡張区3区)を調査した結果、岩盤斜面を削り込んで作った溝の南側端部を検出した。次いで当調査区から北に約1.8m離れた地点に東西1m×南北1.5mの調査区(H15-8トレンチ北拡張区4区)を設けて調査したところ、直線的に伸びる溝と北側端部を検出したため、これらを一体の溝として捉え、B5号溝とした。

なお、H15-8トレンチ北拡張区4区では、北側端部の北東側の岩盤がヘラ状に平らに削れて落ちこんでいる状況が見られたため、その下方の岩盤斜面の状況を確認する目的で東西1m×南北1.1mの範囲を追加・拡張した。これを掘り下げた結果、単純な傾斜をもつ岩盤が下方に続いていることと調査区下端(東端)付近でその斜面に落ち込みが見られることが分かった。この落ち込みに関しては、その上端ラインがH15-8トレンチ検出の切り落としラインの方向と異なり、南西から北東へと向いていること、落ち込み下方で見受けられる面がフラットとはいえないこと、落ち込みの段差がほとんどないところもあれば、8cm～17cmの部分もあるなど整っていないことなどを勘案し、人為的な岩盤の切り落としではないと判断した。

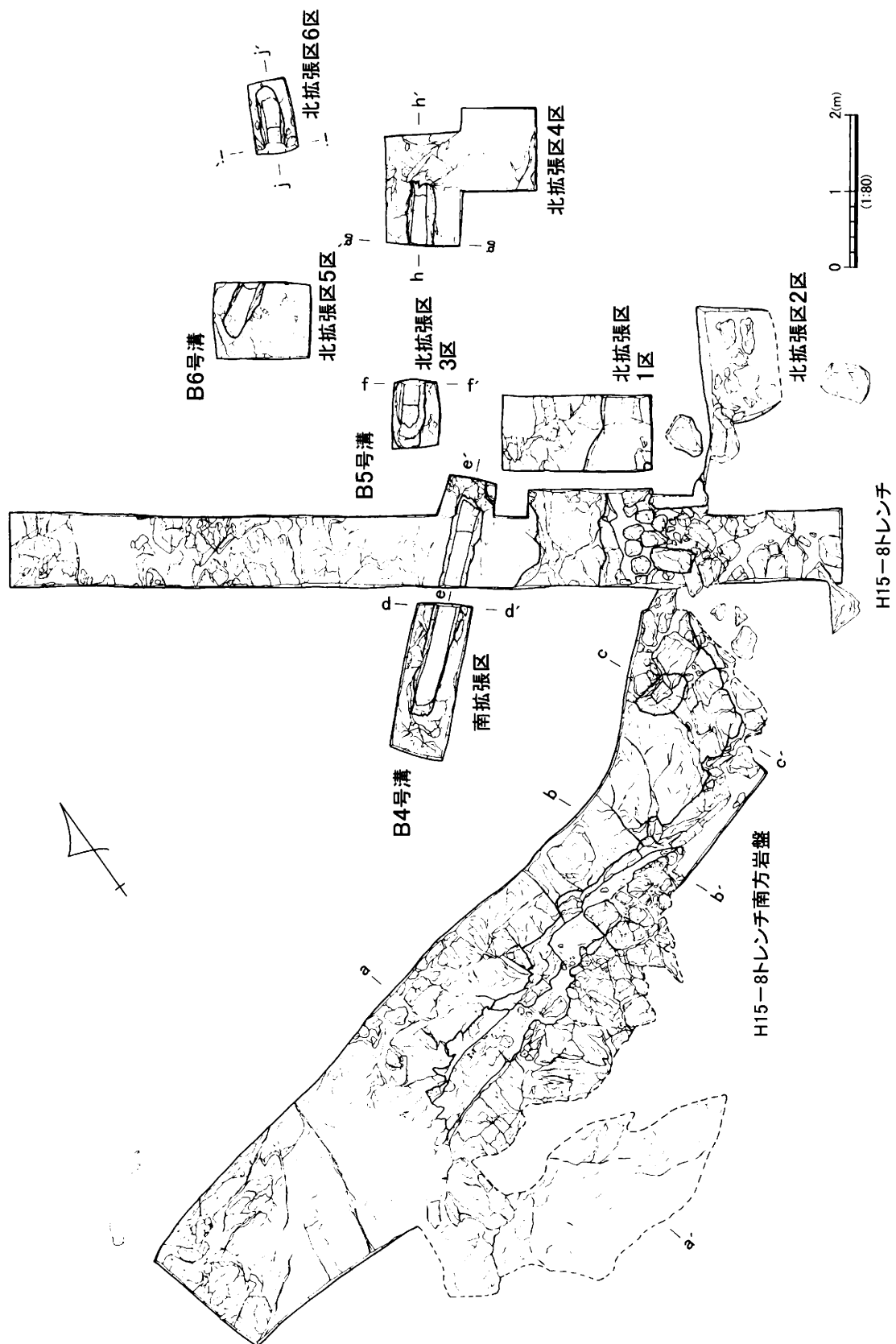


図 39 南部突出部 南東斜面調査区平面図

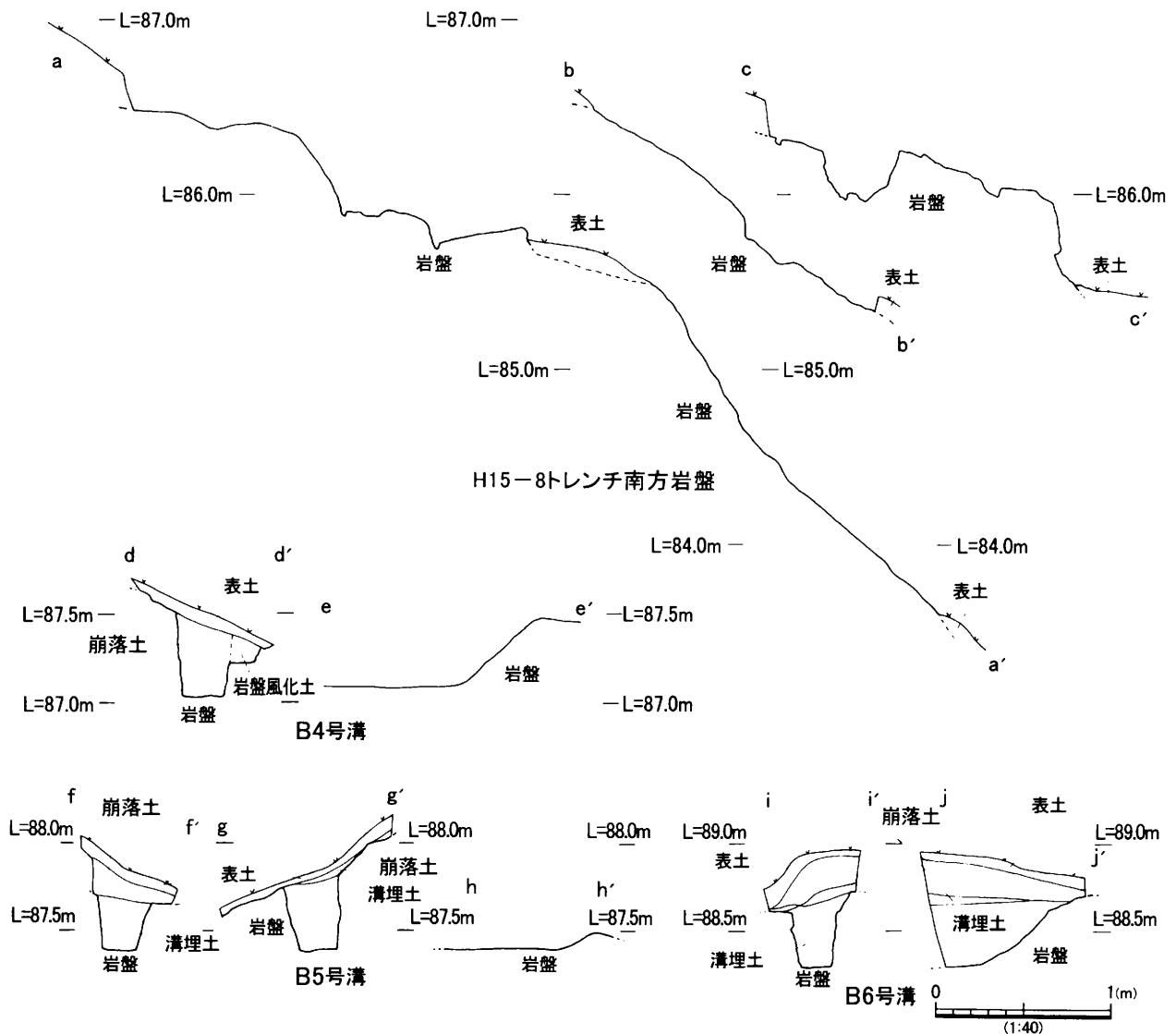


図 40 南部突出部 南東斜面調査区 岩盤及び溝 B 群断面図

H15-8 トレンチ北拡張区 5・6 区・溝状遺構(B6号溝) H15-8 トレンチ北拡張区 5 区は、H15-8 トレンチ北壁ラインから北に 2 m 離して設定した東西約 1.3m×南北 1 m の調査区である。これを調査した結果、岩盤斜面を削り込んで造った溝の南側端部を検出した。次いで当調査区から北に約 1.7m 離れた地点に任意で東西 0.5m×南北約 0.9m の調査区(H15-8 トレンチ北拡張区 6 区)を設けて調査したところ、溝の北側端部を検出したため、これらを一体の溝として捉え、B6号溝とした。

以上のように、当トレンチ及び同拡張区各区の調査の結果、H15-6 トレンチ東区南拡張区で見られた岩盤利用の外郭線が当トレンチ北拡張区 1 区の北側付近まで続いたのち、同拡張区から当トレンチにかけてテラス状の平坦面に列石と裏込め状石を置くものへと変わり、さらに H15-8 トレンチ南方岩盤部で再度岩盤利用の外郭線構造へと変化することが分かった。なお、土塁の痕跡はいずれの調査区でも確認できなかった。また、溝状遺構 3 条(B4～6号溝)を検出したが、これらの詳細と評価については後でまとめて述べたい。(半沢)

H 15- 9 トレンチ(図 43)

H 15- 7 トレンチおよび各拡張区において溝が検出されたことから、南部突出部の尾根頂部をピンポールによってボーリング調査したところ、7 トレンチ東端からおよそ 3 m 北方付近の頂部上に溝が存在する可能性が明らかになった。そこで溝状遺構の検出を目的として東西 2 m × 南北 1. 5 m のトレンチを設定し、H 15- 9 トレンチとした。

調査の結果、しまりが弱く粘性の無いにぶい黄色砂礫土を埋土とする溝(B 7 号溝)を検出した。当溝は、尾根頂部地山のやや風化した岩盤層を断面コの字状に掘削して作られており、H 15- 9 トレンチ中央を直線的に南北に走る。なお、トレンチ北側に当溝に切られて直交する不整形の溝状部分がみられるが、他の溝と比較して極端に不整形であり、木根の痕のような細かい溝状の掘り込みも入っていることから何らかの自然的な攪乱によるものと判断した。ただし、この直交箇所付近の溝の深さが 30 cm 程度と他に比べて浅くなっていることから、当溝を掘削する際にこの不整形な溝状部分が作業に何らかの影響を及ぼした可能性がある。

さらに当溝の南北方向のつながりと終端部を明らかにするために当トレンチの南北に複数の拡張区を設け調査した。

H 15- 9 トレンチ北拡張区 1・2 区 H 15- 9 トレンチ北端から約 4. 5 m 北方に設定した北拡張区 1 区で B 7 号溝の中間部分を検出、さらに 1 区北端から 3 m 北方に設定した北拡張区 2 区で同溝の北側端部を検出した。

H 15- 9 トレンチ南拡張区 1・2 区 H 15- 9 トレンチ南端から約 2 m 南方に H 15- 7 トレンチ東端に接続する形で設定した南拡張区 1 区において直線的に続く B 7 号溝のつながりを検出した。南側付近、特に南東部では岩盤の風化が激しく、溝の上端の形状が曖昧になっている。さらにその南に隣接する南拡張区 2 区では、1 区南側と同様に岩盤の風化が激しく溝上端の形状が曖昧であることが分かった。しかし、溝底部において礫の混じりの少ない風化岩盤が南側で途切れ、人頭大の礫が密集する状況を確認した。これらの礫は硬い岩盤の露頭の一種であるとみられ、上述の境が溝の南側端部であると判断した。

H 15- 9 トレンチ南拡張区 3・4 区 B 7 号溝の調査の後、尾根頂部先端部付近においてピンポールによるボーリング調査を行ったところ、別の溝状遺構が存在する可能性を得たため、H 15- 9 トレンチ南拡張区 1 区から 2 m 南方に南拡張区 3 区、南拡張区 2 区から 0. 5 m 東方に南拡張区 4 区をそれぞれ設定し、調査を行った。その結果、3 区では岩盤を抉る上端幅 40 ～ 50 cm の溝状の落ち込みを検出した。しかし、この落ち込みは、側壁がこれまでの溝状遺構のものと違って垂直的ではなく、特に東側の側壁は東から西へ大きく傾斜して西壁へと落ち込んでおり、底部も平坦な面を持たない状況であった。また、これまでの溝状遺構が概ね等高線のカーブに沿うように並行して伸びるのに対し、この落ち込みは等高線のカーブとはむしろ逆のカーブを描いている点で大きく異なる。一方、4 区でも岩盤の落ち込みを検出したが、こちらは落ち込みが溝状と言えないほど不整形なものであることが分かった。これらの状況から、3・4 区検出の岩盤の落ち込みは、溝状遺構ではなく何らかの自然の攪乱により形成された落ち込みであると判断した。

H15-9 トレンチ西拡張区1～4区・溝状遺構(B3号溝) H15-9 トレンチの調査の過程で、同トレンチとH15-7 トレンチ北拡張区1区間の斜面をボーリング調査したところ、新たに別の溝が存在する可能性を得たため、H15-9 トレンチ西拡張区1区を設け調査した。その結果、B7号溝の下方に新たな溝(B3号溝)を検出し、その南側端部を明らかにした。B3号溝は、尾根頂部からわずかに下った斜面の岩盤を掘削したもので、当トレンチ西拡張区1区内では尾根先端部に向かって等高線に並行して伸び、H15-7 トレンチ北側手前で収束していた。そこで、この溝の北方へのつながりと北側端部を明らかにする為にH15-9 トレンチ西拡張区2～4区を設けて調査した。その結果、2区で当溝の直線的な部分を、3区では溝の屈曲部分を検出し、さらに4区においてその北側端部を検出することができた。

以上のように、当トレンチの一連の調査で2条の溝状遺構(B3号溝・B7号溝)を検出したが、これらの溝の詳細と評価については次にまとめて述べたい。(半沢)

南部溝状遺構及び土坑状遺構・テラス状平坦面

既に述べたように、南部突出部尾根と南部頂上西方尾根の頂部・斜面で多数の溝状遺構とテラス状平坦面、そして土坑状遺構1基を検出した。これらの遺構についてここで総括を行い、その性格や時期について言及しておきたい。以下、土坑状遺構・テラス状平坦面、溝状遺構の順に述べる。

1. 土坑状遺構・テラス状平坦面 土坑状遺構(H15-SX-1)は、南部頂上西方尾根斜面において検出したA2号溝の南側端部とA3号溝に挟まれた箇所に岩盤を掘削して造られている。当遺構はA2号溝の南側端部と切り合わず、約30cm間隔で隣接するが、両者の南側で岩盤の落ちが見られ、南方へ傾斜した平坦面(テラス2)が広がる。遺物は、底部直上で1点土器片が出土したが、器種・時期は不明である。当遺構の法量その他の詳細は既述の通りであるが、重要なことは岩盤を削り抜くことによって上端最大幅約1.3m、最深部の深さ0.9mにもなる土坑を掘り、なおかつ底面はほぼ平らに整形することに投じられた尋常ならざる労力と技術であり、そこには大規模な溝の掘削やテラス状平坦面の形成と共通するものが感じられる。当遺構、A2・3号溝、テラス2が、相互に切り合うことなく近接した位置関係にあること、岩盤を直に掘削して形成するという共通の方法・発想が用いられていることを考慮すると、これらは近接した時期に相互に関連性をもって造られた可能性が高い。遺構の性格に関しては、その形状から水溜めのものをまず想定できるが、北側の深さが0.9mあるのに対し、南側の深さが0.3m足らずしかないので、安易にそうとも決めかねる。

テラス状平坦面は、明らかに古代山城の外郭線に関連するものとそれ以外に分けられる。前者は、南部頂上西方尾根斜面の西側と突出部東斜面から南端にかけての範囲で確認されており、大別すると、①列石を用いた外郭線構造の一部をなす平坦面と②岩盤利用の外郭線構造を形成する平坦面に分けられる。①には、H15-3 トレンチ検出の平坦面(奥行き推定約70～90cm、東壁での標高83.3m前後)、H15-6 トレンチ東区下位検出の平坦面(奥行き推定約50cm、標高86.6m前後)とH15-8 トレンチ下位及びH15-8 トレンチ北拡張区1区で検出した平坦面(奥行き推定80～100cm、標高86.3～86.4m前後)がある。同じ斜面にある後二者のテラスは、奥行きに違いがあ

るが、これは裏込め状石の有無に起因していると考えられる。また、②には、H15-8トレンチ南方岩盤部で検出した、横幅5m、奥行き10cm未満～最大50cmを測る小テラス面(標高85.6～86.0m前後)が該当する。これらの外郭線構造に関連する平坦面を「外郭線テラス」と呼んでおく。

一方、後者の山城との関連が明らかではないテラス状平坦面は、南部頂上西方尾根から突出部西斜面にかけての範囲で確認されている。西北から順に述べると、H15-3トレンチ検出の2段の平坦面、H15-5トレンチ及び同東拡張区～H15-11トレンチ周辺で検出した一連の平坦面(テラス1～3)、H16-1トレンチで検出した3段の平坦面、H15-7トレンチ下位で検出した1段の平坦面がある。これらのテラス状平坦面は、いずれも列石や土塁の痕跡が伴っていないため、古代山城との関係・性格・時期が問題となってくる。

テラス1のH15-5トレンチ東拡張区8区東端での標高は約89.0m、テラス2のH15-5トレンチ東拡張区11区東端での標高は約87.6m、テラス3のH15-11トレンチ東壁での標高は約86.3mであり、各テラス間の標高差は1.3～1.4mである。また、H16-1トレンチで検出した3段のテラスを上・中・下段テラスとすると、その南壁断面での標高は、上段が85.9m、中段が84.5m、下段が83.1mであり、テラス間標高差は1.4mとなる。各テラスの標高と周辺のコントア図における平面的位置関係及びテラス前端ラインの方向性を合わせて考えると、テラス3はH16-1トレンチ上段テラスに連続していることが分かる。したがって、同中段テラスをテラス4、下段テラスをテラス5と呼ぶことができ、この斜面一帯においては各テラス間の標高差が1.4m前後になるように少なくとも5段のテラスがほぼ等間隔で造られており、テラスのラインは、現地形すなわち等高線に沿う形でつながっていることが分かる。なお、西方のH15-3トレンチ検出の2段の平坦面のトレンチ東壁での標高は、上段が85.3m、下段が約84.0mであり、確実ではないがそれぞれテラス3・4に対応している可能性がある。ちなみにH15-11トレンチ～H16-1トレンチ一帯でみる限り、各テラスの奥行きは、テラス1が55cm超、テラス2が60cm超、テラス3が50～75cm、テラス4・5が、75cm前後である。一方、H16-1トレンチから20m以上隔てて南方に位置するH15-7トレンチ検出のテラス(テラス6とする)は、奥行き65～90cmで、標高は約86.8mである。これは、地形の流れ・位置関係・標高からみるとテラス2ないしテラス3と一連のものである可能性もあるが、両トレンチの中間に位置するH15-6トレンチ西区でテラスが検出されなかったため定かではない。

テラス1～5は、奥行きに着目すれば、山城外郭線に列石を置く外郭線テラスと差がみられないが、上述のように等高線(地形の流れ)に沿ってほぼ等間隔に、しかもほぼ同じ標高差で規則正しく造られている点からみると、外郭線構造とは無関係な遺構である可能性が高い。両者が別物という視点で再度両者を検討したところ、テラス面後方の岩盤の切り落しの高さや傾斜に差が認められることが分かった。すなわち、テラス1～5の切り落しの高さは、約20cmと比較的低いテラス1を除き、概して30～40cmを測り、その傾斜も約75～85度の垂直に近い急勾配をなしている。これに対し、突出部検出の外郭線テラスの方は、切り落しの高さが20～30cm弱で、その傾斜も垂直気味ではなく60～70度前後の勾配を示している。この視点によると、上述のテラス6は、切り落しの高さは20cm程度で、傾斜も約70度を測り、標高も東斜面の外郭線テラスと大きな差がないことから現状では外郭線テラスの可能性も排除できない。

以上のように、土坑状遺構と外郭線テラス以外のテラス状平坦面の性格・時期については、両遺構及び溝状遺構が互いに密接な位置関係にあること、岩盤を大規模に削平する手法に共通性がみとめられること等を考慮すると、溝状遺構の評価を行なったうえで総合的に解釈せざるをえない。

2. 溝状遺構(図39・40～43) 南部頂上西方尾根斜面で5条、突出部の尾根上及び東西斜面で7条の溝状遺構を検出した。前者の一群をA群、後者の一群をB群と呼び、まずそれぞれについて整理を行い、その後全体の特徴をまとめ、時期・性格などの評価を行いたい。なお、各溝の法量などの属性は表3にまとめてある。

(1) 溝の特徴

A群(A1～A5号溝) いずれの溝も傾斜地の地山(岩盤)を垂直気味に削り込んで掘られ、底部は水平な平坦面になるように削平され、断面コの字状を呈する。溝幅は、総じて上端幅約25～40cm、底部幅約20～30cmに収まり、溝の深さは斜面上側で約30～50cm前後、斜面下側で約20～40cm前後に収まる。溝両側の端部形状は、一部隅丸形状に削り込まれているものや二段掘りになっているものもあるが、大半が小口側から斜めに面を作るように削り込まれ、底面から端部が翼状に立ちあがるものである。

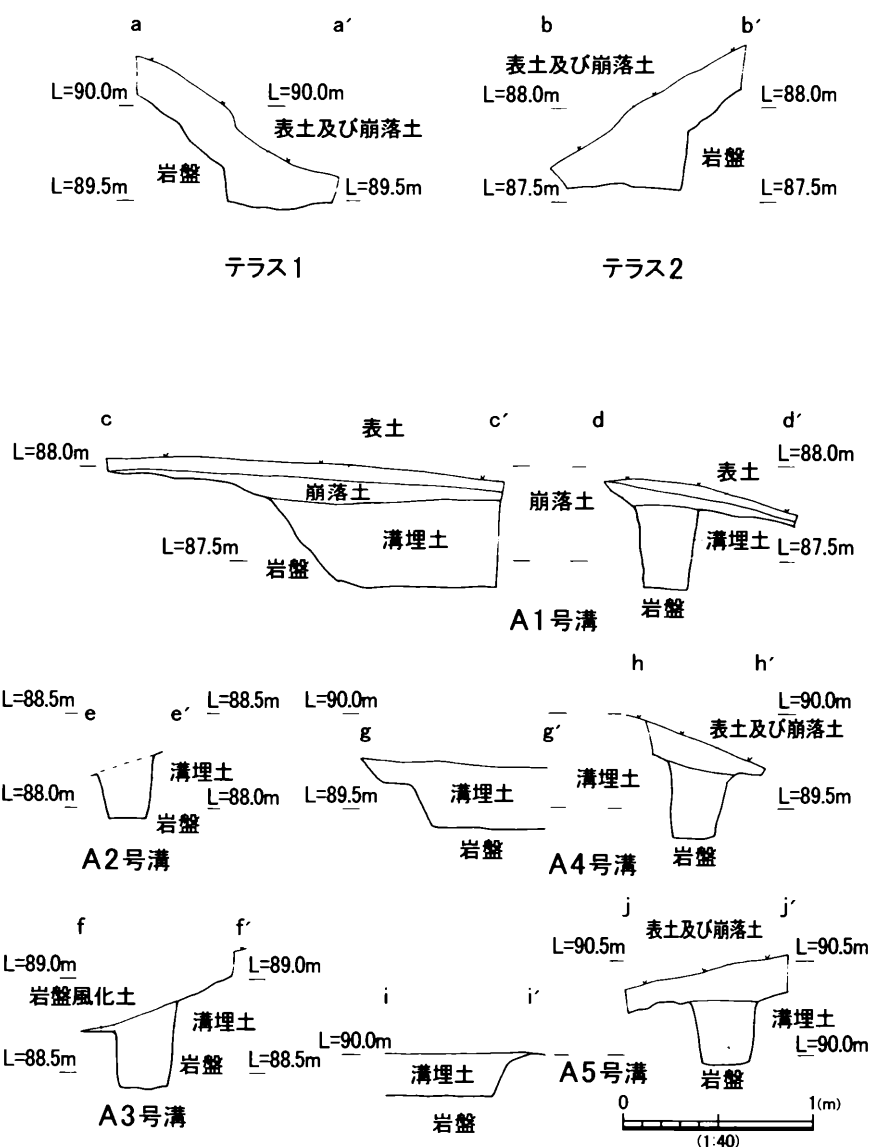


図41 テラス1・2及び溝A群断面図

溝の全長に注目すると、5.4～5.7mのA1・2号溝、8.6～9.8mのA3～5号溝の二者のまわりに分かれ、斜面の下方の2条が短く、上方の3条が長いことが分かる。平面形状については、「への字」状に一度屈曲するA1号溝以外は、いずれも複数の屈曲部を有して蛇行するが、特に尾根頂部に最も近いA5号溝は、北側端部付近が大きく如意状に折れ曲がっている。

溝底部の高低差は、溝の性格を考える際に重要な要素となるものと考えられる。A1号溝では、

北側の最深部より南端が5 cm高い程度で、溝全体で底部の高低差がほとんどない。また、A 2・3号溝では屈曲部を境とする区間毎に底部が10～20cm前後上下するものの、最終的に北端より南端が約5 cm低いだけであり、全体的な高低差はほとんどないに等しい。これに対し、A 4・5号溝では、底面が水平に続く部分もあるが、全体でみると北端から南端にかけて約30～35cm下降する。

埋土は、いずれもしまりが弱く粘性のほとんどない浅黄色砂礫土の単層で、まれに風化した岩盤ブロックが混じる。遺物は出土していない。

なお、ピンボールを用いたボーリング調査の限りでは、同尾根の北側斜面には溝状遺構は確認されなかった。

B群(B 1～7号溝) 突出部西斜面に3条(B 1～3号溝)、東斜面に3条(B 4～6号溝)、尾根頂部に1条(B 7号溝)が存在する。A群と同様にいずれの溝も地山(岩盤)を垂直的に削り込んで掘られ、底部は水平な平坦面になるように削平され、断面コの字状を呈する。また、B 2号溝の北端から1つ目の屈曲部の東側コーナー床面において一辺20～23cmを測る不整菱形の平面形を呈する窪み(底部は尖底状、深さ21cm)を検出した。さらに、これと同様の不整菱形の窪み(一辺20cm前後、底部は尖底状、深さ14cm)をB 3号溝の北端から1つ目の屈曲部における西側コーナーで検出した。両者は、平面的にみて、隣接する二つの溝の最北側の屈曲部にあって、B 3号溝の下側コーナー、B 2号溝の上側コーナーに穿たれており、あたかも対応する位置関係にあるかのように看取される。両者の中心間の距離は、約1.4mである。これらの状況から、現状では性格は不明であるが、溝に伴う何らかの人為的な窪みである可能性が考えられる。

溝幅は、概して上端幅約25～40cm、底部幅約15～30cmに収まる。ただし、B 2・3号溝で検出した菱形の窪みを有する屈曲部では、上端幅は50～55cm前後、底部幅は40cm前後を測る。溝の深さは、B 1～6号溝では斜面上側で約30～50cm前後、斜面下側で約20～40cm前後、B 7号溝では30～44cmに収まる。溝両側の端部形状は、一部隅丸方形状に削り込まれているものもあるが、大半が小口側から斜めに面を作るように削り込まれ、底面から端部が翼状に立ちあがる。

西側斜面と尾根頂部の溝(B 1～3号溝、B 7号溝)は、全長が8 mを超えるものばかりで、3～3.5mに収まる東斜面の3条(B 4～6号溝)とは対照的である。B 1～3号溝は、全て少なくとも3～4回屈曲する蛇行状の平面形を呈するが、B 4～6号溝は、短く真一文字状をなすもの(B 4・5号溝)と短く「への字」状をなすもの(B 6号溝)に分けられる。また、尾根頂部の全長15mを超えるB 7号溝は、非常に緩い「への字」状をなす。

溝底部の高低差についてみると、西斜面において長く蛇行する形状のB 1・2号溝では、概して屈曲部を境とする区間毎に水平を保つ部分と緩やかに傾斜する部分がみられ、上昇下降の結果溝全体としては、B 1号溝では、北端より南端が約15cm低く、B 2号溝では、北端より南端が約10cm高くなっている。また、B 3号溝では、北端から溝の半分付近まではほぼ水平に底面が続き、そこから南端へ向かって徐々に下降する。その高低差は約10cmである。したがって、B 1～3号溝を総じてみると、10～15cmの高低差はあるものの、これらの溝はいずれも8 m以上の長い全長を持つものであり、高低差はないに等しいと言える。これに対し、東斜面のB 4～6号溝では、部分的にも5 cm前後の高低差しかみとめられず、全体として北端から南端まではほぼ水平な底面を

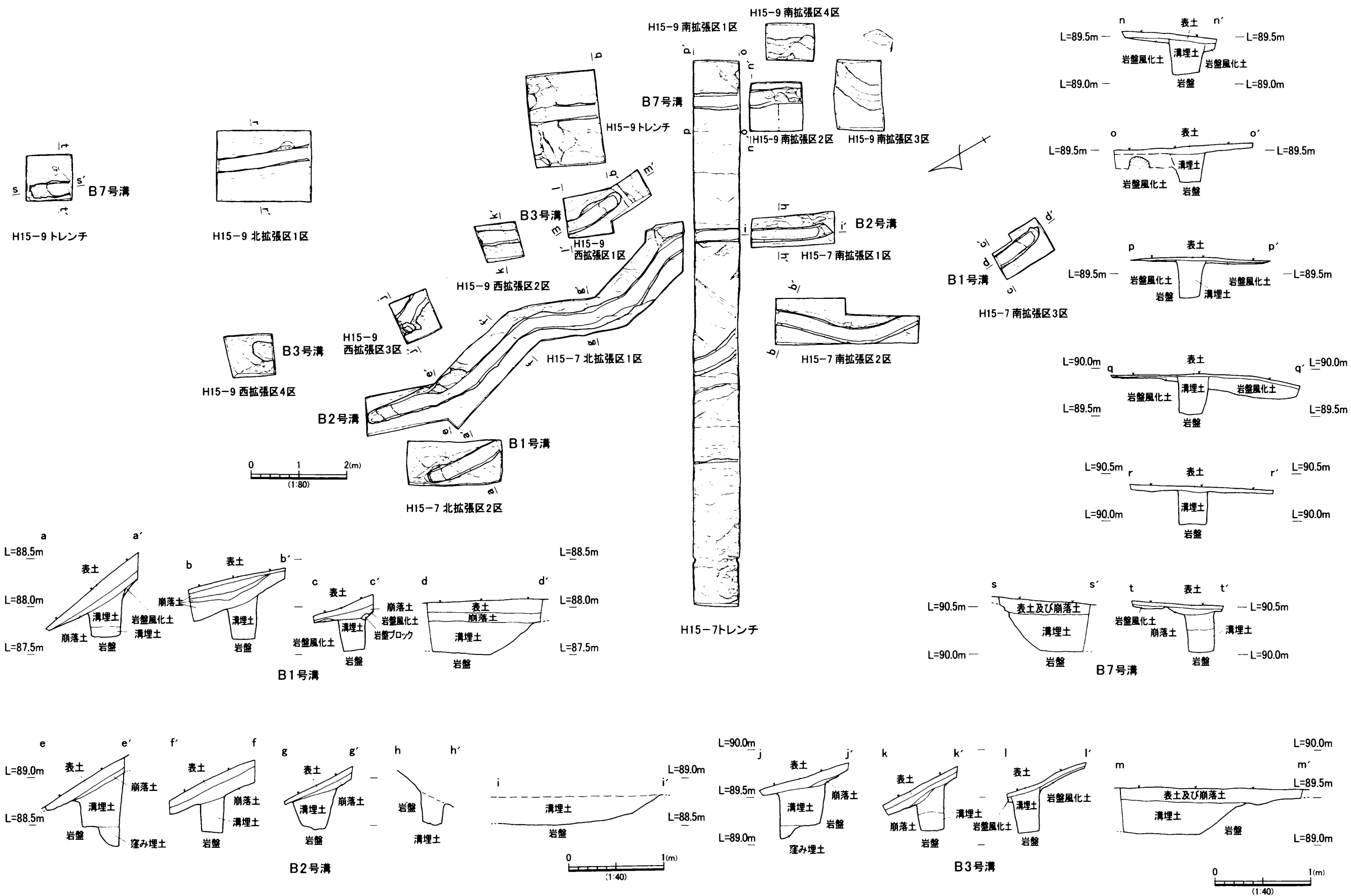


図43 南部突出部西側溝B群平面配置・断面図

保っている。また、尾根頂部に位置し最長の全長を誇るB 7号溝では、北側端部付近が最も高く、南へ向かって徐々に下ってゆき、北側端部付近と南側端部付近の高低差は、実に約90cmを測った。埋土は、大半がしまりの弱い砂礫土単層で構成される点で同様であるが、場所によって色調や粘性に若干の違いがみられる。遺物は、B 2号溝の北端から二番目の屈曲部より約80cm南方の溝内西側寄りで、溝埋土上層から須恵器片1点が出土しただけであった。ほぼ最上層からの出土であり、溝に直接伴うものかどうかは不明である。

このように、A・B群両者を整理してみると、溝の長さや平面形状の違いを除き、掘削方法・断面形状・端部形状・溝幅や深さなどに大きな差異はみとめられず、これらは同じ方法・技術・発想によって同時期に形成された一連の遺構であった可能性が高いと判断される。なお、溝底部の高低差をみると、A 1～3号溝・B 1～6号溝のようにほぼ高低差がないものと、A 4・5号溝・B 7号溝のように高低差が顕著なものがみられる。このように溝状遺構の大半が、傾斜地において確実に水を溜める機能を有する一方、水を溜める機能が不十分なものも存在していることから、これらの溝が岩盤を掘り抜いたままの状態で機能していた可能性は低い。このような場合でも、溝を土砂で埋めておくなどしておけば、水分が沁みこんで保水的な機能は果たしうる。溝の埋土が、概して砂礫土単層で構成されていることもこのような溝の使われ方を物語っている可能性が高い。

(2) 溝の分類と構成 これら12条の溝を主に全長により分類すれば、a：全長3～4mの短いもの(直線的なものと「へ」字状に屈曲するものを含むが、両者の差は元地形の屈曲の違いに起因すると推測される)、b：全長5～6mのもの(概して複数の屈曲を有する)、c：全長8mを超えるもの(概して複数の屈曲を有する)、d：全長15mを超えるもの(非常に緩やかな「へ」字の屈曲を有する)、の4タイプに分けることができる。この分類基準によると、A群は、尾根頂部から斜面下方へ向かって「c－c－c－b－b」という配列で溝が取り巻くのに対し、B群では尾根頂部にdタイプを掘削し、それを中心に西斜面下方へ向かって「c－c－c」という配列が、また東斜面下方へ向かって「a－a－a」という配列が取り付く構成になっている。このように斜面毎に上方の3条の溝が概して同じタイプのもので構成されていることから、基本的に溝3条が1セットとして掘られていると想定することもできる。つまり、南部全体を広い視野で捉えた時、南部頂上西方尾根の南斜面から突出部西側斜面にかけての2箇所cタイプ3条からなるセットを二つ掘削し、突出部南側斜面にaタイプ3条を掘削するのを基本構成とし、西方尾根では基本構成の下方にbタイプ2条が補完的に掘削されたという全体構成を想定することができる。

表 3 溝状遺構属性観察表

遺構名	位置	タイプ (※1)	全長 (m)	平面形	屈曲部	端部形状	断面形	底面	上端幅 (cm)	底部幅 (cm)	深さ・斜 面上側 (cm)	深さ・斜 面下側 (cm)	底 部 高 低 差	溝 埋 土	備 考
A1号溝	A群	b	5.4	への字	(1) (※2)	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	27~40	23~26	37~50	17~42	北側最深部<南端。高低差最低5cm	浅黄色土	遺物なし
A2号溝	A群	b	5.7	蛇行	2	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	27~34	17~24	31~43	21~38	北端→最初の折れ(15cm上昇)→南端(20cm下降)	浅黄色土	遺物なし
A3号溝	A群	c	(9.6)	蛇行	3~4	南:翼状 北:隅丸	コの字	平ら	28~37	20~28	36~50	23~39	北端→最初の折れ(9cm下降)→第2・第3の折れ(最低12cm上昇)→南端(7cm下降)	浅黄色土	遺物なし
A4号溝	A群	c	8.6	蛇行	2~3	南:不明 北:二段	コの字	平ら	26~34	22~30	30~50	14~38	北端→南端(部分的に水平、総じて34cm下降)	浅黄色土	遺物なし。北側端部、翼状に近いが二段掘り
A5号溝	A群	c	9.8	如意状	3~4	南:隅丸 北:翼状	コの字	平ら	25~38	20~28	31~50	22~39	北端→最初の折れ(ほぼ水平)→南端まで2.5m地点(30cm下降)→南端(水平)	浅黄色土	遺物なし
B1号溝	B群・西 斜面	c	(14.4)	蛇行	3~4	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	25~36	22~30	29~48	20~38	北端→7トレンチ北端(水平)→同トレンチ南端(5cm下降)→南拡張区2区中央の折れ(4cm上昇)→南端部付近(16cm下降)	浅黄色土(南側):にぶい黄褐色土(北側)	遺物なし
B2号溝	B群・西 斜面	c	11.1	蛇行	4(6)	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	26~48 コーナー48	18~38 コーナー38	32~52	16~36	北端→2つ目の大屈曲(15cm下降)→3つ目の大屈曲(10cm上昇)→4つ目の大屈曲(4cm下降)→南端(20cm上昇)	黄褐色/にぶい黄褐色	上層から土器片。方形コーナー・菱形凹み有り
B3号溝	B群・西 斜面	c	8.7	蛇行	3	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	25~56 コーナー56	20~40 コーナー40	39~45	19~39	北端→溝中央部(ほぼ水平)→南端(10cm下降)	淡黄色・浅黄色砂礫土	遺物なし。方形コーナー・菱形凹み有り
B4号溝	B群・東 斜面	a	3.0	真一文字	0	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	28~36	21~26	41~49	10~34	北端→中央部(水平)→中央部から80cm南方地点(6cm下降)→南端(3cm上昇)	にぶい黄色砂礫土	遺物なし。埋土:北側端部付近では、にぶい黄褐色土(上層)、にぶい黄褐色/にぶい黄褐色土(下層)
B5号溝	B群・東 斜面	a	3.4	真一文字	0	南:隅丸 北:翼状	コの字	平ら	31~36	16~22	34~56	19~36	北端→南端(全体的にほとんど水平)	にぶい黄色砂礫土	遺物なし
B6号溝	B群・東 斜面	a	3.4	への字	(1)	南:翼状 北:翼状	コの字	平ら	24~29	18	30~42	19~32	北端→南端(6cm下降)	にぶい黄色砂礫土	遺物なし
B7号溝	B群・尾 根頂部	d	15.5	緩いへの字	(1)	南:不明 北:隅丸	コの字	平ら	26~38	21~32	30~44	30~44	北→南端付近(90cm下降)	にぶい黄色砂礫土	遺物なし

※1:溝タイプ
a:全長3~4m(直線的なもの、への字状に屈曲するものがある)
b:全長3~4m(直線的なもの、への字状に屈曲するものがある)
c:全長5~6m(1~数個の屈曲を有する)
d:全長15mを超える(直線的ないし緩いへの字に屈曲する)
※2:()内は推定値を指す

(3)溝の性格と時期・掘削主体 では、これら溝の性格・形成時期・掘削主体、換言すれば「誰がいつ何の為にこれを掘ったか」の問題について若干考えておきたい。その前提として、これらの溝を造る工事が並大抵のものではないということを踏まえておく必要がある。すなわち、岩盤を掘削してこれら12条の溝を造るだけでもかなりの労力を要したことは明らかで、とうてい一個人で行えるような工事ではなく、かつ側壁・小口部・底面などが相当丁寧に整形されている点から相応の技術と道具を要したことが窺われる。つまり、岩盤の加工には鉄器が用いられたことは間違いなく、また法量や形状の面でかなり高い規格性が保たれていることは、この工事を行なった集団の高い技術水準を裏付けるものと考えられる。

この3ヵ年の調査でこのような溝が検出されたのは、上記A・B群のみであったが、実は高規格道路建設に伴う愛媛県埋蔵文化財調査センター(以下、県埋文センター)による97年度の調査においても同様の溝が検出されていることが分かった。その場所は、永納山山頂から東へ大きく突出した尾根先端部上であり、河原津海岸北側を眼下に見下ろしているが、現在は高規格道路によって、その大半が削りとられている。これを便宜的にC群と呼んでおくが、県埋文センターが記録した写真と遺構実測図を拝見したところ、これがA・B群と全く同種の溝状遺構であるとの確証を得た。このC群は、古墳時代初頭前後の土壌墓群を確実に切っていることから、少なくとも溝の時期の上限を古墳時代初頭頃に置くことが可能である。ちなみにA・B群からは、埋土上位から須恵器片1点が出土したのみであり、確実にこれら遺構の時期を示すものはない。また、A・B群の埋土の大半は、砂礫土単層であり、土層観察からは比較的短期間に溝が埋没したような状況が窺われた。

いずれにせよ、遺構の所属する時期については、古墳時代初頭から現代の間で既得の様々な情報を元に考えざるを得ない。A・B群を検出した時点では、これら溝群が古代山城と同時期に造られたとするか、戦後の開拓団によって造られたとするかの二つの可能性を考えた。しかし、前者については、他の古代山城に同様の溝が検出された例を聞かないこと、A・B群は外郭線の内側で検出されたのに対し、C群は外郭線外部で検出されていること、さらに現状ではこの広大な遺跡内ではほんの一部で形成されているにすぎないとみられること、溝埋土がほぼ単層で短期間に埋没した状況がみとめられることなどを総合的に考慮すると、古代山城に伴う防御的な施設として同時期にこうした溝が掘られた可能性は低いと判断された。一方、後者については、当時の開拓団のメンバーから複数の聴き取り調査を行った結果、終戦直後から現在に至るまでそのような溝を掘削したという事実はないという結論に至った。したがって、溝の掘削時期は、古墳時代初頭から戦前のある時期ということになる。そこで、時期と性格・掘削主体を考え合わせ、現時点では次の二つの案を提示したい。

まず、第1案は、古墳時代初頭から中近世にかけてのある時期に掘削された防御用施設、即ち柵・板塀・置き盾などを設置するための溝などとするものである。想定される溝の掘削主体は、国や国府・郡衙などの公的機関か当時の在地の権力者である。ただし、B・C群で見られるような尾根頂部に掘られた溝は防御用のものとは想定しづらいが、例えばB7号溝では、北端から南端の底面差が90cmもあり、排水溝的な機能を想定する余地もある。なお、時期を絞り込むに際しては、古墳時代にこのような溝状の防御的施設が築きえたのかどうか疑問があること、少なくとも

南北朝期には西隣の山塊に世田山城が存在し、永納山が山城として機能していなかった可能性が高いこと、またそれ以降～近世にかけても永納山が城として利用された例が少なくとも文献的にはみとめられないこと、溝の形状・掘り方に着目すると、古代の官衙関連遺構に見られるいわゆる「布掘り」に類似していること等を念頭に考慮する必要があるだろう。また、既述のように様々な角度からみて、これが古代山城に伴う溝である可能性は低いと判断したが、完全に排除できるわけではない。なお、この案に立てば、土坑状遺構・テラス状遺構には、防御的施設に関連する水溜めや通路などの機能を想定することが可能である。

第2案は、明治～戦前の時期に構築された農業・林業目的の溝とする案である。当地は勾配のきつい斜面地であり、しかも全面的に岩盤が広がっていて、表土・堆積土自体が薄く、常に降雨による土の流出の恐れを抱え、農業に適した高い地力を持たない土地である。一般に地力の高低に大きく関係する要素は保水力・保肥力と言われるが、これらを高める目的で溝が掘削された可能性が考えられる。また、果樹栽培の技術では、よく等高線に沿って誘水溝を数条並行させ、各端部を縦溝(排水溝)でつなぐ方法が取られるが、A・B群には縦溝が見られないこと、各溝の底面の高さが水平のものや南北で高低差があるものなどまちまちである点から見て、その種の排水用施設ではないだろう。したがって、主に保水や土壌改良を目的とした溝の可能性が最も高いと考える。溝の端部の大半で確認された「翼状」の小口形態は、溝の両小口側からより多く雨水を集めたいという心情の現れと見えなくもない。この案に立った場合、土坑状遺構・テラス状遺構も溝と一体で農業・林業目的のために掘削されたものと考えて矛盾はない。医王山をはじめ永納山周辺には現在でも国有林が見られ、当地も戦後の開拓団入植以前は、公的な管理が為されていた地であつたらしく、遺跡南西部の山道上には明治期に国が黒松を大規模に植えたことを示す石碑も残っている。既に述べたようにこれら遺構の工事は一個人が簡単に行なえるようなものではないのであり、明治～戦前のある時期に公的機関によって行なわれた工事であつた可能性が高いと考える。

以上のように、南部検出の溝状遺構・土坑状遺構・テラス状平坦面の時期・性格等について若干の考察を試みたが、現状では可能性を指摘するに留まった。今後、南部周辺や他の地区での調査によってさらにこれらを特定しうる情報が得られることを期待したい。(半沢)

H 15 - 10 トレンチ (図 44)

H 15 - 10 トレンチは、南部頂上から東へ向かう尾根の鞍部に位置する。この鞍部を挟んだ城内・外の外郭構造を明らかにする目的で、尾根に直交するようにトレンチを設定した。トレンチは南北に長辺をとる $1 \times 19\text{m}$ の規模であり、尾根を挟んで南・北 2 区に分け、調査を行った。

南区では厚く堆積する腐葉土・崩落土を除去すると、その下に岩盤の風化した地山面が検出され、列石や土塁は確認されなかった。

また地山には奥行き 80cm 程度のテラス状の平坦面を 1 ヲ所確認したが、これは古代山城に伴うものか、後世のものであるのか不明である。

一方、北区は腐葉土・崩落土を除去すると固くしまった明黄褐色の層が現れた。しかし、表面観察では地の土であるのか土塁であるのかの判断が困難であったため、一部を断割ることとした。その結果、土塁のような層の堆積は確認できず、同一層が続くことがわかり、この土は地山であるとの理解に至った。

本トレンチでは尾根を基準とすると、城外・城内ともに人工的な外郭構造は確認されなかった。しかし、この地点を挟んだ両頂上部、すなわち南部頂上と南東部頂上の東斜面には列石が確認されており、永納山城の外郭線がこのトレンチ周辺を通ることは疑いないため、今後詳細な調査が必要となる。

(渡邊)

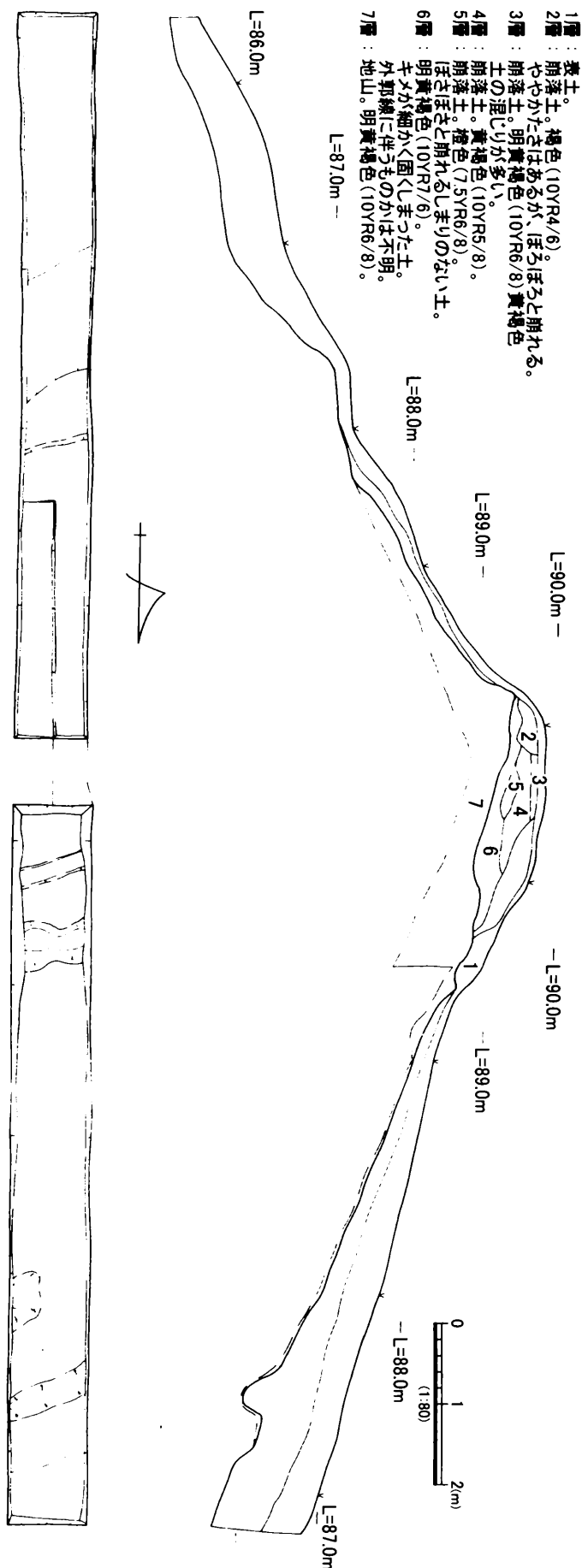


図 44 H 15-10 トレンチ平面・断面図

第4節 南東部の調査

(1)概 要

南東部はすぐ東に燧灘を望む地区であり、そのふもとは現在陸地となつてはいるがいまだに入江状を呈しており、以前は海であったという様相を顕著に残す。当地区の地形を南側からみていくと、南東部頂上から尾根が北へ向け下っていき、その間緩やかなアップダウンを繰り返し2ヵ所の鞍部を形成した後、再び東部頂上に向かい高まっていく。なお、南東部は調査範囲が外郭線の距離で300mと広大であったため、調査地区をA～E地区に分け表記する。調査当初、この地区は鞍部付近のE地点でわずかに列石を確認していたものの、全体に岩肌が露出しているため、岩盤利用部分が多いのではないかと予測していた。しかしながら調査開始から継続した草刈・清掃作業により、断片的にはあるが尾根の傾斜に沿いながら並べられる列石を確認することができた。まず平成14年度の草刈り時に崩落の危険のある列石(D地区)を確認し、土嚢で応急的な保護を行った。続く平成15年度調査では本格的に調査を開始し、新たに数ヵ所で列石を検出した。そこで、南東部ではその断片的な列石を線として追うことを主な目的として、列石の表面検出作業を中心に調査を実施した。その結果、A地区で20m、B地区で17.6m、その間一部列石の途切れる部分があるものの計49mの長さで列石がつながることが明らかになった。また、B地区の北側の一つ目の鞍部に向かう位置で再び列石を確認した(C地区)。しかし、このA・B両区間からC地区・D地区を経た後E地区へ至るまでの間の外郭線が不明確であったため、土塁の有無等を含め外郭線構造を明らかにすることを目的にH15-12トレンチを設定した。その結果、列石とともに残存状況の良好な土塁及び列石前面の柱穴を検出した。特に明確な柱穴の検出は、当遺跡では初めての事例であり、重要な資料となった。

さらに調査ではE地区へ向け周辺の列石確認を実施した。加えてE地区の北側に関しては、岩盤の剥き出しとなった東部頂上につながる場所であることから、外郭線の確認を行うためH15-13トレンチを設定した。また、E地区は鞍部に位置すること、列石が他の地点よりも大型であり中央が途切れる点から門の可能性も考えられる。

以下、調査の順にA・B・C地区、D地区(H15-12トレンチ)、E地区(H15-13トレンチ)と説明を行う。(渡邊)

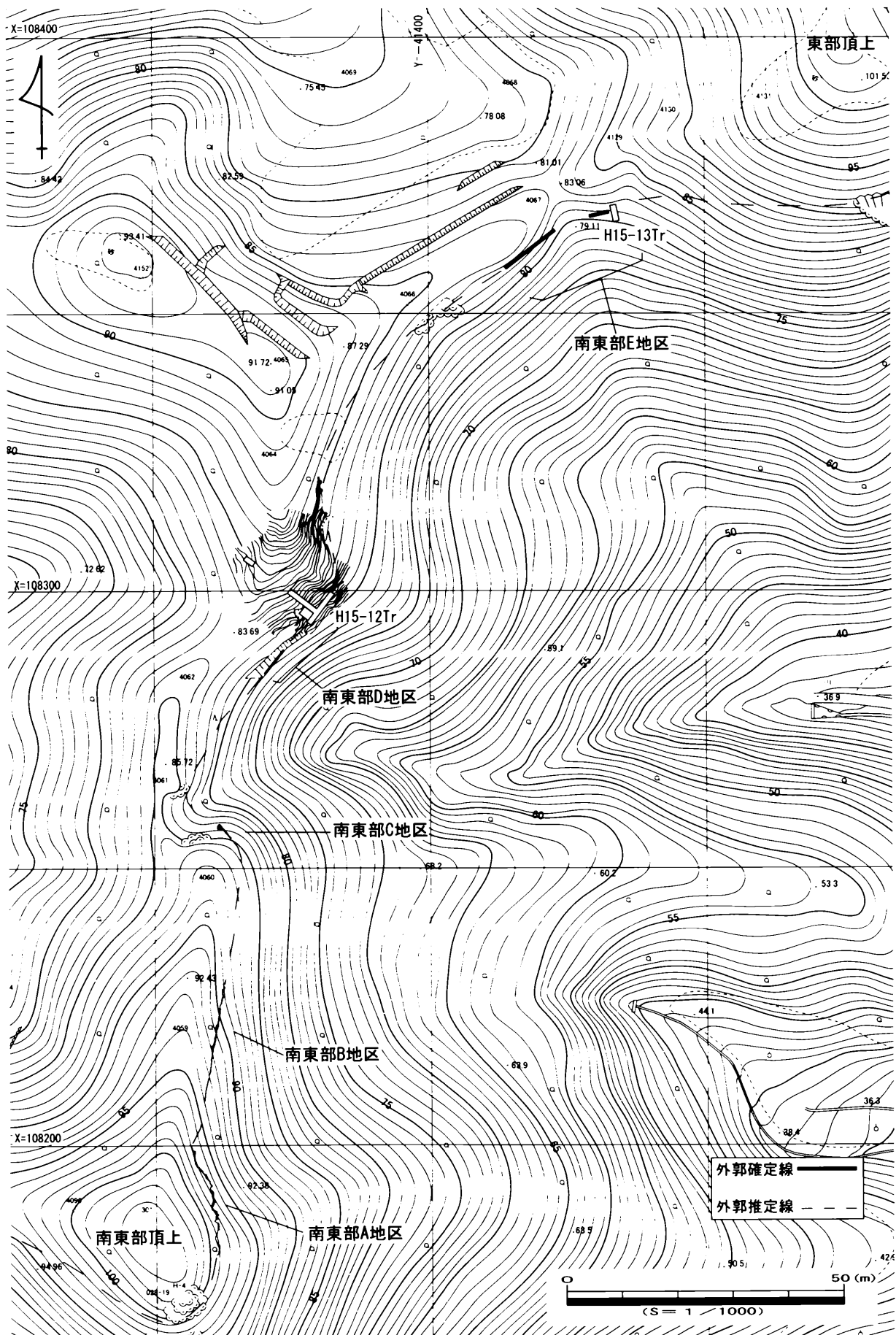


図 45 南東部 地形図及びトレンチ配置図

(2) A・B・C地区(図46・47)

当区間は、標高103mの南東部頂上から尾根が北に向かってやや急傾斜に下っていく約80mの区間である。南東部頂上は腐葉土の堆積が薄く、南から東にかけての斜面は調査前から岩盤の露出が目立っていた。これに対し、頂上から北へ向かう尾根斜面に関しては腐葉土の堆積により表面観察では列石の有無や岩盤の様相を判断できない状況であった。

しかし、当区間においても精査により列石を確認することができたため、その詳細を以下に述べていく。

A地区 南東部頂上の東斜面から尾根の傾斜に沿うように、約20mの長さで列石を検出した。列石の南端付近は頂上から約4m下った斜面に水平に並び、南の岩盤部分へ向かう。ここから北に向けて列石は、尾根の傾斜に伴い一旦急角度で下り、その後は緩やかに連なっていく。そしてA地点北端では、再び岩盤と接続するかたちで列石が追えなくなる。

現状ではこれらの列石は外側に向け膨らんでおり、一見折れ構造ともとれる部分もあるが、その大半は急傾斜のため前面にずれ落ちているものと考えられる。この点は、A地区の列石の大半が前方へ向けて傾斜していることから判断できる。

B地区 A地区北端の列石から約13m北で再び列石を確認できた。そこで、これを基準として北へ向けて列石を追うと、17mの区間ではほぼ直線的に並ぶ列石が検出された。この地点では土塁確認・断割り調査は実施しておらず、列石の背面・上部構造は不明であるが、列石は尾根に沿って直線的に並んでおり、A地区のようなずれが見られない点から元位置を保っていると考えられる。また、この列石北端は再び岩盤へとつながる。

C地区 C地区はB地区から約26m北に進んだ場所で、尾根が小さな鞍部となる場所の南側手前に位置する。列石を確認できたのは3.2mの範囲であり、これより北では列石が途切れる。

この列石が途切れる部分は、尾根の鞍部と一致することや鞍部の両側に切り立った岩盤が見られることから、門が築かれていた可能性もあるが、この周辺は数年前に地崩れが発生しており、それにより列石が崩れ落ちた可能性も考えうる。今後、詳細な検証が必要となる場所である。

A～C地区まとめ 列石は、A地区で若干のずれがあるものの、ほぼ尾根筋の傾斜に沿うように尾根からわずかに下った斜面に並べられる。これらの列石の大きさは、A地区北端付近でほぼ水平に置かれるものが横幅136cmと最大であるが、そこから北へ向かい尾根に沿いながら斜面に並べられる列石は横幅30～40cmのものが主体となる。そして、正面から見た列石の傾斜は10～30度である。

また、これらの区間ではトレンチ調査を行わなかったため、列石背後の土塁の有無は確認していない。

(渡邊)

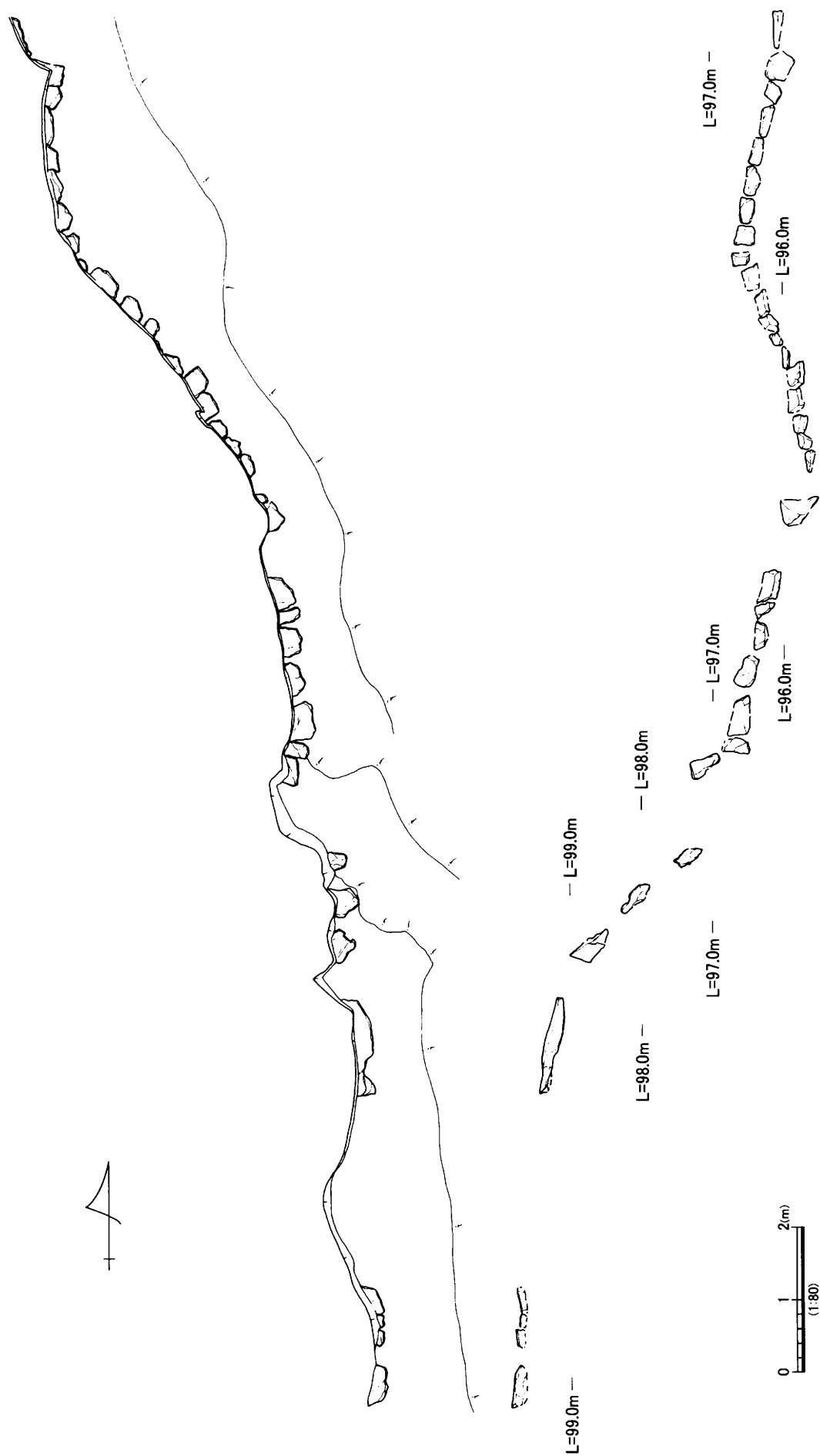


图 46 南東部A地区 列石平面・立面図

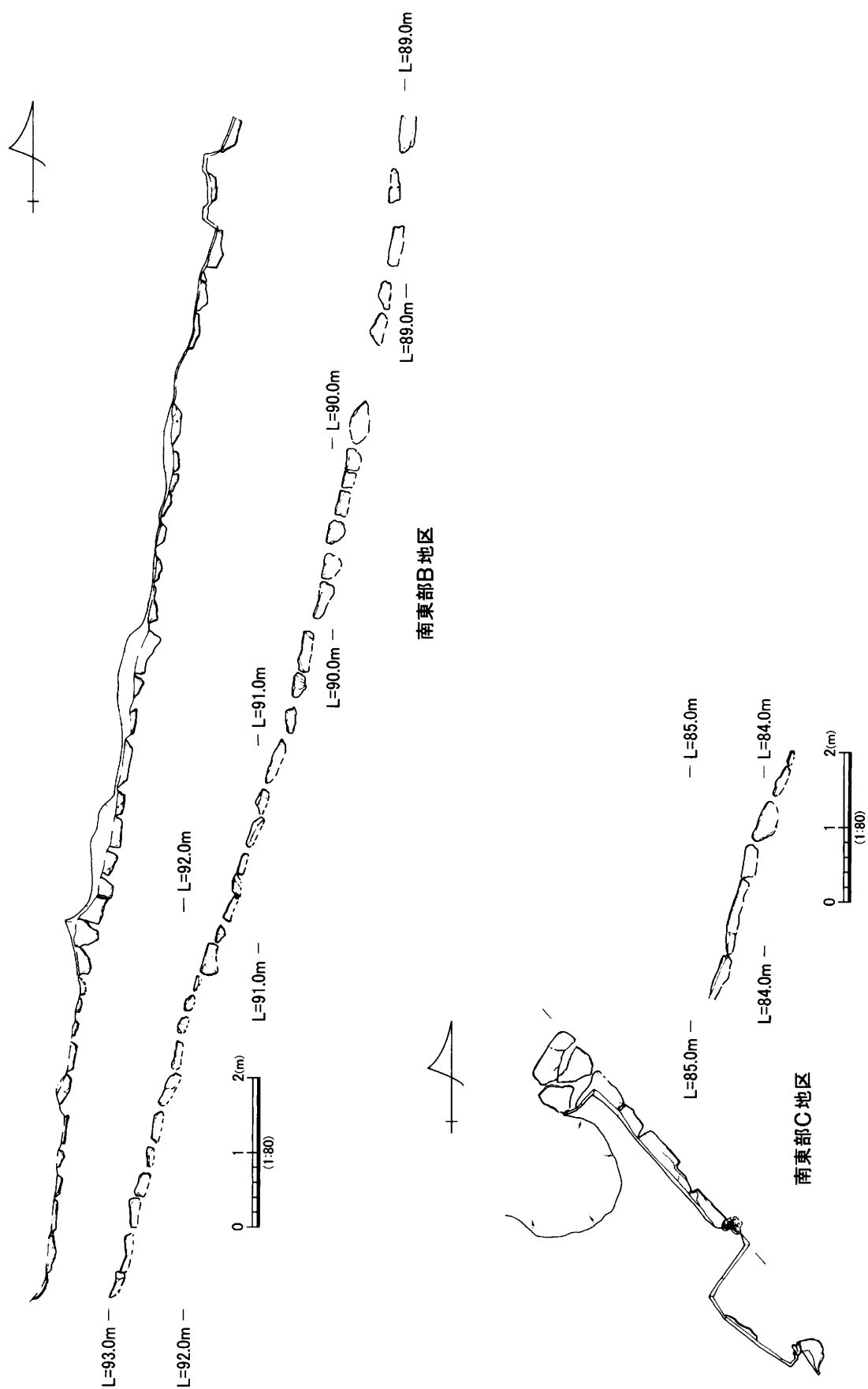


図 47 南東部 B・C 地区 列石平面・立面図

(3) D地区

D地区はC地区の鞍部から尾根が北東へ向け再び上がっていく場所であり、概要で述べたように、崩落の危険性がある列石の応急保護を行った地区である。

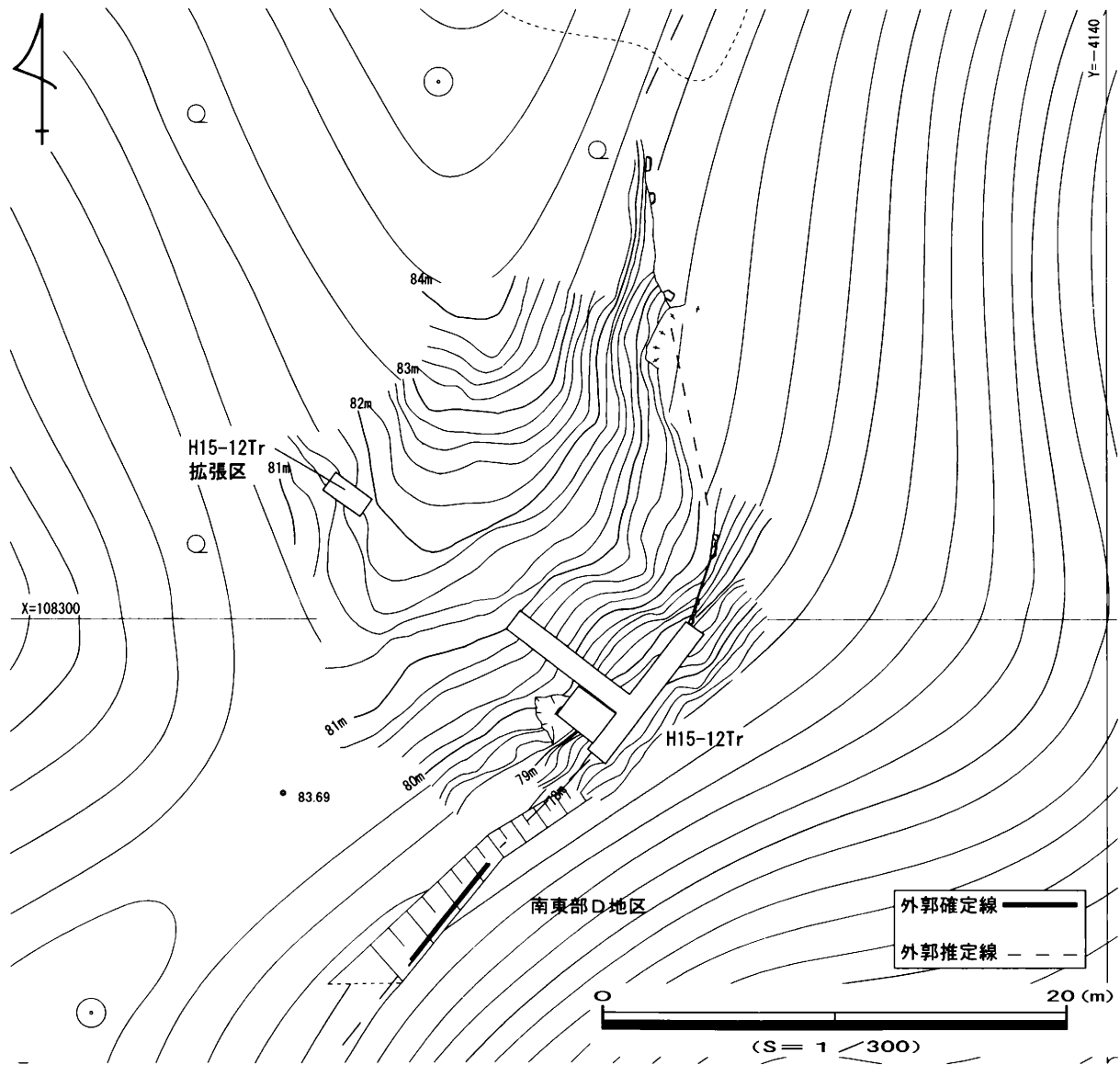


図 48 南東部 H 15-12 トレンチ周辺地形図

H 15－12 トレンチ(図 49・50)

保護を行った列石の北側周辺を表面精査中にさらに列石の一部を確認したため、ここを起点として外郭線の構造を明らかにすることを目的にH 15－12トレンチを設定した。トレンチは当初尾根に直行するように1×6 mに設定し、下1 mは南に2 m、北に3 m広げた逆T字形としたが、調査を進めるに従い、遺構の残存状況を確認するために一部を拡張した。調査の結果、列石とその上に積み上げられた土塁を検出し、さらに列石前面には3基の柱穴を検出した。また、土塁に関してはトレンチを南側に1.5m拡張し、土塁の残存状況が良好であることを確認した上で一部を断ち割り、土塁構造の把握を目指した。

さらに、尾根をはさみ城内側での土塁確認のためにトレンチ西拡張区を1×2 mで設定し調査を行ったが、ここでは腐葉土直下に地山の土が現れ土塁は検出されなかった。

列 石 列石は北側の拡張部を含めると7 m、さらに調査区外へも断片的ながら4 m続き、計11mの長さで北へ向け尾根筋の傾斜に沿って緩やかに上がっていく状況を確認した。これらの列石は、すべて花崗岩の自然石もしくは粗割石が用いられる。列石幅は最長のもので72cmを測るが、30～40cm前後のものが主体を占める。また断割り部の列石をみると、その法量は幅30cm超、奥行き78cm、厚さ12cmを測る。

これらの列石は地山をほぼ水平にカットし、さらに前面には厚さ15cm程度の盛土を行うことによりテラスを構築した上に置かれる。盛土は明褐色粘質土でキメの細かな土が用いられているが、土塁のようにつき固めたような硬さはない。テラスの奥行きは、前面が崩れているため不明である。また、トレンチ北部では列石のすぐ下に地山を検出したことから、これらの盛土は列石を並べる上で地山との傾斜を揃えるためになされたと理解できる。

柱 穴 列石前面の柱穴は、まずトレンチ中央でテラス盛土上面から地山面まで掘り込むものを検出した(P 1)。さらにトレンチ全体を精査していくと南隅でも柱穴を検出した(P 2)。これらP 1・P 2の中心部間の間隔が3.0mであったことから、P 1の北側約3 mの位置に柱穴の存在を想定しトレンチを拡張したところ、3個目の柱穴を確認した(P 3)。なお、P 3とP 1との中心部間の距離は3.2mを測る。

それぞれの柱穴は、以下のような特徴を示す。

P 1 現状で短径43cm、長径52cmを測り、深さは50cmである。埋土は層が縦方向に2層みられ、それぞれ掘方埋土(V層)と柱痕部の埋土(IV層)と考えられる。共に粘性をもつが、掘方埋土が粘性も強くしまりがあるのに対し、柱痕部埋土はしまりがなくボサボサとした土である。なお、柱痕径は29cmを測る。

P 2 現状で径40cmの円形を呈し、深さは25cmを測る。埋土は褐色の弱い粘質土で、土のしまりはない。他の2つの柱穴に比べ、やや小さな柱穴である。

P 3 長径60cm、短径40cmの楕円形を呈し、深さは現状で31cmを測る。埋土は黄褐色土で若干の炭、小礫を含む。

土 塁 土塁は列石上面から積まれており、現状では列石の前面は被覆されていない。残存高は1.9mを測り、列石前面から背面へ向けて4.6mのところで土塁は地山(岩盤)につながり収束する。

また、尾根中心部と列石前面との水平距離は約15mである。土塁の傾斜は、断割り部では20～

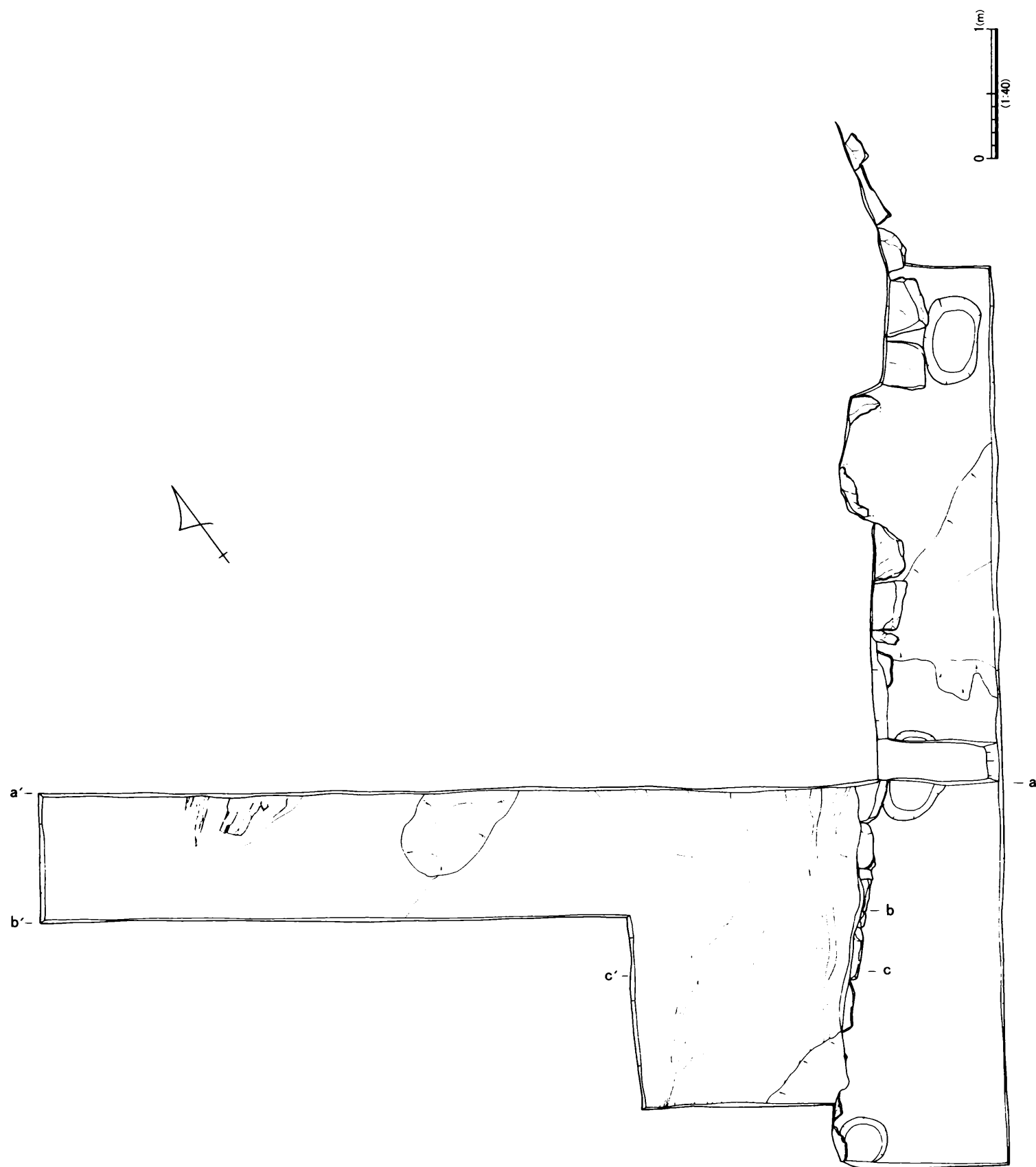
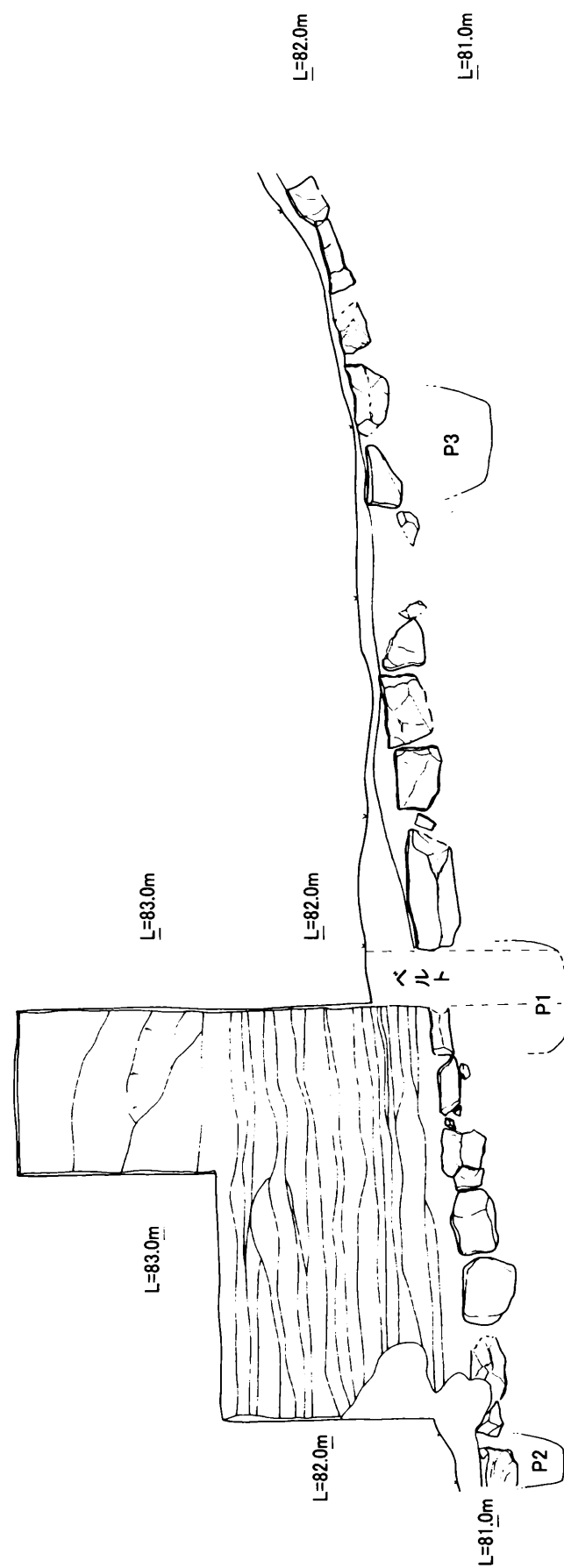


図49 H15-12トレンチ平面・立面図

40度と緩やかになっているが、残存状況の良好な場所では90度に近い角度で残っており、本来急傾斜であったと考えられる。この土塁は内托土塁であり、版築によって積み上げられるが、基底部となる地山面には土塁を安定させるためのテラス面を2段確認できる。

版築土を見ると、列石上面から約50～60cmまで(17層～23層)は、非常に固く叩きしめられた砂質土と粘質土が厚さ5～10cm前後と薄く水平に近い角度で積み重ねられる。しかし、これより上層の土は固くしめるものの下層に比べキメはやや粗く、厚さも10～20cmと厚い。さらに上層では層の傾斜も地山の傾斜に沿うように斜めに上っていき、下層と違いがみられる。なお、正面からみた土塁の各層はほぼ水平に積まれている。(渡邊)

(4) E地区

E地区は、この鞍部周辺の列石に比較的大きなものが目立つこと、また鞍部には列石の途切れるところもあることから門の推定地ともなった場所である。

H 15-13 トレンチ(図51)

この鞍部から尾根が東部頂上に向け急傾斜で高まり始めるその上がり際には、列石が崩落したような状況で散在していたため、列石の残存状況の確認を目的としてトレンチを設定した。トレンチは南北1×東西2mで設定したが、状況に合わせて東に拡張したため結果的には1×2.8mという規模となった。表土の下には崩落土が厚く堆積しており、それを取り除くと周辺の状況同様に、列石が崩れ落ちた状態で検出された。

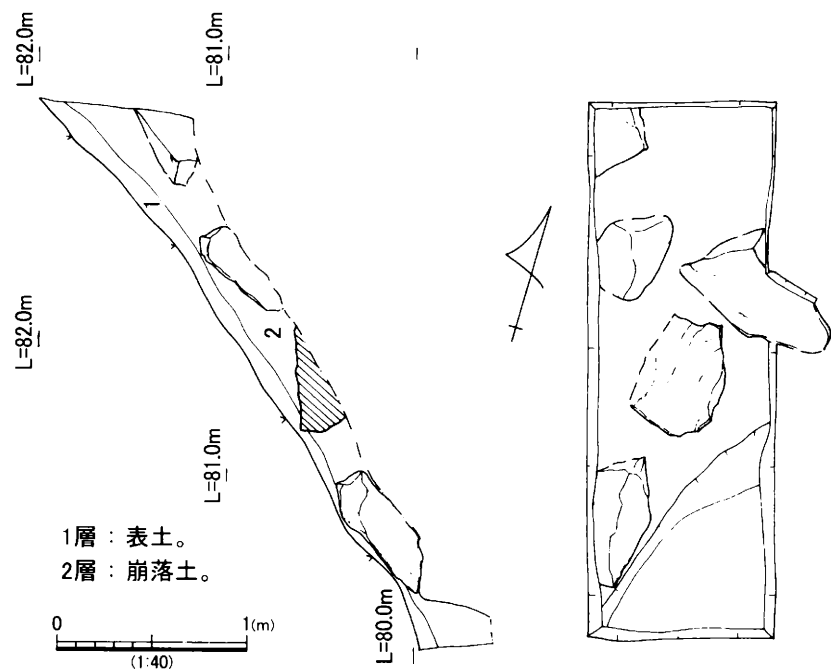


図51 H 15-13 トレンチ平面・断面図

列石・土塁 崩落した状態で5個の石を検出した。その大きさは、一番大きな石で長さ74×70cm・厚さ23cmであり、どの面を正面としても大型の石材を使用していることがわかる。逆に小型のものでは長さ50×30cm程度であり、この周辺の列石と比較するとやや小型である。このような状況から見ると、トレンチ内で検出した石には列石と裏込め状石とが混在していると考えられる。なお、崩落の影響のためか、土塁の痕跡は確認されなかった。(渡邊)

第5節 東部の調査

(1)概 要

永納山山頂部から南へ向け下っていく東部地区は地形の起伏が激しく、東部頂上までの区間には各所に露出した岩盤が切り立っており、まさに天然の要害の観を呈す。

調査は外郭線の確認が第一の目的であったため、岩盤の合間をぬいながらの列石表面検出が中心であった。結果として、山頂東斜面から南に向かい約110mの区間で外郭線を確認したが、その状況は岩盤を要所に取り込みながら、その間をつなぐように列石を巡らせているというものであった。また、これらの列石の一部にはやや前のめりとなり、若干のずれがみられる場所もあったが、極端にずれ落ちたものはなく、ほぼ元位置を保っているものと思われた。そこでまず、この外郭線の2ヵ所にトレンチを設定し、外郭構造の把握を目指した。

次にこれらの列石は、その南北両端で再び崖状に切り立つ岩盤へつながるが、南側ではこの岩盤を越えると、岩盤間の鞍部を埋めるように約5mの幅で石積みが築かれていた。さらにこの石積みを南へ進んだ東部頂上の東斜面でも列石を検出したため、当地区においても1ヵ所トレンチを設定し、外郭構造の把握を行った。ここから南側斜面に向けては、岩肌が露出しており自然地形を外郭線として利用していたと考えられる。

東部において検出したこれらの列石及び石積みを説明の都台上、北から東部A・B・C地区とし報告を行う。

(2)東部A地区

永納山山頂から南に下った東部A地区は、南東部地区同様に草木の生い茂った状況であり、現状での列石確認が困難であったが、草刈りと清掃を進めるに従い、次第に外郭線の姿が明らかとなっていく。検出された列石は、先述のように各所に露出する岩盤と岩盤の間をつなぐように短区間で途切れながら、尾根斜面を巡っていた。これらの列石石材は花崗岩の自然石・粗割石であり、その法量は、横幅40～60cm前後のものが多い。また、尾根斜面が急傾斜であるためか、若干前のめりになっている列石も見られたが、ほぼ一列に並んでいる状況をみると元位置から大きくずれ落ちたものは少ないと考えられる。

当地点では、外郭線の構造を確認するため、2ヵ所のトレンチを設定した。 (渡邊)

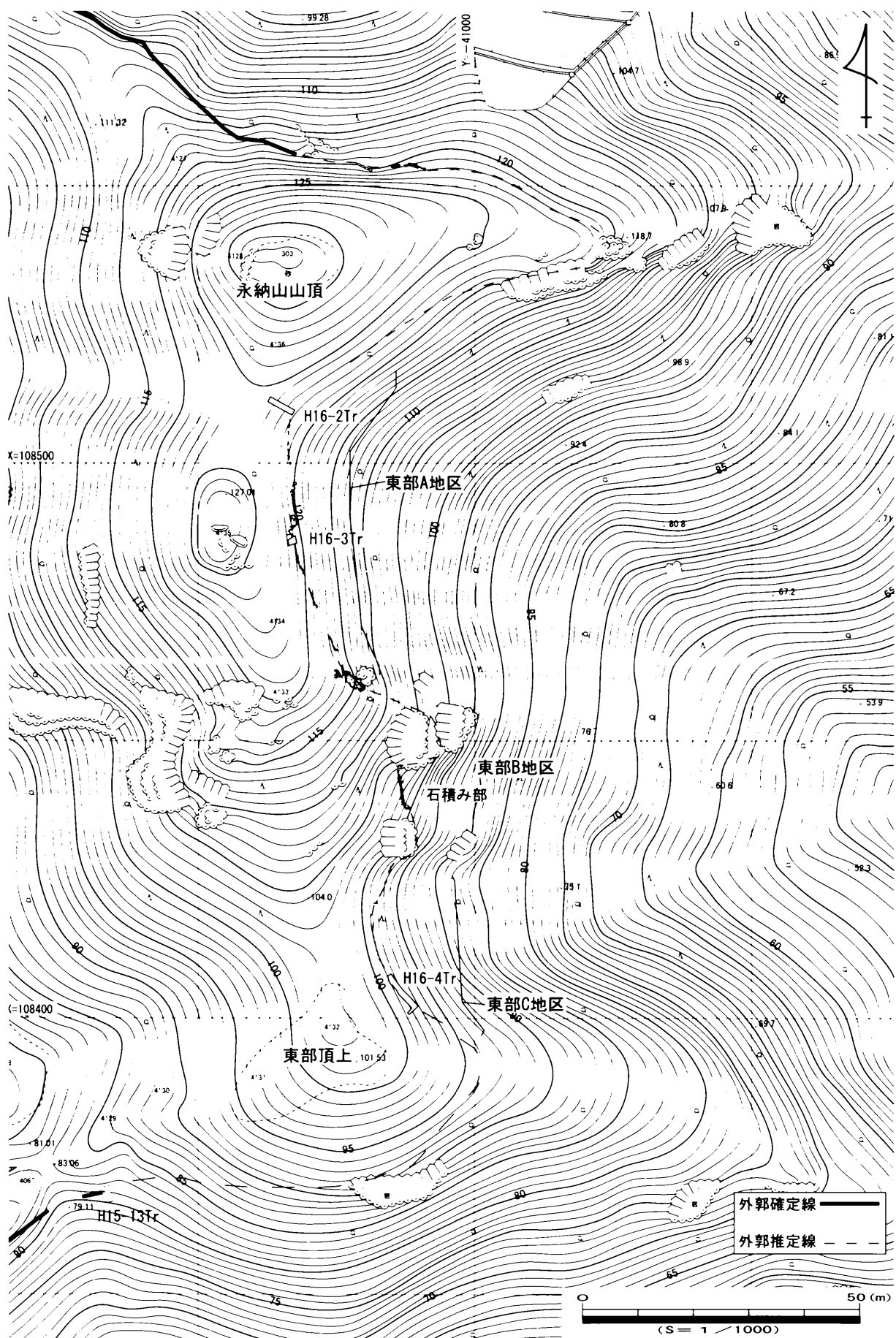
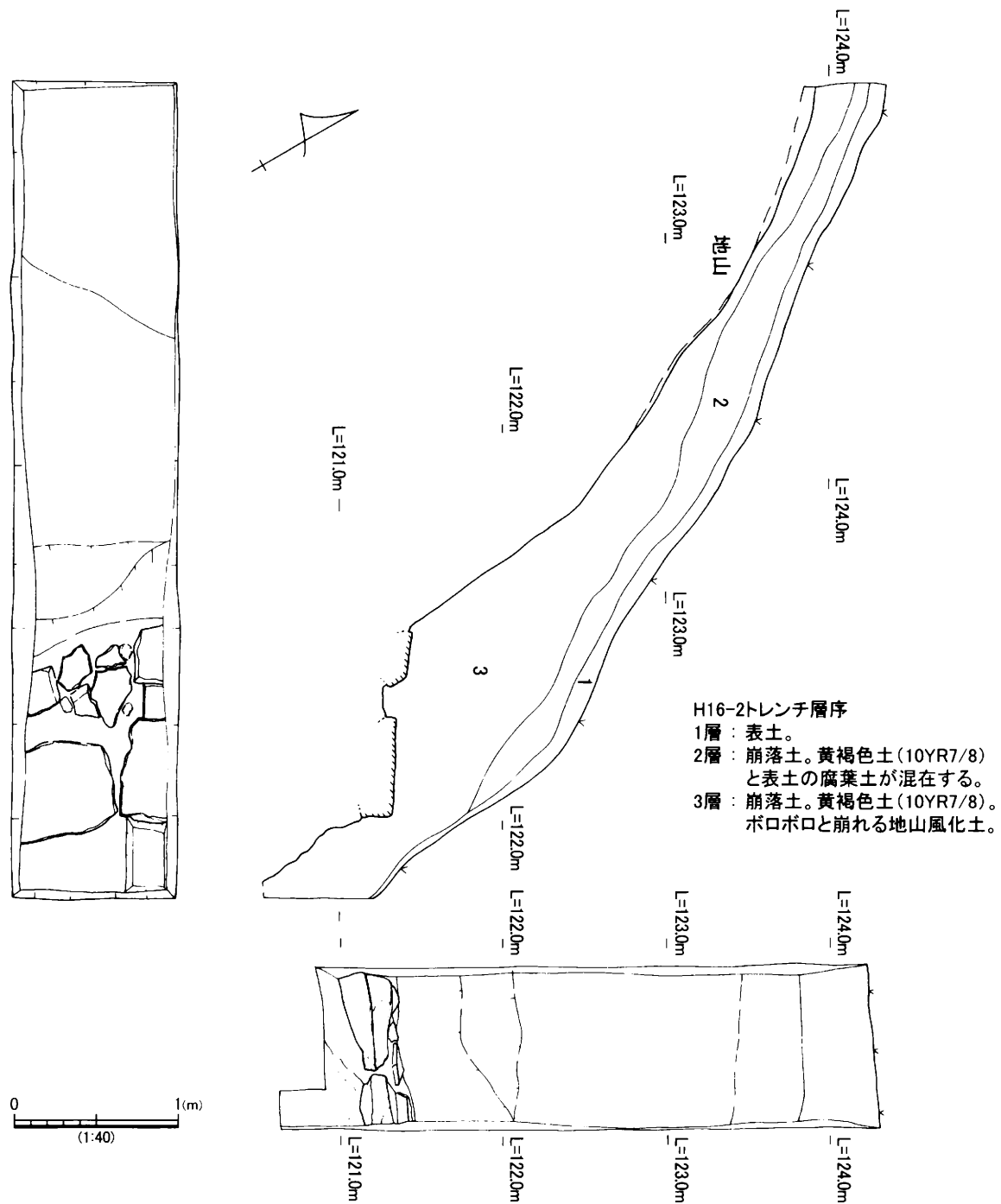


図 52 東部地形図及びトレンチ配置図



H 16 - 2 トレンチ(図 53)

本トレンチは、列石上部の外郭構造を確認することを目的とし、元位置を保っていると思われる列石を基準として尾根に直行するかたちで設定した。トレンチ規模は南北 1 × 東西 5 m である。表土下には厚い腐葉土(2 層)と地山風化土(3 層)が堆積していたが、これらの層を取り除くと、列石及び裏込め状石が姿を現した。

列石・裏込め状石 列石はトレンチ内に 2 個検出した。その石材は花崗岩の粗割石である。列石

の法量は東側のものが奥行き 60 cm、厚さ 19 cm、西側のものが奥行き 60 cm、厚さ 18 cm を測る。また、列石背面の裏込め状石は大きさ 20 ～ 40 m 程度であり、それらは上面を平坦に揃えるように置かれる。

さらにトレンチ北側の列石前後を部分的に断割り、列石の設置状況を確認したところ、これらの列石・裏込め状石は地山を水平にカットし、平坦面を形成した上に置かれていることが明らかとなった。なお、平坦面の奥行きは約 1.2 m である。

土塁 列石背後には、急角度で地山が立ち上がり、土塁の痕跡は全く確認できなかった。地山の立ち上がりは現状で約 50 度を測り、その後も 30 ～ 40 度の急傾斜で尾根へ向かう。さらに上層の崩落土が、地山の風化したものであることから考えると、この傾斜は本来さらに急であったと思われる。なお、列石上面から尾根上までの高さは約 2.5 m である。 (渡邊)

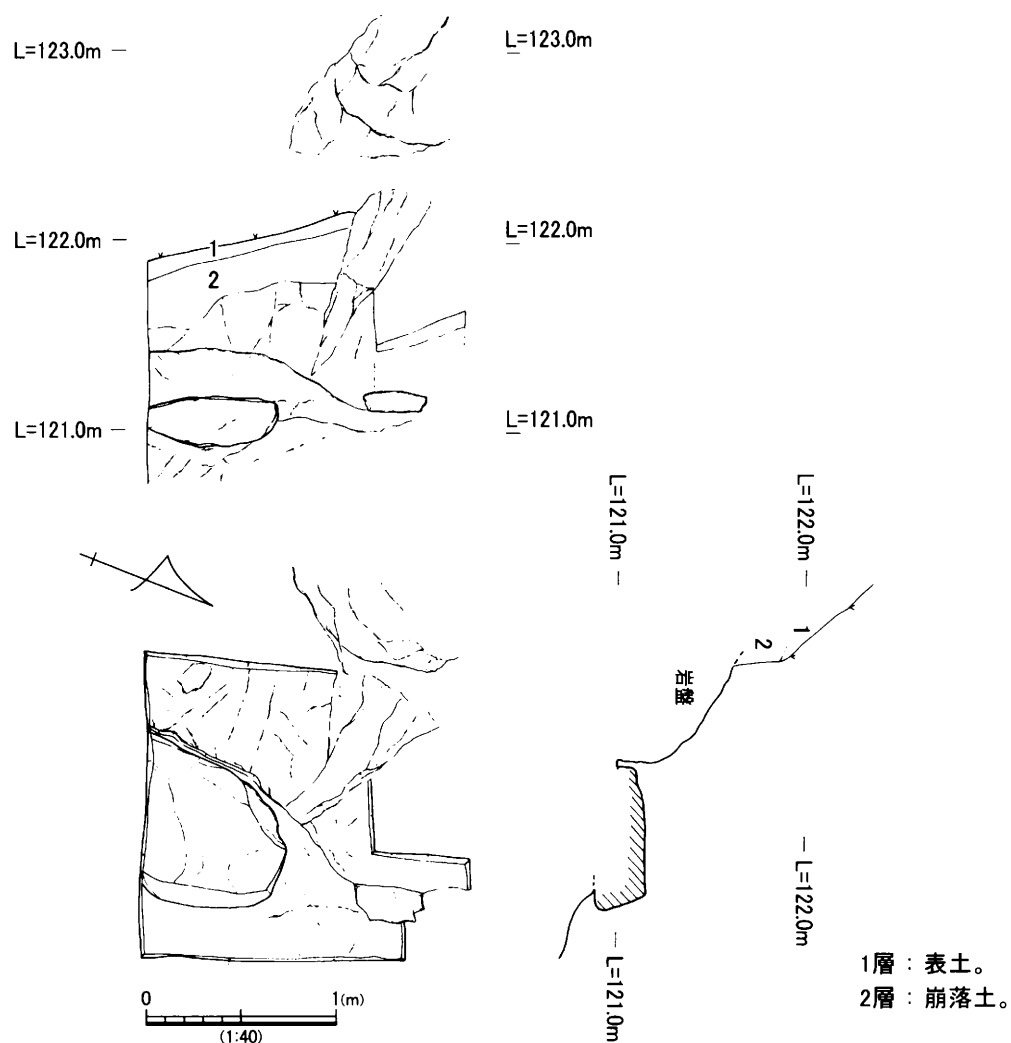


図 54 H 16- 3 トレンチ平面・断面・立面図

H 16－3 トレンチ(図 54)

H 16－3 トレンチは、H 16－2 トレンチの結果を受け、列石背面に土塁が構築されているのかどうかを確認することを目的に設定した。設定にあたり、H 16－2 トレンチと異なる点は、より確実に岩盤との関連を捉えることができるように、列石が岩盤につながるその接続地点に設定したという点である。トレンチは1.6×上辺1・下辺1.4mの台形状である。

列石 列石は1個検出され、その北側は岩盤へと続く。列石の法量は横幅60cm・奥行き72cmで、厚さは25cmを測る。この列石は岩盤をカットした上に据えられ、その背面にはすぐに岩盤が立ち上がり、裏込め状石は置かれていない。

また、この列石の北側岩盤上には横幅30cmほどの石が見られるが、これに関しては、意図して置かれたものかどうか不明である。

土塁 列石背面には30～50度と急傾斜な岩盤が尾根に向かい伸びており、土塁は見られない。これに加えて、すぐ北方には岩盤が各所に露出しており、外郭線への岩盤利用が読み取れる。

さらに、H 16－2 トレンチの成果もふまえると、この周辺では岩盤間を埋めるように列石は並べられているが、その上部構造は急傾斜の岩盤を利用し、土塁が構築されていなかった可能性が高い。(渡邊)

(3) 東部B地区

東部地域では岩盤の露出が顕著であるが、その中でもB地区では最も岩盤が急傾斜に切り立つ場所に位置する。これらの岩盤は起伏が激しく、一部で鞍部状に岩盤が落ち込む場所が見られる。その鞍部を埋めるかのように南北の岩盤間に積まれたのがB地区の石積みである。

石積み(図 55)

南側の岩盤に接する位置から幅約5mの範囲で石積みがなされ、さらに北へ1mは1段の列石が並び、北側の岩盤につながる。

石材は、他の列石同様に花崗岩の粗割石が用いられ、その大きさは横幅30～100cmに及ぶが、60～70cm程のものが数量的には多い。一方、石の厚みは25～35cm前後のものが主体であり、やや扁平な石が用いられている。石積みの高さは現状で約1mであり、石の段数は最大で4段を数える。基底部の石材は岩盤上に直接置かれており、列石による外郭線同様に元来の地形に影響されて、両サイドは岩盤の傾斜に沿うように斜めに上っていく。また、石積みの立ち上がりの角度に関しては、石積みの下部の石材が前方にせり出して全体的にずれが生じているため、本来の傾斜は不明である。ただし、現状でもその角度は60度を測ることから、本来はより垂直に近い傾斜で積み上げられていたものと想定できる。また、石材は全体的に粗い積み方がなされており、各石の間には2～15cm程度の隙間がみられる。これらの積み石の隙間には、わずかではあるが10～15cm程の小礫や粘質土がみられ、これらは目詰を目的として使用された可能性も考えられる。

(渡邊)

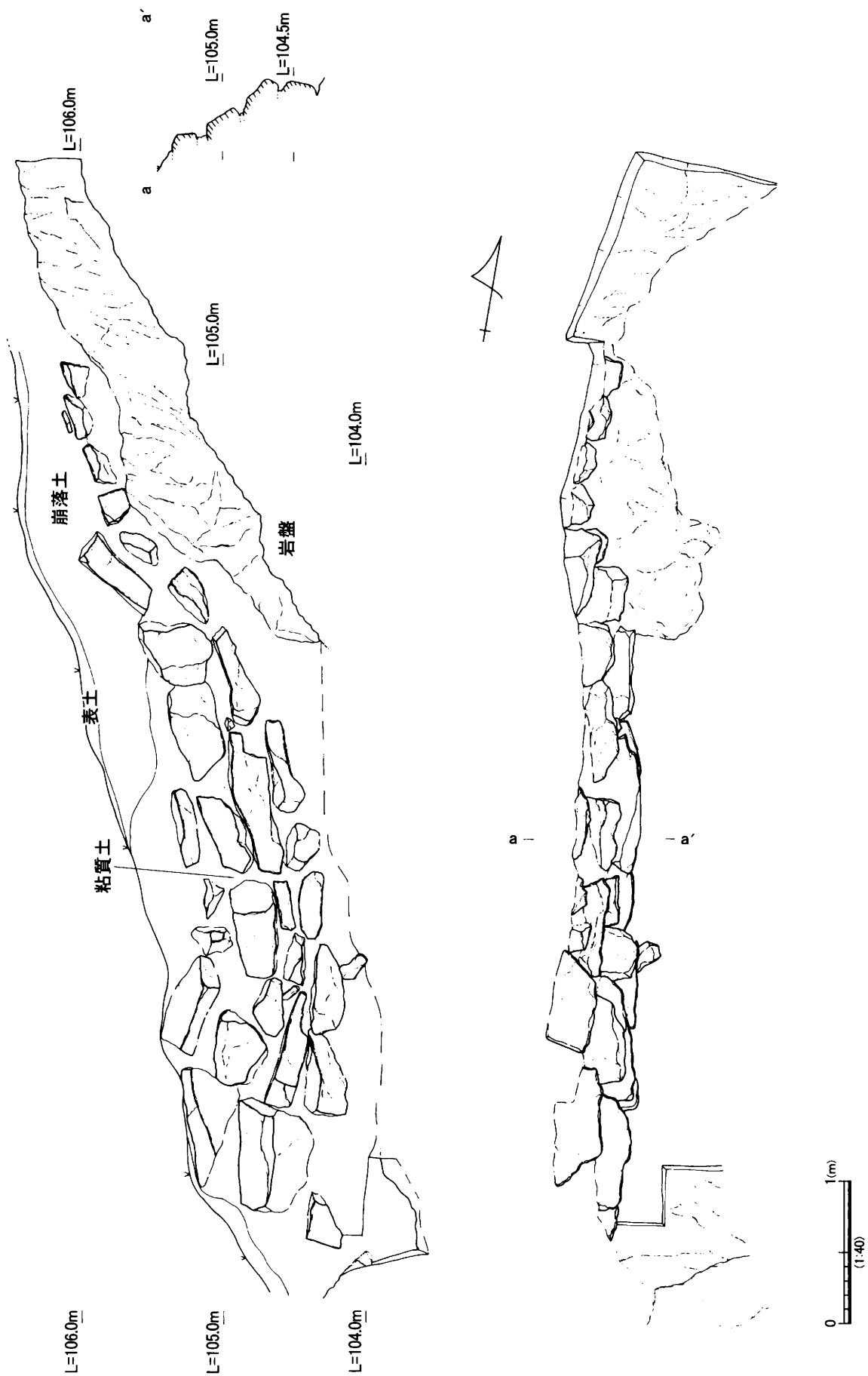


図 55 東部 石積み遺構平面・断面・立面図

(4) 東部C地区

東部頂上の東斜面に位置する。南東部の尾根から伸びてきた東部頂上の南斜面は、急傾斜であることに加えて岩肌があちこちで露出しており、人工的な外郭線は確認できない。これに対し、東斜面は尾根斜面の傾斜が比較的緩やかであり、列石が廻らされていた可能性が高いと推測した。そこで、ピンボールによるボーリング調査で列石の有無を調べた結果、約30mの範囲で列石が並ぶことが確認された。また、この一部で列石の表面検出作業を行ったところ、確認範囲の南部では連続的に列石を検出することができた。

H 16－4 トレンチ(図 56)

本トレンチは上記の列石検出部分を拡張し、列石前面構造の確認を目的にH 16－4 トレンチとして設定し直した。トレンチ規模は列石の並びに沿って7.6×1.2mとした。

列石 列石は7.6mの長さで検出した。これらの列石は、尾根の流れに沿いながらも直線的に並べられる。個々の列石は花崗岩の割石が使用され、その大きさは横幅30～80cm程度である。また、トレンチ南端で背面構造の確認のため、部分的に断割りを行ったところ、列石の背後には幅30cm程の裏込め状石を検出した。

列石前面 列石の検出後、柱穴の有無とテラスの確認をするために平面の精査と一部で断割りを実施した。その結果、列石下には60～90cm程の盛土(3層)がなされていることが明らかとなった。この盛土は土のしまりや硬さは弱い、上層の崩落土との境が列石下面と一致することから盛土と判断した。

また、列石前面の柱穴は、テラス面を慎重に調査したが確認されなかった。(渡邊)

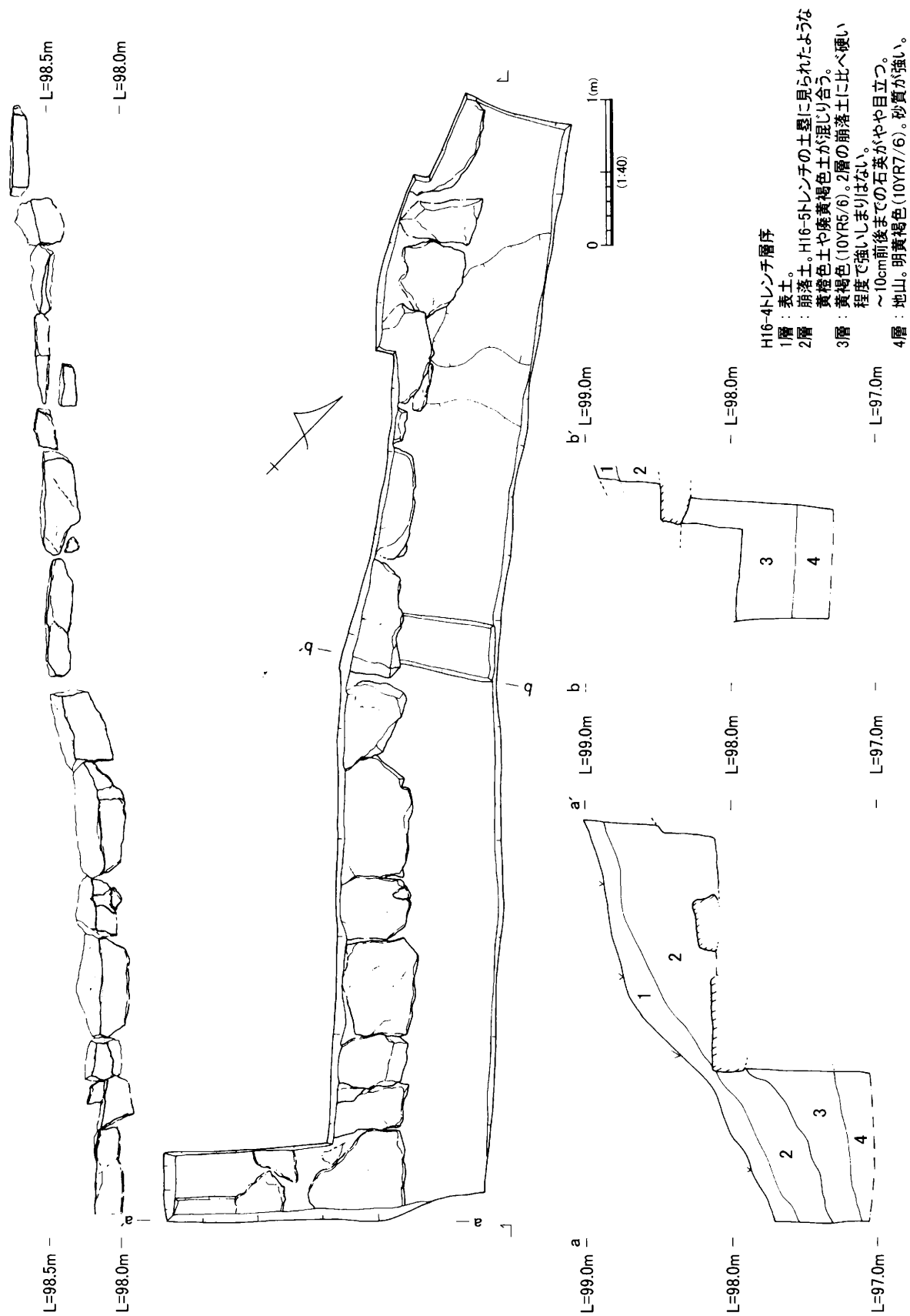


図 56 H 16- 4 トレンチ平面・断面・立面図

第6節 北東部の調査

(1)概 要

北東部は永納山山頂(標高134.2m)から北の地区であり、永納山が古代山城と認識される契機となった列石が発見された場所である。地形的には、山頂を最高所とし、尾根筋が急傾斜で下った後に一旦小さな平坦部を持ち、それ以北は尾根が北の谷へ向かい緩やかに下っていく。当地区は

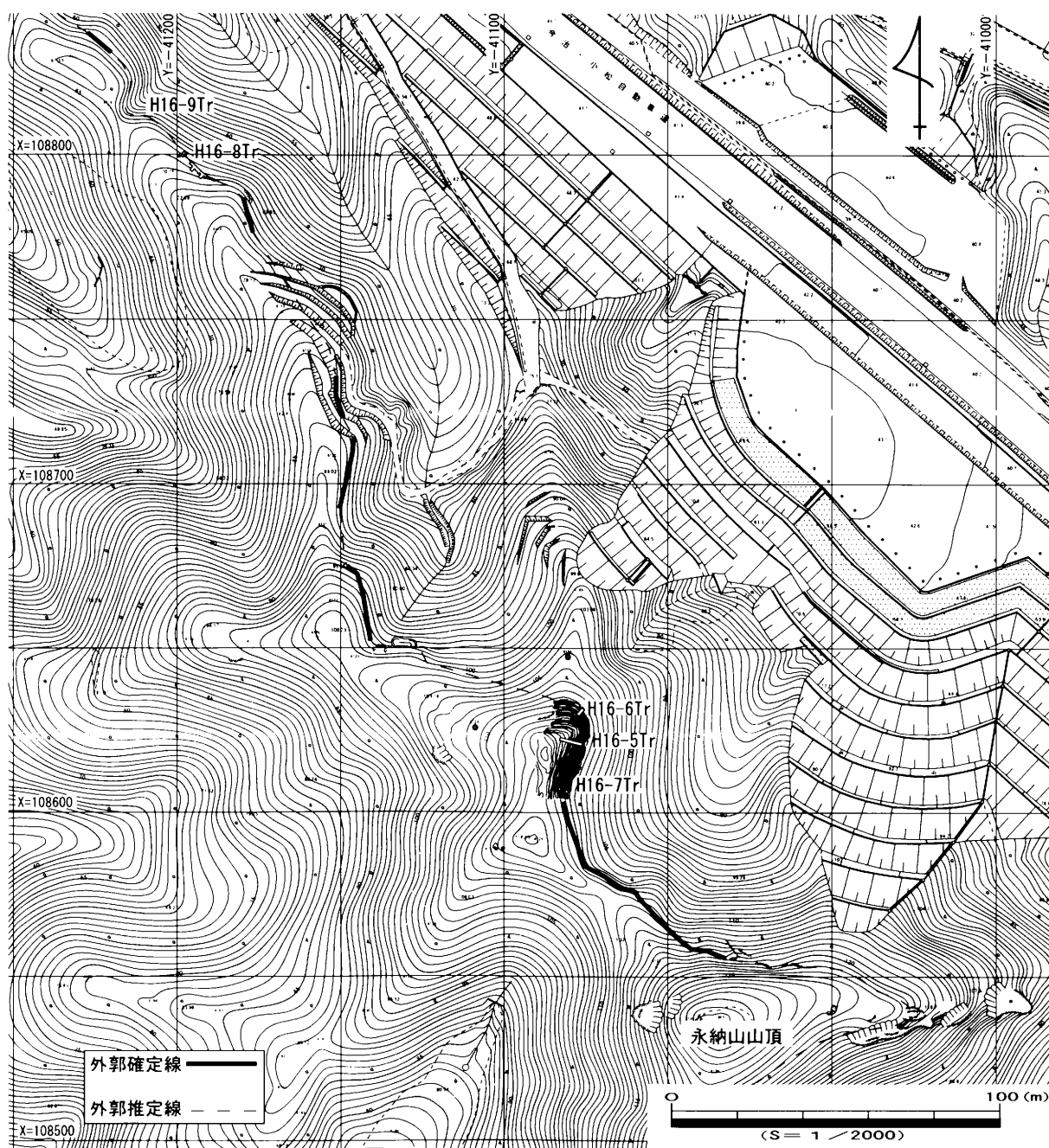


図57 北東部 地形図及びトレンチ配置図

遺跡発見のきっかけとなったことからわかるように、永納山城全体の中でも列石の露出範囲が広く、外郭線は表面からでも容易に確認できる場所が多い。しかしながら現在は、後世の削平により幾段もの平坦面が作られ、外郭線が寸断されているため、列石の一部には元位置を保っていないものも見られる。調査前に確認できた列石総長は、部分的な埋没・欠損部を含めると約470mとなり、これらは基本的に尾根筋より少し下がった斜面に尾根の傾斜に沿うように巡らされる。また、列石は横幅60cmから1mを超えるものも目立ち、大型の石材が多用される。

当地区は範囲が広域にわたるが、上記のように良好な状況を示していたため、外郭線確認を目的としたトレンチ設定は極力少なくすることとした。そこで、過去調査における第一発見地域に外郭構造の確認・把握を目的として設定した3ヵ所(H16-5・6・7トレンチ)と、発見当初第7列石とされた付近で確認した石積み周辺の2ヵ所(H16-8・9トレンチ)にトレンチを設けた。この内、前者の1ヵ所は1・2次調査において設定されたと思われるトレンチ状の窪み部を利用した。

また、外郭線中で山頂東斜面に関しては、その詳細が不明確であったため、一部で腐葉土・崩落土の除去による外郭線確認調査を実施した。(渡邊)

(2) H16-5～7トレンチ周辺

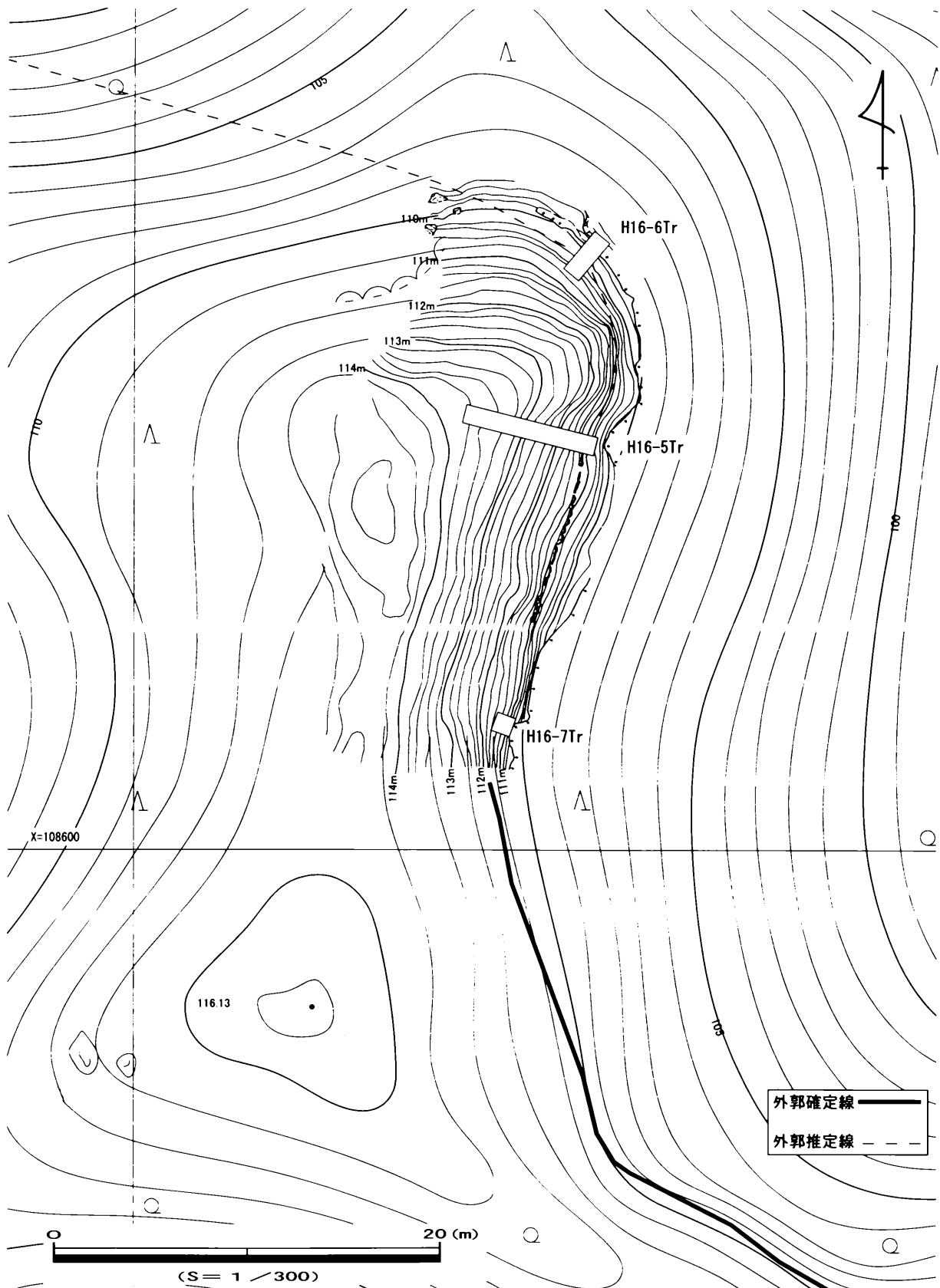


図58 北東部 H16-5～7トレンチ周辺地形図

H 16－5 トレンチ(図 59)

すでに露出している列石を基準に、土塁構造の確認を目的として尾根に直行するように設定した。トレンチ規模は南北 1 m×東西 7 m である。薄く堆積した表土と崩落土を掘り下げた結果、トレンチ下半に土塁と列石を検出した。土塁は版築状態が良好であったため、一部を断割り、土塁と列石の関係把握を目指した。

列石 列石の石材は花崗岩の粗割石であり、そのサイズは断割り部分で確認したもので横幅約 50cm・奥行き 70cm・厚さ 15cm を測る。また、列石の背面には奥行き 42cm と列石に比べ小振りの石が置かれる。これらの列石・裏込め状石は地山を水平にカットした平坦面の上に直接据えられており、その平坦面の奥行きは現状で 105cm である。また、列石が現状の平坦面前端よりさらに約 40cm 前方に突出していることから、本来はもう少し地山の平坦面が続いていたか、あるいは盛土によるテラスがあった可能性がある。

土塁 土塁は内托土塁であり、その高さは現状で列石上面から高さ 1.2m を測り、奥行きは約 1.9m である。土塁は版築工法によって積まれ、各層は正面からみると、列石の傾斜に沿うように緩やかに傾斜する。これに対し縦断面から層の堆積をみると、各層はほぼ水平に積まれている。ただし、内側の地山と接する付近では各層ともわずかに斜めに上がっていく。

土塁の構成土は、固くしまった花崗岩風化土と灰黄褐色砂質土を主体とし、これらが一部に粘質土や炭を含みながら互層状に重ねられる。層の厚みは、下層(8層～21層)では厚さ 2～7 cm と薄い層が重ねられるが、上層(4層～7層)では 5 cm 前後の薄い層とその間に 15～20cm 程と厚い層が見られるようになり、積み上げ方がやや粗くなる。(渡邊)

H16－5 トレンチ層序

- | | |
|--|---|
| 1層：表土。 | 11層：黄褐色(10YR5/6)。基本となる土は花崗岩風化土であるが、これに粘質土がわずかに混じる。そのため、他の層に比べやや硬さは弱い。 |
| 2層：崩落土。 | 12層：8層と同様。 |
| 3層：黄橙色(10YR7/6)。固くしまった土。
残存する土塁最上層である。
数層に細部でできる可能性があるが、根による攪乱により細かい特徴は把握できない。 | 13層：7層と同様。 |
| 4層：黄橙色(10YR7/6)花崗岩風化土。
礫の混じりが少なく、固くしまる。 | 14層：11層と同様。 |
| 5層：黄橙色(10YR7/6)花崗岩風化土。
層全体に薄く灰色砂質土が混じる。 | 15層：8層と同様。 |
| 6層：4層と同様。 | 16層：7層と同様。 |
| 7層：黄橙色(10YR7/6)。花崗岩風化土で、非常に固くしまる。
5mm以下の砂礫を含む。 | 17層：黄褐色(10YR7/6)花崗岩風化土と
灰黄褐色(10YR5/2)が混じりあう。炭を含む。 |
| 8層：灰黄褐色(10YR5/2)。砂質土。4層同様に固くしまる。
しかし、砂礫の混じりは少なく、炭がわずかに混じる。 | 18層：8層と同様。 |
| 9層：7層と同様。 | 19層：7層と同様。 |
| | 20層：灰黄褐色(10YR5/2)。砂質土。5層等と同様な土が用いられるが、それらに比べ炭の混じりが顕著である。 |
| | 21層：7層と同様。 |

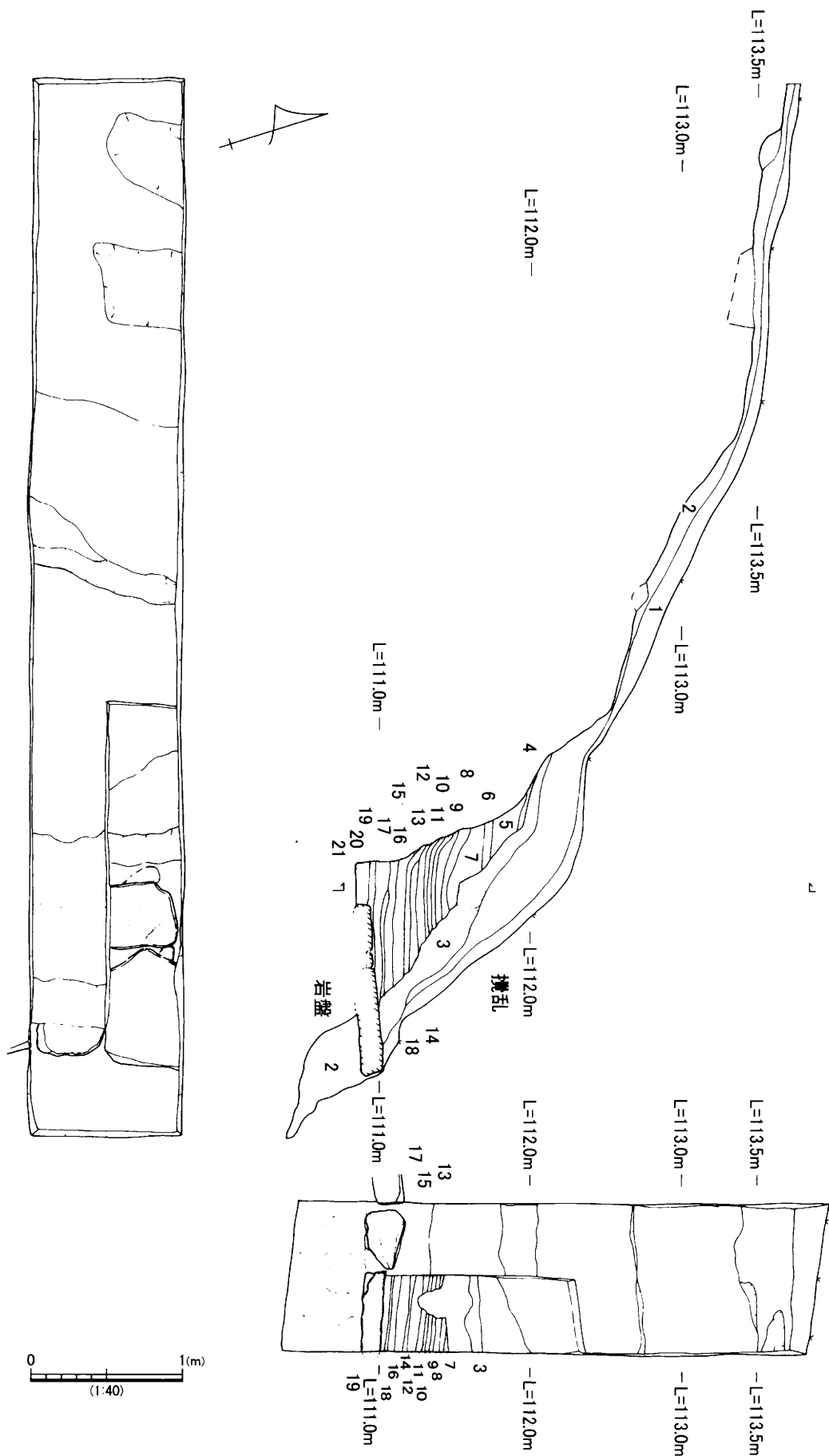


図 59 H 16- 5 トレンチ平面・断面・立面図

H 16－6 トレンチ(図 60)

H 16－5 トレンチの北側で列石確認中に、旧トレンチと思われる長方形の窪みを発見し清掃を行ったところ、列石状の石を検出したため、ここに新たなトレンチを設定した。トレンチ規模は東西 1 m×南北 2.5 m である。

腐葉土の除去と精査を行うと 5 個の石を検出したが、これらの並びには規則性がなく、大きさも 20～30 cm 程度と小さなものであった。さらに石の周辺には固くしまった土(2 層)が堆積しており、不自然な状況であった。そこでトレンチ南端を幅 20 cm で断割り、状況把握を行ったところ、2 層の下にはテラス状にカットされた地山が検出され、その上にこれらの石と土が混じりあって堆積していることが明らかになった。

このような状況から、本来このテラスに置かれていた列石が何らかの要因により崩れたものと判断した。なお、検出した石はその大きさから裏込め状石とみなされ、それらが土塁の崩落土と共にテラス面に残っていたものと考えられる。(渡邊)

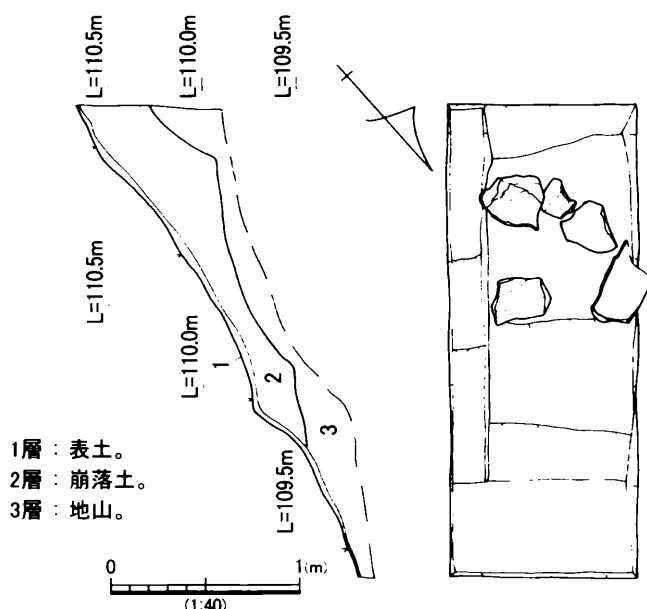


図 60 H 16- 6 トレンチ平面・断面図

H 16－7 トレンチ(図 61)

H 16－5 トレンチから南へ向けて列石の表面検出・清掃を行っていたところ、一部で土塁を確認したため、H 16－5 トレンチの土塁との比較を目的に 1×1 m でトレンチを設定した。なお、本トレンチと H 16－5 トレンチとの間隔は直線距離で 14m を測り、この間は列石がほぼ露出している。

調査は土塁の版築状況の確認が目的であったため、大規模な断割りは行わず、列石の検出と土塁前面での土層確認にとどめた。

列石 トレンチ内で 2 個の列石を検出した。花崗岩の粗割石が用いられるが、比較的平らな面を正面に向けて並べられている。その法量は、共に一方の端部がトレンチ外へ続くため不明であるが、現状からみて、最低でも横幅 40 cm 以上を測ると考えられる。

土塁 土塁は列石上面に積まれており、現状では列石前面は露出している。土塁の構成土は固くしまった花崗岩風化土が主体であり、砂粒や礫の混じり具合により分層が可能である。そして、これらの各層は 2～5 cm と薄く、奥に向かってほぼ水平に積み重ねられる。また、下方の土塁層には炭の混入した暗褐色粘質土が 3 層見られ、花崗岩風化土と互層となる。これらの各層は、正面から見ると列石の傾斜に沿うように緩やかに傾斜する。

本トレンチの土塁は花崗岩風化土が主体となる点、炭を含む層がみられる点で H 15－5 トレン

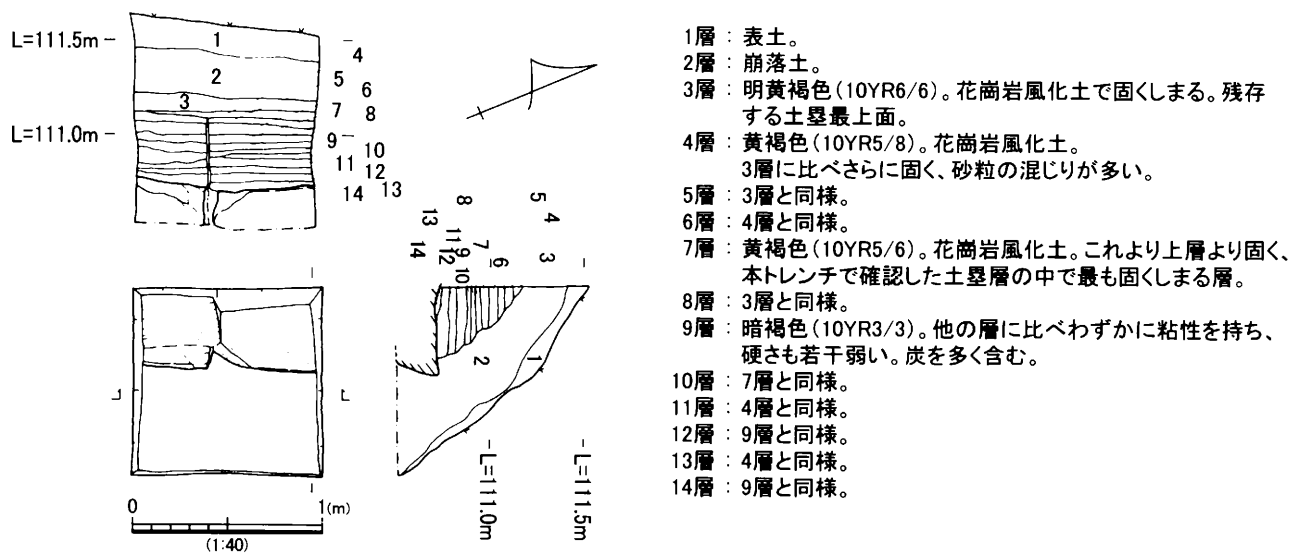


図 61 H 16- 7 トレンチ平面・断面・立面図

チと共通した特徴を有するが、炭の混じり具合はH 16 - 5 トレンチよりも多い。

(渡邊)

(3) H 16 - 8・9 トレンチ周辺

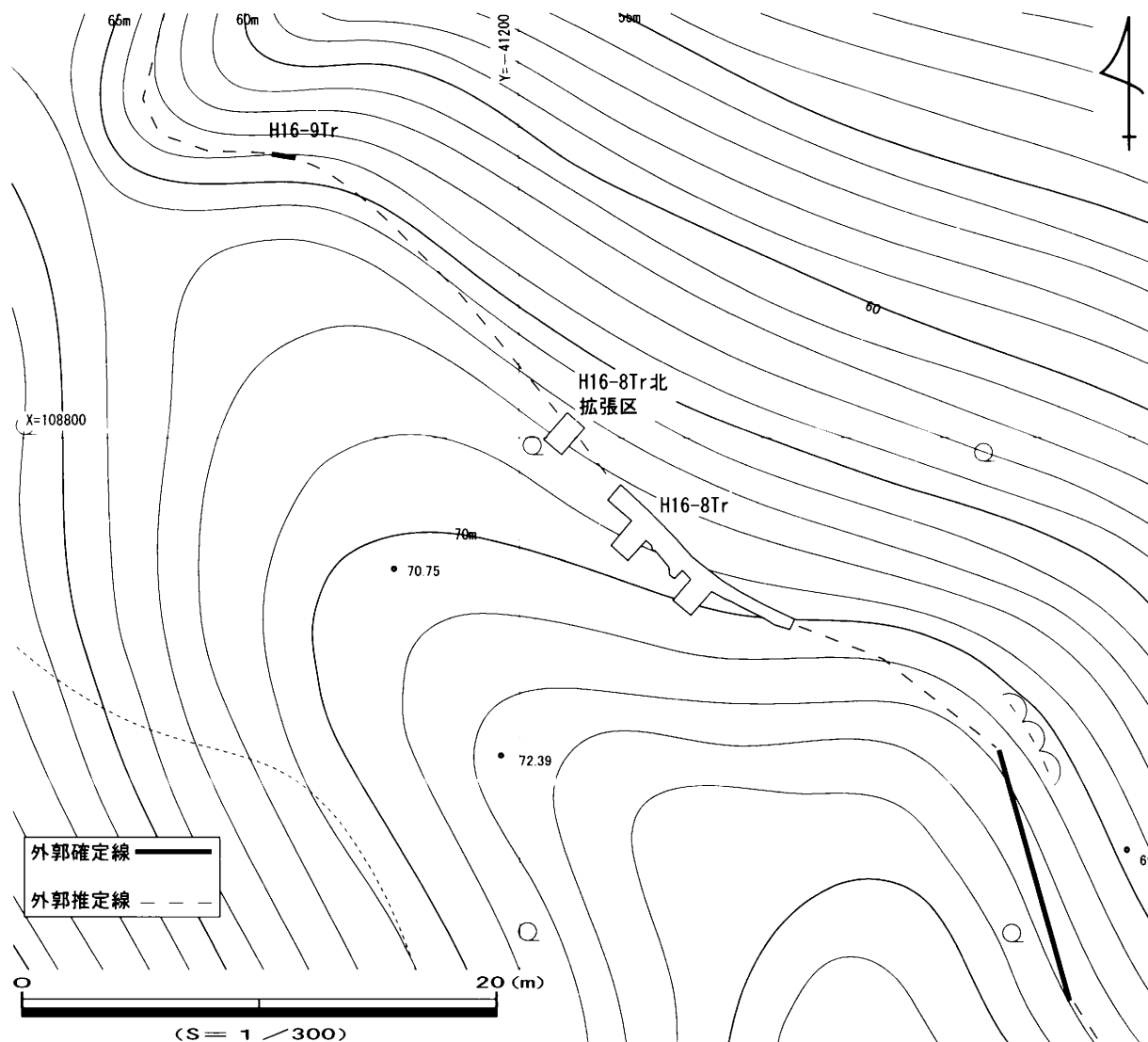


図 62 北東部 H 16- 8・9 トレンチ周辺地形図

H 16 - 8 トレンチ(図 63・64)

H 16 - 6 トレンチから北に向かい尾根筋を下っていくと、斜面には比較的長距離で列石が続く(過去調査の第 2・3・7 列石)。今調査では、これらの列石の清掃作業を実施したが、その途中、一段で連なっている列石が突如、二段に積まれている部分を確認した。地形的に見ると尾根が緩やかに下っていく部分であり、地形に大きな変化も見られないことから、かえってこの場所に石積みがあることに違和感を覚えた。そこで、ここにトレンチを設定し、外郭線の確認を行うこととした。

石積み 掘り下げを進めるに従い、石積みが二段以上となることが判明したため、最下段の積み石まで検出を行うこととした。その結果、石積みは尾根筋の傾斜に沿うように斜めに積み、幅 2.5m の距離に及ぶことを確認した。その高さは 1.2～1.5m を測り、最大で四段の石が積まれる。また、個々の石材の横幅は 40～50cm 程度のものが大半であり、列石に用いられるものと同様の特

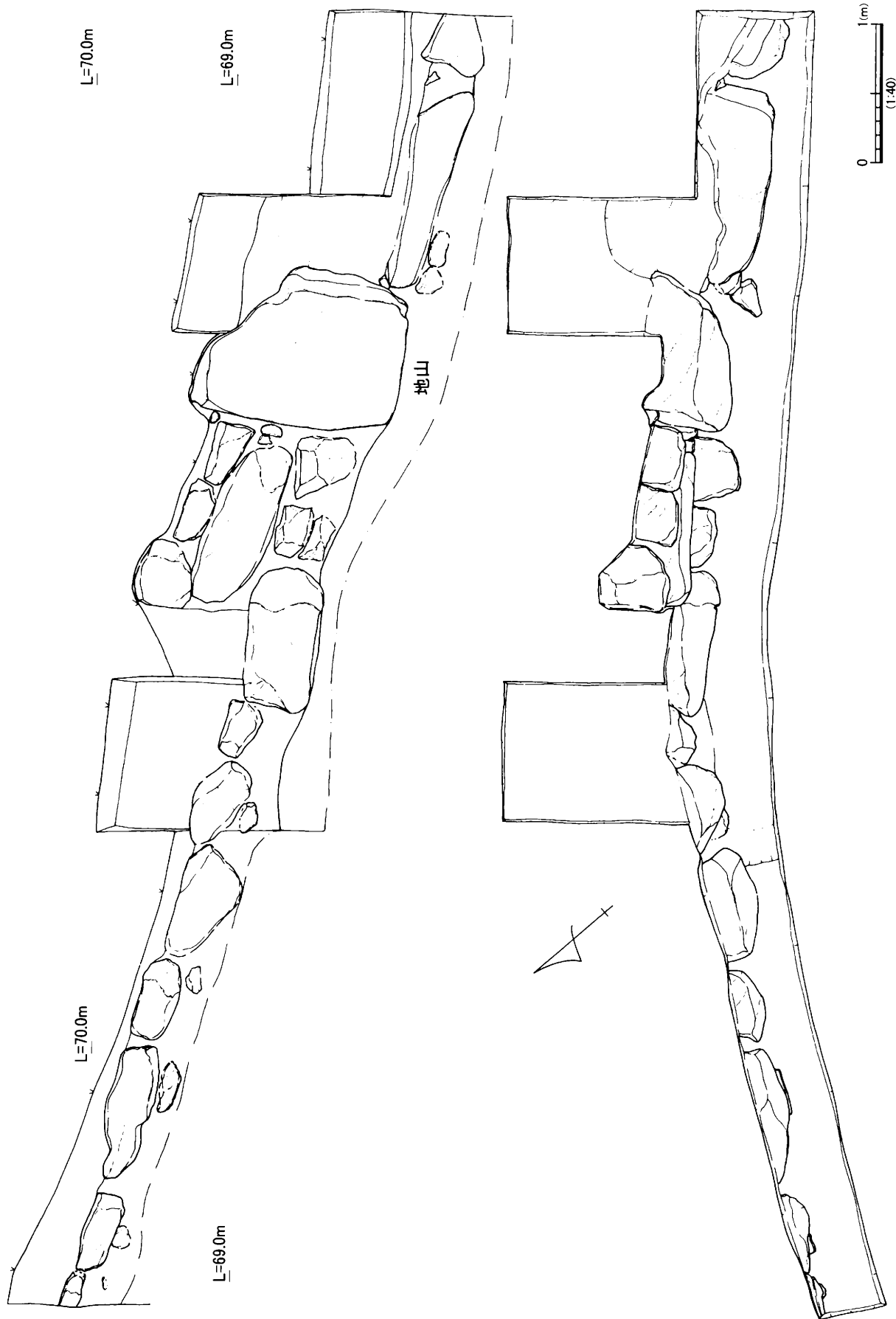


図 63 H 16- 8 トレンチ平面・立面図

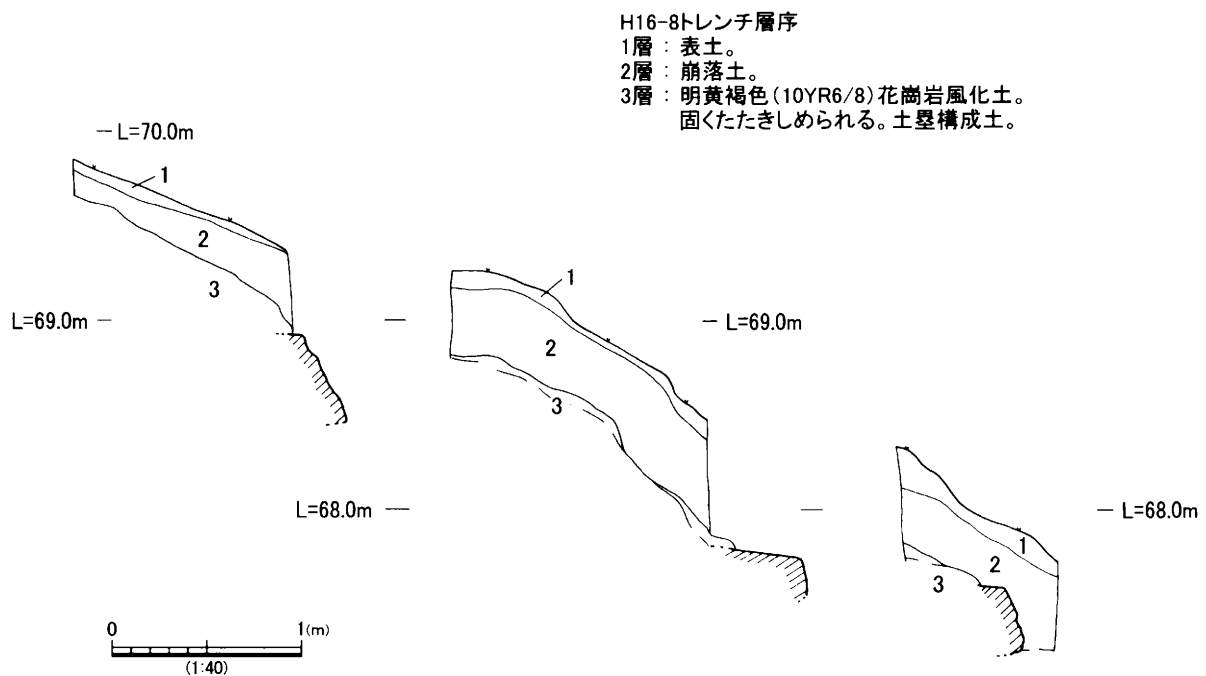


図 64 H 16- 8 トレンチ断面図

徴を示す。なお、最下段の石材は、石積み両側の列石に高さを揃えて並べられる。この石積みの上から二段目は幅 125cm の石が横長に一つだけ積まれ、逆に北端の石材は幅 100cm・高さ 150cm の大型の石を立柱状に縦長に置くなど特異な様相を呈する。この北端の石は一石のみであり、石積みとは言えないものの、その上・下両面がこれに接する石積みの上・下端とほぼ揃えられていることから、石積みと一連のものとして捉えられる。

列石・土塁 石積み南側の列石は横幅 60～100cm 程のものが多く、この北東部地区によく見られる大きさの列石のである。一方、石積み北端の立柱状の石に北接する列石は幅 150cm を測り、これまで検出した列石と比べても特に大型の部類に入る。また、これらの列石石材は、他の列石同様に花崗岩の粗割石が用いられる。

土塁は石積み南側の列石部分と、石積み北側の列石との接続部分の 2 ヲ所で確認作業を行った。作業は土塁上面の検出に留め、断割りは実施しなかったが、石積み背面にも土塁が接することが判明した。

これらの状況から、この石積みも古代山城に伴うものであることは疑いないが、その石積みの意図するものが何であるのかは現時点では明らかにできなかった。ただし、立柱状に置かれる石や、それに北接する大型平石による列石の存在からみると、例えば、門のような遺構が存在することも十分考えられる。しかし、範囲確認が主目的である今回の調査では、石積み及び列石・土塁の存在を確認するに留めた。

(渡邊)

H 16- 8 トレンチ北拡張区(図 65)

H 16- 8 トレンチの調査で立柱状に立てられた大型石、その北側の大型平石およびその背後の土塁が検出されたことを踏まえ、当トレンチ北側にどのような外郭線がつながっているのかを明らかにする目的で、当トレンチ基準杭縦軸(東西軸)から 2. 25m 北方に東西 1. 5m × 南北 0. 75m の拡張区を設定し、H 16- 8 トレンチ北拡張区とした。

表土、崩落土(1～5 層)を掘り下げていったところ、土塁と列石 2 個を検出した。列石下まで精査すると、列石直下に黄褐色風化土(8 層)を検出、さらにその下にやや粘性のある褐色土(9 層)を検出したため、その土の広がりを追ったところ、トレンチ東端まで広がることを確認した。これら二層が列石の置土になる可能性を考え、さらに下層の土層状況を調べる為にトレンチ北側で断割り調査を行った。その結果、上述の褐色土(9 層)の下層に、粘性はないがしまりの強いややピンクがかった明黄褐色土(10 層)が斜堆積している状況を確認した。

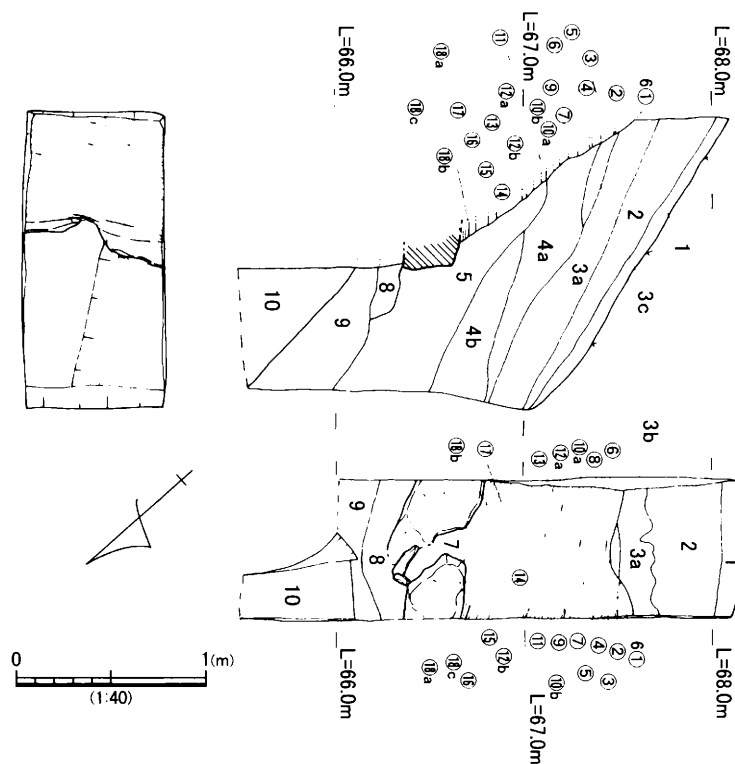
列石および下部構造 この明黄褐色土層は、その質感や厚みから少なくとも地山の岩盤風化土層であると考えられるが、その上に斜堆積する褐色土(9 層)については、所々黒味がかかった土が含まれ、稀に 5 mm 大の炭が含まれることから列石設置以前の自然の堆積土あるいは人為的な置土層である可能性が考えられる。そして、この褐色土層の斜面を水平気味に削平ないし整地した上に確実に置土と判断できる黄褐色風化土(8 層)が乗っていることが分かる。この置土の上部に平坦な面を前に向ける列石 2 個が置かれる。これら列石は、両者とも花崗岩の粗割石で、ほぼ平坦な面を前面に向けている。法量は、南側のものが、横幅 50cm 超、厚さ約 35cm を、北側のものが横幅 35cm 超、厚さ約 30cm を測る。幅の狭いトレンチ調査のため、正面からみた列石の傾斜角度は明確ではないが、次に述べる土塁の傾斜角度を合わせて考えると、おおよそ 15 度前後の緩やかな傾斜で北方から南方へ列石線が上がってゆくことが分かる。

また、列石の間隙下方にはやや小型の礫が挟まれ、列石上面付近までの間隙は、粘性はほとんどないが固くしまる明黄褐色土(7 層)が充填されていることが判明した。これは列石の固定を目的とした埋め土であると見受けられる。

土塁 土塁(6 層①～⑧)は、列石とその埋め土に乗るように積まれている。その構成土は、大別すると共にやや粘性がありしまりのある、褐色土、灰色がかかったにぶい黄褐色土、黄褐色/明黄褐色土と暗褐色～黒色系の炭混入土を主体とし、それらが互層状に積まれている。特に黄褐色土/明黄褐色土層は土のしまりが強い。但し、色調の類似した層でもしまりや粘性は層毎にばらつきが見られる。

特に土塁最下層(列石直上)は、灰色がかかったにぶい黄褐色土と褐色混じりの黄橙色土が互層をなす非常に硬化した土層(6 層⑧)が形成されているのが注目される。土塁の各構成層は、正面から見て北方から南方へおおよそ 15～20 度の緩やかな傾斜で積まれている。また、土塁の立ち上がりは、断面的に見ると、現状で 50～60 度の傾斜を示している。長年の風雨等の影響を考えれば、元来の土塁は 60 度を超える強い勾配で築かれていた可能性が高い。

当拡張区の調査により、H 16- 8 トレンチと当拡張区との間に構造上の大きな変化が認められることが分かった。すなわち、当拡張区では、通常の列石と版築土塁のセットで外郭線が構成されており、その構造は次に述べる H 16- 9 トレンチから連続してみられるものであるのに対し、H



- 1層：暗褐色(10YR3/3)。表土層(腐葉土)。
- 2層：褐色/にぶい黄褐色(10YR4/6～5/6)。崩落土。粘性なし。しまりなし。
- 3層 a：褐色(10YR4/6)。崩落土。粘性弱い。しまりなし。5mm大の礫わずかに含むキメ細かい土。
b：黒褐色(10YR3/2)。崩落土。やや粘性あり。しまりなし。礫の混じり少ない。
c：褐色(10YR4/6)。崩落土。粘性わずか。しまりなし。礫の混じり少ない。
- 4層 a：暗褐色(10YR3/4)。崩落土。粘性なし。しまり弱い。5mm大の礫わずかに含むキメ細かい土。
b：暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)。崩落土。やや粘性あり。しまり弱い。キメ細かい。
- 5層：褐色(10YR4/6)。崩落土。粘性ほぼなし。しまりなし。礫混じり少なく、キメ細かい。
- 6層：土壘構成土。
①：褐色(7.5YR4/6)。やや粘性あり、固くしまる。礫の混じり少ない。
②：褐色(7.5YR4/4)。上下層より灰色味強い。粘性・しまり弱い。
③：褐色(10YR4/6)。6層①とほぼ同様だが、より固くしまる。
④：褐色(7.5YR4/6～10YR4/6)。③より粘性強い。しまりやや弱い。礫の混じり少ない。
⑤：暗褐色(10YR3/3)。黒味強い。やや粘性あり、固くしまる。礫の混じり少ない。
⑥：黄褐色(10YR5/8)。粘性わずか。固くしまる。5mm以下の礫含む。
⑦：褐色(10YR4/4)。粘性わずか。しまり弱い。5mm以下の礫含む。
⑧：褐色(10YR4/6)。やや粘性あり。やや固くしまる。5mm以下の礫含む。
⑨：黒褐色(10YR3/1)。黒味強い。やや粘性あり。キメ細かい。
- ⑩a：褐色(10YR4/6)。粘性わずか。固くしまる。3mm大の礫含む。
⑩b：褐色(10YR4/4)。粘性わずか。固くしまる。5cm大のもろい礫含む。1～2cm大の炭片含む。
⑪：黒色(N1.5/)。炭層。やや粘性あり。しまりやや弱い。礫混じらない。
⑫a：黄褐色(10YR5/8)粘性わずか。やや固くしまる。3mm大の礫含む。1～2cm大の炭片含む。
⑫b：黄褐色(10YR5/6)。粘性わずか。固くしまる。2～5mm大の礫含む。1～2cm大の炭片含む。
⑬：暗褐色(10YR3/3～3/4)。炭混じる。やや粘性あり。やや固くしまる。1cm以下の礫混じる。
⑭：黄褐色(10YR5/6)。粘性わずか。やや固くしまる。炭片混じらない。
⑮：明黄褐色/黄褐色(10YR6/6～5/6)。やや粘性あり。固くしまる。
⑯：黄褐色(10YR5/6)。粘性わずか。ややしまる。上の方に5mm大の炭片混じる。
⑰：褐色(10YR4/6)。やや粘性あり。ややしまる。3mm以下の礫含む。
⑱a：にぶい黄褐色(10YR5/4)。灰色味強い。粘性わずか。やや固くしまる。3mm以下の礫含む。
⑱b：褐色/黄褐色(10YR4/6～5/6)。やや粘性あり。固くしまる。3mm以下の礫含む。
⑱c：⑱aとほぼ同じ。
⑱d：⑱bとほぼ同じ。
- 7層：明黄褐色(10YR6/6)。列石間充填土。粘性ほとんどない。固くしまる。2～3mmの礫含む。
8層：黄褐色(10YR5/6)。列石置土。粘性ほぼなし。しまりやや弱い。5mm以下の礫多く含む。
9層：褐色(10YR4/6)。所々黒味がかかる土含み、稀に5mm大の炭が混じる。粘性ややあり。+しまりやや弱い。
10層：明黄褐色(10YR6/6)。ピンクがかる岩盤風化土層。粘性なし。しまり強い。

図 65 H 16- 8 トレンチ北拡張区平面・断面・立面図

16-8 トレンチでは大型平石・立柱状大型石・石積みが見られ、背後の土塁も版築ではあろうが、少なくとも炭層をまじえた互層状の構造にはなっていない点が指摘できる。したがって、H16-8 トレンチと当拡張区の間に構造上の大きな変換点が存在しているのは確実で、将来的には両者の間に調査を入れることが必要であり、それがH16-8 トレンチで検出された特殊な石積み遺構の実体解明につながるものと考えられる。
(半沢)

H16-9 トレンチ(図66)

H16-8 トレンチの北方約20mの斜面において、おそらく風倒木によって表土がそっくり剥ぎ取られ、互層状の版築土塁が露出している箇所を発見した。そこで、その剥ぎ取られた部分を利用して、土塁の状況を明らかにする目的で周囲を少し拡張し、H15-9 トレンチとした。なお、調査区周辺には転落した列石が数個確認されている。

調査の結果、互層状の版築土塁に伴う列石2個を新たに検出した。

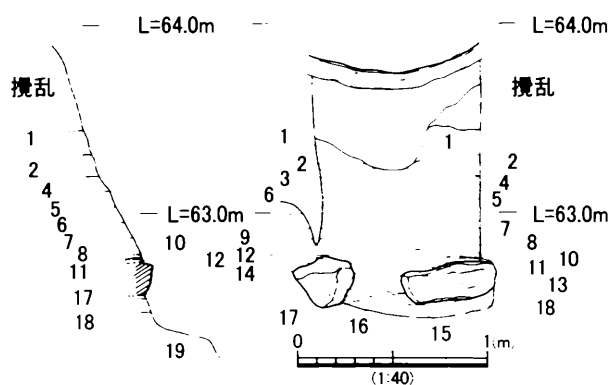
列石および下部構造 検出した2個の列石は、両者とも花崗岩の粗割石で、ほぼ平坦な面を前面に向けている。南側の列石は、横幅約35cm、厚さは約27cmとやや小ぶりで、形も少し不整形であるが、北側の列石の方は、横幅約50cm、厚さ20cm強で、ある程度形は整っており、上面も凹凸はあるにせよ、概して平坦な面を持つ。下に述べる土塁からも言えることであるが、列石は正面から見てほぼ水平に並べられている。

南側列石の直下は、ややもろい岩盤質の明黄褐色土(19層)であり、これが地山であるとみられる。この地山はわずかに窪みつつ北側に伸びるが、南側列石の北端から北側列石下方にかけて、この地山の上に黒味がかかった土が混ざる褐色風化土(18層)が堆積し、さらにその上に明黄褐色風化土の堆積(17層)が確認された。これら二層は南側列石を北側から支える土となっておりと同時に、北側列石の置土となっていることが分かる。次に、歯抜け状に25cm程隙間が空いている列石間には、まずしまりのない暗褐色風化土(16層)が埋め込まれ、さらにその上に固くしめるにぶい黄褐色風化土(15層)が隙間を埋めている。なお、このにぶい黄褐色風化土は、南側列石の南側上面の一部を固定するのにも使われている。以上のような列石と土塁の基礎の築かれ方は、先に述べたH16-8 トレンチ北拡張区でのあり方とほぼ共通していることが明らかである。

土塁 土塁(1～14層)は、列石と埋め土に乗るように積まれている。その構成土は、大別すると、やや粘性がある黄褐色土、明黄褐色土、灰色がかったにぶい黄褐色土と、比較的粘性が強い明黄褐色土、黒褐色土に分かれる。中でも明黄褐色土とにぶい黄褐色土はしまりが強い。但し、色調の類似した層でもしまりや粘性は層毎にばらつきがある。

土塁下層から上層の大半の部分は、黄褐色土と明黄褐色土が用いられており、概してこの二層が互層堆積していることが分かる。一方、土塁最下層(列石直上)では、まず列石の上面を慣らすようにやや粘性が強く、比較的固くしめる明黄褐色土(14層)が敷かれ、さらにその上に比較的粘性の強く、わずかにしめる黒褐色土(炭層の一種)(13層a)が乗っている。土塁の各構成土層は、正面から見てほぼ水平に積まれており、わずかに南側が持ち上がる傾向が看取できる。また、土塁の立ち上がりは、断面的に見ると、現状で65～70度前後の急な傾斜を示しており、土塁の残存状況が比較的良好である。

以上の調査の結果から、北東部の当トレンチから上述のH 15- 8 トレンチ北拡張区までのおよそ20m区間は、列石および炭層の混じる版築土塁で構成された外郭線が正面から見て緩やかな傾斜で北から南へ上っていくことが判明した。(半沢)



- 1層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性わずか。しまりほとんどなし。5mm前後の礫、2～3cmの岩盤ブロック含む。
- 2層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性わずか。しまりほとんどなし。1層と比べ、礫の混じりは似るが、キメ粗い。
- 3層：明黄褐色(10YR6/6)。土塁構成土。粘性ほぼなし。しまり弱い。5mm大の礫、1～3cmの岩盤ブロックを多く含む。
- 4層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性やや強い。ややしまる。5mm前後の礫、5cm以下の岩盤ブロック含む。
- 5層：明黄褐色(10YR6/6)。土塁構成土。粘性ほとんどなし。ややしまる。5mm前後の礫を多く含む。
- 6層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性わずか。しまりわずか。5mm前後の礫、2～3cmの岩盤ブロック含む。
- 7層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性やや弱い。ややしまる。3～8mmの礫まばらに含む。炭をわずかに含む。
- 8層：明黄褐色(10YR6/6)。土塁構成土。粘性わずか。しまりなし。5mm以下の礫を多く、数cm大の礫をまばらに含む。
- 9層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。粘性わずか。ややしまる。5mm前後の礫含む。
- 10層：明黄褐色(10YR6/8)。土塁構成土。やや赤味強い。粘性なし。しまりやや弱い。5mm前後の礫を多く含む。
- 11層：明黄褐色(10YR6/8)。土塁構成土。16層のような土混ざる。粘性わずか。ややしまる。キメ細かい土主体。
- 12層：黄褐色(10YR5/6)。土塁構成土。やや黒ずむ。粘性ほとんどなし。しまり弱い。10mm以下の礫含む。
- 13層a：黒褐色(10YR3/2)。土塁構成土。かなり黒味強い。粘性やや強い。ややしまる。5mm前後の礫を含む。
- 13層b：にぶい黄褐色(10YR4/3)。土塁構成土。灰色味強い。粘性わずか。やや固くしまる。わずかに炭混じる。
- 14層：明黄褐色(10YR6/8)。土塁最下層。粘性やや強い。ややしまる。5mm以下の礫混じるが、キメ細かい土を主体。
- 15層：にぶい黄褐色(10YR5/4)。列石間充填土。粘性ほとんどなし。やや固くしまる。
- 16層：暗褐色(10YR4/6)。列石間充填土。やや黒ずむ風化土。粘性わずか。しまり弱い。5mm前後の礫の多く含む。
- 17層：明黄褐色(10YR6/6)。列石の置土・充填土。赤味強い風化土。粘性わずか。ややしまる。5mm前後の礫の多く含む。
- 18層：褐色(10YR4/4)。列石の置土。やや黒ずむ風化土。粘性なし。しまり弱い。3～5mm前後の礫の多く含む。
- 19層：明黄褐色(10YR7/6)。ややもろい岩盤層(地山)。

図 66 H 16- 9 トレンチ断面・立面図

第7節 北部の調査

(1)概 要

北部の地形的特徴としては、永納山城の中で最も大きな谷の開口部にあたる点と、現在は独立山塊となっている医王山を城域として取り込んでいるという点の2点をあげることができる。前者に関しては、以前より水門の存在が指摘されるところではあるが、この谷部を南北に貫くようにJRの線路が開通しているため現状ではその姿は窺えない。しかし工事当時には多量の石が出たとの話もあり、それが水門に伴うものであるならば、何らかの痕跡が残っていることが期待される場所である。後者については、一見独立した山に見える医王山(標高130m)を城域に含む特異性が注目されていたものの、永納山西部頂上からこの医王山を廻り北の谷まで下る外郭線構造の詳細は不明確な部分が多かった。

医王山を下り県道孫衛兵作壬生川線(以下、県道)を挟み、谷に向かう丘陵部(現在は蜜柑畑)には列石に用いられたと考えられる石材が点在している。これらは斜面に不規則にみられ、蜜柑畑の表土層等にはまっていることから元位置を保っていないであろうことは容易に想像できた。そこで平成15年度に列石を据えるためのテラスやその上の土塁といった外郭構造の痕跡を確認することを目的として、2ヵ所にトレンチ(H15-14・15トレンチ)を設定し調査を実施した。しかし、外郭線の明確な痕跡を確認できなかったため、平成16年度に拡張区を設定し補足調査を進めた。

医王山に関しては国有林ということもあり多くの規制もあったが、愛媛森林管理署の協力により調査を実施することができた。ここでの調査目的は、当然のことながら医王山における列石の有無の確認であった。そこでまず、過去調査で設定された「4トレンチ」を見つけ列石を確認することに作業の主眼をおいた。したがって、医王山北東斜面での草刈・踏査に前半期を費やすこととなったが、無事に「4トレンチ」を発見することができた。トレンチは崩落土が堆積していたが、精査を行うと列石が残っていることが確認できた。そこでこの「4トレンチ」を拡張し、新たにH15-16トレンチを設定した。

さらに列石の方向性を追うために踏査を継続したところ、H15-16トレンチから西に向かい斜面を急傾斜で駆け上る列石を確認した。

調査は北東斜面での外郭線確認が一段落したところで、南西斜面の踏査へ移行した。南西斜面では主に永納山西部との外郭線のつながりを明らかにするために列石の確認を目指し、この南西斜面においても列石が廻らされることが確認できた。

また、平成16年度には、JR予讃線線路を挟み東西両側で、谷に向かい下る外郭線の確認調査を実施し、部分的に列石の検出を行った。

若干、調査順序と前後するが、(2)医王山の調査、(3)谷部西側丘陵の調査、(4)谷部東側斜面の調査の順に説明を行っていく。

(渡邊)

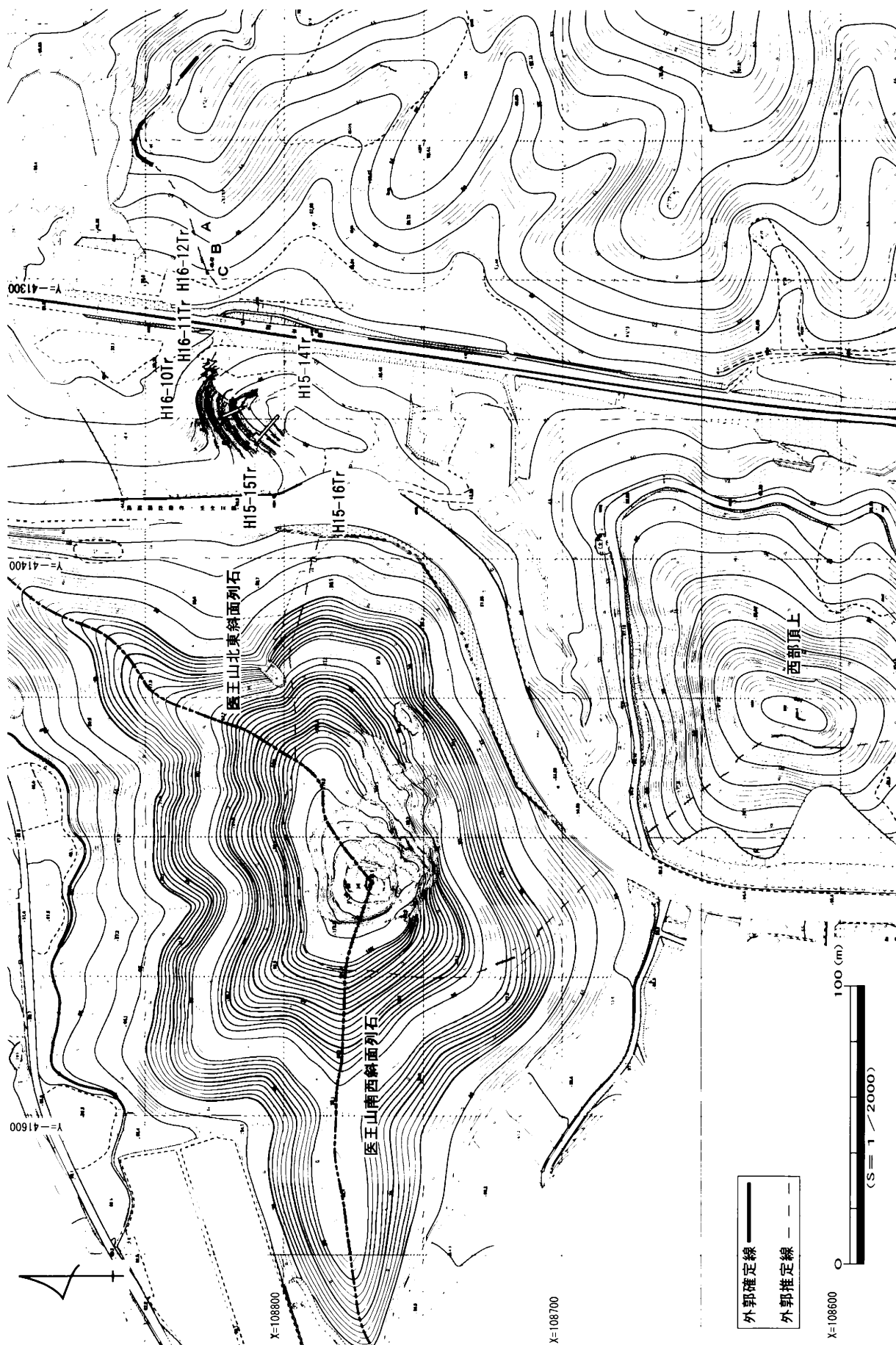


図 67 北部地形図及びトレンチ配置図

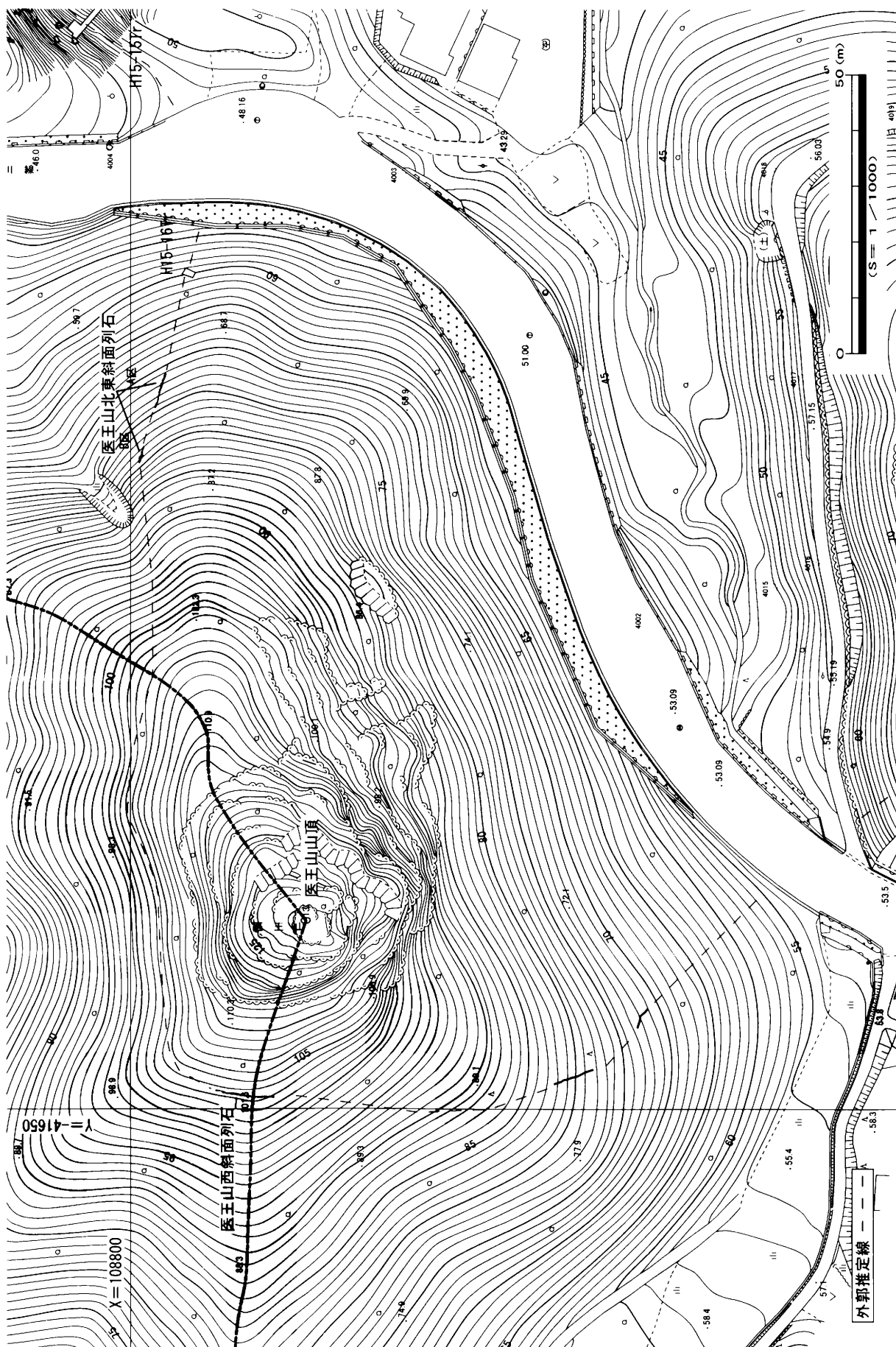


图 68 北部 医王山地地形图

(2) 医王山の調査

ここではトレンチ調査成果、北東斜面、南西斜面の順に調査成果を述べていく。

H 15 - 16 トレンチ(図 68)

H 15 - 16 トレンチは過去調査の 4 トレンチを拡張して設定した。医王山は、そのすぐ東を通る県道が拡張されたため遺跡発見当初に比べると、ふもとが削平されており、トレンチは道路の法面に近接する状況であった。トレンチ規模は旧トレンチを基礎としたが、崩壊具合と壁面観察の都合上から、2 m × 上辺 1 m・下辺 1.5 m の台形に設定した。

本トレンチはすでに一度調査されていたため、作業は基本的にトレンチ内の崩落土除去と清掃による外郭線の確認であった。その結果、

前調査で検出されていた列石を再検出することができた。

列石・裏込め状石 列石はトレンチ内に 3 個検出し、その背後には裏込め状石を確認した。列石のうち西側の 2 個は横幅 40 cm・奥行き 75 cm 前後、厚さ 30 cm とほぼ同サイズである。また、これらの列石は小口面を正面とし、奥行きを長くとり据えられる。裏込め状石は、50 cm 前後のほぼ同サイズのものが一列に 3 個並ぶ。さらに東にもう一つ小振りの石が見られるが、これは道路法面の防護ネットの押さえとして利用されており、元位置を保っていない。

これらの列石と裏込め状石は、地山である岩盤をカットして平坦面を作り出した上に置かれる。**土塁** 再検出時には列石の上に崩落土が堆積しており、土塁は確認できなかった。そこでトレンチ幅を拡張し壁面での確認作業を行ったが、ここでも土塁は確認されなかった。医王山に廻らされる列石は急傾斜地に置かれるため、上部の土塁が流出した可能性も考えられるが、他の地区で一部に見られるように本来から土塁が構築されていなかった可能性もあり、そのどちらであったかは判断できない。医王山における土塁の有無の確認は、今後の課題の一つである。

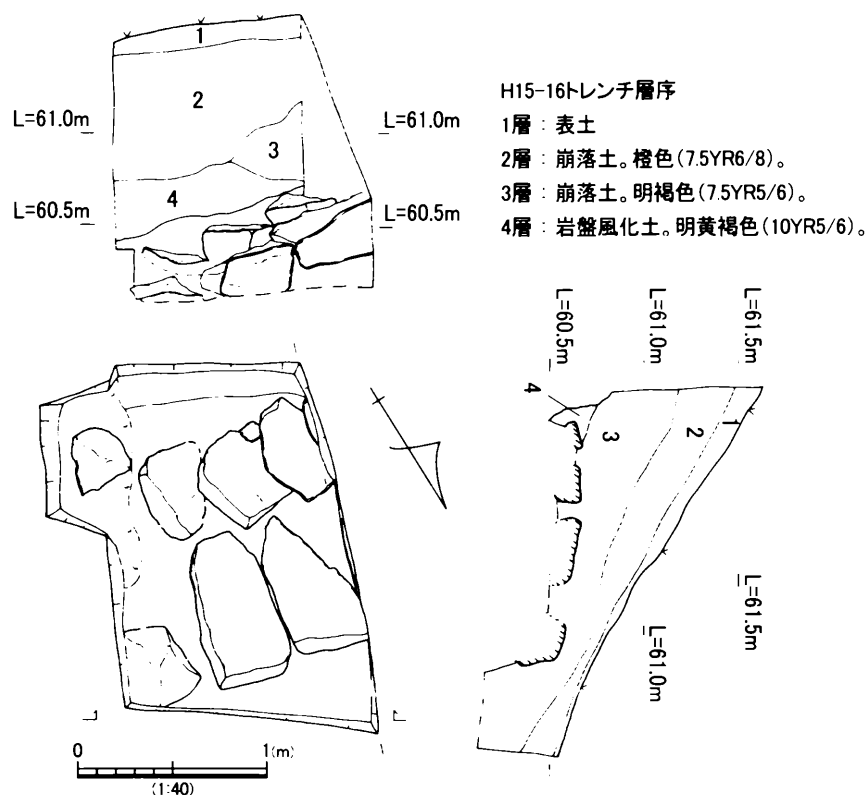


図 69 H 15-16 トレンチ平面・断面・立面図

北東斜面(図 70) H 15－16 トレンチで列石を確認した後、さらに周辺の踏査を続け断続的ながら列石の存在を確認した。そこでこれらの列石の状況を明らかにするため、一部で列石の表面検出作業を行った。

列石はH 15－16 トレンチからほぼ直線的に、等高線と交差するように医王山山頂に向け駆け上がる。このような状況は、永納山の列石の大部分が尾根の傾斜に沿うように比較的緩やかに連なるのとは様相を異にする。これらの列石は、H 15－16 トレンチから約 36m の区間で確認でき、その先は岩盤が切り立つ頂上部へ続く。そして、これらはおおむね 30～40 度の急斜面に並べられ、若干のずれはあるもののほぼ一列に並ぶ。なお、確認できた最も高所の列石は標高 78.3m に位置した。

個々の列石は、横幅 20～40cm 前後の小・中型の石材が主体であり、花崗岩の自然石もしくは粗割石が用いられる。

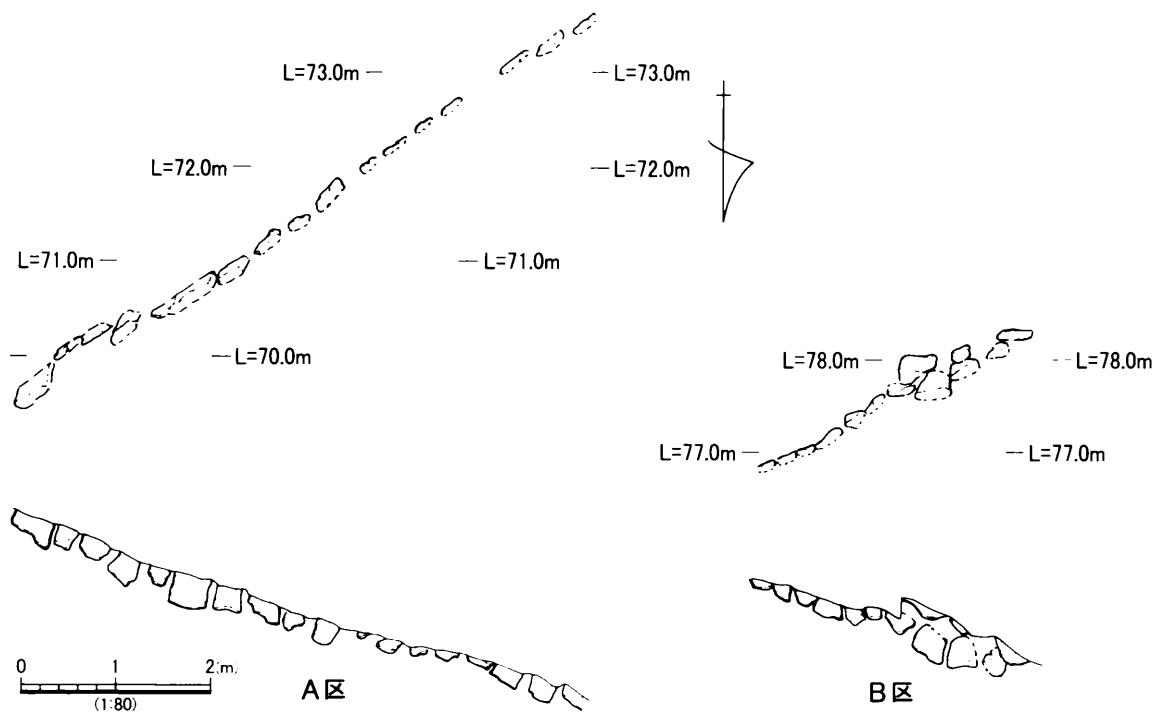


図 70 医王山北東斜面 列石平面・立面図

南西斜面(図71) 当所は過去のトレンチ調査の情報もないため、北東斜面に比べるとさらに列石確認が困難な場所であった。しかしここでも草刈りによる現状把握を進めるに従い、点的にはあるが列石を発見した。これらを手がかりとして頂上へ向け調査を続けると、その後さらに数カ所で岩盤を取り込みながら連なる列石を確認することができた。

これから本地区の列石も北東斜面同様に、等高線に交差するように30～40度程度の傾斜をもつ急斜面に並べられることが明らかとなった。

列石が確認された地点の中で最高所となるのは標高104m付近である。そしてこの付近では、列石の状況が良好に観察できたため、その特徴を以下に述べる。

列石は10.4mの長さで確認できる。傾斜は約20度とこれまで斜面を上ってきた列石に比べると緩やかであり、この地点をほぼ列石の最高所として、外郭線は北西斜面の岩盤へつながっていくものと考えられる。個々の列石石材は花崗岩の粗割石が用いられ、その大きさは横幅30～40cmと小型である。また、これらの列石は比較的面の整ったものが直線的に並べられていた。(渡邊)

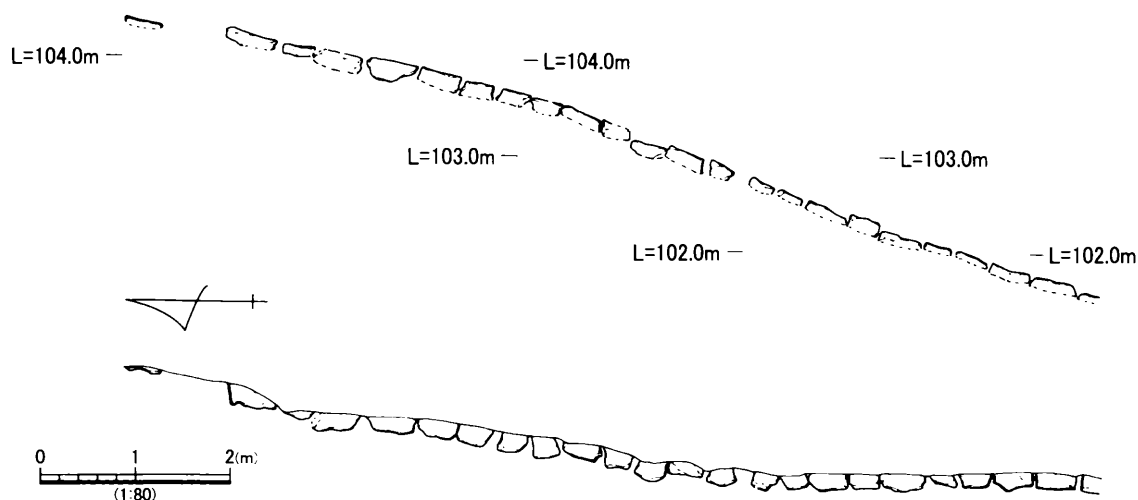


図71 医王山西斜面 列石平面・立面図

(3) 谷部西側丘陵の調査

医王山東麓から県道孫兵衛作壬生川線をはさんで東側に、JR 予讃線に向かって舌状に伸びる尾根がある。当尾根とその北側斜面は、戦後長らく蜜柑畑として用いられてきた場所であり、現在県道からその斜面を見ると、蜜柑の樹木の広がりの中に本来列石であったとおぼしき石が点散しているのが確認できる。医王山および当尾根の等高線の流れ、県道による山の切られ方を地図上及び実地で検討すると、当地は元来医王山の東麓が東に突出したものであり、さらに東側に位置する JR 線および小川が南北に走る永納山北側谷部の北西端部に該当する。斜面に見える石については、地権者からの聴き取りによって、かつては斜面の上のほうに列状に並んだ石がある程度残っていたこと、それらの石の多くが何者かにより持ち去られたこと、下の方の列状を為している石は地権者本人が転石を積み直したものであることが分かった。

15 年度調査では、現在斜面に残る石がほとんど転石であろうと予測した上で、当尾根における外郭線の確認を目的として斜面 2 ヶ所にトレンチを設定した。また、16 年度調査では、前年度調査の補足調査と谷部へ向けての追加調査を行った。

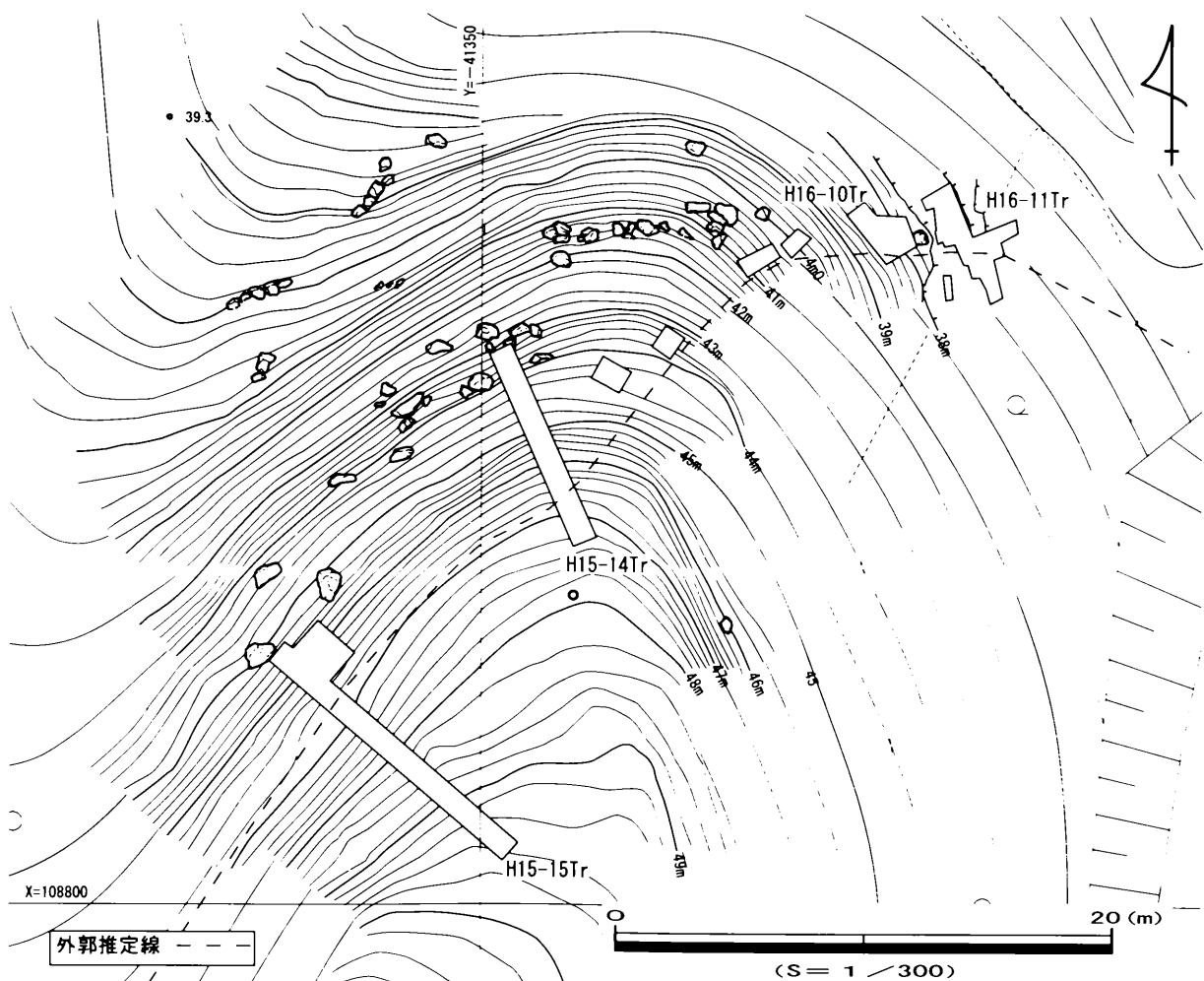


図 72 北部 谷部西側丘陵周辺地形図

H 15-14 トレンチ (図 73)

丘陵北側斜面の北東側に長さ 7 m × 幅 1 m のトレンチを設定し、H 15-14 トレンチとした。なお、のちに調査の過程でトレンチ下方に見られる石にぶつかるまで調査範囲を拡張したため、トレンチ長は最終的に約 7.5 m となった。

蜜柑畑表土である暗褐色土が斜面を薄く覆っているが、表土下の状況については場所によりだいぶ異なるため、トレンチ上端(南端)から北方約 3 m 地点までをトレンチ上位、約 3 m ～ 5 m 地点までをトレンチ中位、約 5 m 地点～トレンチ下端(北端)までをトレンチ下位として別けて説明する。

まず、トレンチ上位では、表土(1層)下に土のしまりや粘性、小礫の混じり具合の異なる数種の黄褐色土層(2層①～③)が厚く堆積しているが、これを掘り下げるとトレンチ上端から約 1 m 地点までの範囲において、5 mm 大の小礫を多く含みやや固くしめる褐色土(3層)の広がりを検出した。そこで、これが土塁の一部である可能性を考え、周辺を精査したうえで、トレンチの西側約 40 cm 幅を断割り、断面でも確認したところ、地山と見られる岩盤斜面があたかも短いテラス面を持つように削平されている状況が判明した。さらに、そのテラス面下方の岩盤斜面にやや固くしまり、粘性も比較的強い黄褐色土(4層)を積み足して平坦面を前方に広げているかのような状況を確認した。積み足し部分を含めた平坦面の奥行きは、西壁断面で見ると 70 cm を測る。また、その標高は、約 46.4 m である。さらにトレンチ上端付近には、やや固くしめる褐色／明黄褐色粘質土(5層①)が平坦面上方の岩盤斜面に覆い被さるように乗り、先に平面的に検出していた褐色土(3層)がこの粘質土と平坦面の間を埋めるように堆積している状況が分かった。また、トレンチ上方から 2 ～ 2.5 m 北方地点において現状で径約 45 cm、深さ 20 ～ 30 cm、底径 20 cm 強の円形プランの掘り込みを検出した。これは、風化岩盤ないし黄褐色風化土(6層①)を直接掘りぬいた穴であり、断面観察によると径 60 cm 強、深さ 30 ～ 60 cm に復元が可能である。柱穴の可能性も考えられる。

トレンチ中位では、トレンチ上端から 3.5 m 地点付近でやや固くしまった黄褐色土(8層)があたかも斜めに切り落され、奥行き 25 cm 程度の短い平坦面が形成されているような状況を確認した。3 ～ 3.5 m 地点付近にかけてこれらを覆い隠し、さらに上方へ乗る比較的しまりの強い明黄褐色土(7層 a)とにぶい黄褐色土(7層 b)の互層堆積が看取される。当該堆積の上側には攪乱があり、上方の土層とのつながりが不明瞭であるが、見方によってはこの互層堆積が一種の土堤のように見えなくもない。なお、4 ～ 5 m 地点付近にかけてトレンチにやや斜行する長さ約 1.2 m × 幅 50 cm 余の岩盤の窪みを検出したが、性格は不明である。確認は出来なかったが、過去の何らかの調査の痕跡であろうか。

トレンチ下位では、攪乱層の混じる複雑な土層状況が明らかになり、同時にほとんどの土層がしまりのない崩落土であることが分かった。9層・10層に対応する土で構成される互層状の土の堆積を平面的に確認したことから、土塁の可能性を考え、断割り調査も行ってみたが、風化岩盤層の上にこれらの土層がしまり無く緩やかに斜堆積している状況が確認されるのみで、列石や裏込め状石が確実に設置できるような所を特定することは出来なかった。

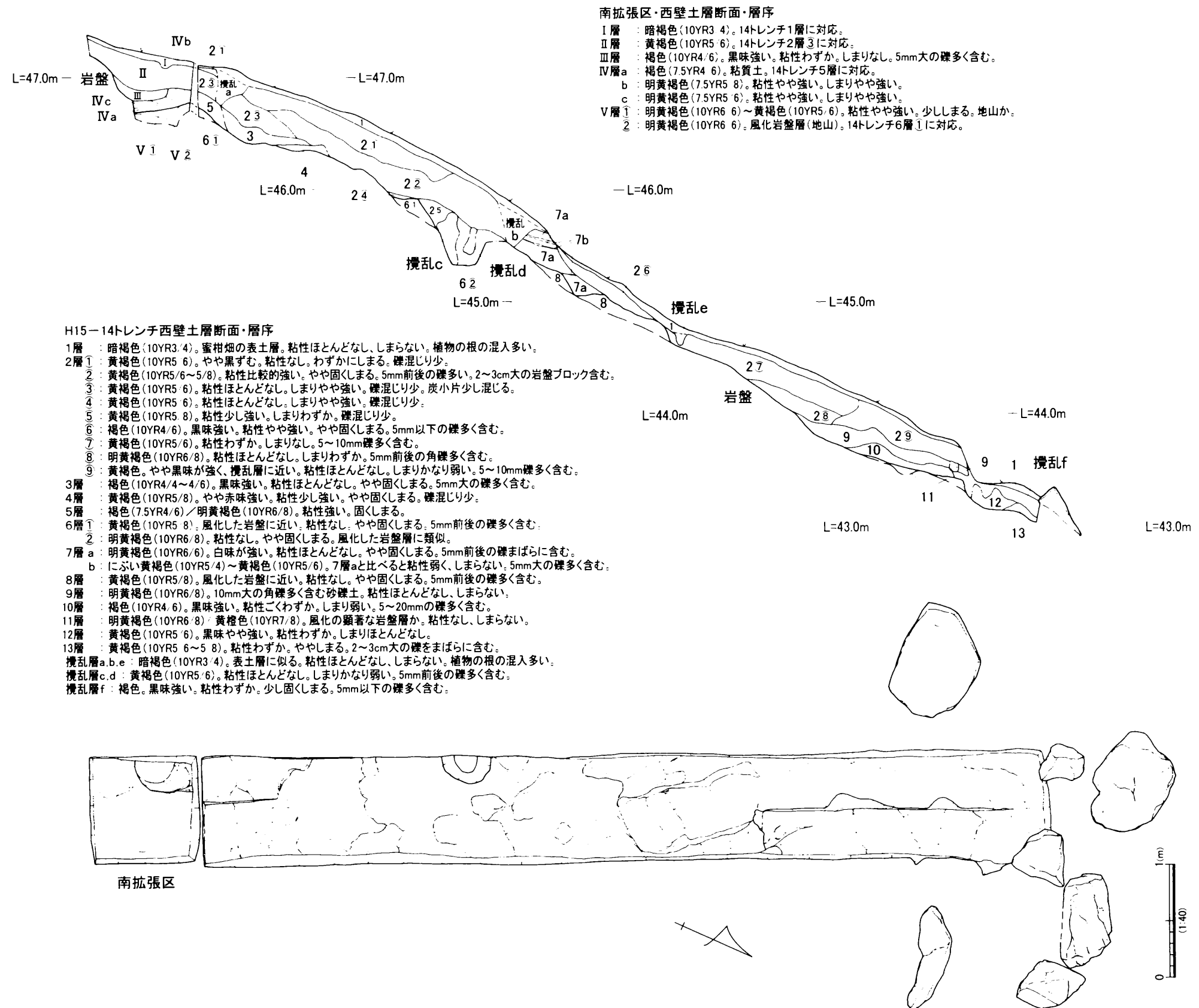


図73 H15-14トレンチ平面・断面図

H15-14トレンチ南拡張区 上述のように本トレンチにおいて中位～下位では、列石や裏込め状石を設置できる構造を有する場所は特定できなかったが、トレンチ上位では、地山と固くしまる土で作られた平坦面および土塁状の堆積層を検出し、当所がトレンチ内では最も外郭線の可能性が高い箇所と判断した。また、列石・土塁に関係するものか確証はないが、柱穴らしき掘り込みも検出している。そこで、16年度の調査において上端付近で検出された土塁状の堆積層の性格を明らかにする目的で、調査区をトレンチ上端から南へ1m拡張し、これをH15-14トレンチ南拡張区とした。

掘り下げを進めた結果、14トレンチ上位と同様に表土下に厚い黄褐色土層(Ⅱ層)を検出し、これを除去したところややしまりの強い岩盤風化土が面的に広がりを見せた。拡張区南側では、この岩盤風化土のしまりが比較的固く地山そのものと判断できたが、北側ではかなり風化が進んだ感があったので、念のために西側に30cm幅の断割りを行った。その結果、風化岩盤層をほぼL字状に削平し、奥に向かって僅かに下がっていく平坦面を検出した。その上に明褐色粘質土(Ⅳ層b・c)がブロック状に混入した比較的固くしまる褐色粘質土層(Ⅳ層a)が堆積し、さらに粘質土層と南側の岩盤を掘り込むようにしまりが弱く、粘性もない褐色土層(Ⅲ層)が堆積していることが分かった。ここで検出された粘質土層(Ⅳ層a)は、14トレンチ南端検出の粘質土(5層①)にそのまま対応することは明らかであり、当拡張区西側から14トレンチ上端1m地点の範囲において、地山削平や盛り土によって二段の平坦面を形成し、そこに粘質土が用いられていた可能性が認められる。但し、拡張区および14トレンチ上端付近で共通して見られる比較的しまりが弱く、黒味がかかった褐色土の堆積など、攪乱なのか何らかの遺構に伴うものなのか不明な点も多い。

以上のように、H15-14トレンチ及び同南拡張区においては、地山の岩盤の風化が激しいせいもあり、明確な外郭線の痕跡は確認できなかったが、トレンチ上位付近においては地山整形・盛土による平坦面、粘質土の堆積、柱穴状の掘り込みが確認され、強いて言えば当箇所が外郭線に当たる可能性が指摘できる。(半沢)

H15-15 トレンチ(図74)

H15-14トレンチの設定と併行して、同じく当尾根における外郭線の確認を目的として北斜面南西側に長さ12m×幅1mのトレンチを設定し、H15-15トレンチとした。なお、のちに調査の過程でトレンチ下方に見られる大型の石にぶつかるまで調査範囲を拡張したため、トレンチ長は約12.5mとなった。

表土の暗褐色土が斜面を薄く覆っているが、トレンチ長も長大であり、表土下の状況が場所によってかなり異なるため、トレンチ上端(南端)から北方約4m地点までをトレンチ上位、約4m～8m地点までをトレンチ中位、約8m地点～トレンチ下端(北端)までをトレンチ下位としてそれぞれ説明する。

トレンチ上位では、表土下に薄い堆積土層がかろうじて見られる状況で、概して10cmも掘り下げればにぶい黄橙色の岩盤風化土が検出された。これをさらに掘り下げると、すぐに風化の進んだ岩盤層(地山)に到達することが分かった。岩盤風化土層が奥行き20cm位の短いテラス状をなすところもあるが、とても列石を設置できるようなものとは認められない。

トレンチ中位になると、表土と地山斜面の間の堆積土の厚みが若干増加してくる。堆積土は、ほとんどが崩落土と見られるが、にぶい黄褐色土(西壁断面6層、以下6層)や明黄褐色風化土(8-①層)、にぶい黄褐色弱粘質土(8-②層)、明褐色粘質土(9-①層)、明黄褐色弱粘質土(9-③層)のようなやや固くしまる土層の堆積が見られる。なお、トレンチ上端から約5m地点付近に岩盤斜面を掘りぬいた方形の土坑を検出した。掘り方は、かなり整った隅丸方形プランを呈し、垂直気味に岩盤を切り落している。底面も整った方形プランを呈し、ほぼ平らに面が削られている。上端の南北最大幅は95cm、底面の南北最大幅は85cm、現状の深さは、斜面上側で35cm強、斜面下側で10cm強を測る。埋土下層に黒味がかった褐色弱粘質土が堆積しているが、その粘質土上面から漁網か風糸のような紐の断片が出土した。周辺住民の方々から聴き取った話によると、1950年代後半頃永納山周辺で盛んに蜜柑栽培用の方形穴を掘り、医王山などからオニシダを刈って来て一年間方形穴に入れて肥料としたらしい。当所で検出された方形土坑はまさにそれに該当し、埋土下層の褐色土層はオニシダの肥料化した土層であろうと推測される。

トレンチ下位においては、表土下にトレンチ中位から続くにぶい黄褐色弱粘質土(8-②層)が一樣に見られる。さらに、8-②層を除去すると全体的に明黄褐色土の斜面が検出されてきたため、トレンチ西側に幅50cmの断割り調査を行って土層の状況を確認めた。トレンチ上端から8～9m地点一帯では、固くしまる明黄褐色土(12-②層・13-②層)とやや固くしまる暗オリーブ褐色土(10層)による平坦面(標高約46.9m)を確認した。また、9～10.5m地点一帯では、12-②層・13-②層が斜堆積しており、西壁断面で言うと、標高約46.25m、46.6mなどに奥行き15～30cmの平坦面が形成されているという見方も出来る。さらに、10.5～12m地点一帯では、やはり固くしまる明黄褐色弱粘質土(13層①)が急勾配で堆積している他、12m地点付近～トレンチ下端一帯では、やや固くしまる明黄褐色弱粘質土(13層③)をしまりがなく黒味がかった褐色土(11層③)が切り、その上に複数のしまりのない黄褐色土層(11層①・②)が堆積する状況が明らかになり、なんらかの攪乱土層であろうと判断した。なお、8.5～10m地点付近にかけてH15-14トレンチでも見られたような長さ1.5m程の断割り状の窪みを検出したが、性格は不明である。

H15-15トレンチ東拡張区 本トレンチの調査によって明確な外郭線の痕跡といえる箇所が特定できなかったことを受け、16年度の調査でその特定を目的として、トレンチ上端から9.5～12m地点の範囲を東側に幅1.5m拡張し、H15-15トレンチ東拡張区とした。

掘り下げてゆくと、表土下に本トレンチの8-②層に対応する崩落土(Ⅱ層)が厚く斜堆積し、これを除去すると、拡張区上半部においては、しまりの弱い明黄褐色土(Ⅵ層)、拡張区中央部ではやや固くしまる明黄褐色土(Ⅶ-①層)、拡張区下半部においては、Ⅱ層より黒味がかった黄褐色ないし褐色土(Ⅲ層)、部分的に黒味がかった明黄褐色土(Ⅳ層)を順に検出した。一見すると全て明黄褐色の風化土がだらだらと落ちてゆく斜面が検出されたような状況であったため、拡張区東側に幅40cmの断割り調査を実施した。その結果、地山そのものと考えられる硬い明黄褐色ないし黄橙色土(Ⅶ-②層)を基盤として、拡張区下半部では上述のⅦ-①層が厚く堆積し、Ⅶ-②層を切る形で上述のⅣ層下ににぶい黄褐色土(Ⅴ層)が堆積すること、拡張区上半部では、Ⅶ-②層上に上述のⅦ-①層が堆積していることが分かった。拡張区東壁とH15-15トレンチ西壁の土層を見比べると、基本的な土層の成り立ちはやはり共通していると看取され、Ⅲ～Ⅴ層は、それぞれトレンチ

西壁11-①～③層に相当する可能性が高い。そうすると、しまりの強い黄褐色土Ⅶ-①・②層は、13-①～④層にほぼ対応し、Ⅵ層は12-②層に対応する可能性が高い。結局、当拡張区においては、東壁でいうと10.5m地点付近の標高45.85m辺りに奥行き約40cm、9.7m地点付近の標高46.45m辺りに奥行き約20cm、標高46.3m辺りに奥行き約25cmの短いテラス状の平坦面を想定することができた。

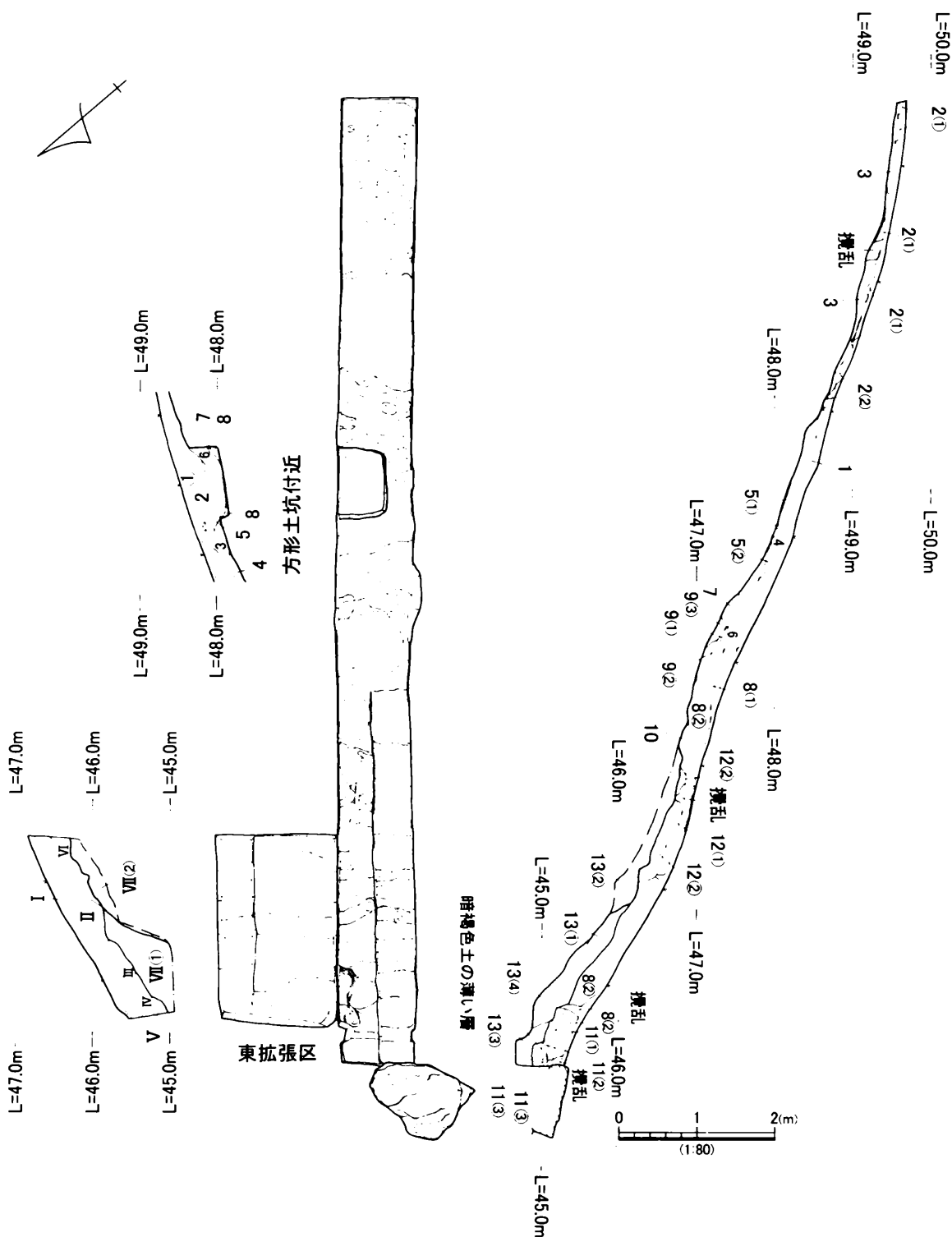


図74 H 15-15トレンチ平面・断面図

H15-15 トレンチ西壁土層断面・層序

- 1層 : 暗褐色(10YR3/4)。果樹園の表土層。粘性なく、しまり弱い。
- 2層① : にぶい黄褐色(10YR5/4)。粘性なし。ややしまる。
② : にぶい黄褐色(10YR6/4)。粘性わずかに有り、ややしまる。2～3mmの砂粒多く含む。
- 3層 : にぶい黄褐色(10YR7/4)。岩盤風化土。5mm前後の砂粒を多く含み、砕くとキメ細かい砂質土になる。粘性・しまりわずかに有り。
- 4層 : 黄褐色(10YR5/6)。粘性なし、しまらない。2～3mmの砂粒わずかに含む。
- 5層① : にぶい黄褐色(10YR7/4)。3層に似る風化土。5mm前後の砂粒を多く含み、砕くとキメ細かい砂質土になる。粘性・しまりわずかに有り。
② : 明黄褐色(10YR7/6)。岩盤風化土混じりの粘性ほとんどなく、しまりのない砂礫土層。
- 6層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)。5mm前後の砂粒を多く含むキメの粗い。粘性なし、やや固くしまる。
- 7層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)。やや褐色(10YR4/4)寄り。6層に似るがより黒みが強い。粘性なく、しまり弱い。”
- 8層① : 明黄褐色(10YR7/6)。岩盤風化土で構成される。粘性なく、ややしまり強い。
② : にぶい黄褐色(10YR5/4)。5mm前後の砂粒を多く含むキメの粗い土。粘性やや強く、やや固くしまる。”
- 9層① : 明褐色(7.5YR5/6)。やや赤みがかる。粘性やや強い。
② : 黄褐色(10YR5/6)。5～10mmの小礫を多く含むキメの粗い土。粘性は少しあるが、しまりはない。
③ : 明黄褐色(10YR6/6)。粘性やや強く、やや固くしまる。
- 10層 : 暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)。西壁で最も暗い層。5mm以下の砂粒を多く含む。粘性・しまりわずかに有り。
- 11層① : 黄褐色(10YR5/6)。黒みがかった汚れた土。黒み②<①<③。小礫混入少。粘性わずかに有り、しまりやや弱い。
② : 黄褐色(10YR5/8)。やや黒ずむ。小礫の混じり少ない。粘性わずかに有り、しまりやや弱い。
③ : 褐色(10YR4/4)。10層の次に黒みが強い層。5mm前後の砂粒含む。粘性わずかに有り、しまり弱い。
- 12層① : 明黄褐色(10YR7/6)。小礫の混じりは少なく、暗褐色の土がモザイク状に混入。粘性ほとんどなく、しまり弱い。
② : 黄褐色(10YR6/6)。小礫の混じり少ない。粘性ほとんどないが、しまり強い。
- 13層① : 明黄褐色(10YR6/6～6/8)。5～10mmの小礫を含む。粘性やや有り、しまり強い。
② : 明黄褐色(10YR7/6)。岩盤風化土が固まった状態のもの。岩盤そのものか。粘性ほとんどないが、しまり強い。
③ : 明黄褐色(10YR6/8)。5mm以下の砂粒を含む比較的キメの細かい風化土。粘性やや強く、少し固くしまる。”
④ : 明黄褐色(10YR6/6～6/8)。5mm前後の砂粒を含む岩盤風化土及び岩盤ブロック含む。粘性やや有り、わずかに強くしまる。

H15-15 トレンチ東拡張区東壁土層断面・層序

- I 層 : 暗褐色(10YR3/4)。果樹園の表土層。粘性なし、しまらない。植物の根の混入多い。H15-15 トレンチ西壁の1層に同じ。
- II 層 : 黄褐色(10YR5/6)／褐色(10YR4/6)。暗褐色土や明黄褐色土がブロック状に混じる。粘性わずかに有り、しまりやや弱。礫混じり少。
- III 層 : 黄褐色(10YR5/6)／褐色(10YR4/6)。II 層より全体的に黒味がかかった土。粘性わずかに強い、わずかにしまる。礫混じり少。
- IV 層 : 明黄褐色(10YR6/6～6/8)。部分的ににぶい黄褐色土が混入。5mm以下の小礫をまばらに含む。粘性やや有り、しまり強い。
- V 層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)。全体的に黒ずみ、III 層よりさらに黒味強い。粘性少し強、しまりやや弱い。礫混じり少。
- VI 層 : 明黄褐色(10YR6/6～6/8)。VII 層①よりも白味部分少なく、全体的に赤みが強い。粘性わずか、しまりやや弱い。
- VII 層① : 明黄褐色(10YR7/6)。部分的に黄褐色(10YR7/8)が横方向に混ざる。VII 層②よりしまりがなく風化進む。粘性やや強。やや固くしまる。
② : 明黄褐色(10YR7/6)／黄褐色(10YR7/8)。岩盤に近い。粘性ややあり。固くしまる。

H15-15 トレンチ東壁(方形土坑付近)土層断面・層序

- 1層 : 暗褐色(10YR3/4)。果樹園の表土層。粘性なし、しまりなし。西壁断面の1層に同じ。
- 2層 : にぶい黄褐色(10YR6/4)～明黄褐色(10YR6/6)。粘性わずかに有り、ややしまる。2～5mmの砂粒含む。破碎した岩盤ブロックをまれに含む。西壁断面の4層に対応する。
- 3層 : 明黄褐色(10YR7/6)～にぶい黄褐色(10YR7/4)。しまりのない岩盤風化土。西壁5層②に対応。
- 4層 : にぶい黄褐色(10YR6/4)。3層に近いが、粘性わずかにあり、少ししまる。西壁6層①に対応。
- 5層 : にぶい黄褐色(10YR5/4)～黄褐色(10YR5/6)。上層と比べ黒味強い。粘性わずかでややしまる。礫の混じり少。新しい堆積土の一種。
- 6層 : にぶい黄褐色(10YR6/4)。粘性なく、しまりない。5mm以下の小礫まばらに混入。土坑埋土。
- 7層 : 褐色(10YR4/6)。黒味強い。しまりはないが、粘性やや強。土坑埋土。
- 8層 : 明黄褐色(10YR6/6)。粘性わずか。しまりない。2～3mmの小礫多く混入。土坑埋土。

外郭線 当トレンチ下方に転落している列石は、奥行き1m弱を測る大型の石であり、周辺にみられる石も比較的大型であるから、これらを設置するには、ある程度奥行きのある頑丈なテラス状平坦面が必要であったと推測される。その意味では、H15-14トレンチと同様、東拡張区を含む当トレンチでも確実な外郭線構造を示す箇所は検出できなかった。先にも述べたように、両トレンチが設定された当該斜面は、全体的に岩盤の風化が顕著である上、蜜柑畑として開発され、外郭線構造もかなり崩壊している可能性がある。ただし、調査によって得られた情報を最大限に汲み取れば、H15-15トレンチ西壁の標高約46.9mの平坦面(奥行き70cm超)、標高46.6mの平坦面(奥行き20cm弱)、標高約46.25mの平坦面(奥行き30cm)が列石設置面になる可能性を有する。これは、当トレンチ東拡張区で検出された三箇所の平坦面にそれぞれ対応している可能性もある。

そこで、H15-14トレンチでの調査結果を踏まえて考えてみたい。H15-14トレンチの平坦面は、標高約46.4mで、奥行き70cmである。先に述べたとおり、当地は医王山東麓が東に突出したものであり、外郭線(列石線)は、中央谷部から当尾根北斜面へと西上し、北斜面を等高線に平行気味に進んだ後、県道付近で本来あったであろう尾根を伝って医王山東斜面を駆け登ったと見るのが自然である。したがって、H15-14トレンチからH15-15トレンチへ至る外郭線の標高は、現地形の等高線の流れから判断すると、水平ないしやや西へ向かって高くなる可能性が高い。よって、H15-14トレンチの平坦面(標高46.4m)から続く平坦面としては、H15-15トレンチ内の標高46.9mの平坦面(奥行き70cm超)と標高46.6mの平坦面(奥行き20cm弱)が妥当な候補となるが、奥行きの十分さを考慮すると、やはり前者の標高46.9mの平坦面の方がより蓋然性が高いと思われる。以上のように、H15-14・15両トレンチでの調査から推測すると、H15-14トレンチにおける上端付近とH15-15トレンチ西壁における8.5m地点付近を結んだラインが外郭線となるのではないかと推定しておきたい。

(半沢)

H16-10 トレンチ(図75～77)

H15-14トレンチ北端から北東方向に当たる標高40～42mの斜面上にも20個弱の大小の石が帯状にかたまっているのが認められているが、これらもH15-14トレンチ周辺の転石と同様に表土・上層の崩落土にはまっており、明らかに新しい時期に転落したものとみられる。したがって、かなり多くの列石が既に崩落している可能性が高いと見込んだうえで、H15-14トレンチから北東方面への外郭線を明らかにするため、ピンボールによるボーリング調査を実施した。その結果、JR予讃線西側の小川へ落ちる急斜面に向かって蜜柑畑斜面が傾斜変換する落ち際の約1m西側、H15-14トレンチ北端からおよそ16m離れた地点において列石らしき石が埋もれていることを確認した。そこで、この石が列石であり、外郭線に関係するものかどうかを明らかにするために、等高線に平行する横2.5m×縦0.9mのトレンチを設定し、H16-10トレンチとした。調査の過程で、斜面落ち際に露出している石との関係を確認する目的で下方に拡張を行ったため、トレンチ南辺は約1.4mとなり、最終的に長方形に台形を付加したような現在のプランになった。

列石 調査の結果、表土(1層)、にぶい黄褐色の崩落土(2層)下の黄褐色土(3層)に埋もれ、地山の風化岩盤斜面上に斜めに傾いて止っている列石2個を検出した。西側の細長い列石は、横幅約1.1m、奥行約40cm、厚さ約16cmで、東側の列石は、横幅約60cm、奥行約50cm、厚さ推定約18cm

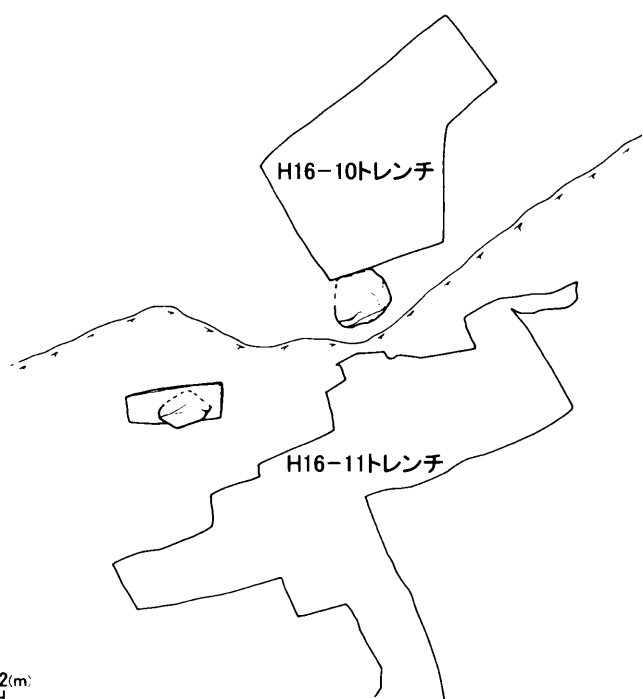
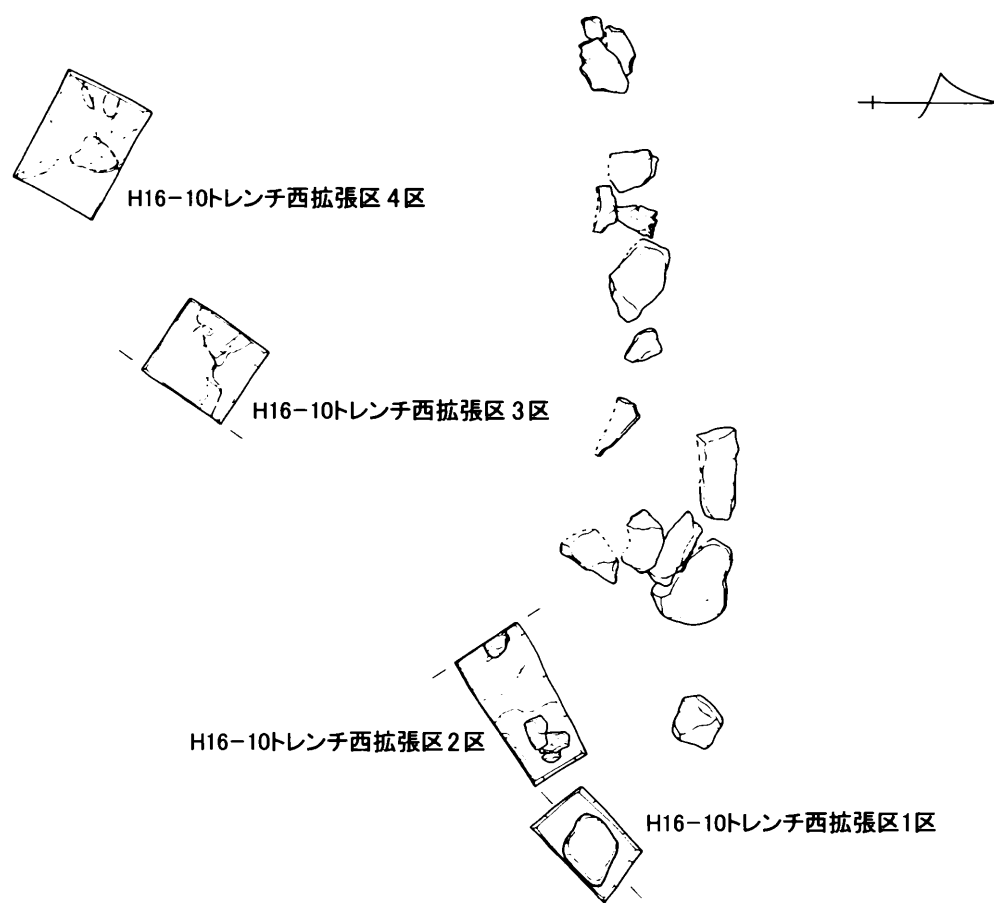
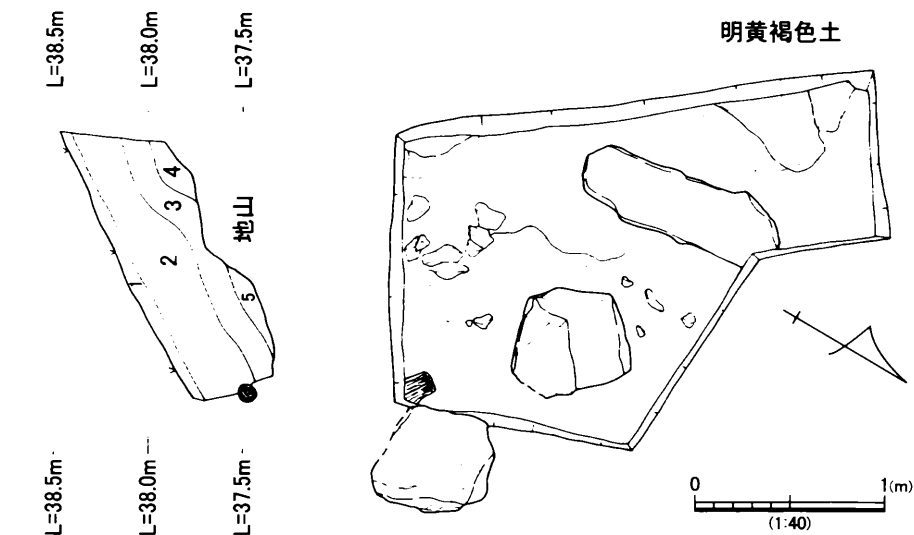


図 75 H 16-10・11 トレンチ周辺平面図

を測る。両者とも、東下方へ30～35度の傾斜で傾いている。なお、トレンチ東端に接し、トレンチ外側に露出していた石は、質感・形状・大きさからみて列石である可能性が高いが、1層・2層上位に食い込んでいることから比較的新しい時期に崩落して当所で止ったか、置き直されたものと判断した。

また、トレンチ北西隅付近において岩盤上に色合い・質感の異なる固くしまった明黄褐色土の堆積を検出した。この明黄褐色土は岩盤上に厚みをもって貼り付いており、土塁の一部と理解される。一方、トレンチ南壁断面にも表れているように、トレンチ西端付近や西端から50cm東方付近において3層下の岩盤や4層(やや固くしめる明褐色ないし黄褐色風化土)によって傾斜変換や平坦面が形成されている。これらの状況から、岩盤を削るか、岩盤風化土を固めることによって平坦面を形成した上に列石を設置し、土塁を乗せた可能性が指摘できる。こうしたトレンチ内の状況から判断して、外郭線は、トレンチ内より幾分南西方向にあったと推測する。



H16-10トレンチ層序

- 1層：表土層。
- 2層：にぶい黄褐色(10YR5/4)。粘性ほとんどなし。しまり弱い。5～10mmの礫多く含む。
- 3層：黄褐色(10YR5/8)。やや赤味強い。キメ細かいが3～5cm大の礫多く含む。粘性なし。しまりやや弱い。
- 4層：明褐色(7.5YR5/8)／黄褐色(10YR5/8)。風化した岩盤状。キメの粗い砂粒多し。

図 76 H 16-10 トレンチ平面・断面図

H16-10トレンチ西拡張区1～4区 本トレンチで崩落土下より列石が検出されたことを受け、さらに西方の斜面をボーリング調査したところ、数カ所で列石存在の可能性を得たため、その確認を目的として4カ所に任意で小トレンチを設定し、東から順にH16-10トレンチ西拡張区1～4区(以下1～4区)とした。まず、1区において表土下の崩落土を除去したところ列石1個を検出した。この列石は、平面形が方形で、前面および上面がほぼ平坦な面を呈し、崩落土下の傾斜した岩盤斜面に約20度の傾きで止まっていた。法量は、横幅57cm、奥行約60cm、厚さ12cm超を測る。2区では、崩落土下の岩盤斜面に3個の石が折り重なるように止まっている状況を検出した。これらの石は、いずれも長辺が20～30cmと小形で、やや不整形な角礫であり、1区で検出されたような列石ではないが、岩盤が自然に割れて出来たものでもない。おそらく外郭線に用いられた裏込め用の石が流れ落ちて当所に止まったものと推測する。また、2区上端で岩盤を掘りぬいた柱穴状の掘り込みを検出した。平面形は楕円形気味で、掘り方の径27cm前後、底径約6cm、深さ22cm強を測り、断面形は先の窄まる深鉢状を呈する。3区では、表土・にぶい黄褐色土・にぶい黄橙色崩落土(1～3層)を除去すると、北西側には風化岩盤の斜面が現れたが、南東側では、風化岩盤斜面に乗る比較的しまりの良い明黄褐色土が面的に広がりを示した。また、3区東端付近では非常に緩やかな傾斜の平坦面を検出した。なお、調査区内でみるかぎり、この平坦面の方向性は現地形の等高線と並行しているように見える。4区では、表土層下の黄褐色崩落土を除去すると、凹凸の顕著な岩盤斜面を検出した。しかし、精査の結果、単純な岩盤斜面ではなく、所々にしまりの良い明黄褐色土の固まりが認められた。西拡張区3・4区で検出したこれらのしまりの良い明黄褐色土は本トレンチ検出の土塁の痕跡と色合いや質感が類似しており、土塁が崩落した痕跡であると推測した。

これまで谷部西側丘陵では、転落して斜面に露出して留まっている列石しか確認されていなかったが、当トレンチ及び拡張区の調査によって埋没していた列石と土塁の痕跡を検出できたことは大きな成果であった。外郭線の流れに関しては、上述のようにH16-10トレンチ検出の東側列石の後方(西南側)からH15-14トレンチ上端付近をつなぐラインが推測される。このラインは、H16-10トレンチ西拡張区2区で検出した柱穴状掘り込みの後方(南西側)をほぼ通ると考えてよい。この掘り込みは、同様に推定外郭線の北側に接するH15-14トレンチ上端付近検出の柱穴状掘り込みとの関連が注目されるが、今回の調査では判断材料に乏しいため、外郭線構造に関連する遺構の可能性があると指摘するに留めたい。(半沢)

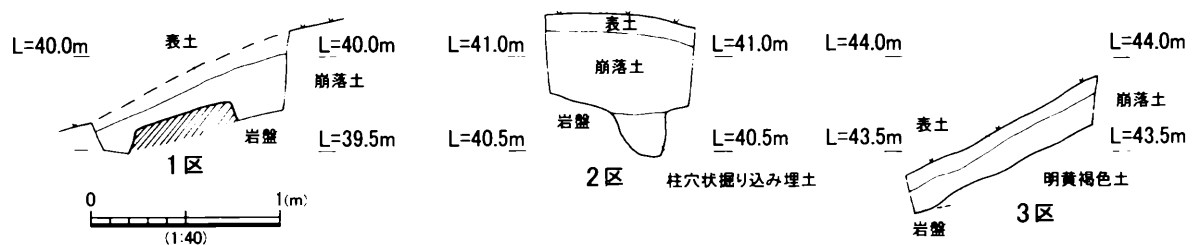


図 77 H 16-10 トレンチ西拡張区断面図

H 16-11 トレンチ(図 75・78)

H 15-14・15 トレンチおよびH 16-10 トレンチを設定した医王山東麓の舌状尾根北斜面は、H 16-10 トレンチのすぐ東側で急激に傾斜変換し、その崖下はJR 予讃線西側の小川になっている。この小川は、やや上流で谷に沿って線路の東側をしばらく併走した後、小型の鉄道橋をくぐって線路西側に出て、H 16-10 トレンチ東側の崖下へ流れてくるものである。この鉄道橋付近は、前調査において、「水門推定地」とされているが、詳細な調査がなされなかった場所に該当する。当所は、昭和50年代の調査時点で既にそれ以前の採石や線路敷設により顕著な破壊を受けており、その後の小川の改修や土砂災害等により原状はかなり変化しているとみられ、「水門」の痕跡は当時より更に不明瞭になりつつある。

そこで、平成16年度調査では、まず西方からつながってくる外郭線構造が存在するのかどうかを明らかにするために、H 16-10 トレンチと小川の間周辺の急斜面をピンポールによりボーリング調査した。その結果、斜面中腹付近で列石存在の可能性を得たため、その周囲に東西約1.5×南北1.2mの調査区を設定し、H 16-11 トレンチとした。後に、崖下の小川近くまでの状況を明らかにするために約60cm幅の拡張区を東方に伸ばし、また、南側の列石の有無を確認する為に約60cm幅で約1.5m南方へ拡張を行った。さらに、北西側の斜面上方に露出している一見列石に見える石の実態を明らかにするためにその一帯東西約1.5m×南北約3mを調査し、その他任意で部分的に拡張を行ったため最終的に図のような不整形なトレンチになった。以下、各部分ごとに調査結果を述べる。

まず中央部では、横幅70cm、奥行約1m、厚さ35cm前後を測る大型列石1個を検出した。この列石は、上面・前面にほぼ平坦な面を持つ。この列石上面の西側端部付近の縦約15cm×横約50cmの範囲に最大4cm程の厚みを示す非常に固くしまるにぶい黄橙色土の固まりが乗っていた。また、列石北側には、列石に潜り込むように固くしまるにぶい黄橙色土(但し、前者よりも灰色味が強く、キメが粗い)の広がりを検出した。これらの土の固まりについては、非常に固くしまることから、前者は、列石に乗っていた土塁の痕跡であり、後者は、列石の置土の一部ではないかと推測した。また、列石北側や北東側には、長さ25cm前後の小型の礫が複数認められたが、これらは列石に伴う裏込め状の石である可能性がある。一方、列石の背後30cmには、やや硬質の岩盤層が南北に広がりを見せるが、岩盤は切り落されたように平坦面を前面に向けた状況が検出された。さらに列石背後において断割り調査を行った結果、背後を埋める褐色土の下にほぼ平坦な地山が検出されたことから、岩盤の断面L字状カットと列石のセット関係が認められ、上述の置土は、地山の不足部分を補う役割を果たしていた可能性がある。なお、列石は、25度前後の傾斜で東側に傾いて止まっている。

次に、東拡張部では、表土とその下の黄褐色砂礫土を除去した結果、上記の列石の東側下方には長さ80cmを超えるような複数の大型石が調査区東端の小川付近まで斜めに積み重なっているような状況が分かった。これらの大型石は、比較的大型の列石によくあるような平石状ではなく、太い角柱状や岩塊状を呈しており、当トレンチの調査だけでは、人為的に積まれたかどうか判断できなかった。当所の斜面の傾斜は約40度前後であり、大型石もほぼ同様の傾斜で積み重なっている。なお、このような大型石は、すぐ北側の小川沿いでも見られることを付記しておく。

一方、南拡張部では、列石や裏込め状石は見つからず、岩盤が破碎してできた礫や岩盤風化土が検出された。南側は1 m近く掘り下げたが、岩盤風化土が面的に広がりを見せたところで、ほぼ地山まで到達したとみなし、発掘を停止した。西側ではやはり岩盤が切り落とし状にカットされている状況が看取できた。岩盤切り落とし上部には、一見横幅30cm前後の列石が乗っているように見えるが、これらは岩盤が木根などで割られてできたものである。

最後に、北西拡張部では、まず、北端部崖面上方に調査前から露出していた石の周辺を精査したところ、東に前面を向け、上面もほぼ平らな列石状の石2個を確認した。両者とも横幅55～60cmを測る中型の石である。また、それらの間を深掘したところ、奥から平らな前面を東に向ける横幅30cm超の石1個を検出した。一方、拡張部南側では、表土下の明黄褐色崩落土を掘り下げると、すぐに硬質の岩盤が現れた。この岩盤も切り落とし状にカットされており、広い平坦面を東に向いている。岩盤前面を約35×80cmの範囲で深掘してみると、赤みを帯びたしまりのない黄褐色土のすぐ下で地山の風化岩盤層が検出された。また、南側端部付近で東へ向けて斜め落ちたような横幅50cm×奥行30cm前後の石を検出した。これに関しては、すでにグラグラ動いており完全に崩落した石であるが、位置・質感・形状から判断すると岩盤が破碎してできた平石状の礫である可能性が高い。

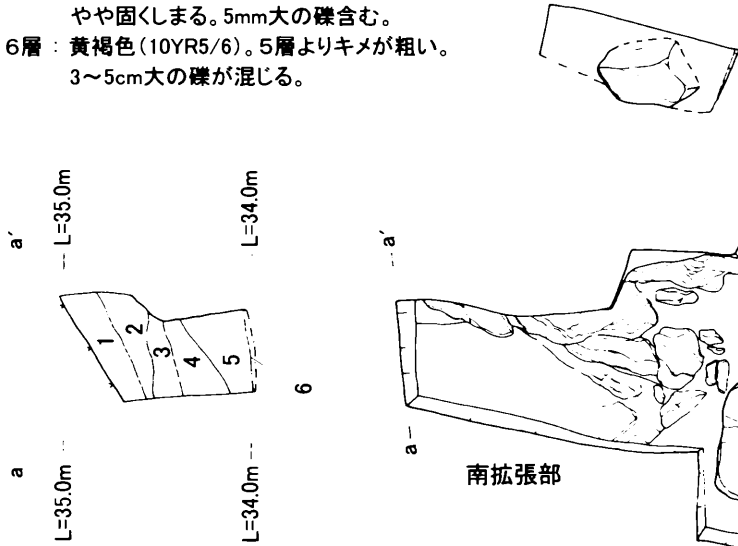
なお、当トレンチ南拡張部の西側上方斜面において列石に類似した石が1個露出しており、周囲一帯を精査したところ、横幅55cm前後の平坦な面を持った方形の石が斜面に止まっていることが分かった。石材は花崗岩の粗割石ないし自然石で、当遺跡でよく見られる中型の列石と変わるところはなかった。

以上のような調査結果の要点を整理すると、中央部・南拡張部・北西拡張部において共に西側で岩盤の広がりが見られ、しかも岩盤の切り落としを確認した。特に、中央部と北西側拡張部南側で大きな切り落とし面が東を向いている。これらの岩盤切り落としの前面にはテラス状平坦面が形成されている可能性が高い。特に中央部では、テラス状の平坦面に置土的な盛土が付加され、少しずれ落ちているが大型の列石が乗っているのを確認した。列石上面には固くしめる土塁状の土の固まりが部分的に残っていた。南拡張部の西側上方や北西拡張部の北西隅付近で列石に類似した石を複数検出した。これらの石が列石なのか、岩盤が割れて列石状になったものなのか、また、仮に列石だとしても現位置にあったものなのか、崩落してきたものなのか、今回の調査のみでは答えを出すのが困難である。但し、H15-14トレンチ方面からH16-10トレンチへ続く推定外郭線を上述のようにやや内側(南側回り)で捉えた場合、当トレンチ北西拡張部の北西隅の列石状の石3個が外郭線外に並ぶことになり不自然な感が否めない。一方、東拡張部では、急斜面に積み重なった複数の大型石を検出した。人為的な構造物か否か、また仮に人為的な構造物である場合、それが造られたのはいつかという問題があるが、今回の調査からは判断がつかなかった。

以上を総合的に勘案すると、医王山東麓の舌状突出部北斜面を東行してきた列石線は、H16-10トレンチ上方の岩盤に接続し、少なくともH16-10トレンチ中央部の列石をなんらかの形で取り込んだことは確かである。いずれにせよ、当トレンチで検出した切り落とし状の岩盤や多様な大小の石の状況から見て、当所は「水門推定地」周辺にふさわしい状況を備えており、さらなる実体解明の為に付近一帯の全面的な再調査がいずれ必要になってくると思われる。(半沢)

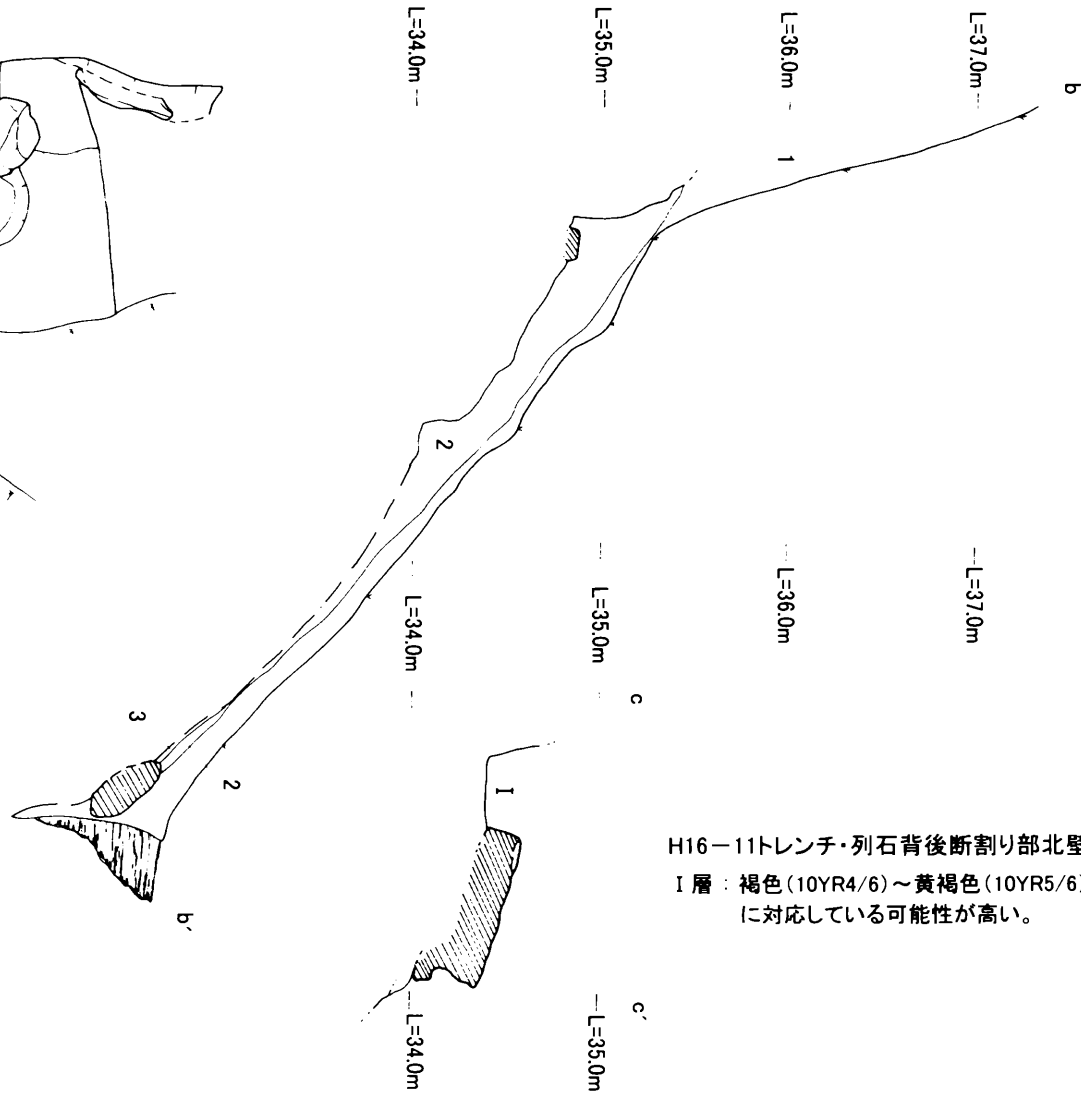
H16-11トレンチ南壁土層断面・層序

- 1層：オリーブ褐色(2.5Y4/3)。表土層。腐葉土。
- 2層：黄褐色(2.5Y5/6)。崩落土。やや黒味強い。
- 3層：黄褐色(2.5YR5/3)。崩落土。黒味強い。
キメ細かいが5~40mm大の礫含む。粘性なし。しまり弱い。
- 4層：黄褐色(10YR5/6)砂礫土主体。浅黄色(2.5YR7/3)
シルトがブロック状に混じる。
- 5層：黄褐色(10YR5/6)。赤味が強い。粘性わずか。
やや固くしまる。5mm大の礫含む。
- 6層：黄褐色(10YR5/6)。5層よりキメが粗い。
3~5cm大の礫が混じる。



H16-11トレンチ中央部及び東拡張部土層断面・層序

- 1層：表土層。腐葉土。
- 2層：黄褐色(10YR5/6)。砂礫土。粘性なし。しまりやや弱い。5~10mm大の礫多く含む。
- 3層：にぶい黄色(2.5Y6/3~6/4)。灰白色気味。かなりキメ細かい。粘性わずか。やや固くしまる。



H16-11トレンチ・列石背後断割り部北壁土層断面・層序

- I層：褐色(10YR4/6)~黄褐色(10YR5/6)。トレンチ北壁2層に対応している可能性が高い。

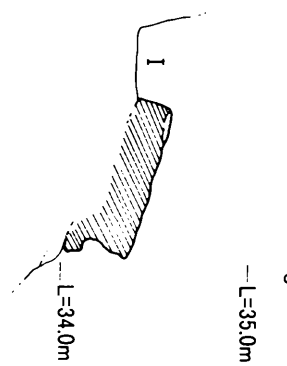


図78 H15-11トレンチ平面・断面図

(4) 谷部東側斜面の調査

谷部を挟んだ東側では、東北部から北端部にかけての外郭線は列石が現在も露出しており良好に観察できる。しかしこの北端部は尾根が、この列石付近ぎりぎりまで土採りのため削られており、外郭線の保護が急がれる地区である。前調査においては、ここからさら谷開口部へ向かい内側へ折れてゆく外郭線が復元されているが、詳細な情報が残っていないため、今回改めて外郭線の確認調査を実施した。

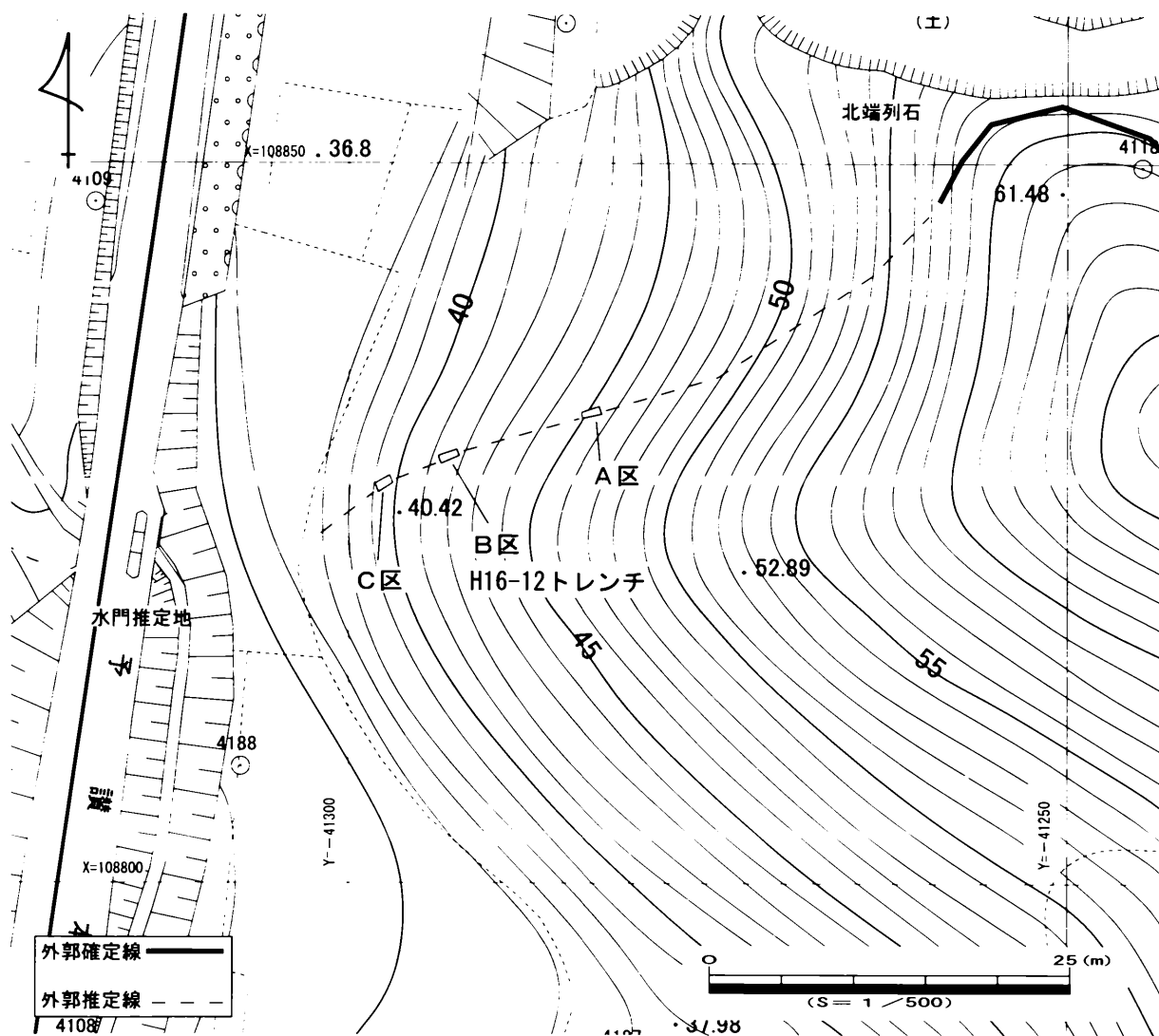


図 79 北部 谷東斜面周辺地形図

H 16－12 トレンチ(図 80)

北端部から谷開口部に向け西方へ駆け下りる斜面での外郭線確認を目的として、3ヵ所の小トレンチを設定した。これらはピンポールによるボーリング調査により列石の位置を推定し、列石のつながりを確定することが課題であったため、掘り下げは必要最小限に留めた。これらのトレンチにはそれぞれH 16－12 トレンチ A・B・C 区と枝番号をふることにした(A・B・C 区と表記)。

調査の結果、いずれにおいても列石を確認することができた。しかしながら、現状で列石の上に30～80cmの厚さで土が堆積していたため、列石の検出は部分的なものに留めた。このような状況であったが、大きさの把握できたものも数点あり、それによると列石の横幅は50～60cm程度である。また、これらの列石の標高は最も谷に近いもので39.07mであった。

3ヵ所のトレンチはともに幅1.2m前後と小規模であったため、検出当初からこれらの列石が元位置を保っているのかが、最大の問題であった。しかし、この点に関しては、B・C区で列石上面に土塁を確認したことから、元位置を保っているものと判断できた。また、B・C区では、列石が若干階段状に積まれており、これは急斜面に列石を並べる際の工夫かもしれない。

以上により、外郭線が谷開口部へ向かい内側へ入り込むことが再検証でき、その先に存在したであろう「水門推定地」の場所をより確実に絞り込むことが可能となった。(渡邊)

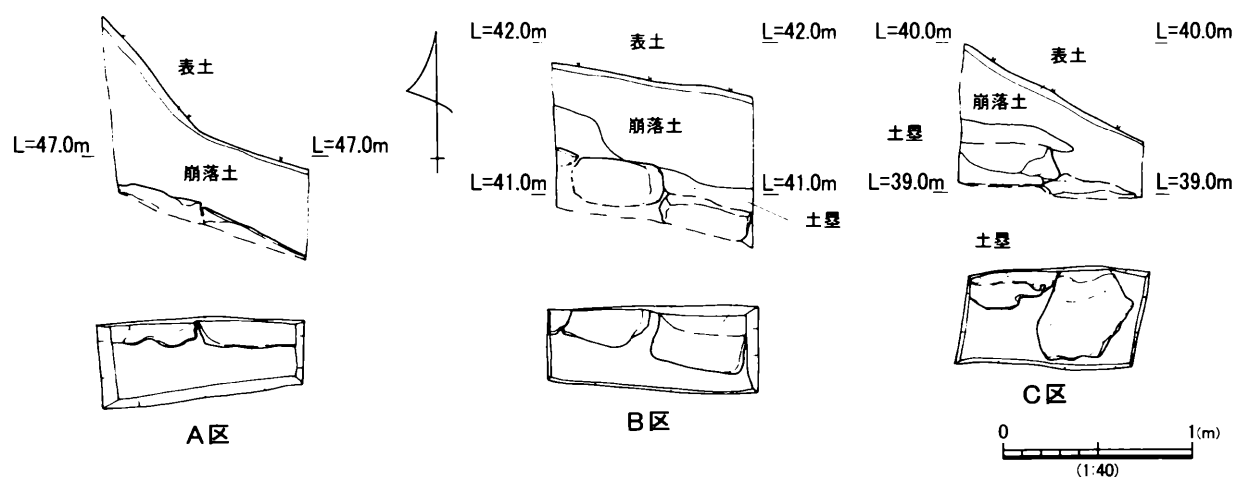


図 80 H 16-12 トレンチ平面・立面図

第5章 これまでの調査成果

これまで4章・5章において過去調査の成果及び3ヵ年をかけて実施した今回の調査成果を報告してきたが、本章ではこれらの成果を踏まえ、永納山城跡の特徴を第1節 城壁外郭線の特徴、第2節 永納山城跡の年代に分けて整理しておく。

第1節 城壁外郭線の特徴

ここでは、城壁外郭線の特徴を1. 立地・自然地形との関係、2. 外郭線の構造に分けて述べていく。

1. 立地・自然地形との関係

ア. 列石と尾根

永納山城跡の外郭線の特徴としては、北に開口した谷を囲むように尾根斜面に列石が巡らされる包谷式山城であることが発見当初の調査によって、すでに指摘されている。さらにこれに加えて、これまで述べてきたように永納山の地形は尾根の起伏に富んでおり、今回の調査成果をふまえ細部をみていくと随所に自然地形に影響された外郭線の特徴を読み取れる。

古代山城の外郭線の特徴付けるものは土塁とその基底部に並べられる列石であり、これらは永納山城跡においても確認されている。そこでまず、この人工的な外郭線(列石・土塁)と自然地形との関係に注目してみたい。列石が並べられるのは基本的に尾根の外側斜面であるが、尾根筋との対応関係を見ていくと大きく二つの巡らされ方が存在することを指摘できる。一つは列石が尾根筋の傾斜に沿うように尾根よりやや下った斜面に巡らされ、等高線に対し緩やかな角度で並べられるものであり、もう一つは列石が等高線に直交するか、あるいは直交と言わないまでも等高線に対し急角度で交差するように並べられるものである。前者の場合、尾根の状況に目をやると、尾根は水平に伸びるか、または緩やかな傾斜であり、列石自体の傾斜もそれに沿うように緩やかにアップダウンを繰り返す。これに対し、後者の場合は尾根が頂上へ向かい急角度で高まる場所(頂上からみると尾根が急傾斜に下る場所)や谷に向かう場所など地形の変化(高低差)が激しい場所に限られる。医王山もまた全体的に急傾斜の山塊であり、後者に含まれる。このような急斜面での外郭線の様相は、北部の谷へ向かう斜面を除くと、あたかも列石が最短距離で頂上を目指し、尾根筋へ擦り寄っていくかのように見える。

これら急斜面での列石の状況に加え、緩斜面で尾根筋に沿って巡る外郭線の状況をみると、永納山城の外郭線が尾根筋を意識し、またそれによって非常に規制されている姿を読み取ることが可能である。

イ. 列石と岩盤

これまでの調査において、永納山城跡の外郭線は列石・土塁を中心とした城壁構造と共に自然地形を巧みに利用していることが明らかとなった。自然地形の利用とは具体的には、山中の各所に露出している岩盤を外郭線として取り込んでいる状況である。最も確実にそして直接的に岩盤

利用と判断できるのは、岩盤自体に加工がなされている場合であるが、現在のところ明確な加工と判断できるものは確認されていない。しかし、永納山城跡では、以下のような状況から自然地形を外郭線への利用していたものと理解できる。

まず、岩盤利用と認めることが可能であるのは、列石もしくは土塁が岩盤へ接続する状況が明らかな場合である。このような状況は南西部・H14-4トレンチ、南部・H15-4トレンチ、東部・A地区(H16-3トレンチ等)に見ることができる。特にH15-4トレンチでは、列石とその上に築かれる版築土塁が良好に残存しており、これらがそのすぐ西側に切り立つ岩盤へとつながっていく様子が明確に捉えられた(図版13・15)。

また、比較的長距離にわたって外郭線の確認作業を実施した東部A地区の状況は、自然地形の利用を如実に示している。東部A地区では、110mの区間で外郭線を検出したが、この列石は尾根斜面に露出しているいくつもの岩盤と岩盤の間をつなぐように並べられており、岩盤と列石が一体となって外郭線を形成していた(図版28・29)。このような状況をそのまま、永納山城全体に当てはめることが可能であるかどうかは全面的な調査が必要となってくるが、少なくとも現在すでに確認されている列石線と列石線を結ぶ線上に露出している岩盤については、外郭線として利用されていた可能性が高い。

ただし、現地調査と並行して行った周囲への聴き取り調査では、農作業・通行の邪魔となるとの理由から、一列に並んでいた石を除去したとの証言もいくつかあるため、不自然に列石が途切れている場所に関しては、列石がないという理由のみでの自然地形利用と評価することはできない。

ウ. 石積みによる外郭線

今回の調査では、外郭線中に石積みがなされる場所を2ヵ所で確認した。1ヵ所は東部に位置し、絶壁状に切り立つ岩盤間にその間を埋めるように積み上げられる(図版31)。この場所はふもとの海岸からの見通しもきくところであり、両サイドの岩盤と一体化したように見えるその城壁の姿は、築城当時、非常に威圧感のあったものと思われる。

これに対し、もう1ヵ所は東北部に位置し、緩やかに連なる列石線上に突如、石積みが現れる(図37)。立柱状に置かれる石の存在などから門のような特殊な遺構の可能性も考えられる場所であるが、今調査では石積みの検出に留めた。

このように2ヵ所の石積みの立地は全く異なった状況にあり、そこに共通性はみられない。現段階において確実に古代山城に伴うことが明らかな石積みはこの2ヵ所のみであるため、その性格は不明な点も残るが、これらの石積みを外郭線の中でも特殊な様相を示していることは確かである。

エ. 外郭線の全長

列石・土塁を主体とした外郭線の総長は、欠損部を含めた推定距離で2.554kmに及ぶことがすでに過去調査で報告され、それ以降も全長約2.5kmという数値が定着している。今回の調査ではその確認・検証が目的の一つであり、ほぼ全域にわたりトレンチ調査を中心とした範囲確認を実施した結果、この外郭線が大部分において正確なものであることを確認した。

しかし、南部地域では外郭線の捉え方に若干の相違が見られたため、この点について説明を行

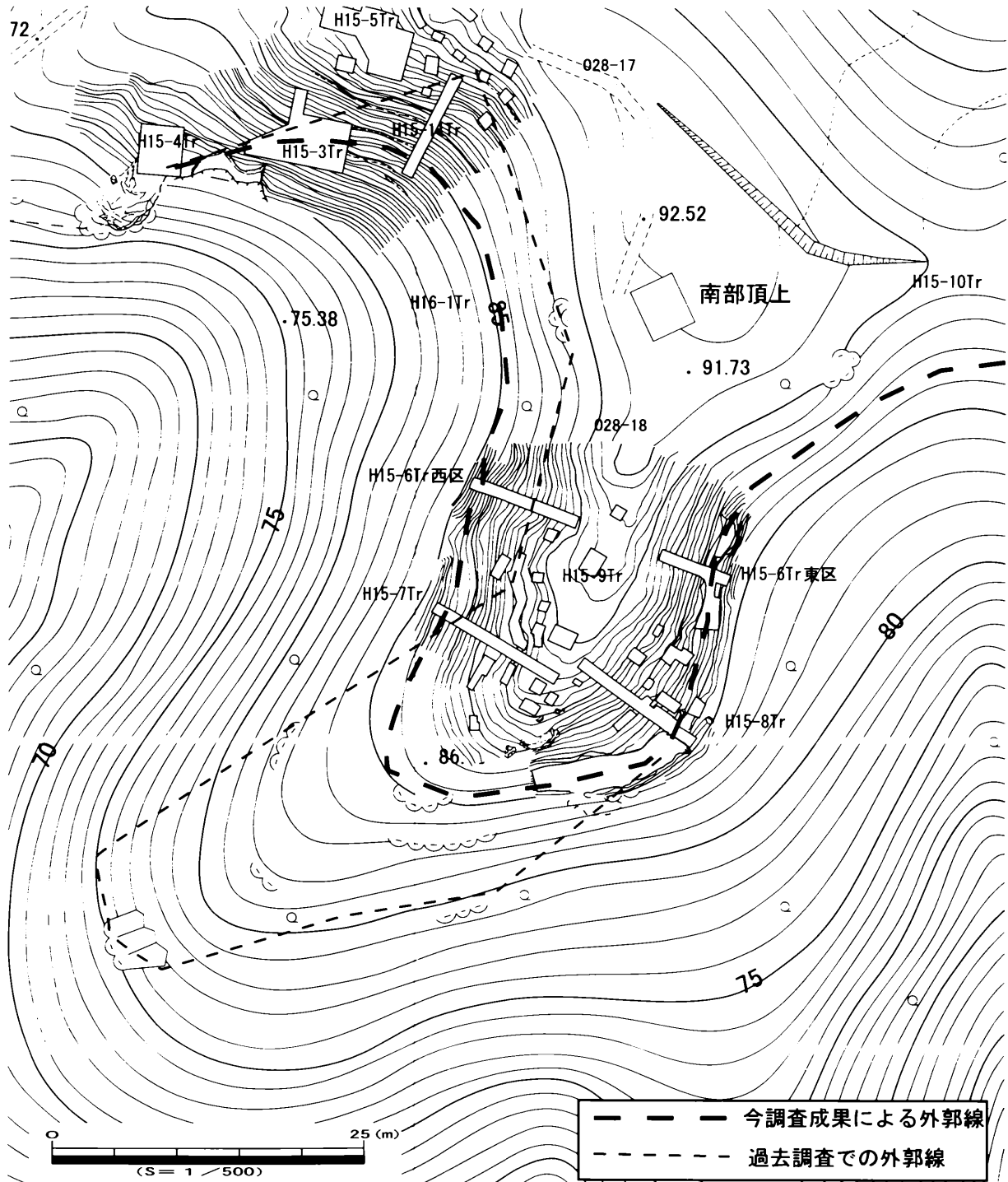


図 81 南部 城壁外郭線

い、新たな外郭線案を提示しておきたい(図 81)。南部頂上から南へ緩やかに延びる南部突出部では過去調査において、外郭線はその尾根の先端を急傾斜に下り、標高75m付近の岩盤を取り込むように巡るものと推定されていた。この外郭線の巡り方は、地形の大きな変換点以外は基本的に尾根の傾斜に沿いながら外郭線が巡る永納山城の中であって異質なものであった。また、これに加えて、この突出部に対する過去調査の成果は詳しく述べられていなかった。そこで今回、外郭線の確定を目指し、この突出部に数ヵ所のトレンチを設定した。各トレンチの詳細は第4章で述べ

たとおりであるが、東斜面においてはH15-6トレンチ東区・H15-8トレンチで列石を確認したことから、従来の外郭線を追認することができた。しかし、その先の南端部へ向けては各所に岩盤が露出しており、突出部先端での外郭線認定はどの岩盤をそれと理解するかによって大きく異なってくるのであった。そこでH15-8トレンチの南方で腐葉土を除去し、岩盤の状況を確認したところ、緩やかであるが傾斜の変換点を検出した。これを東斜面で検出した列石のレベルと比較すると、そこには極端な高低差が見られないことから、列石とこの変換点、そしてその西に露出する巨大な岩盤を結んだ線を外郭線として捉えるのが最も妥当であると判断した。その結果、南部突出部先端の外郭線は、これまで推定されていたラインよりも平面距離で約25m内側を巡ることとなった。次に突出部と南部頂上西方尾根斜面のH15-3・4トレンチで検出した列石とを結ぶ外郭線を確認するため、突出部西側斜面に4ヵ所のトレンチを設定した。しかしながら、いずれのトレンチにおいても明確な外郭線構造は確認されなかった。また、この周辺は時期・性格ともに不明なテラスや溝がみられる。これらが、外郭線的な役割の一部を果たしていたのか、あるいは本来そこにあった列石や土塁が崩落してしまったのか、さらには自然地形を利用した外郭線であった可能性もあり、現状からこれ以上の判断を下すことはできない。しかし、突出部をほぼ等高線に沿い緩やかに列石が巡る東斜面の状況とH15-3・4トレンチの列石を延長すると、この間の外郭線は標高85m付近を巡っていた可能性が最も高く、このラインを外郭線推定線としておきたい。

以上のように一部で外郭線に変更が必要となったが、欠損部も含めた永納山城跡の全長はこれまでどおり約2.5kmという距離で統一しておきたい。

2. 外郭の構造

ここでは、列石と土塁を中心とした人工的な外郭構造を中心にその特徴について述べておく。まずは個別要素を分析し、その後、これらを一連のものとしてみた時、外郭構造としてどのような特徴が見えてくるのかをまとめてみたい。

いくつかの要素の集合としての外郭線の中で、最も古代山城の特徴を示すものは「神籠石論争」の原因ともなった列石である。そこで最初に列石の特徴を述べ、次に下部構造(列石より下)と上部構造(列石より上)に分けて外郭構造の特徴を見ていく。

ア. 列石の特徴

列石の材質 花崗岩の自然石もしくは粗割石が使用される。永納山城が所在する一体は花崗岩地帯であり、広い意味で列石は現地調達であった可能性が高い。さらに永納山山中には各所に花崗岩の露岩が見られ、その中には不自然な割れ方をするものもある。肉眼観察の範囲では、これらの花崗岩が列石の花崗岩と非常に類似している。また石材運搬の問題も踏まえると、列石に用いられた石材の一部はこの山中から割り出された可能性も十分考えられる。

列石の大きさ 今回検出した列石とすでに露出している列石を計測すると、その横幅は小さなもので20cm前後、大きなものでは100cm以上となり、非常に不統一である。今回計測できた列石数に限りはあるものの、それを遺跡全体でみると横幅30～50cm程度のものが最も多い。これを地区別で見た場合にもやはり、この大きさのものが多数を占めることから、永納山城跡の列石の特徴

の一つとして、横幅30～50 cmのものを主体とすることを指摘できる(図82)。ただし、これ以外の大きさの列石も多々使用されており、そこに同じ外郭線でも地区による差が現れる。まず、医王山に巡らされる列石には幅20 cm代の小型の石材が多数使用されている。医王山は非常に急傾斜であるため、この地形的な制約を受けた結果、小型の石材を用いざるを得なかったということは十分

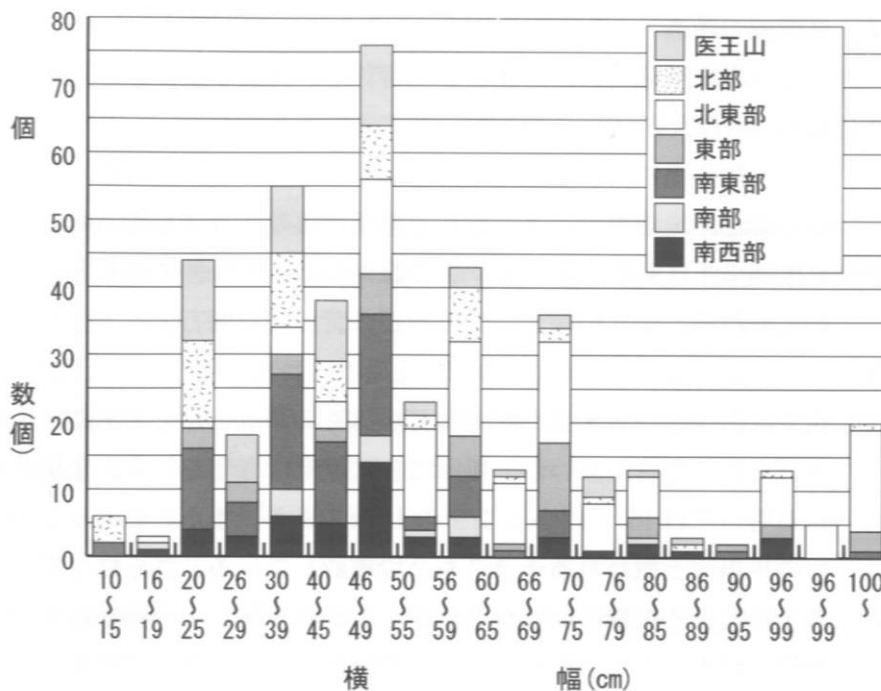


図82 永納山城跡 列石法量

考える。これに対し、北東部では50 cm以上の列石が多く用いられ、90 cm以上の大型の石も随所に見られる。永納山城の主体となる30～50 cmの列石ではなく、大型の石材を用いるという点に関しては様々な推測が可能である。単に傾斜が緩やかであるために大型石材を用いたと理解すべきであるのか、さらに他の要因があるのか。石材調達の問題や、あるいは防御面や周囲への威圧性といった城の機能的な違いがあった可能性も十分考えられるが、列石のみでこの点について評価を与えることは困難である。しかし、いずれにしても、永納山城では多様な大きさの列石が用いられていることが明らかとなった。

列石の加工 列石は材質の項で述べたように、自然石もしくは粗割石が用いられる。自然石はその名の通り全く加工がなされておらず、粗割石に関しても面を整えるよう丁寧な加工痕は確認できない。ただし、列石を並べた場合に正面・上面となる部分は粗いながらも面を持つ場合が多く粗割り段階で面を意識していた可能性は高い。

列石の並び 列石は尾根外側斜面に尾根に沿うように並ぶものと、尾根に直交するように並べられるものがあるという点については先に述べたが、このいずれの場合においても列石は直線的に並べられ、「折れ構造」をなして斜面を巡っていく。今回の調査により検出した列石は、斜面ですれを生じているものも多数あり、確実な折れ構造が確認できる場所は少なかったものの、H 14-2 トレンチで検出した列石は確実な外折れをなしており、その角度は150度を測る(図版5)。また、これらに対し、現在のところ確実に曲線構造をなす場所は確認されていない。

イ. 外郭線の構造

列石と土塁を基調とした外郭線の場合、その共通した特徴を構築作業順にまとめると以下のようになる。

- ① 尾根外側斜面に列石を据えるための平坦面を作る。この際、平坦面は地山を水平にカットしたものと、地山をカットしさらに盛土によりテラスを作るものがある。
- ② 平坦面の上に列石を据える。この際列石は、奥行きを長くとり、小口面が正面となるように据えられる。多くの場合、この列石の背面には列石より小振りで不整形な石が置かれる。
- ③ 列石の直上から土塁が積まれる。土塁はこれまで確認されたものはすべて内托土塁であり、現状では斜面途中で土塁が収束しているものがほとんどである。土塁は版築工法によって積み上げられる場合が多いが、場所ごとに様々な様相を示す。土塁の高さは、最も高く残存しているものでH 15 - 12 トレンチの1.7mである。またこのトレンチでは、地山に土塁を積むための平坦面と思われるテラスも2段確認している。さらに土塁と列石の関連では、列石前面の土塁による被覆の問題が残るが、この点に関して今回の調査では、列石はすべて露出した状態で検出された。しかし、前調査においては、西部で被覆された状態の列石が検出されていることから、さらなる確認が必要である。

また、一部のトレンチでは、列石前面のテラスや、そのテラスを掘り込んだ柱穴が確認された。この内、テラスは列石を据える平坦面(盛土)と連続的に捉えることができる場合が多かったことから、①段階に作られたと理解できる。柱穴についてはその目的にもよるが、列石据置き以降の③段階にあてはまると考えられる。

次にこれらを下部構造(列石を据える平坦面・列石前面の構造)・上部構造(列石背後の構造)に分け、その特徴を述べていく。

下部構造

平坦面 列石を据える平坦面には次の2種類が見られる。

A：尾根外側斜面の地山を水平に近くカットし、その上に列石を据える(H 15 - 3・6・H 16 - 5 トレンチ等)。

B：地山をカットし、さらに盛土を行った上に列石を据える(H 15 - 4・12 トレンチ等)。

A・Bともに平坦面の奥行きは1 m前後である。そして、この両者は場所によって完全に分けられるものではなく、H 15 - 3・4 トレンチで見られたように連続的な変化をなすものと考えられる(図版 16)。すなわち、本来の地形の傾斜と列石の傾斜に違いがあり、地形の方が急傾斜となる場合、この傾斜差を埋めるように盛土が行われ、その必要がなくなると地山上に直接列石が置かれる。

列石前面の構造

テラス 今回の調査では、数カ所のトレンチで列石前面のテラスが検出された。テラスはその前端まで明確に残存しているものはなかったが、H 15 - 12 トレンチでは現状で1 m程残っている状況を確認した。今回の調査でこのテラスが確認できたのは、列石下に盛土を行っているものに限られ、地山直上に列石を据えるものでは、現在のところ前面のテラスは確認されていない。この

点について、H16-5トレンチのように列石の下が大きく抉れた状態になっている場合は、本来テラスが作られていた可能性もある。しかしながら、すべてがこのような状況ではないところを見ると、本来からテラスが作られなかった場所も存在したということも十分考える。

柱穴 H16-12トレンチでは、列石前面の平坦面の検出にともない約3mと等間隔に並んでいる3個の柱穴が検出された。しかし、各柱穴の平面形は不整形であり、その大きさは径40cm～60cmとまばらであり、明確な規格性は見られなかった。これらの柱穴は、確実に永納山城に伴う柱穴としては初めての例である。

また、北部においても柱穴らしき掘り込みが数基検出されているが、この周辺では、確認できる列石はすべて転落している状況であり、外郭線の確定が困難であったため、これらの掘り込みが永納山城築城時に伴うものであるのかどうかは判断できない。

上部構造

列石上部の構造は実際の城壁の機能として重要な要素である。この上部構造では土塁により城壁が作られるものと自然地形の利用による城壁の二つを見ることができる。

土塁による上部構造

永納山城跡において土塁が構築される場合、①明確な水平堆積をなして、土塁構成土が積み上げられる土塁、②明確な水平堆積をなさない土塁がみられる。

① 明確な水平堆積をなす土塁

版築工法によって積み上げられる土塁である。細部を見ると様々な違いがみられるものの、土塁構成土として大きくは花崗岩風化土と粘質土、砂質土の3種類の土が使用され、これらが互層状に積み上げられていく点で共通する。層の厚さは薄いもので2cm、厚い層では20cm程度であるが、土塁の構築される場所や同一土塁の中でも上層、下層といった位置による厚みの違いがみられる。また、各層は正面からみると列石の傾斜に沿うように傾斜し、土塁断面からみると水平に積まれる。ただし、断面は上層へ行くに従い、奥へ向けやや斜めに積まれ、積み方も厚く粗くなる傾向がある。

版築土塁は、以上のような大枠での共通点をもつものの、個別的にみていくと、特に土塁構成土に違いがみられる。そこで、次に具体的な例をあげながらその多様性を示しておく。

北東部地区は、今回調査を行った中で最も土塁が良好に残存していた。H16-5トレンチでは、土塁は花崗岩風化土と灰黄褐色砂質土が互層状に積み重ねられ、その一部に粘質土・炭が混じるという状況である。しかし、ここからわずかに約14mしか離れていないH16-7トレンチでは花崗岩風化土からなる土塁構成土を主体としながらも、土塁下層では炭を多く含んだ粘質土と花崗岩風化土が明確な互層状態をなす。また、H16-8トレンチ北拡張区でも弱い粘性をもった炭層と数種に分層が可能である花崗岩風化土が互層堆積をする。以上のように北東部地区では、構成土の中への炭が混じるという点に共通した特徴を持ちながらも、その含有具合に違いが見られる。

このような状況に対し、南部地区で確認を行ったH15-3・4両トレンチは、花崗岩風化土と灰黄褐色砂質土、黄褐色粘質土が互層堆積するという共通した特徴をもつ。しかし、H15-3トレンチでは粘質土層に10cm前後までの小礫を多く含んだ状況が確認された。このような多量に小

礫を含むという状況は、他地区のトレンチのみでなく近接するH15-4トレンチでも全く見られなかった特徴である。

以上のような状況を見ると、地区ごとで土塁はある程度の共通性は持つものの、さらに小単位で様相が変化していることが明らかとなった。これは、単に構成土の違いのみを示しているのではなく、作業単位や作業集団の違いといったものを示しているのかもしれない。いずれにしても、このような土塁のバリエーションの豊富さは永納山城の特徴といえる。

② 明確な水平堆積をなさない土塁

H14-2トレンチでは水平堆積による土塁とは異なる土塁状況を確認した。土塁は厚さ10～20cm前後、幅20～60cm前後の層が緩い傾斜を持ちレンズ状に積み重ねられる。各層は非常に固くしまったものである。さらに、これらの土塁が積まれる基盤としてその下には盛土層が見られる。また、この基盤層には20～40cm間隔で縦方向の層が存在し、この層は基盤層に比べ硬さやしまりがなく基盤層とは明確に区別できる。この縦層は基盤層築造の際の堰板的なものの、痕跡とも考えられるが、このような状況は他の地区では確認されておらず、この縦層の評価については今後詳細な調査が必要である。しかしながら、同じような縦層が時代は異なるものの地域的に近接した愛媛県今治市大西町に所在する前期古墳「妙見山古墳」において、古墳盛土の「縦版築」として確認されており、このような技術が当地域に伝統的なものとしてたどれる可能性もある(写真9)。今後、注目すべき状況である(注1)。



写真9 愛媛県今治市大西町 妙見山古墳墳丘盛土断割り状況

自然地形利用による上部構造

調査を進めていくに従い、いくつかのトレンチで列石は検出されるものの、その上部構造として土塁の痕跡が全く見られない状況が確認された。

その状況は、列石背後に共通して急傾斜に立ち上がる地山が検出されるというものであった。地山の傾斜は南部のH 15－6 トレンチ東区で40度、東部のH 16－2 トレンチでは40～50度というように現在でも非常に急である。このような状況に加え、同じく東部のH 16－3 トレンチでは列石が岩盤へつながる部分での土塁確認を行ったが、その背後には土塁ではなく、やはり地山が急激に立ち上がる状況が確認された。

現状として列石は存在するが土塁が確認できない場合、本来造られていた土塁がその後、何らかの理由で流出した可能性、あるいは当初から土塁が築かれていなかった可能性の両方が考えられる。前者については、その確認は非常に困難であるが、はたして大きな土砂崩れでもない限り列石直上まですべての土塁が痕跡なく流出してしまうことがあるのか疑問が残る。また、そのような災害があったとしたならば、列石のみが被害を受けずに残存するというのも考え難い。このような点から見ると、後世に土塁が完全に流出した可能性は低いのではないだろうか。

そうすると当初から土塁が築かれなかった可能性が有力であるが、これについても自然地形を利用するがために不必要であった可能性と土塁を築く予定であったものが築かれなかった可能性がある。後者の場合、他の一部の山城で言われるような未完成説とも関わってくるが、調査成果からみると前者の自然地形を利用するがために土塁を築かなかった可能性が高いのではないかと判断できる。

単に列石背後の地山の傾斜のみに目をやると、先に上げた土塁の存在しない3ヵ所のトレンチよりも元地形の傾斜が急でありながら、土塁を築いている例(H 16－5 トレンチ等)も見られることから、傾斜だけでは、山城が未完成のため土塁が存在しない部分があるという考えも否定しきれない。しかし、山全体の地形に注目すると、列石が存在し土塁が存在しない場所は、現在のところ斜面の傾斜が急であり、なおかつ岩盤が発達している場所に限られる。そして列石は、その隙間を縫うように短区間に並べられる。そして、当然のようにその周囲の岩盤には土塁はみられない。このような状況を踏まえると、今回検出した3ヵ所を中心とした場所では最低限、列石を並べることによって城域を示したものの、その背後は自然地形を利用していた可能性が高いのではないだろうか。

3. 外郭線まとめ

以上のように個別に各様相の特徴を述べてきたが、次にこれらを総合的に一つの城壁構造として捉え、地形との関係を踏まえながら、その特徴を見ていきたい。

まず、地形と外郭線の間を見えると、①尾根の傾斜が緩やかな地形であり、列石が比較的長距離にわたって並べられる場所、②尾根の傾斜が急な地形に列石が並べられる場所、③岩盤の露出が目立ち険しい地形で岩盤利用が目立つ場所の3つに分けることが可能である。これらと列石・土塁の関係を見ていくと、①～③は次のようにまとめることができる。

① 列石は40cm前後の中型のものが主体となり、場所によっては大型の列石が用られる。これら

の列石の背後には土塁が築かれることで共通する。また、列石前面にはテラスが確認されているトレンチもあり、テラス・列石・土塁からなる古代山城特有の外郭線構造をなしていた可能性が高い。

地区でみると、北東部、南西部～南部、南東部の一部である。北東部では特に大型の列石が多用され、その上には明確な水平堆積をなす版築土塁が積まれる。列石前面のテラスは、その可能性のあるものがわずかに残存するに過ぎず、明確なものは確認されていないが、列石下部の岩盤が抉れている場所が多いことから、本来テラスが存在していたものの、それがすでに崩れてしまっている可能性も十分考えられる。これらを積極的に評価した場合、この北東部地区は最も城壁らしい城壁が築き上げられていた場所と言えよう。また、南西部や南部、南東部においても傾斜の緩やかな尾根の斜面には連続的に列石を確認することができた。これらの地区も列石背後には土塁を確認できたが、その姿は先述のように様々な様相を呈している。西部は、前調査成果と今回の再報告から評価すると、北東部の状況に近いと思われる。

② 医王山や各山頂付近の尾根斜面、北部の谷に向かう場所である。用いられる列石は、幅20cm代の小型のものから中型のものまでが中心である。各頂上や谷へ向かう列石では中型の列石が多いのに対し、医王山では小型の列石が非常に目立つ点が注目される。

これらの急傾斜部では調査を列石の確認に留めたものが多いが、このうち南西部頂上へ向かう列石(H14-7・H15-1トレンチ)、北部谷へ向かう列石(H16-12トレンチ)ではその背後に部分的であるが、土塁の存在を確認している。よってこのような急斜面においても列石と土塁がセットとなっていた場合が多いものと考えられる。これに対し、医王山では1ヵ所のみのトレンチ調査であったが、土塁は確認されなかった。一見独立した急傾斜な岩塊、等高線に直交するように頂上を目指す小型の列石といった医王山の特徴は永納山城の中でも特異である。今回は、列石の確認のみで、その前面や背面構造の検証はできなかったが、今後その解明が急がれる。

③ 永納山城の中で最も特徴的な外郭線の様相を示す。実際は、大きな目でみると永納山城の外郭線そのものが、このような岩盤と列石の組み合わせの連続であるが、特にこの状況がよく捉えられるのが南部や東部である。この岩盤利用には、長距離にわたり岩盤のみが連続的に続く東部頂上南斜面のような状況や、岩盤の間を縫うように短区間に列石が据えられる場合とがある。ともに元来急峻な岩盤を外郭線として利用しているために、その背後に土塁は認められない。また、この岩盤間に列石が並べられる場合も、その背後には周辺の岩盤同様に土塁の痕跡は全く確認できない。先に検証したとおり、ここには当初から土塁は築かれておらず、背後の地山を城壁としていたものとみられる。さらに、列石前面には急傾斜で下っていく岩盤が続いており、テラスは現在のところ確認されていない。このように岩盤の発達した地域は岩盤をそのまま利用するか、あるいは人工的に手を加えるとしても列石を並べるのみで終わっていた可能性が高い。

第2節 永納山城跡の年代

永納山城跡に限らず遺跡の年代決定に重要な資料の一つとなるのは、その遺跡から出土した土器である。今回3ヵ年をかけ調査を実施した結果、少数ながらも土器が出土し、これらの中には永納山城跡の年代決定に大きな手がかりとなると思われるものも含まれていた。そこでまず、出土状況と土器の特徴、年代についてまとめ、次に永納山城跡の年代について述べていく。

1. 出土土器について

ア. 出土状況

これらの土器は、H14-2トレンチの先行断割り部からほぼ1ヵ所にまとまって出土した。出土位置は平面的にみると列石裏込め状石の上部にあたり、出土層は遺物出土レベルとトレンチ断面との対応関係からみると、土塁崩落土層である9層に対応する。9層は列石・裏込め状石、土塁基盤層といった城壁構造物のすぐ上に堆積した崩落土層であるが、非常にしまりがなく、キメも粗いことからその下の基盤層とは明確に区別できる。

イ. 土師器杯の特徴と年代

これらの土器のうち時期決定に大きな手がかりとなるものが、畿内系土師器杯(図16-1・図版3)である。この土師器杯の詳細はすでに報告しているところであるが、その特徴を再度まとめておくと以下ようになる。口径・器高は復元推定でそれぞれ18cm、4cmを測る。また、外方へ屈曲する口縁部、口縁端部内面の段、体部内面の一段の放射状暗文、底部外面のヘラ削りといった特徴をもつ。このような特徴をもつ杯は畿内の編年に当てはめると、平城Ⅱ～Ⅲ期、実年代では8世紀第2四半期に位置する(注2)。土器の時期決定には慎重を要するものの、畿内産土師器の忠実な模倣状況や古代山城がつくられた歴史的背景にみられる中央との強いつながりを考慮するならば、畿内で与えられている土器年代とこの土師器との間に大きな時期差はないものと判断できる。

2. 永納山城跡の年代

現在のところ、永納山城跡の年代決定につながる資料は上に述べた畿内系土師器1点のみである。いかに出土土器が遺跡の時期決定に有効な資料とはいえ、1点の土器をもってそれをなすことは危険である。しかしながら、史書への記載がなく謎が多いとされる神籠石山城の年代を考察していく上でも、限られた資料から一定の年代観を導いていく努力は必要である。そこで、この土器をもとに大枠ではあるが永納山城跡の年代を絞っていきたい。

まず、この土器の年代が永納山城の築城から廃城までのどの時期を示しているものであるのかが、大きな問題となる。出土状況をみると土塁の崩落土下層からの出土であり、現在も残存している土塁層より上に位置する。崩落土中という出土状況を考慮すると、これらの土器は土塁構築時に混入した可能性と、土塁完成以降に何らかの目的で土塁上にあったものが土塁崩落に伴い混入した可能性が考えられるが、出土状況からはこれ以上は言及できない。そこで、これを特定するために土器そのものの状態に着目してみた。すなわち、土塁構築時に混入した土器であれば、土塁を築き固める工程でそれらは粉々に割れ表面も磨滅している可能性が高い。これに対し、崩落時の混入と考えるならば、もちろん破損や磨滅はするであろうが、前者に比べると良好な状態を

保っている可能性も高い。そこでこれらの土器の状態をみると、一部で細かく破損している土器も見られるものの、器表面の状況は良好である。特に畿内系土師器は底部から口縁部まで残存しているも破片もあり、表面の文様や調整も良好に観察できる。相対的な評価ではあるが、このような状況から判断するならば、これらの土器は土塁構築時に混入したものというよりはむしろ崩落時に混入した可能性が高い。よって出土土器が示す年代は、永納山城跡が築城された後、継続から廃城までの時期の一点を示しているものと理解できる。

したがって、永納山城跡の築城時期は、この土器の示す8世紀第2四半期以前というところまでは絞り込むことが可能である。また、この年代はこれまで各地の古代山城調査によって示されている年代観、7世紀後半～8世紀初頭という年代と矛盾しない。 (渡邊)

注1 妙見山古墳の縦版築については、下條委員長より永納山城の土塁基盤層との類似性を教示いただき、愛媛大学考古学研究室が保管する写真資料の掲載にも快諾を得た。

注2 H14-2トレンチ出土畿内系土師器と畿内産土師器との比較にあたっては、奈良県立橿原考古学研究所 林部 均氏に多大なるご教示を賜った。

第6章 各 論

1. 古代伊予国における永納山城

白石 成二

はじめに

古代山城に関する議論は様々であるが、7世紀代の東アジアの動乱に起因する対外的な危機を背景に、国家的なプロジェクトとして西日本各地に造営されたものとする説に収斂されつつあり、ほぼ通説に近い位置を占めるようになった。しかし永納山城がなぜ伊予国に築かれたのか、またなぜ律令制下の越智郡と桑村郡とが境を接する地でなければならなかったのか、という理由については十分な議論が行われているとはいえない。ここではその二つの点について若干の考察を加えていきたい。

1 永納山城と古代伊予国

古代山城が国家的な防衛企画に基づいて築造されたとすれば、第一に伊予国が西日本の地域において軍事的・政治的要地と認識されていたこと、第二には、山城の立地する場所の近くに防衛すべき対象があるとともに、防衛を可能とする種々の条件が必要であった。

まず第一の点について、伊予国が古代において西日本の地域で軍事的・政治的な重要地と認識されていたことは、次の点から明らかと考えられる。

『古事記』の国産み神話で、イザナギミコトが淡道之穂之狭別島を産み、ついで伊豫二名島を産み、ついで「此の島は、身一つにして面四つ有り。面毎に名あり。」と記されている。したがって「伊予二名嶋」は単に伊予国をさすのではなく、四国全体の総称として使用されていることがわかる。このことは『古事記』の編纂された7世紀後半から8世紀初頭の当時の為政者の意識を反映していたと考えられる。また、持統3年8月条には「詔伊予総領田中法麻呂等曰、讃吉国御城郡所獲白鷄、宜放養焉。」という記事がみえる。総領が7世紀後半に筑紫・周防・吉備・伊予の四つの地域に置かれていたことは『日本書紀』や『風土記』によって明らかであるが、伊予総領田中法麻呂はこの記事の内容からわかるように、伊予国だけでなく、少なくとも讃岐国をもその管轄下に置いていたことは間違いない。四国全体を管轄していた可能性もあるが、いずれにしても令制下の国の領域を越えた広域の拠点に伊予国が位置づけられていたことは間違いないであろう。それは『播磨国風土記』揖保郡条にも「広山里旧名握村、土中上、所以名都可者、石龍比売命、立於泉里波多為社而射之、到此处、箭尽入地、唯出握許。故号都可村。以後、石川王為総領之時、改為広山里。」とある記事と同様である。吉備総領であった石川王が播磨国の行政地名の改変にかかわっているように、やはり広い地域を管轄していた。さらに『日本書紀』天武14年11月条に「儲用鉄一万斤、送於周芳総令所。」とあり、周防総領所に送られた大量の鉄は武器に供するものであったと考えられ、総領が軍事的役割を担っていたことがわかる。

次に大和王権にとって海の大動脈である瀬戸内海航路の重要な拠点に位置し、同時に外征軍に欠かすことのできない兵士や航海技術者を多く供給できる地であり、伊予国の豪族たちも協力的であったことがあげられる。伊予国が四国北岸航路の拠点として重要な位置を占めていたことは、つとに岸俊男氏が指摘している通りである。大和王権の朝鮮への出兵に際してたびたび将軍となっ

て外征軍を率いた紀氏が讃岐や伊予国の豪族と密接な関係を持っていた。なかでも伊予国では最大豪族であった越智氏については『続日本紀』延暦10年12月条の伊予国越智郡人越智広川ら五人が言上した記事に「推古朝の時代に紀博世が伊予国に遣わされ、その孫の忍人が越智直の女を娶って在任という者を生んだ」とあり、ここから紀氏と越智氏との系譜関係を確認することができる。また斉明7(660)年に斉明天皇らの一行が朝鮮半島で滅亡した百済を救援するために、難波を出発し、途中熟田津に寄港し、二ヶ月あまりにわたって長期間滞在したことも参考になる。難波から那大津までの行程でこうした例はなく、またこの時代瀬戸内海的主要航路は山陽沿いの航路であったにもかかわらず、わざわざ四国北岸航路に変更しているのである。この時に出兵した人物として、『日本霊異記』にみえる伊予国越智郡大領の先祖越智直や備後国三谷郡大領の先祖があり、『備中国風土記』に邇摩郷では二万の兵を得たことなどが記されている。さらに捕虜となったもののうちで運良く帰国できた者の出身地は陸奥国を除けば、筑紫・筑後・肥後・伊予・讃岐となっており、いずれも西日本の諸国、とりわけ政治的・軍事的要地に置かれた総領の管轄下の地域であった。

従来、伊予国は我が国でも有数の長い海岸線を有するにもかかわらず、海部の存在を示唆するものは『日本書紀』神武天皇即位前紀に天皇が東征に向かう途中、速吸瀬戸(現在の豊予海峡)で珍彦という国神が漁夫となって出迎え、その水先案内で無事に筑紫国の菟狭に到着したという記事くらいであった。しかし平城京をはじめとする木簡が出土するにしたがって多くの海部の存在が明らかとなった。もとより多くの海部は木簡の内容からもわかるように海産物の貢納にあたっていたが、しかし戦時には容易に航海技術者に転化する存在であったと考えられる。現在、木簡から検出される海の民と言われる海部・安曇・日下部に関わる地名や人物は下記の8例である。木簡以外では『日本霊異記』上巻十八「法花経を憶持し、現報を得て奇しき表を示す縁」に伊予国の和気郡に日下部候という人物がみえる。説話集ではあるが、こうした和気郡の木簡からすれば、実在していた可能性が強いと言える。

- ・「伊予国伊予郡石井郷海部里安曇部大隅鯛楚割六斤」
- ・「伊豫国伊豫郡川村郷海部里白髪□□□」
- ・「伊予国伊予郡石井郷海部里日下部麻呂調賛楚」
- ・「和気郡海部里調塩三斗 刑部首嶋」
- ・「伊与国和気郡海部郷若日下部廣島楚割六斤」
- ・「伊与国和気郡海部郷若日下部廣島楚割六斗」
- ・「伊予国神野郡海乎知人知訓調塩二顆」
- ・「宇和郡海部郷□知部万呂□□六斤」

「乎、カ」 「楚割、カ

これらの木簡からみると、伊予国の海部は、伊予郡と和気郡を中心に松山平野に稠密に分布するグループと越智氏に関わるグループに分類できる。まず前者の地域については、海部の存在だけでなく、白髪部・日下部・刑部・矢田部など、天皇家所有の部民である名代が多く分布している。またきわめて信頼性の高いとされる「和気系図」には他の一般豪族の称するカバネである「直」や「首」ではなく大和王権との特別な関係を示す「君」のカバネをもつ別君が存在する。別を称

する氏族は6世紀以降、西日本の要地に拠点的に分布した中小の地方豪族で、王権に対する従属度が高いとされる。さらに後の温泉郡にあたる湯評には大和王権の軍事力を支えた丈部首や葛城氏などが存在しているように、大和王権との関係は伊予国の他の地域とは際だって強固である。

後者の越智氏に関わる海部については、神野郡と宇和郡とにあり、越智氏の本拠地である越智郡とは随分離れているが、越智氏の影響力が伊予国の中では際だって大きいということを示している。その一例として越智部をあげることができる。一般に部民は中央豪族を中央の伴造とし、そのもとに地方の伴造がおり、その地方的伴造が部民を率いて生産物を貢納する形態をとる。それに対し越智氏のような地方豪族がみずからのウジを名乗る部民を所有する例はまれである。部の設定というのは大和王権によって豪族と人民との政治的隷属関係が認められたことを意味しており、それによって宗家のウジを称することができた。公認されない私的な隷属関係が部民制として現れることはない。越智氏は部民制の展開したとされる6世紀半ば頃には越智郡地域の首長・国造としての越智氏、その国造のもとで技術者や集団として編成された越智人、そして越智直氏の私有民である越智部という組織を整えていた。この木簡から越智氏が令制下の越智・神野・宇和郡を範囲とした広域の交易圏をもっていたことが想定され、そしてその交易を可能としていたのが、越智氏配下の海部集団であったと考えられる。

時代は少し下って8世紀代になるが、『続日本紀』宝亀元年5月条に「先是、伊予国員外掾従六位上笠朝臣雄宗献白鹿。勅曰、朕以薄德祇奉洪基。善政未孚、嘉 頻降。去歳得伊与国守従五位上高円朝臣広世等進白鹿一頭。(中略)進白鹿人叙位兩階、賜絶廿疋綿卅屯布五十瑞稻二千束。共捕白鹿五人各叙位一階。牧長一人、挟抄二人各賜稻四百束。捕鹿处駟使三人、水手十三人三百束。(中略)進瑞国司及所出郡司各叙位一階。」とあり、ついで同年10月条に「授伊予守従五位上高円朝臣広世正五位下、掾正六位上中臣朝臣石根従五位下、介外従五位下板茂連真釣外五位上、員外介正六位上百済公水通外従五位下、外散位外従五位下越智直飛鳥麻呂、越智直南洲麻呂並外従五位上(中略)並是貢瑞国郡司。去五月有、勅、進位一階。至是授焉。」とみえる。伊予国からの白鹿の献上は動揺する称徳・道鏡政権を正当化するという政治的意義があったが、ここではこの捕獲に伊予守を中心とする国衙機構とともに越智氏関わっていたこと、また越智氏配下の水主が牧長とともにみえることが重要である。白鹿は海上で捕獲されたと理解できるが、ここでも海部の系譜につながる人々の存在があった。なお伊予国の牧は「延喜式」兵部省諸国馬牛牧条にみえる忽那嶋牧しかないが、それとは別に越智氏が所有していた牧と考えられ、伊予国の中では圧倒的な軍事力を有していたことがわかる。このように海上からの敵に対処するのに伊予国は好条件を備えていたと言えるのである。

2 永納山城の立地条件

永納山城は令制下の桑村郡にあり、越智郡と境を接する位置に造営されている。この地に造営された理由は次の二点と考えられる。

第一点は桑村郡が伊予国の中で軍事的に重要な位置を占めていたことがあげられる。まずその史料として『正倉院文書』『伊予国正税出挙帳』に桑村郡の郡司として大領凡直広田とともに主政大伴首大山の名がみえている。また平城京から「□□国桑村郡林里佐伯」と記された木簡が出土し

たが、ここにみえる「佐伯」は人名であろうから、桑村郡に佐伯氏の存在したことは確かである。この二つの史料から大伴・佐伯の両氏が確認できるが、大伴・佐伯両氏は中央では宮城を警備する十二門号氏族であり、朝廷では「内の兵」とされた軍事的氏族であった。伊予国でこの両者が同時に確認できるのは桑村郡だけであり、この地が伊予国の軍事的に重要な位置を占めていたことを物語っている。

また佐伯部については、『日本書紀』景行51年8月条には「日本武尊(中略)所献神宮蝦夷等昼夜喧嘩出入無礼。時倭姫命曰。是蝦夷等不可近於神宮。則進上於朝廷乃令安置御詣山傍。未經幾時悉伐神山樹叫呼隣里而脅人民。天皇聞之詔群卿曰。其置神山傍之蝦夷是本有獸心雖住中国。故随其情願令班邦畿之外。是今播磨讃岐伊予安芸阿波凡五国佐伯部之別祖也。」とみえる。伊予国を除く四力国では佐伯部の存在が確認されていたが、伊予国では史料の裏付けがなく、また伊予国のどこに設置されたのかも不明であった。しかし佐伯氏の存在を示す木簡が出土し、これによって『日本書紀』の記事が事実であることが確かめられた。さらに『続日本紀』神亀2年正月条には「陸奥国俘囚百四十四人配于伊予国五百七十八人配于筑紫十五人于和泉監焉」とみえる。この史料は「俘囚」という名の初見であり、同時に他国への移住の初見記事でもある。また『日本後紀』弘仁4年2月条には「賜伊予国人勲六等吉弥侯部勝麻呂、吉弥侯部佐奈布留二人野原姓」とあり、さらに『類聚国史』天長9年12月条「伊予国俘囚吉弥侯部於等利等男女五人移阿波国。優情願也」とみえる。このように蝦夷を服属させる過程で律令国家の理念に基づいて俘囚の大量移住が行われたが、問題は単に俘囚を公民化させるだけではなく、俘囚の軍事的役割が期待されていた。「夷をもって夷を撃つは古の上計」とされ、9世紀の群党蜂起が大きな政治的課題となると、しばしば俘囚が動員された。『三代実録』貞観9年11月条には「下知摂津和泉山陽南海道諸国曰。如聞。近来伊予国宮崎村海賊群居掠奪尤切公私海行為之隔絶。(中略)差発人兵招募俘囚搜其。」とあるように、伊予国の海賊対策としても俘囚を利用していたことがわかる。これらの俘囚が傭兵的に利用されたとすると、国司の指揮下に入っていたであろうから、国府の周辺地域に置かれていたと考えられる。

第二には国府に近く、地形的にも適地であったことがあげられる。永納山城が海上からの敵に備えたものであることは、その立地する場所や城の構造からも明らかである。伊予国府は現在なおその所在が不明であり、様々な説があるが、越智郡にあったことは確かである。備中国の鬼ノ城、讃岐国の城山城をはじめ瀬戸内海に分布する古代山城の場合、古代の国府に近く、また陸上や海上の交通の要地に築造されている。永納山城の場合、国府のあった越智郡の方に向けて谷が開けており、しかも古代の幹線道路である太政官道で結ばれていることからみて、国府の官人や周辺の人々の逃げ城としての役割を担っていたと考えられる。ただ伊予国府、あるいはその前身となる組織がはじめて越智郡にあったかどうかについては定かでない。既述したように、6・7世紀代には松山平野の方が大和王権との関わりが強く、政治的・経済的にも伊予国の中心地であった。また朝鮮半島への出兵の中継地や軍事的動員を行ううえでは、熟田津への寄港にもみられるように好都合であった。しかし白村江の戦いの敗戦以降の対外的緊張のなかで、国家的な防衛の観点から来島海峡の東側に拠点を移していったと想定される。また総領のような広域な範囲、具体的には讃岐を含んだ地域、あるいは四国全体を管轄に置いた場合、松山平野ではあまりにも

西側に偏しており、不都合であったと考えられる。防御を重点に考えた場合、直接的に敵の攻撃を受けにくい越智郡地域の方が好都合であったと考えられる。

さらに律令制下の越智郡と桑村郡の境に位置することについて、もし地方の有力豪族の意思が優先されるならば、当然豪族の政治的拠点に近い場所に築造されるはずであり、おそらくこの当時の力関係からいえば、越智氏の勢力が卓越していたのであるから、越智郡郡衙の近くに位置しなければならないのである。しかしそうはならず、永納山城の占地のほとんどが桑村郡にあることは、古代山城の築城は伊予の豪族の力関係やその意思を超える強力な権力によって行われたことを示していると言えよう。

このように永納山城の位置からも、東アジアの動乱を背景に国家的な防衛構想の中で築造され、そのことによって伊予国では大きな政治的・社会的改変を伴ったが、そうしたことを象徴する遺跡と言える。また朝鮮の築城の思想や方法を色濃く反映しており、そういう意味で古代山城は西日本各地に残された日朝交流のモニュメントとも言えるのである。

2. 山城と大宰・総領と「道」制

狩野 久

永納山城がいつ、どういう勢力により、どのような戦略的意図で築かれたのかは、今日まだ十分解明されていない。『日本書紀』には、天智3年(664)に対馬島、壱岐島、筑紫国等に、防(防人)と烽(とぶひ)を置き、筑紫にはまた大堤を築いて水を貯える水城を構築したこと、翌天智4年8月には、百済の亡命貴族で兵法にくわしい達率(百済第二の官位)億礼福留や達率四比福夫の指導により、筑紫の大野・椽(基肆)の二城を、また達率答怱春初の指導をうけて長門の城を築き、天智6年には倭国の高安城、讃吉国山田郡の屋島城、対馬国の金田城を築いたことがみえる。

白村江敗戦と山城の築城

このような城づくりが、天智2年(663)8月、朝鮮半島南西部の百済の錦江河口(白村江)で行われた、倭(日本)・百済軍と唐・新羅との2日間の海・陸戦で、倭・百済軍が壊滅的な敗戦を喫したことによるものであることは従来いわれているとおりである。対馬にはじまり、北九州、瀬戸内海沿岸から王都近傍の高安城までの山城づくりは、唐・新羅連合軍の倭国侵略を予想した西日本防衛ラインの構築といえるものである。ただし、その後の唐・新羅との対応をみると、日本側がどの程度の現実性と緊急性をもってそのことを認識していたかは疑問であり、両者は必ずしも緊迫した敵対関係をもち続けたようにみえないのである。

そのことに若干ふれておこう。白村江敗戦の翌年5月、唐の百済鎮將軍劉仁願の使者として、郭務棕という唐人等が筑紫に来るが、日本側はこの使者に対して、大山中(令制の六位相当)采女某を差し向けて接客させ、その上郭務棕を唐の正式な使者でなく、鎮將の私的な使者として処遇し、筑紫での饗応にとどめた。外交上のかけひきもあろうが、この時の日本側の対応には少なくとも敗戦国の卑屈な姿勢は感じられない。次いで翌天智4年9月に、今度は唐の正式な使者劉徳高が254人を連れて来日し、上表文を進めた。この時には都まで案内して饗応したらしい。同時にこの年には日本からも遣唐使が派遣され、高宗(唐皇帝)の封禪の儀(皇帝が国威を内外に誇示するために行う天地の祭祀)に他国とともに参列している。三回目は天智6年11月、唐使法聰らが前々年の遣唐使を送って筑紫にやってくるがあった。

この間の朝鮮半島の状況はというと、斉明6年(660)百済を滅ぼした唐と新羅は、勢いに乗って天智7年(668)には高句麗を滅ぼしている。唐に危機感をもった新羅は倭に接近するようになり、他方唐はそれを牽制するべく、天智10年11月、郭務棕ら600人、送使の百済旧臣沙宅孫登ら1400人を、船47隻に乗せ大挙して対馬近くの島に上陸させた。当時、百済旧領の唐の本拠地は新羅に攻撃を受けていたので、上記の人数の中には唐や百済の避難民も含まれていたようで、郭は侵略の意図のないことを前もって日本側に伝えたという。郭はその後天智の喪に服し、帰国したのは翌年5月のことである。新羅に破れた唐が、都督府を遼東故城に移したのは天武5年(676)のことである。この時期には実質的に朝鮮半島は新羅が統一する形になった。

以上のような白村江以後の唐・新羅と倭国との関係をみると、両者の間に切迫した緊張関係が

あったようにも思えないのである。このことは山城築造の目的が外敵を迎え撃つ即戦力的なものだけを意図したものではなく、一方において西日本の要地に在地支配の拠点をつくることもあわせもっていたのではないかと思われる。

築城にかかる年数

この時期の城で、築城にどの位の年数を要したかがわかる史料はないが、規模も構造もさらには時代的背景も異なるから簡単には比較できないが、奈良時代後半に吉備真備の建議、指導でつくられた怡土城は、完成までに12年を要している。また近年城跡の発掘調査が盛んであるが、それによって解明された遺構の実態をみると、到底短期間に築かれるようなものではないことがわかる。そこであらためて『日本書紀』の築城記事を見ると、大野城・基肆城・長門城については、前掲の天智4年8月のほかに天智9年2月にも「長門城一つ・筑紫城二つを築く」とある。これは従来重出記事として扱われ、天智4年を史実とみる説が提示されているが、城内施設を含めて考えると、とても1～2年の仕事とは思えないから、5年後の天智9年に築城が完成もしくは続行していると解することも可能である。なお『続日本紀』文武2年(698)の大野・基肆・鞠智の三城を繕治するとあるのは、築城開始以来30年以上も経過しているのであるから、文字通り修理と解してよいであろう。

同じことは高安城についてもいえることで、天智6年の築城記事につづいて、天智8年、天智9年に、税・穀・塩の倉をつくる話があるのは、城内施設の造営がなお続いていることを示している。また、文武2年、同3年には大野城などと同様に修理が行われている。

神籠石山城の年代観

さて、『日本書紀』等に記載のある上記の城のほかに、永納山城をはじめとして、北九州、瀬戸内海沿岸には、神籠石山城と称されるものが16城ある。これらがすべて天智朝に造られたものか否かには種々の見解があり、ことに九州の神籠石山城については、時代をさかのぼらせて6世紀初頭の筑紫国造磐井の乱に結びつけて、磐井側の築城とする説がある。このことは今後の調査の進展により明らかにされるであろう。ここで問題にしようとしている永納山城などの6城の瀬戸内海沿岸のものは、対馬金田、長門、讃岐屋島、河内高安と同じ防衛ライン上に配置されていることから、天智朝築城の可能性が高いのではと筆者は推測する。

ここでは以下今後の調査に資する意味で、古代山城の性格や機能、さらには時代的背景について、律令国家の軍制と比較しながら、文献の検討を中心に若干の私見を述べてみたいと思う。

山城の城内施設

文献から知られる古代山城の城内施設をみると、まず舎屋(高安城)なる建物がある。舎屋は倉庫に対して、城内に詰める軍士やその統率者の宿舍をひろくいうのであろう。いま一つの建物は倉庫群であり、これには不動倉(肥後鞠智城、稲倉で備蓄のためのもの)、税倉(高安城、稲倉で日常支出用のもの)、穀・塩倉(高安城)、城庫(大野城、衛卒の月々の糧米を納めるもの)があるほか、当然ながら兵庫(鞠智城、武器庫)もある。カッコ内の城名は文献で確認できる施設の判明する城である。倉庫群は大野城をはじめ、各地の城跡で多数みつまっている。このほか予想されるものとしては、望樓や烽燧の施設・資財庫がある。東北の城柵、例えば多賀城にみられるような官衙(役所)的なものは城内ではなく、大野城下に大宰府の官衙があるように、城下につくられた可能性が

高いが、これも今後の調査の課題の一つである。

山城の廃絶時期と軍団の成立

つぎに古代山城の性格・機能を考える上で、その廃絶の時期と意味をみておくことにしよう。大宝元年(701)8月に高安城は廃止された。この年は大宝律令が制定された年で、翌年同法が發布をみる画期的な年にあたっている。地方行政組織として国郡里制が施行され、国司の権限が強化され、郡司は民政のみを分担することとなり、軍政は国司一軍毅が担当することとなった。軍毅も地方豪族の出身であるが、郡司の三等親を排除し、国司の直接統轄下においた。軍毅が率いる軍団には規模の上で1,000人、600人以上、500人以下の3ランクがあり、一国に数団が置かれた。兵士は民戸一戸から一人の正丁が徴用され、番をつくって軍団に出向いて、武芸の教習をうけるほか、国府、兵庫、関の守衛、外国使節の送り迎えなどの任務についた。兵士は弓・刀などの武器や食糧を軍団に提供する義務があった。さらに兵士の中から交代で都の守衛(衛士)や西国防衛(防人)に赴くものがいた。

山城廃止の意義

大宝元年の高安城廃止の記事で注意したいのは、城を廃止する代替処置として、諸国に衛士を増員させ、宮城門を守る衛門府の組織の充実をはかっていることである。高安城を廃止することは、山城を結ぶ西日本の防衛ラインをやめることであるから、都自体の防衛をこれまで以上に充実させることが必要になったのである。

いま一つの軍制の改革は、城をつなぐ防衛体制に代わって、烽による防衛ラインを構築したことである。都が奈良盆地南部の藤原京から北端の平城京に遷るにともない、和銅5年(712)生駒山の烽の位置を南の高安烽から北の高見烽に移している。そして烽の終点は平城京東方の春日烽とされた。西日本の烽による緊急通信網は、対馬に発し、北九州、瀬戸内海沿岸を經由して、都近傍の烽に到達するものであった。

律令国家の軍制 - 防人と烽 -

律令国家の軍制を規定した軍防令をみると、もっとも多くの条数をさいているのが防人と烽である。奈良時代の防人については、東国の兵士が多く充てられたことは万葉集の防人歌によりよく知られたことであるが、法令上は全国の軍団兵士から徴用されるものであった。後には全国からの徴発が困難となり、西国の地元の兵士をもってあてることにした。烽は緊急時の通信手段であるから主として海防問題をかかえる西国の防衛装置として置かれたのであるが、近年栃木県宇都宮市の飛山遺跡から、9世紀の土器に「烽家」と墨書したものが出土し、関連して特殊な竪穴遺構が見つかったことから、烽の遺構と判断され、古代の烽制が必ずしも西日本に限られるものではないことが明らかとなった。東北の蝦夷地経営は7世紀中頃から古代を通して継続的に行われ、多賀城をはじめ多くの城柵が造られたことを考えれば、東日本にも烽があるのはむしろ当然というべきであろう。

軍防令によると烽は40里(約21km)ごとに置き、昼ならば煙、夜は火をあげ、煙は一刻の間(30分)、火ならば一炬(一束の火炬)の間に次の烽が対応しない場合には、脚力(駅馬か)をもって連絡するとしている。『延喜式』(兵部省式)には、大宰府管内の烽は使節の舟ならば一炬、賊は二炬、舟二百艘以上は三炬をあげるとある。火炬や煙具のつくり方も細かく規定されていて、炬筒や火

台を用いる構造は唐の烽を模したものといわれる。烽には烽長、烽子が配置され、烽長には国内有力者を国司が選び(三年交替)、烽子(正丁)は烽ごとに4人をあてた。烽を管轄したのは国司で、軍団が国司の指揮下に置かれたのと同じ扱いである。烽はさらに西海道では大宰帥が、政府では兵部卿が統轄した。烽の位置は駅とも関連させ、官道沿いの高所に置き、軍団とも連絡のとれ易い場所に置いた。

百済救援軍の部隊編成

ここであらためて山城築造期の軍制がいかなるものであったかをみておこう。その前に百済救援軍の部隊編成について記すと、全部隊27,000人の兵員が動員された。これを前・中・後に大きく分けて阿部比羅夫などの中央豪族を将軍としたが、大隊ごとの内実は各地の国造が率いる部隊により編成されていて、令制下の征討軍が大將軍－將軍－副將軍－軍監－軍曹－録事－兵士とヒエラルヒッシュに編成されていたものとは異なっていたとみられている。『日本書紀』をみると、勇將近江の豪族朴市秦造田来津の奮戦は記されているが、組織的な戦闘の様子はみられず、「我等先を争はば、彼自づからに退くべし」と軍士の志気を鼓舞するだけの戦争であった。『日本霊異記』には備後国三谷郡大領の先祖が百済救援軍に遣わされて、百済僧をつれて無事帰還でき、僧の協力で造寺に成功した話(上の7)や、伊予国越智郡大領の先祖の場合は唐軍に捕えられたが、観音菩薩の像を信敬して帰国でき、立郡(越智郡をつくること)を許された話(上の17)が載っている。また『日本書紀』(持統4・10)には、同じく唐軍の捕虜になった人で、軍丁筑後国上陽咩郡人大伴部博麻の助力で早く帰国できた筑紫君薩夜麻の話があるが、彼はその氏姓からみて筑紫国造の一族であろう。これらはいずれも西国の豪族たちの話であるが、百済救援に出兵したのは西国だけではない。他の史料から近畿や東国からも動員されたことがわかるが、主力は西国軍が占めていたと推測されている。

山城築城期の軍制

白村江後の軍制も、基本は国造軍を主体とするものであったとみられる。筑紫と吉備に大宰(オオミコトモチ)という地方官を置いたのは、両地域の広域的な行政を担わせると同時に、軍政官としての権限をも付与されたものと考えられる。筑紫の大宰は、律令制下にも引き継がれ、西海道一円を支配するとともに、防人を編成して海防を重要な任務とする組織となった。吉備大宰のもとにも、相当な兵力が集結していたことは、壬申の乱の際に、近江方から筑紫とともに吉備にも特別に募兵が求められたことから知られる。その時筑紫大宰栗隈王は海防を理由に断ったが、吉備国守はなぜか使者に殺されている。推測するのに、吉備も白村江後西日本の防衛拠点となって、かなりの兵力があったが、壬申の乱時には兵力を維持する事由が希薄となっていて、近江方に断る理由づけが困難だったためではないかと思われる。

吉備大宰の消滅

吉備大宰は吉備国の分割(備前・備中・備後)とともに、その役割を失った。三国の成立時期は、天武12年(683)から3年かけて実施された国境画定作業によってであると推測され、吉備大宰の任命記事も天武8年に現地で亡くなった石川王以後見当たらない。ただ、大宰と並んで吉備総領(惣領)という国宰(のちの国司)より上位にある官職に、文武4年(700)上野朝臣小足が任ぜられている。文武4年と言えば大宝元年の前年であって、大宰・総領も大宝律令の発布により国郡制が施

行され、その役割を完全に終えるのである。

伊予総領

ところで総領が史料で確認できる国は筑紫・吉備のほかに、坂東・周防・伊予がある。いま当地域との関連で伊予総領についてみると、『日本書紀』持統3年(689)8月条に、伊予総領田中朝臣法麻呂に詔して、讃吉国御城郡(讃岐国三木郡)で獲た白燕を放し養いせよと命じたとある。田中法麻呂は持統5年には伊予国司とあるから、彼は伊予国司であると同時に、讃岐国の行政にも関与する立場にあったことがわかる。同様のことは播磨国の里名改正に係わった吉備総領石川王(吉備大宰ともみえる人)にもみられることである。

七道以前の「道」制

ここで大宰・総領が配置された地域との関連で注目したいのが、律令制七道(東海道以下の広域行政区画)以前の「道」制である(以下七道以前の道制を「」で示す。)。これについて詳細な史料検討を行った山田英雄氏は、7世紀後半に全国的に広域行政区として「道」制が施かれたことを論じている(「もう一つの道制試論」1976)。例えば筑紫には筑紫道が、肥には肥道が設けられ、これが令制下で前後二国に分割されたとする。吉備の「道」制に関しては、山田氏の指摘以後、木簡により史料が増え、「吉備道中国」(備中国)などという国名表記により、「吉備道」の存在が明確になった。もっとも上記の国名表記について、「吉備」の「道中」と読んで、「道」を道路の意と解する説もあるが、筆者は大宰・総領の置かれた地域と、「道」制の施行地域が重なることを考え、「吉備道」の「中国」と読むことが妥当と考える。その場合、山田氏は「道」制を全国的にひろく設けられたものとし、大宰・総領も史料上は上記の地域に限られるが、これも全国に置かれたとする説がある。その可能性はまったく否定できないが、筆者は大宰・総領も、「道」も限定的なものと考える。西日本についてみると、筑紫、肥、豊の北部九州、周防、伊予、吉備の瀬戸内海沿岸の大宰・総領と、「道」制は密接な関係があると想定し、そこに上記にものべたように、広域行政区的な意味合いだけでなく、軍政的な役割をもつものとする。そしてまさにこの地域に山城が築かれているのである。

伊予の道前・道後

伊予について「道」制で思い合わされるのが「道前」「道後」の地域区分である。それは越智郡の国府を境にして、東側が道前、西側が「道後」である。その史料初見は長寛2年(1164)12月伊予国弓削島住人等解の「道前之方」で、それ以前にさかのぼるものはないという。越智郡に国府留守所が置かれた頃に設けられた行政区分とするのが現在の通説であるが、区分のもととなった「道」は、あるいは古い区分用語かもしれないが、他地域の例を参照すると、「伊予道」という行政区分があった可能性を想定してみたいのである。永納山城が越智郡の国府に近い場所に築かれていて、道前、道後の境に位置していることも興味深いことである。

最後にこれまでのべてきたことをまとめると、7世紀後半の白村江後の西日本の防衛網は西国の要地に築かれた山城を核として、大宰・総領の統率下に、国造軍といういわば非常備軍により維持されるものであった。大宝元年以降の令制下においては、都下を防衛するための五衛府(衛門府、左右衛士府、左右兵衛府)を充実させる一方、常備軍を擁する軍団と、烽という緊急通信連絡網を活用することにより、組織的にも機能的にも前代と比較にならない軍制を確立したのである。

『日本書紀』築城記事の有無

『日本書紀』の築城記事の有無は、編者の手元に偶々のこされた原史料の有無によるのかもしれないが、それなりに理由があるようにも思われる。大宰府管内の大野・基肆・鞠智・金田城は、西海の防衛基地として、防人の兵站基地や烽火の設置場所となって大宝以降も残り、長門・屋島の2城は、瀬戸内海の入口と中間に位置していて、見透しのきく重要な烽火基地として、宮廷の人たちのひろく知られた城であったのではと推測される。高安城が都を守る最後の砦として、大宝元年までその機能をもち続けたことは既述の通りである。これに対して、周防の石城山、吉備の鬼ノ城、大廻小廻、讃岐の城山、伊予の永納山の各城は、国の分割や国司の権限が強化確立するに従い、それまでの広域行政官であると同時に軍政官でもある大宰・総領の役割は筑紫を除いて消滅し、それに伴い軍要地としての機能が失われた結果、その存在意義が失われ、編纂途上の『日本書紀』の編者の目にふれることがなくなったのではと推測するのである。

《参考文献》

(史料) 『日本書紀』、『続日本紀』、『令義解』(軍防令)、『類聚三代格』

(研究文献)

- ① 鬼頭 清明『白村江』(教育社歴史新書、1981)
- ② 鬼ノ城学術調査委員会『鬼ノ城』(1980)
- ③ 坂本 太郎「天智紀の史料批判」『日本古代史の基礎的研究(上)』(東京大学出版会、1964)
- ④ 下向井龍彦「日本律令軍制の形成過程」(『史学雑誌』第100編第6号、1991)
- ⑤ 瀧川政次郎「律令時代の国防と烽火の制」『法制史論叢第4冊』(角川書店、1967)
- ⑥ 佐藤 信「古代国家と烽」『出土史料の古代史』(東京大学出版会、2002)
- ⑦ 岸 俊男「防人考—東国と西国—」『日本古代政治史研究』(塙書房、1966)
- ⑧ 鎌田 元一「律令軍制の形成」『日本の古代15』(中央公論社、1988)
- ⑨ 山田 英雄「もう一つの道制試論」『日本古代史攷』(岩波書店、1987)
- ⑩ 考古学研究会岡山例会委員会編『シンポ記録 激動の七世紀と古代山城』(2004)

3. 北部九州の神籠石からみた永納山神籠石

石 松 好 雄

わが国の古代において本格的な軍事防衛施設として築造されたものとしては朝鮮式山城と神籠石とがある。前者は天智天皇2年(663)朝鮮半島の白村江海戦における敗戦を契機として築造されたものであり、これらの築造状況については『日本書紀』や『続日本紀』に記載があり、これによって築造場所や年代について知ることができるとともに、これらの城が百済の高位の貴族の指導によって築かれたことが記されており、このことからこれらの山城が一般的には朝鮮式山城と呼ばれている所以もここにある。

一方これから述べる神籠石は山地に延々と数キロメートルにわたって方形の切石を敷き並べたもので、明治31年(1899)に福岡県久留米市所在の高良山神籠石が学会に報告されたのが最初である。この報告では高良山の山頂には式内社高良神社があり、これを取り囲むように列石がめぐらされていることから神聖な霊域を画するための施設として紹介された。その後福岡県下には女山、雷山、鹿毛馬、御所ヶ谷など類似の遺構が在ることが紹介されるにいたり、朝鮮半島の古代山城を調査した経験のある研究者たちは、これらを实地に踏査し、城郭以外の何者でもないとして山城説が提起されたのである。以後、この神籠石の性格をめぐって霊域説と山城説が対立し明治から大正年間にかけて長期にわたって論争がくり返された。しかしながら決着がつかないまま論争はしだいに下火になっていった。昭和38年(1963)新たに発見された佐賀県武雄市所在のおつぼ山神籠石の発掘調査がおこなわれ、山頂から山腹にかけて巡らされた列石上には版築による土塁が構築されているとともに列石前面には3メートル(10尺)間隔で柱穴が存在していることが明らか

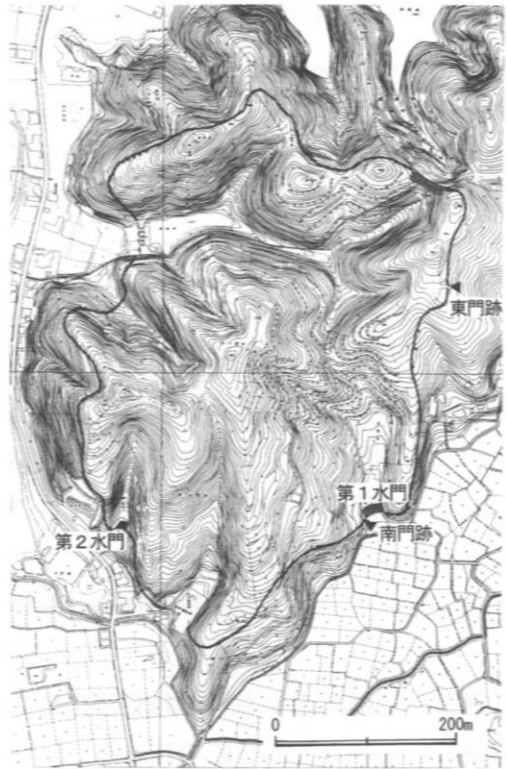
神籠石式山城一覧表

No.	名 称	旧国名	所 在 地	標 高(m)	全 長(km)
1	雷 山	筑 前	福岡県前原市	100	2.0
2	鹿 毛 馬	筑 前	福岡県嘉穂郡額田町	76	2.0
3	杷 木	筑 前	福岡県朝倉郡杷木町	147	2.3
4	宮 地 岳	筑 前	福岡県筑紫野市	310	2.8
5	高 良 山	筑 後	福岡県久留米市	253	3.5
6	女 山	筑 後	福岡県山門郡瀬高町	203	3.0
7	御 所 ヶ 谷	豊 前	福岡県行橋市・犀川町	247	2.9
8	唐 原	豊 前	福岡県築城郡太平村	83	1.7
9	帯 隈 山	肥 前	佐賀県佐賀市	178	2.4
10	お つ ぼ 山	肥 前	佐賀県武雄市	66	1.87
11	石 城 山	周 防	山口県熊毛郡大和町	359	2.53
12	鬼 ノ 城	備 中	岡山県総社市	397	2.8
13	大廻小廻山	備 前	岡山県岡山市	199	3.2
14	城 山	播 磨	兵庫県新宮町	158	(3.5)
15	城 山	讃 岐	香川県坂出市	462	4.2
16	永 納 山	伊 予	愛媛県西条市	132	2.5

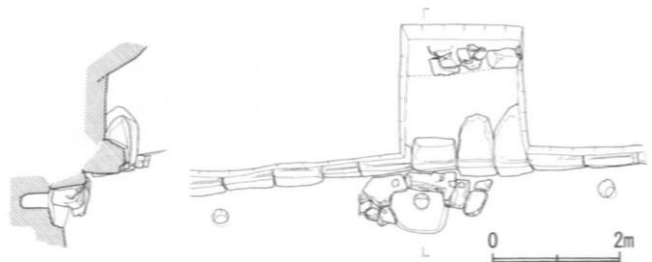
にされた。その後佐賀県の帯隈山、福岡県の女山における調査でも同じような版築による土塁および柱穴が検出され、神籠石は山城であることがほぼ確定的となった。これら神籠石は現在福岡県を中心とした北部九州から瀬戸内海沿いの中国地方および四国地方に分布しており、これまでに明らかにされている遺跡は表に示したとおり16カ所に及んでいる。

これまでの調査結果によると構造的には、いずれも列石を巡らし、その上部に版築による土塁を築き、これが谷を通過する部分は石垣を組み水門を設けている。また列石の途中数カ所に城門を設けるなど共通した点が多いことが明らかにされている。しかしながらその地形の取り方については北部九州所在の神籠石が山頂から平野に向けて斜めに構築されるのに対して瀬戸内海沿岸のものが山頂をはちまき状にとりまくように構築されていることから坪井清足は前者を九州型、後者を瀬戸内型として型式分類している。また近年北部九州では御所ヶ谷、鹿毛馬が、また瀬戸内海沿いでは鬼ノ城、大廻・小廻山などの発掘調査が行われ北部九州所在のものと瀬戸内海沿岸域所在のものとは列石の形状や水門の形態など幾つかの相違点のあることも明らかになってきた。次にこの両者を比較しながら、その類似点および相違点について見ていこう。

まず北部九州所在の神籠石は坪井が九州型として型式分類しているが、その構築形態は山頂から山腹にかけて列石が構築されており、したがって山腹側に一カ所ないし数カ所の谷を取り込んでいる(第1図)。列石は幅1～1.5メートル、高さ1メートルほどの方形切石を前面および上面をそろえるように一列一段に敷き並べている。さらに前面の上端部をL字状に切り欠いた加工がなされている例が多い。この列石は、その上部に構築される土塁の土留めの施設を設けるためのものと考えられており、列石の前面は露出されていたと見られている。また発掘調査が行われたおつぼ山や帯隈山などで列石前面に検出された柱穴は列石上部に版築による土塁を構築する際の堰板を支えるためのものではなかったかと見られており、しかも3メートル(10尺)間隔で検出されていることは神籠石の築造年代を推定する一つの根拠とされている(第2図)。このように方形切石を一段一列に敷き並べた列石、その上部に版築により盛られた土塁および列石前面の柱穴、これらの遺構の組み合わせは九州型神籠石には普遍的



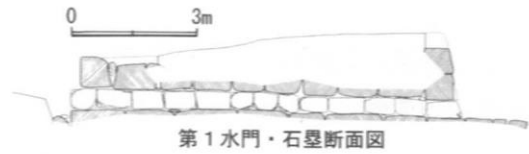
第1図 九州型神籠石(おつぼ山神籠石)



第2図 列石・柱穴(女山神籠石)

なものとして理解されている。この列石・土塁が谷部を渡る所は石塁構造とし、主にその下辺部に内部の水を排水するための水門が設けられている(第3図)。ところで近年発掘調査が行われた御所ヶ谷神籠石ではこのような遺構とともに新たな遺構が検出されている(第4図)。第4図-1は列石前面にも版築による盛土がみとめられ、列石は版築土によって被われている。このような構造は石城山や鬼ノ城など瀬戸内型の神籠石系山城で観察されている。石城山の発掘調査に参加した小野忠熙はその調査結果から列石および柱は土塁の築成工事の過程で設けた仮設的なもので、完成時には土塁の内部に埋存していたとの見解を示している。第4図-2は土塁前面に列石は設置されておらず柱穴のみが検出された例であり、このように北部九州における神籠石の土塁の構築法にも瀬戸内海沿岸のものに共通する工法が取られていることがしだいに明らかにされてきている。このような列石および土塁によって囲繞された城内への通路として数カ所に城門が設けられている。おつぼ山では東門跡と南門跡が調査されているが、いずれも間口1間(7尺)、奥行2間(9尺)の掘立柱建物で、かなり簡略な構造の門であったと推定される(第5図)。また城内ではこれまでのところ建物跡などの明確な遺構は検出されていない。御所ヶ谷では城内中央部の尾根上で3間×4間の総柱建物の礎石が残っているが、その中には列石を転用したものがあることから疑問視する意見もある。また最近発見された唐原神籠石では列石線のすぐ内側から3間×5間の総柱礎石建物跡が発見されているが、礎石の大きさや間隔など幾つか疑問点も指摘されており、神籠石にともなう内部施設と断定するには疑問が残る。

以上述べた九州型神籠石の構成要素と最近

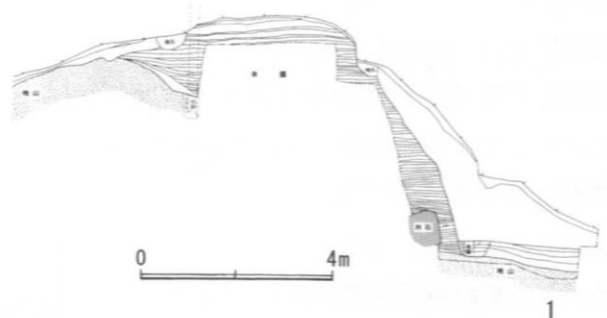


第1水門・石塁断面図



第2水門・石塁正面図

第3図 水門(おつぼ山神籠石)

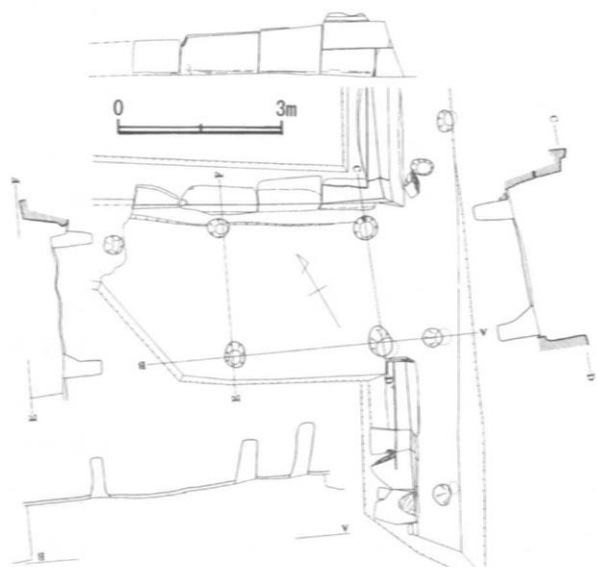


1



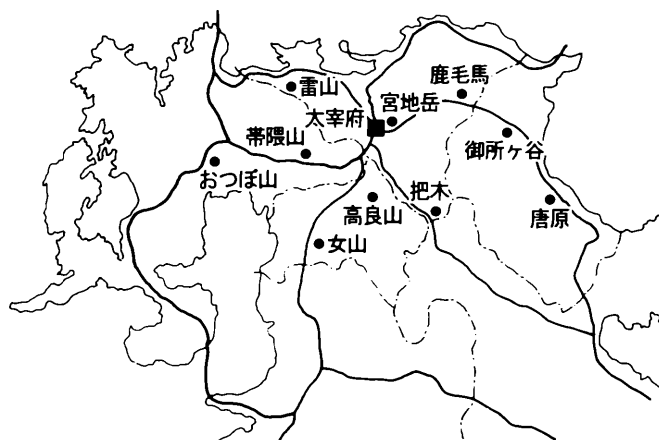
2

第4図 列石・土塁・柱穴 断面図(御所ヶ谷)



第5図 城門(おつぼ山神籠石)

における御所ヶ谷の発掘調査成果を参考にしながら今回の発掘調査によって得られた永納山の遺構について比較検討してみよう。まず地理的な分布を見てみると北部九州所在の神籠石の殆どが内陸部に位置しており、しかも主要幹線交通路（官道）沿いに位置している（第6図）。これに対して瀬戸内海沿岸部に所在する山城のうち中国筋の石城山、鬼ノ城、大廻・小廻山はやや内陸部によっているのは幹線道路（山陽道）と瀬戸内海の両者を意識して築造されたためと考えられる。これに対して四国北部沿岸には永納山のほかに城山および天智天皇6年（667）に築かれた朝鮮式山城としての屋島城があるが、いずれも直接瀬戸内海に接するような沿岸部に築造されており、これらは主として瀬戸内海を監視する役目を担った戦術的拠点として築造されたものと考えられる（第7図）。永納山は最高所が標高132メートルで北部九州のおつぼ山（66m）、鹿毛馬（76m）、唐原（83m）に



第6図 北部九州神籠石分布図



第7図 瀬戸内海沿岸神籠石分布図

ついで低い山塊にある。地形的には北に向かって開いた谷を中央に取り込み馬蹄形を呈する尾根上に列石、土塁がめぐらされており、全周は2.5キロメートルにおよんでいる（第8図）。このような地形の取り方は、その規模において大きな隔たりはあるが天智3年（644）、白村江海戦後に大宰府政庁の背後に築造された大野城にきわめて類似していることが指摘できる。次に列石は花崗岩の割石ないし自然石を一段一列に敷き並べているが大小様々であり規格性は認められず、北西部の医王山など場所によっては一辺が20～30センチメートルほどのかなり小型の荒い割石を使用しているところがある。このような石材の使用は直方体切石を主体とした規格性のある九州型の神籠石には見られない石材の使用法であり、九州型と瀬戸内型との相違点のひとつであると共に永納山の特色であるとも言って良いであろう。また列石線は数メートル単位で直線的に石を並べ、それを地形に沿わせて連続させていくことを基本としたいいわゆる「折れ線構造」を取っている。このような構造は基本的に曲線からなる北部九州の神籠石とは異なっており、きわめて対照的である。また、列石上部の版築による盛土は主として「内托法」による築成法が取られていると思われるが場所によっては「馬の背」状の地形を呈する所が数箇所あり、この部分は「夾築法」による築成法が取られている可能性があり土塁前面の列石と並行して城内側にも列石が存在していることが考えられ今後の調査によって確認する必要がある。また石城山や鬼ノ城、大廻・小廻山

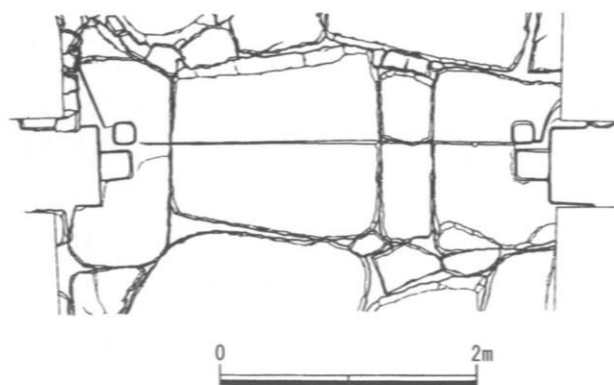
など瀬戸内海沿岸部に所在する神籠石では列石前面にも版築による盛土がなされていることが確認されており瀬戸内型の特徴と理解されてきているが、永納山ではこれまでのところそのような遺構は明確には確認されて居らず、列石前面を露出させる九州型神籠石の工法と同じように列石前面は露出していた可能性が強い。さらに列石前面の柱穴については南東部で三個が検出されているが、全く検出されていない所もある。この列石前面の柱穴の有無については土塁の構築法と密接な関係を有していることから今後さらに精査する必要があるだろう。つぎに北に向かって開く谷の開口部には比較的大規模な石塁と水門が設けられていたことはまちがいないとみられるが、ここにはJR予讃線が通過しており、この鉄道敷設工事の際に破壊されたものと考えてまちがいないであろう。城門の位置や構造については未だ明確ではないが、今回の調査において列石線東側で途中二カ所ほど幅数メートルにわたって列石が欠失している所が確認されており門跡と推定されるが、後世における自然災害による崩落の跡の可能性もあり、今後の調査を待つ以外にない。門の構造としては推測の域をでないが、第5図に示したようなおつぼ山に見られるような構造のものとは異なり石城山や鬼ノ城など瀬戸内型の神籠石に見られるような大きな石の側面に柱を据えるためのコ字型の切り込みを入れ、上面に方立をたてる切り込みを設けた石製唐居敷を使用した構造のものが考えられる(第9図)。その他内部施設についても何も知られていないが、鬼ノ城では倉庫と見られる3間×3間、5間×3間といった礎石総柱建物が数棟検出されており、永納山の場合も中央の谷に向かって延びる尾根上に遺存している可能性も考えられる。

以上永納山神籠石について北部九州所在の神籠石と比較しながら見てきたが、今回の発掘調査は史跡指定のための調査であり、従って列石・土塁線の範囲確認に重点がおかれたため城門の位置や構造をはじめとして内部施設の有無など今後解明していかなければならない点が多い。今後の発掘調査が期待される。

以上永納山神籠石について北部九州所在の神籠石と比較しながら見てきたが、今回の発掘調査は史跡指定のための調査であり、従って列石・土塁線の範囲確認に重点がおかれたため城門の位置や構造をはじめとして内部施設の有無など今後解明していかなければならない点が多い。今後の発掘調査が期待される。



第8図 永納山神籠石地形図



第9図 鬼ノ城西門

第7章 ま と め

永納山城跡が発見され古代山城と認知されてから今回の調査に至るまでに、すでに20数年が経過したが、この間、遺跡の置かれていた環境は必ずしも良好なものではなかった。しかし、旧東予市では市民の文化財への関心の高まりと共に永納山城跡の重要性が再認識される中、遺跡の保存・整備・活用の前提として平成14年度から3ヵ年、現地での確認調査を実施してきた。調査自体は遺跡範囲の確定が主目的であったため、トレンチ数や個々のトレンチ規模も限られたものであったが、前章までに述べてきたように多くの成果が上がり、それに伴い新たな知見を得ることができた。さらに第6章では永納山城に対する3つの論考を頂き、多様な視点からの永納山城に対する評価が可能となった。そこで、これらを踏まえた上で、当遺跡の調査成果を再度、以下にまとめておきたい。

1. 永納山城の立地と城壁外郭線

永納山城は、標高132.4mを最高所とする独立山塊に築かれた山城である。瀬戸内海南岸を西方で東西に分断する高縄半島の付け根に位置し、海上交通の要衝・来島海峡を見据える場所に築城されている。また、永納山城を挟んだ南北には、県下第二の規模を誇る道前平野と古代国府推定地のある今治平野がそれぞれ存在しており、この地が海上・陸上交通の両面において重要な場所であったことが窺える。

次に山城が築かれる山塊の地形に目を向けてみると、永納山城は、その城域の大半を占める永納山と、その北西部にそびえ現在は独立山塊となっている医王山(標高130.1m)の2つの山塊を取り込んでいる。永納山の規模は東西約780m、南北約970mを測り、既述の最高所(永納山山頂)は遺跡東部に位置する。さらに、永納山中央には北へ向け開く大きな谷が存在しており、永納山城の特徴を大きく捉えると、この谷を取り囲むように外郭線が巡らされる包谷式山城といえる。

城壁の外郭線は、基本的にはこの山の尾根からやや下がった外側斜面に、尾根の傾斜に沿うように巡らされており、その全長は欠損部分も含めると約2.5kmを測り、範囲は、東西約470m、南北約720mである。

2. 永納山城跡の特徴

(1) 調査の成果から

①**多様な城壁外郭線** 古代山城を最も特徴付けるものは城壁を構成する土塁とその基底部に並べられる列石であり、永納山城においても他の山城同様に、これらを確認できる。まず、概略的な構造をみると、列石は尾根斜面の地山を水平に削平し、そこに直接あるいは盛土をなした後に据えられる。この据え方の違いはおそらく、急傾斜な斜面に列石を並べる際の調整的な意味合いが強かったものと考えられる。また、列石背後には、列石同様の花崗岩を用いながらも小振りの石

が1～2個程度置かれ、これら列石と裏込め状石の上に土塁が築かれる。今回確認した土塁は、すべて内側に尾根斜面を利用した内托土塁であった。なお、列石・土塁の特徴については後述する。

また、このような列石による外郭線に加え、人工的な構造物として石積みによる城壁を2ヵ所で確認した(図版31・37)。共に石材が現状で最大4段に積まれる点は共通するものの、これらの石積みは石の積み方、立地も異なっており、段数以外に共通性が見られないことから、本来別の役割をもっていたものと考えられる。しかし、現状確認に留めた今回調査では、それぞれの性格を明確にできなかったため、今後の調査によって、その詳細を明らかにする必要がある。

さらに、以上のような人工的な城壁とともに、外郭線中の各所に見られる自然地形を利用した城壁構造が永納山城の大きな特徴である。山中には、城内外に関わらず露出した岩盤があちこちに見られ、特に尾根外側斜面に絶壁状に切り立つ岩盤は、それだけで城壁の役割を十分果たしうるものも多く、以前から岩盤利用の可能性が指摘されていた。今回、このような状況を再確認し、列石・土塁と岩盤との関連を把握するための調査を実施した結果、列石が岩盤へつながる接続部が各地区で検出され、調査によって改めて外郭線への岩盤利用の状況が明らかとなった。特に東部では、まさに岩盤を基準として、その間をつなぐように列石が並べられている様子も見られた。

また、もう一つの自然地形利用として、列石は並べるものの、その背後に土塁ではなく岩盤(地山)を利用した城壁構造の存在が考えられる。遺跡南部や東部でこのような状況が確認されたが、この周辺には急勾配の岩盤や地山が露出しており、列石の背後にも急傾斜な斜面が尾根筋に向かい立ち上がっていた(図36・53・54)。さらに列石自体も短い区間で岩盤の間にみられることから、周辺地形との関係も踏まえて考えると、列石背面は自然地形を利用していたものと理解できる。

②列石・土塁の特徴

・列石 列石には以下のような特徴がみられる。

1. 花崗岩の自然石もしくは粗割石が用いられ、丁寧な加工を施すものや上部をL字状にカットするようなものは見られない。
2. 石材の大きさは横幅20cm前後のものから1mを越えるものまであり、明確な規格性は見られない。あえて、大きさに関して主体となる数値を上げるならば、横幅40cm前後のものが比較的多いように見受けられるが、全体的に小型の石材が使用されていることを指摘できる。
3. 各石材は横幅に対し奥行きを長くするように置かれ、石の厚みも20～40cm前後と薄い。

以上1～3のような不整形で小型、扁平な石材を用いる状況は、横幅1m前後で分厚い大型の切石を据置き、並べていく北部九州の神籠石山城とは対照的であり、永納山城の特徴ともいえる(第6章3参照)。

4. さらに列石は、折れ構造をなして斜面を巡っており、この点でも曲線構造を主とする北部九州の神籠石山城とは、異なった特徴を示している。

・土塁 城壁としては、上記のように岩盤や尾根の傾斜といった自然地形を取り込むものの他、土塁によるものが見られるが、土塁の構造に関しても、特徴的な状況が明らかとなった(図版1・2)。

1. 版築工法による明確な水平堆積をなす土塁が主体である。今回確認できた土塁の大半は、この水平堆積をなす土塁に含まれ、この点は他の多くの古代山城とも共通する。主要な土塁構成

土は地山の土である花崗岩風化土であり、これ以外の構成土としては、粘質土や砂質土が用いられ、互層状に積み上げられる。この点は、遺跡全体にほぼ共通する特徴である。しかし、各トレンチの土塁状況や、また同一土塁内であっても各層の状況を見ると、層の厚さや礫・炭の混じり具合等には明らかな差が見られ、場所により様相を異にする。

2. 明確な水平堆積をなさない土塁では、各層が水平面を意識しながらやや傾斜したレンズ状に堆積している状況が確認された(H14-2トレンチ)。また、このトレンチで特筆すべき点は、基盤層構築の際の堰板痕の可能性もある縦層が確認されたことである。このような状況は1ヵ所でしか確認されていないため、今後、さらなる検証の必要も残るものの、在地的な系譜が追える技術の可能性もある。

表4 古代山城比較表

		九 州	瀬 戸 内	永 納 山 城
占 地		傾斜圍繞(包谷・九州型) 鉢巻(瀬戸内型)	鉢巻(瀬戸内型)	傾斜圍繞(包谷・九州型)
城 壁 構 造	城 壁 の 類	列石・土塁（一部に石塁） 石塁	列石・土塁（一部に石塁）	列石・土塁 一部に石積み
	自 然 地 形	利用するものあり	利用するものあり	利用あり
列 石	加 工	切石・上端面L字加工 （一部ではL字加工ないものも見られる）	割石・自然石 石城山は切石	割石・自然石
	大 き さ	70cm以上のもの中心	40～50cm中心	40～50cm中心
	構 造	曲線（一部に折れのものあり）	折れ	折れ
柱 穴		あり・3m間隔中心 （確認されていない山城もあり）	鬼の城・石城山あり その他・なし	1ヵ所で確認・3m間隔
土 塁 構 造	形 態	内托中心（一部、夾築あり）	内托中心（一部、夾築あり）	現在のところ内托のみ
	工 法	版築中心	版築：鬼の城・大廻小廻 版築認められない： 屋島・城山	版築中心 一部で版築認められない
そ の 他 の 構 造	門	礎石 掘建柱：おつぼ山	礎石：石城山・鬼の城・城山等	未検出
	水 門	各城で検出	各城で検出	未検出
	内 部 施 設	礎石建物：大野城・鞠智城等	礎石建物：鬼の城	未検出

* 各山城は、非常に様々な特徴を示しており、単純に九州・瀬戸内と分けることはできないが、永納山城の特徴を明確にするため、この表を作成した。

* 占地の分類は葛原克人氏の分類を参考とし、側方から見て外郭線がほぼ水平に走るものを鉢巻型、斜めに走るものを傾斜圍繞型としている。（葛原 克人 1981 「古代山城の特色」 『日本城郭体系』）
しかし、研究史的にみて、包谷式・鉢巻式、九州型・瀬戸内型という分類も広く定着しているため、細部で若干に差異はあるものの併せて掲載した。

④永納山城の年代 今回の調査によって、永納山城が列石・土塁を主な城壁構造として持つ遺跡であることを再確認し、このような特徴から古代山城であるとの認識が深まった。古代山城の中でも神籠石山城は、年代決定の資料が乏しく、いまだに年代論争は続くところであるが、朝鮮式山城との比較や、調査によって出土する遺物をもとにした研究の積み重ねにより、その築城年代が7世紀後半から8世紀初頭の間に集約しつつある。今回の調査では、永納山城の年代が明らかとなることも期待されたが、直接的に築城年代を示す情報は得ることはできなかった。しかし、H14-2トレンチで出土した畿内系土師器は、永納山城の時期を考察していく上で少なからず重要な役割を果たすものである(図版3)。この土師器の示す年代は、その特徴から平城Ⅱ～Ⅲ期に比定でき、実年代をあてはめると8世紀第2四半期となる。土塁崩落土下層という出土状況から、この年代が築城時期そのものを示す可能性は低く、なおかつ、土器の残存状況が良好な点を見ると、土塁構成土の中に含まれていた可能性も低い。このような状況からこの土師器は、永納山城が築城された後、廃城となるまでの間に使用されたものが、土塁崩落と共に土塁構成土中に混入した可能性が最も高い。一点の土器から明らかにできることには限界があり、現状で確実であるのは、永納山城の築城が少なくとも8世紀前半より遡るという事でしかないが、この年代観はこれまで言われている古代山城の年代とも矛盾しない。

(2)築城の背景

古代山城が築城された時代背景には、文献に語られる朝鮮式山城の築城契機に示されるように東アジア社会の中での国際的緊迫状況があり、その築城は国家的事業としてなされたものと考えられる。この点は、文献に名のない神籠石山城においても同様であろうと思われる。では、一体いかなる理由でこの地に永納山城が築かれたのであろうか。この点に関しては、立地条件、他の古代山城、伊予国府との関連等、様々な角度から論じられている。

まず、その立地をみると、永納山城は瀬戸内海に面する独立山塊上に築かれ、そこは海上交通の要衝・来島海峡を一望することができる場所である。四国北岸を、斎灘から来島海峡を抜けて燧灘を通り中部瀬戸内に至るという行程は弥生時代以来、主要な交通ルートであった。さらに瀬戸内海を西から東へ向けて海峡を抜けようとする船団にとっては、永納山城は高縄半島によって死角となる。これに対し、永納山城からは、このような海上の様子が手に取るように見えたのである。当山城が、都へ向け東進してくる船団の監視的な役割を果たしていたと理解した場合、当所はまさに最適の地であったと考えられる。また、瀬戸内海沿岸の各山城が、当時都のあった大和周辺を防衛するという目的で築城され、互いに連動して機能していたものと想定するならば、上述のような条件は必要不可欠であったであろう。(第6章2参



写真 10 燧灘から見た永納山城跡

照)。次に、もう少し永納山周辺に目を向けてみると、伊予国府や太政官道との関連からこの地の重要性が説かれている。すなわち、永納山城の北には国府推定地のある今治平野(古代越智郡)が広がる。さらに、永納山の所在する道前平野北部(古代桑村郡)の伊予国における軍事的重要性も明らかにされた(第6章1参照)。また、これら両平野を結ぶように山城の西側ふもとには、南海道が通っていたことが指摘されており、当時も南海道あるいは、その前身となる官道が通っていたことは十分考えられる。

以上のような視点からみても、永納山城築城時の当地の重要性を疑うことはできないが、いかに立地的条件に優れていようとも、その周囲に社会的・経済的環境が整わないことには、国際的緊張関係の中、容易には山城の築城はできなかったであろう。たとえ、国家主導として築かれた山城であったとしても、その築城工事に際しては、当然在地の力が関与していたはずである。

そこで、周辺の歴史的環境を見ていきたい。まず、古墳時代後期の道前平野には、禽獣葡萄鏡や珠文鏡が副葬された甲賀原古墳群や、楠古墳群・六軒家古墳群など多くの群集墳が分布することから、すでに在地の豪族が成長していたことが窺える。

また、永納山城との年代関係には若干の問題を残しているが、近年の発掘調査によって、これまで考古学的資料が少なく空白のあった古代の様相が明らかになりつつある。古代の道前平野には桑村郡と周敷郡の2郡が置かれていたことが知られるが、永納山城から約7km南の久枝Ⅱ遺跡で周敷郡の官衙関連施設と考えられる建物跡や柵列が検出されており、周敷郡衙もその周辺にあったものと推定される。さらにこの久枝Ⅱ遺跡から2.7km南の松ノ元遺跡では、従来推定されている南海道より西側を北へ延びる道路状遺構が確認され、ここに隣接する大久保遺跡や大開遺跡では多数の建物群が検出されている。

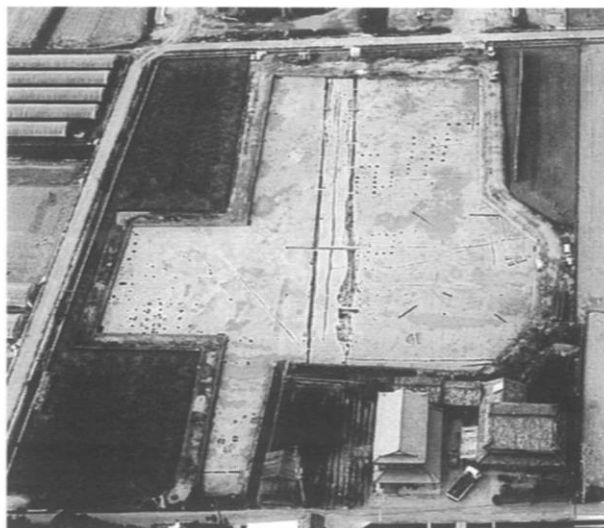


写真 11 松ノ元遺跡 官道遺構

この官道遺構は駅路から分岐した伝路の可能性が高いとされており、周辺の遺構はこの官道に関連するものである可能性が指摘されている。これら平野中央部の状況に加え、永納山城跡の所在する平野北部では、古墳時代後期から古代へかけての集落関連遺構も資料数が増加の傾向にある。

続いて、今治平野側の遺跡を見てみると、先述の国府推定地に関しては数説が存在するものの、いまだ確定に至っていないのが現実である。しかし、国府推定地の一つである八町説推定地に近接する八町1号遺跡では、墨書須恵器や石帯が出土するなど、一般集落ではみられない状況も確認されている。

また、先述したように、この両平野をつなぐ当時の古代官道「南海道」の駅路が、永納山城の西麓を通ると推定されていることも両平野の中間に位置する永納山城跡の重要性を示している。

以上のように、考古学的資料からも窺える、古墳後期から律令期へと継続的に成長してきた地

元の豪族が、山城築城の実質的な原動力となったのではないだろうか。永納山城が中央の指導の下、築かれた山城であり、列石・土塁といった古代山城共通の要素を持ちながらも、城壁構造の細部に独自性がみられるのは、まさに地元の関与を示しているものと理解できる。

3. まとめと課題

古代山城の古代史上における重要性は、これまでも様々な視点から論じられており、永納山城に関しても各分野から研究されている。しかし、これらの成果の中であって、永納山城そのものの実態は漠然としたものであったと言わざるを得ない。しかし、この3カ年の確認調査を通じ、ようやく永納山城自体の輪郭が明らかとなった。今後は、さらに城門・水門・内部建物など、城を構成する他の遺構を明らかにし、永納山城の姿をより明確なものとしていかねばならない。水門は従来から言われているように、遺跡北部の谷開口部にあったと考えられ、トンネル工事の際にすでに崩壊している可能性も高い。しかし、そこへ続いていく外郭線は、今回の調査により谷の両側で確認され、より正確に水門の位置を予測することが可能となった。また、すでに指摘されている城門推定地については、今回調査を行わなかったが、現地踏査により、新たにいくつかの門推定地を比定することもできた。また、内部遺構についても調査は実施しておらず、全く不明な状態であるが、城内側へ伸びる丘陵平坦面にその可能性も指摘される。これらを一つ一つ明らかにしていくことが、今後の課題である。

さらに永納山城の年代についても、課題が残された。今回調査の出土土器から山城の継続時期の一点に迫ることはできたが、これはあくまで、わずかな土器資料からの位置付けである。3カ年の間に出土した遺物は、コンテナ1箱にも満たず、特徴の把握できるものは数点に過ぎなかった。今後、更なる資料の蓄積を行い、永納山城の築城年代を明らかにしていかなければならない。

(下條 信行・渡邊)

*本章で掲載した写真2点は、財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター 柴田 昌児氏のご好意により、資料提供を頂いた。

*まとめにあたり、他の古代山城との比較に関しては、各地で実施されている古代山城の調査報告や古代山城に対する研究論文を、道前平野の遺跡の動向については、愛媛県埋蔵文化財調査センターによる発掘調査成果とそれに基づく研究成果を参考としたが、紙数の関係により参考文献は割愛させていただく。

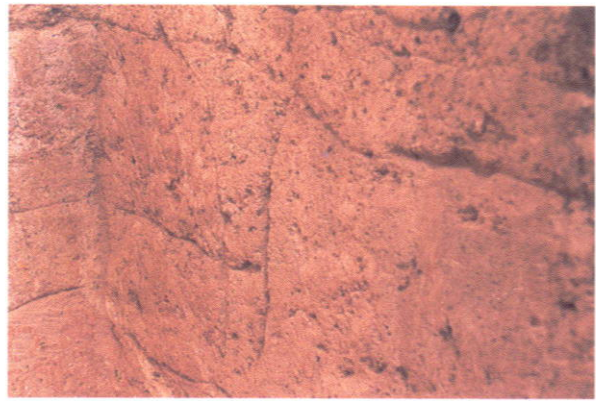
*本章の文責は渡邊 芳貴にある。



左上：H15-12トレンチ
右上：H16-8トレンチ拡張区
左下：H16-5トレンチ
右下：H16-7トレンチ



H14-2トレンチ



H14-2トレンチ列石前面盛土



H14-7トレンチ



H15-4トレンチ



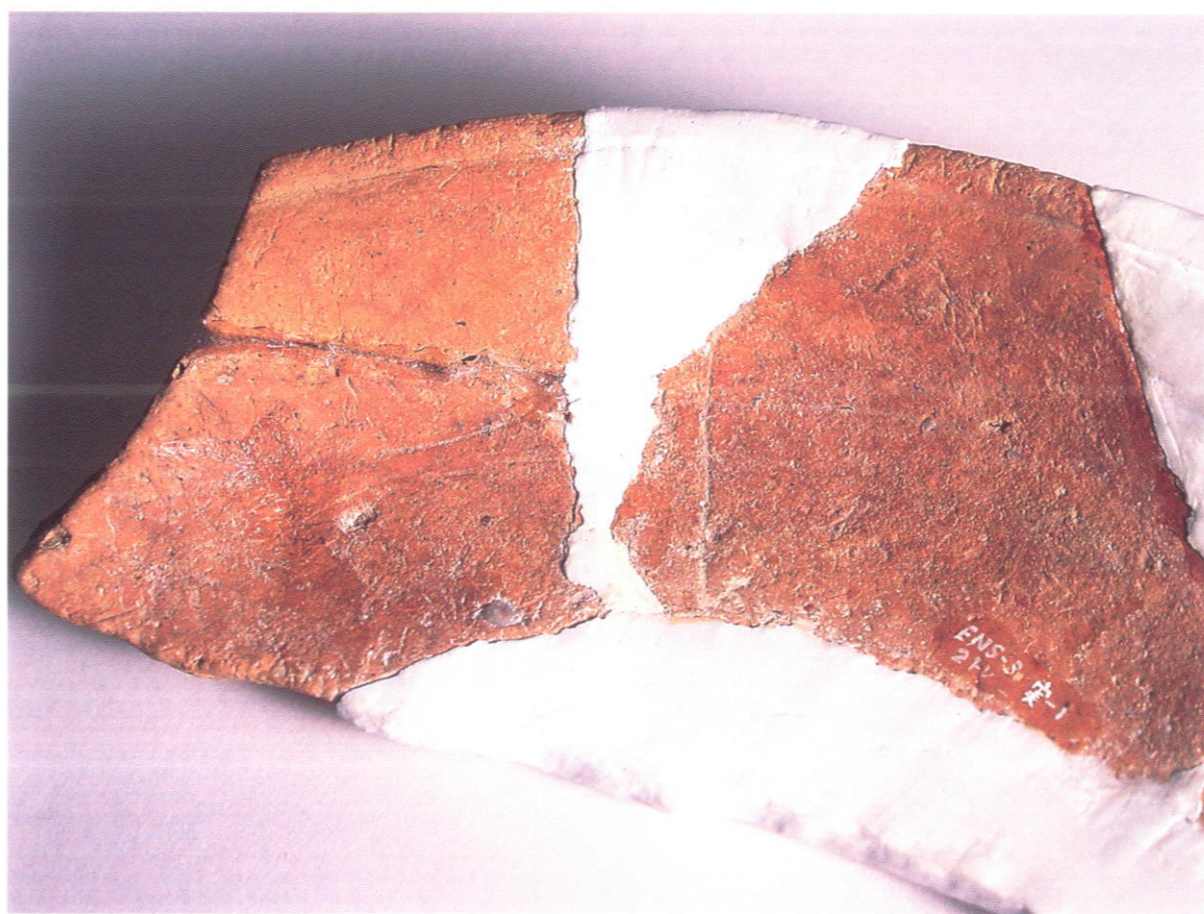
H15-3トレンチ



畿内系土師器 1 (内面)



畿内系土師器 1 (外面)



畿内系土師器 1 (内面 放射状暗文)



畿内系土師器 1 (傾き)



赤色塗彩土師器



H14-1トレンチ 岩盤検出状況



H14-5トレンチ 岩盤検出状況



H14-6トレンチ 北壁断面



H14-6トレンチ 断面(西から)



H14-2トレンチ 列石検出状況(南から)



H14-2トレンチ 折れ構造(北西から)



H14-2トレンチ 東拡張区(南西から)



H14-2トレンチ 列石・裏込め状石(北西から)



H14-2トレンチ 列石下盛土



H14-2トレンチ 土塁断割り東壁断面 1



H14-2トレンチ 土塁断割り東壁断面 2



H14-2トレンチ南拡張区 列石前面盛土断割り1 (北西から)



H14-2トレンチ南拡張区 列石前面盛土断割り2



H14-2トレンチ北拡張区 岩盤平坦面 (南東から)



H14-2トレンチ 土器出土状況 (北西から)



H14-3トレンチ 列石検出状況(南から)



H14-3トレンチ 断割り部



H14-4トレンチ 列石・岩盤接続部検出状況(南から)



H15-2トレンチ 岩盤検出状況（南西から）



H15-2トレンチ北拡張区 岩盤検出状況（南から）



H14-7トレンチ 全景(西から)



H14-7トレンチ 列石・土塁検出状況



H15-1トレンチ 全景(西から)



H15-1トレンチ 断割り状況



H15-1トレンチ 列石・裏込め状石(北から)



H15-1トレンチ北方列石（南から）



階段状に積まれる列石（H15-1トレンチ北方列石）



H15-3・4トレンチ
外郭線遠景（南から）



H15-3・4トレンチ
外郭線近景



H15-3トレンチ・東拡張区 列石検出状況（南から）



H15-3トレンチ 列石検出状況（南から）



H15-3トレンチ 土塁断割り状況（西から）



H15-3トレンチ西拡張区 列石・土塁



H15-4トレンチ 列石・土塁・岩盤検出状況（南から）



H15-4トレンチ 東壁断面



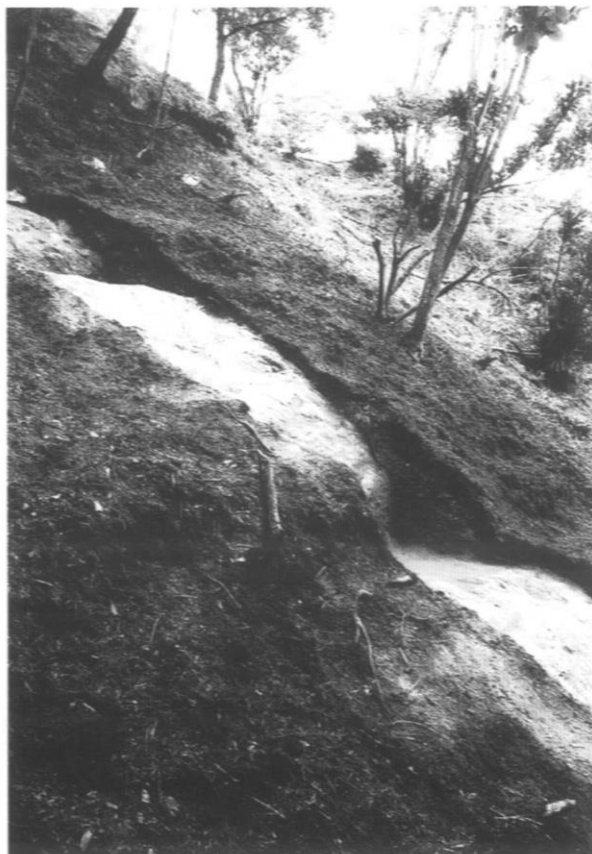
H15-3・4トレンチ間 列石検出状況（南から）



H15-3・4トレンチ間 東壁断面



H16-1トレンチ 岩盤検出状況(西から)



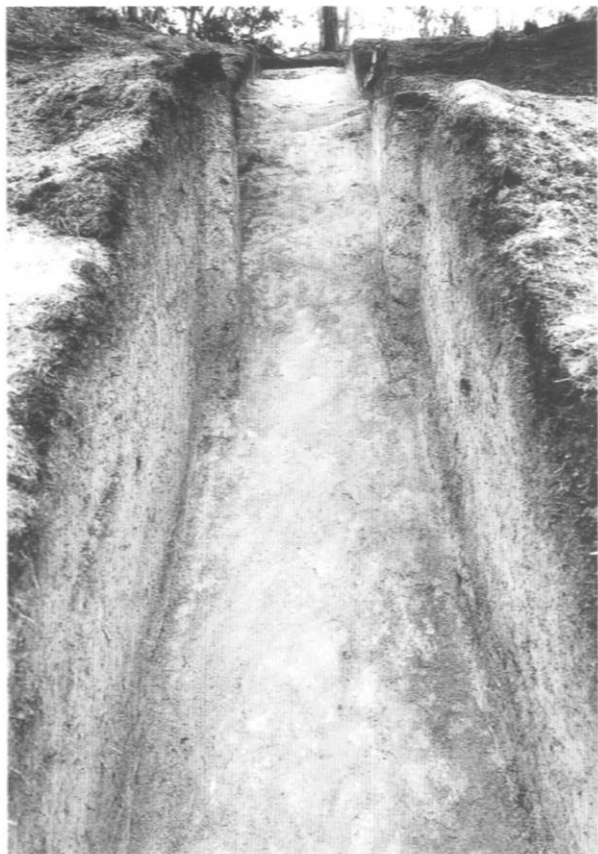
H16-1トレンチ 岩盤削平状況(北西から)

南部突出部
遠景（南東から）



H15-6トレンチ
東区及び周辺
列石近景
（南東から）

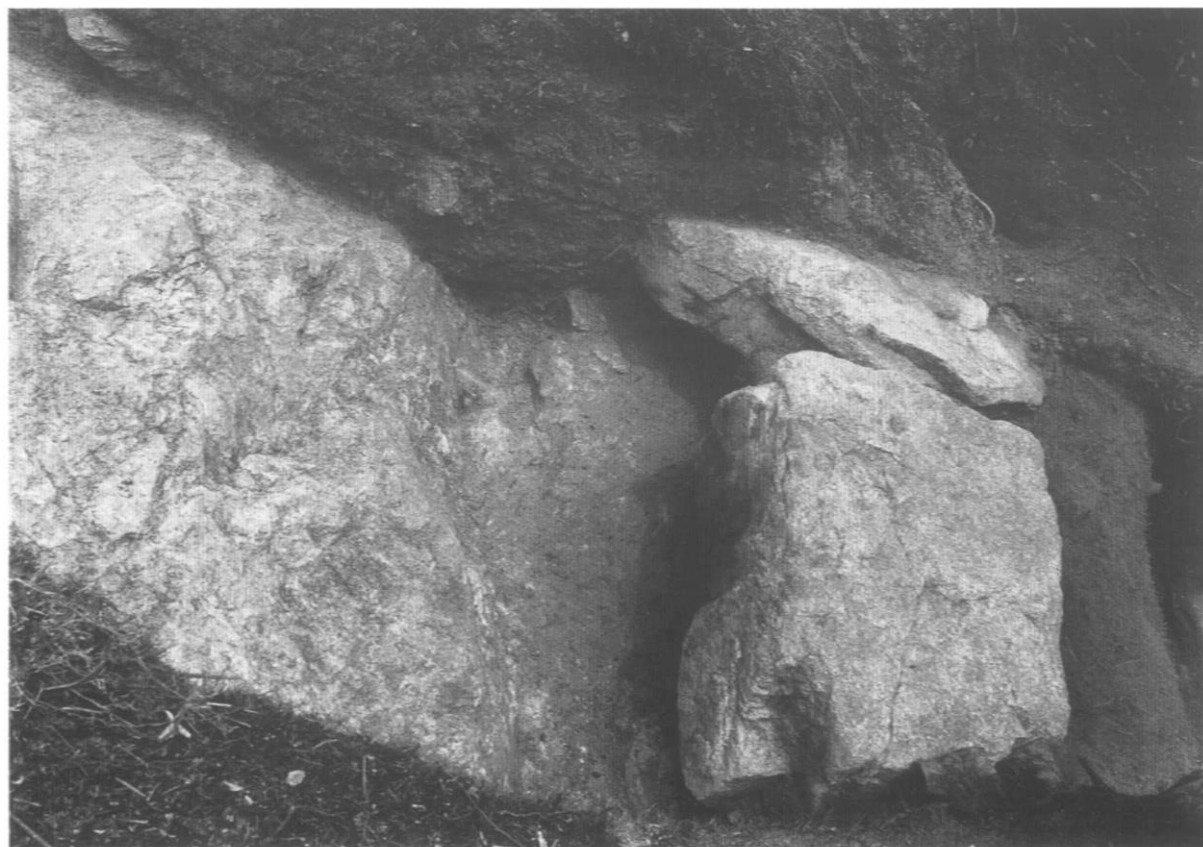




H15-6トレンチ西区 完掘状況(西から)



H15-6トレンチ東区 列石検出状況(南から)



H15-6トレンチ 列石検出状況(南から)



H15-7トレンチ 完掘状況(北西から)



H15-8トレンチ 外郭線検出状況(南東から)



H15-8トレンチ南方岩盤部 外郭線検出状況(北東から)

図版21



H15-8トレンチ南方岩盤部 岩盤変換点



H15-8トレンチ南方岩盤部 ピット状遺構



H15-8トレンチ南方岩盤部 南端



H15-8トレンチ及び北拡張区 1 区



H15-8トレンチ 列石及び背面検出状況



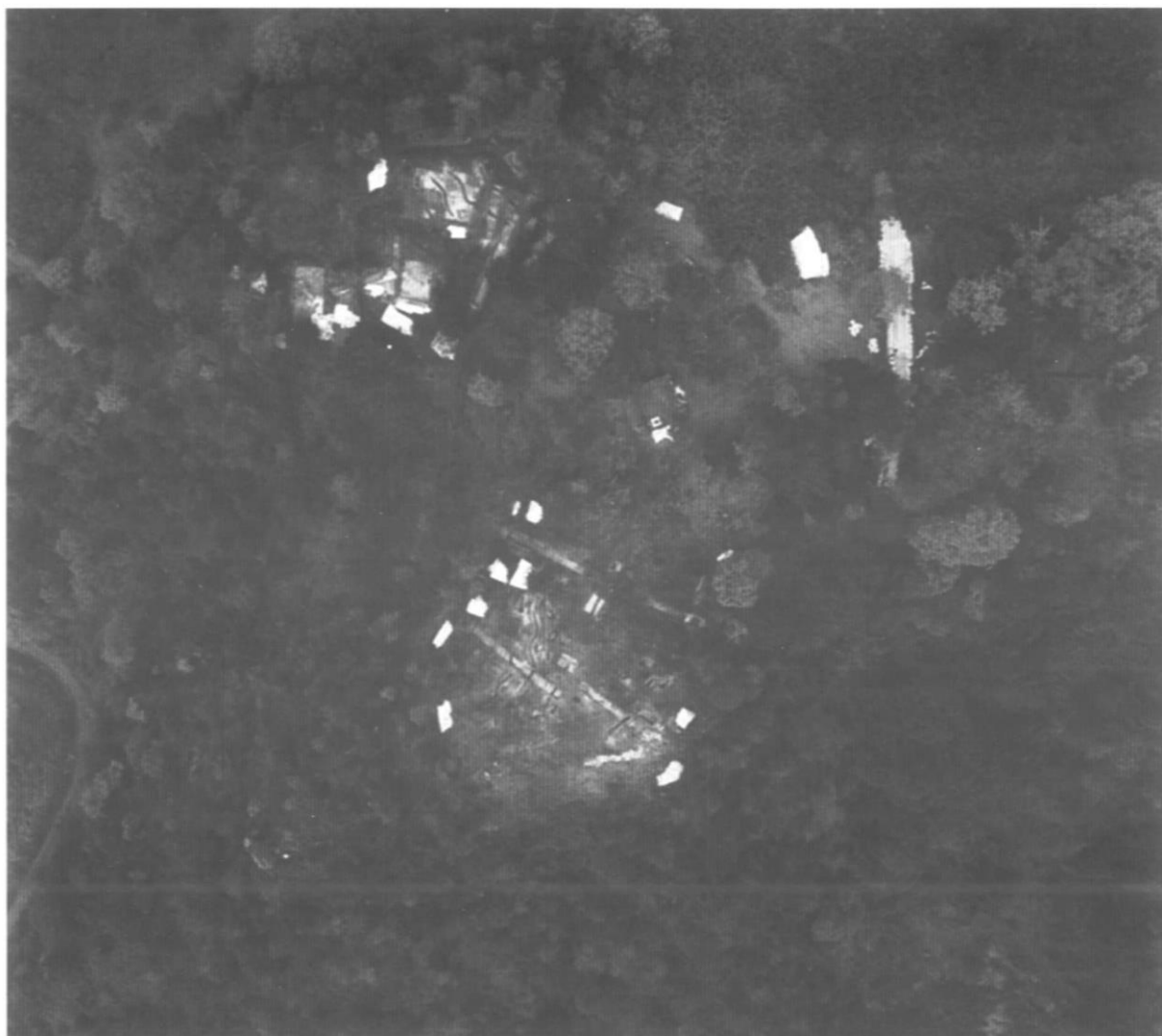
H15-10トレンチ北区 地山検出状況(南から)



H15-10トレンチ南区 地山検出状況(北から)



H15-10トレンチ北区 東壁(北東から)



南部 溝状遺構検出状況（真上から）



H15-5・11トレンチ 溝状遺構検出状況



南部突出部 溝状遺構検出状況



南部突出部西側斜面 溝状遺構検出状況（北から）



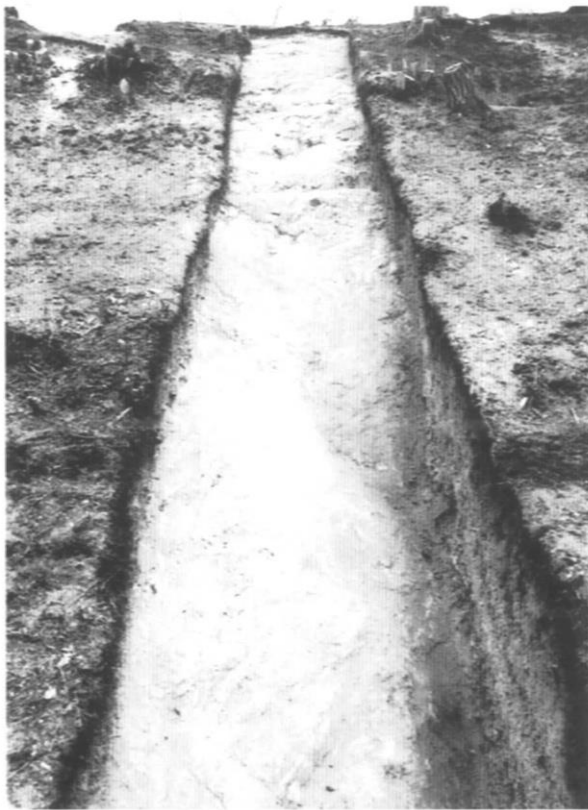
H15-8トレンチ北拡張区 3・4区 溝状遺構検出状況



H15-5トレンチ東拡張区1区 溝状遺構検出状況



H15-5トレンチ 土坑状遺構検出状況



H15-11トレンチ 全景



H15-5トレンチ東拡張区9区・11トレンチ
溝状遺構検出状況



H15-11トレンチ テラス状遺構(テラス2)



H15-11トレンチ テラス状遺構(テラス3)



南東部列石 (A～B 地区) 遠景 (東部頂上から)



南東部列石 (A 地区) 近景 (北東から)



H15-12トレンチ 全景(東から)



H15-12トレンチ検出状況(南から)



H15-12トレンチ 土塁断割り断面(南東から)



H15-12トレンチ P1(東から)



H15-12トレンチ P2(南から)



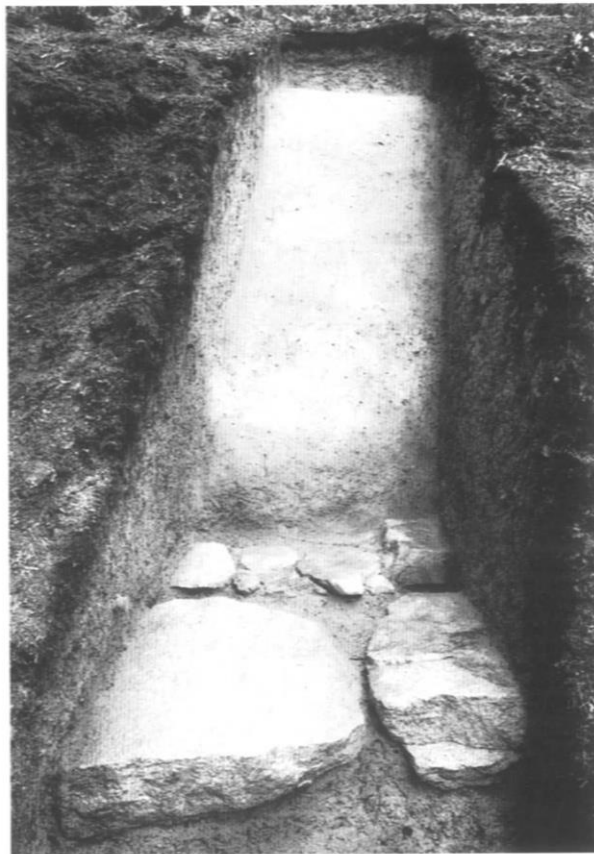
東部 列石検出状況（南から）



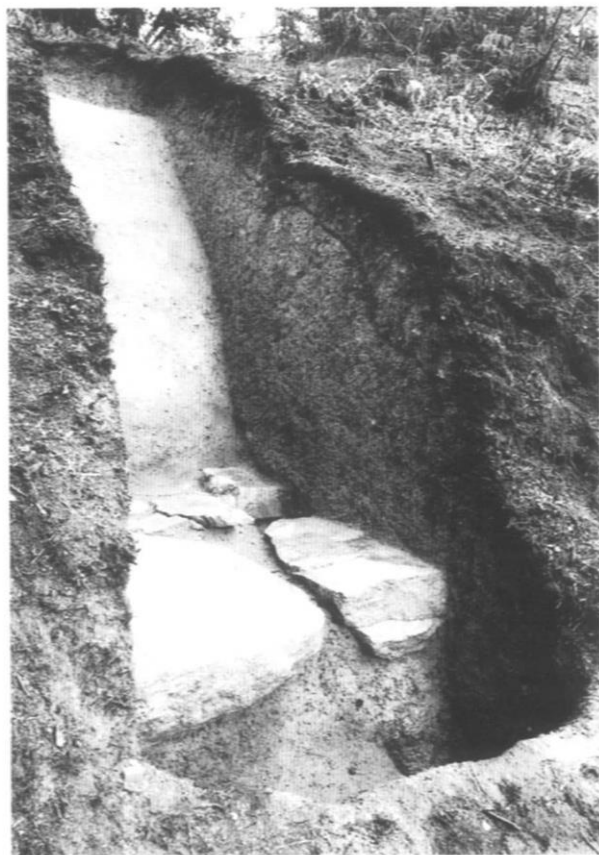
東部列石 岩盤への接続状況 1（南から）



東部列石 岩盤への接続状況 2 (北から)



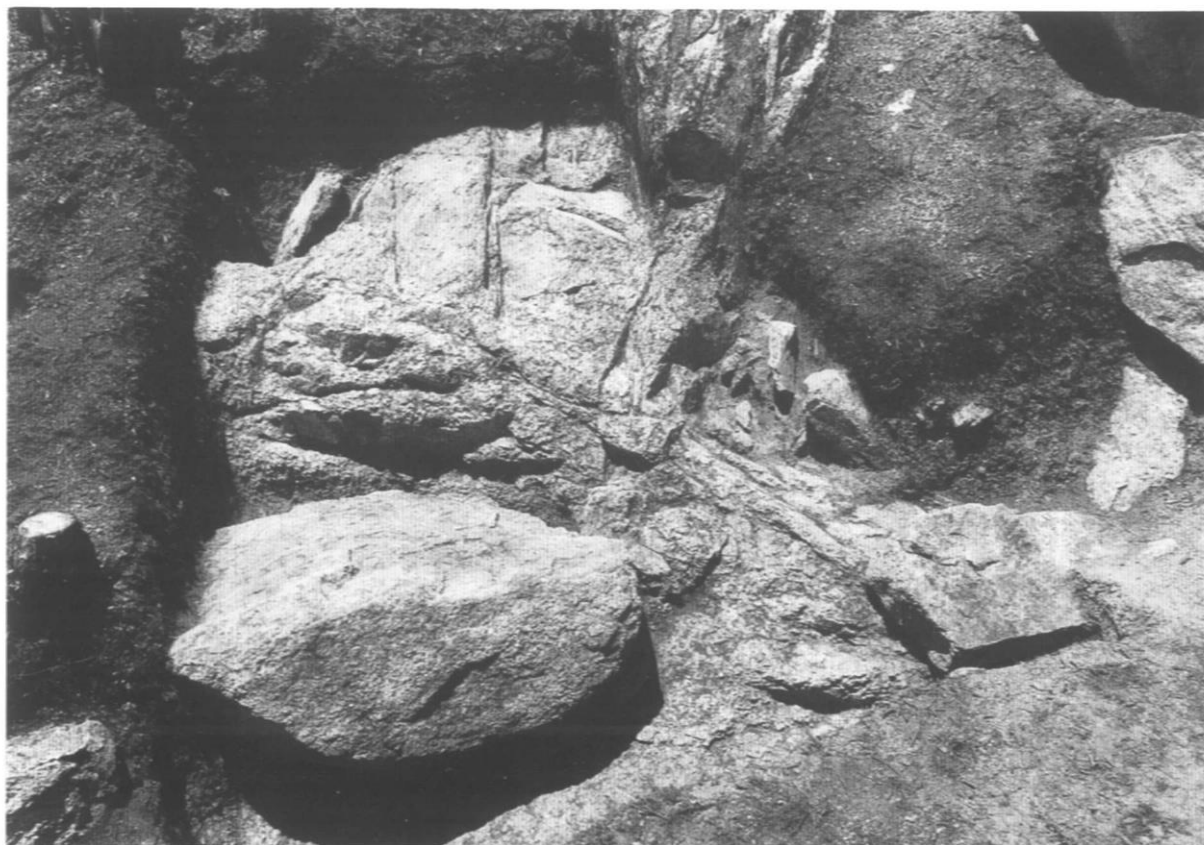
H16-2トレンチ 列石検出状況 (南東から)



H16-2トレンチ 断面 崩落土堆積状況 (南から)



H16-2トレンチ 列石及び裏込め状石



H16-3トレンチ 列石と背後の岩盤1 (東から)



H16-3トレンチ 列石と背後の岩盤2 (南から)



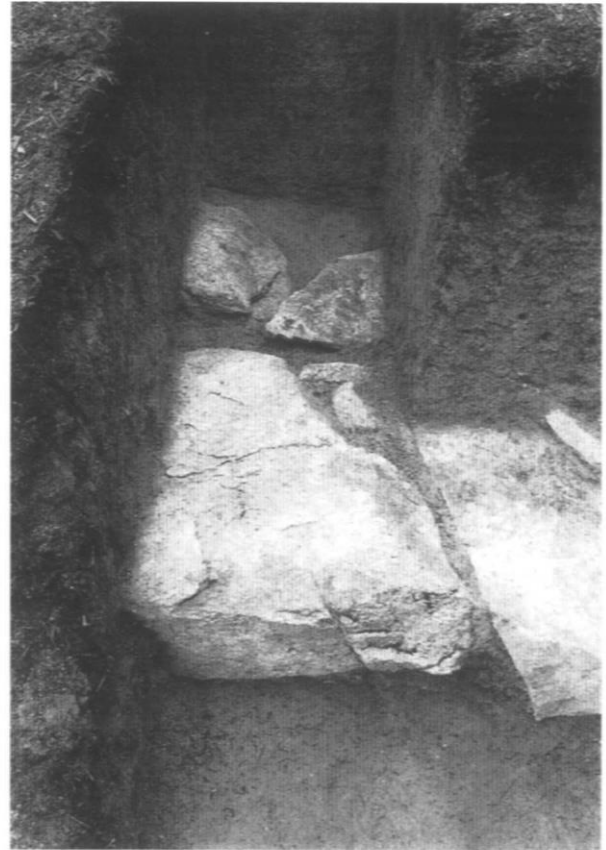
東部 石積み遠景（河原津海岸から）



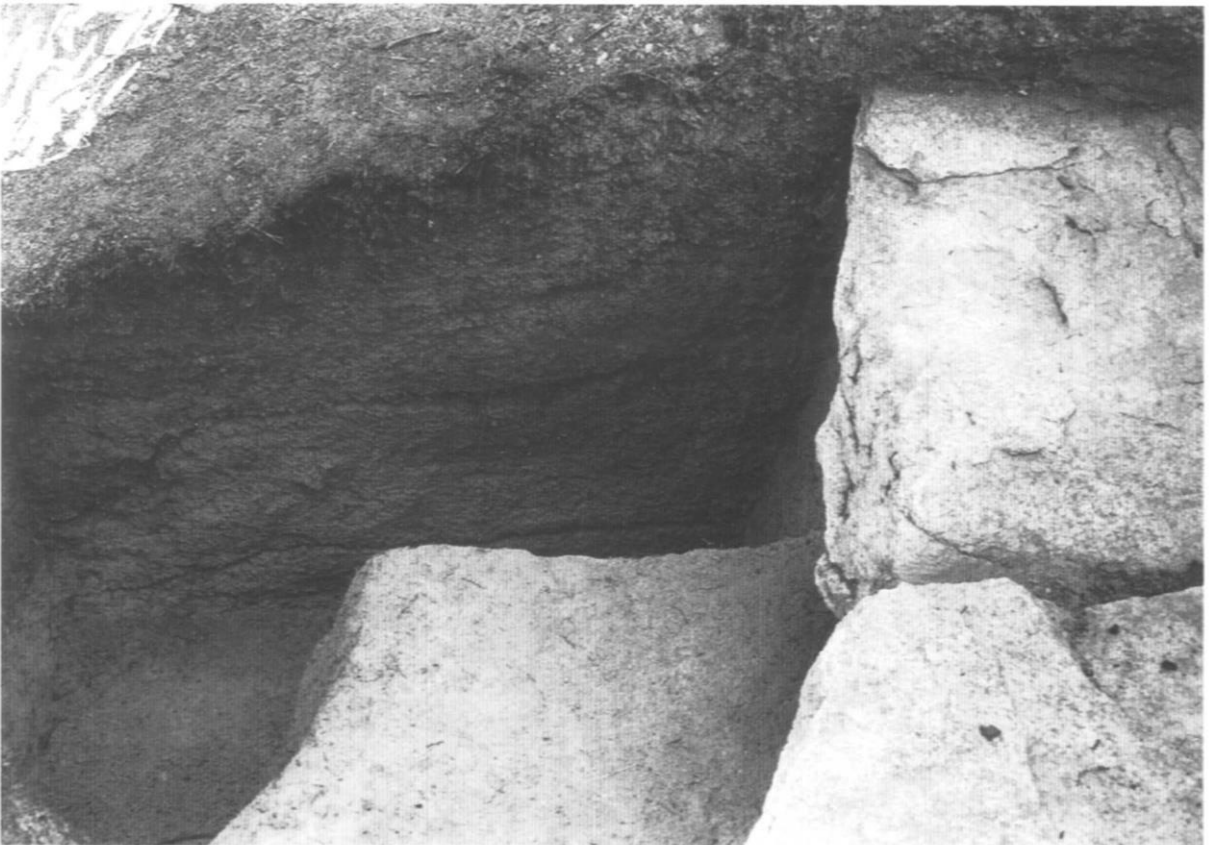
東部 石積み検出状況（南東から）



H16-4トレンチ 列石検出状況(北から)



H16-4トレンチ 南端断割り状況(東から)



H16-4トレンチ 南端断割り列石前面



H16-5・7 トレンチ間列石 (北東から・手前がH16-5トレンチ側)



H16-5トレンチ 近景 (南から)



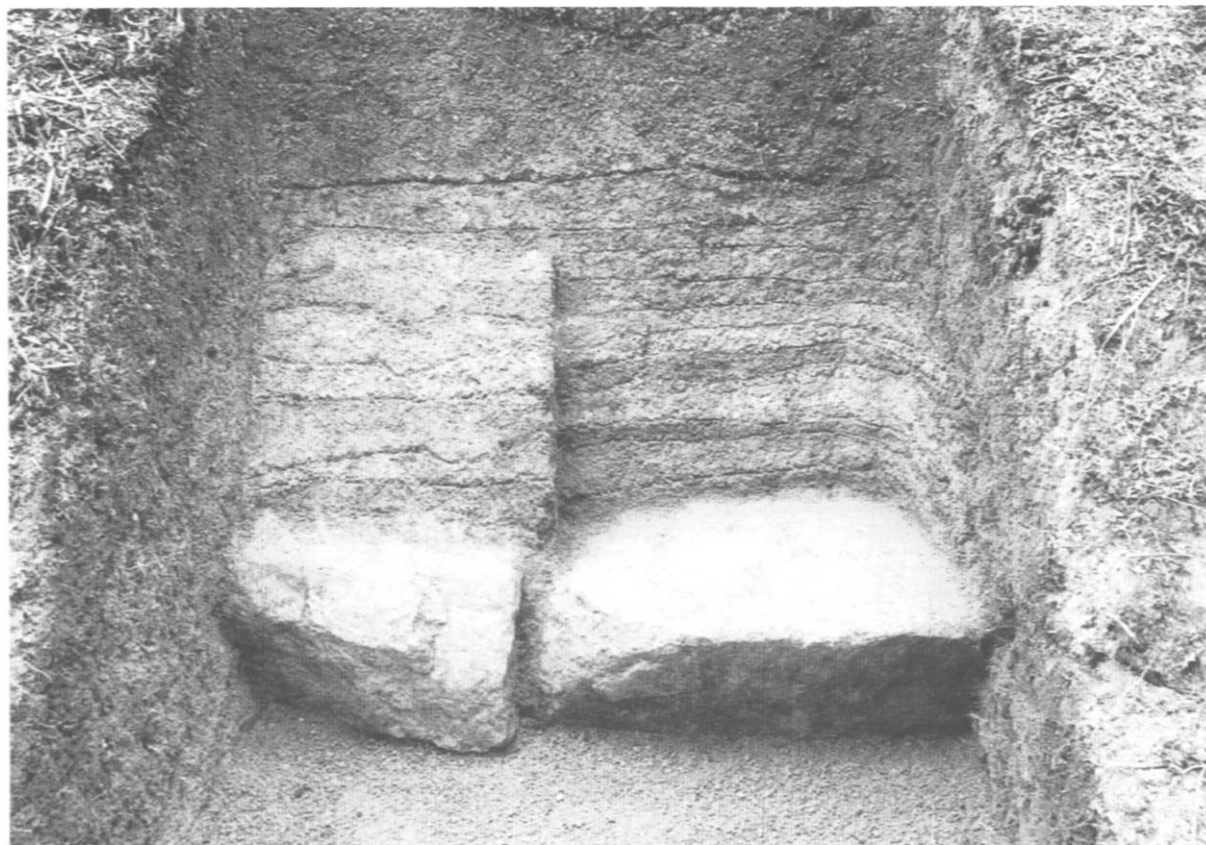
H16-5トレンチ
列石・土塁検出状況（東から）



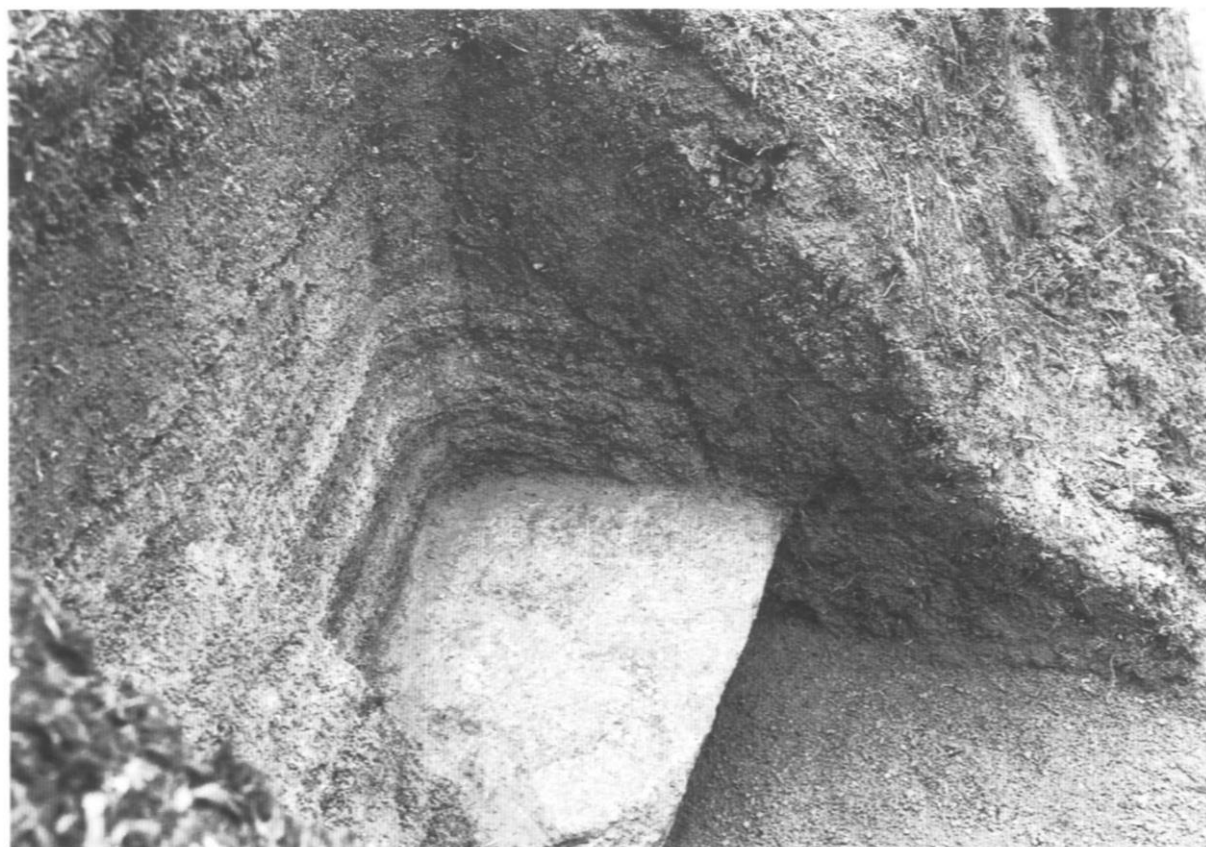
H16-5トレンチ 土塁断割り状況 1



H16-5トレンチ 土塁断割り状況 2



H16-7トレンチ 列石・土塁検出状況 1 (南東から)



H16-7トレンチ 列石・土塁検出状況 2 (南から)



北東部 列石露出地域1（南から）



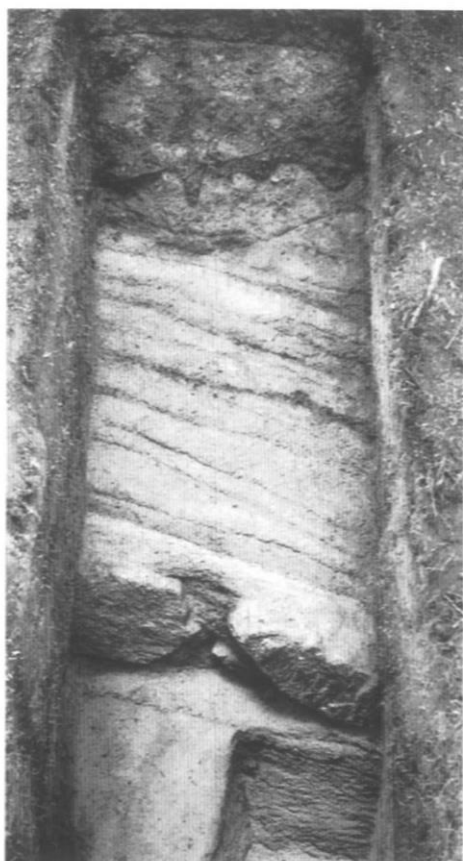
北東部 列石露出地域2（北から）



H16-8トレンチ 列石・石積み検出状況(北から)



H16-8トレンチ 石積み(正面から)



H16-8トレンチ北拡張区
列石・土塁検出状況 1 (東から)



H16-8トレンチ北拡張区 列石・土塁検出状況 2 (南から)



H16-9トレンチ 外郭線検出状況 (北東から)



H16-9トレンチ 土塁傾斜確認状況 (南から)



北部 H15-14・15トレンチ 遠景 (北から)

道路右は医王山



北部 H15-14・15トレンチ 近景 (北から)



H15-14トレンチ 全景(東から)



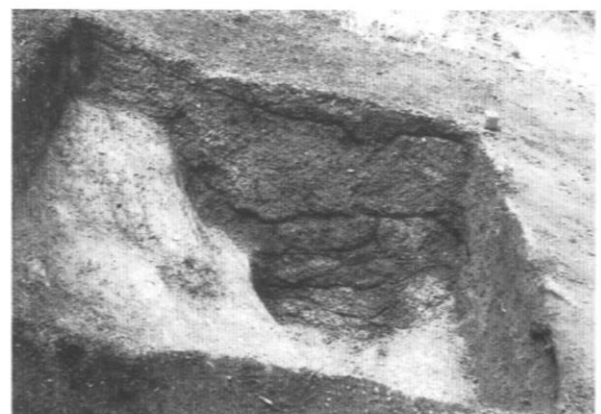
H15-4トレンチ 南端断割り



H15-4トレンチ 西壁断面



H15-4トレンチ南拡張区



H15-4トレンチ南拡張区 西壁断面



H15-15トレンチ 全景 (北西から)



H15-15トレンチ 西壁断面1 (北東から)



H15-15トレンチ 西壁断面2 (北東から)



H15-15トレンチ東拡張区 (北西から)



H15-15トレンチ東拡張区 東壁



H16-10トレンチ及び西拡張区1・2区(西から)



H16-10トレンチ 全景(東から)



H16-10トレンチ南壁



H16-10トレンチ西拡張区1・2区(南から)



H16-10トレンチ西拡張区3・4区(東から)



H16-11トレンチ全景
(東から)



H16-11トレンチ北拡張部
(北東から)



H16-11トレンチ南拡張部
(南東から)



医王山 近景（東から）

矢印はH15-16トレンチ位置



H15-16トレンチ 列石検出状況（北から）



医王山北東斜面 列石検出状況（東から）



永納山山頂から見た医王山

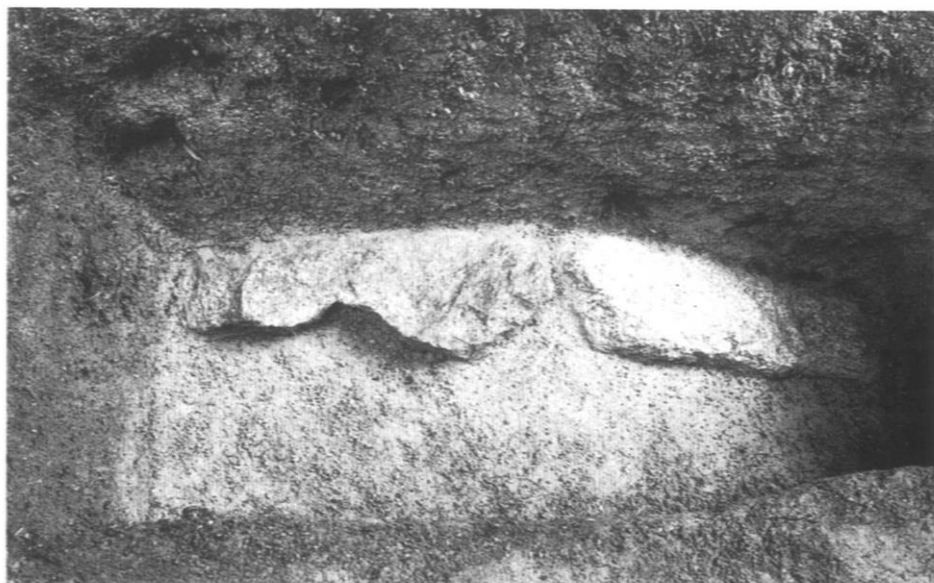


医王山南西斜面 列石検出状況(南から)



医王山南頂上付近 列石検出状況(南西から)

H16-12トレンチ
A区 列石検出状況
(北から)



H16-12トレンチ
B区 列石検出状況
(北から)



H16-12トレンチ
C区 列石検出状況
(北から)





南東部 D地区
列石下崩壊状況



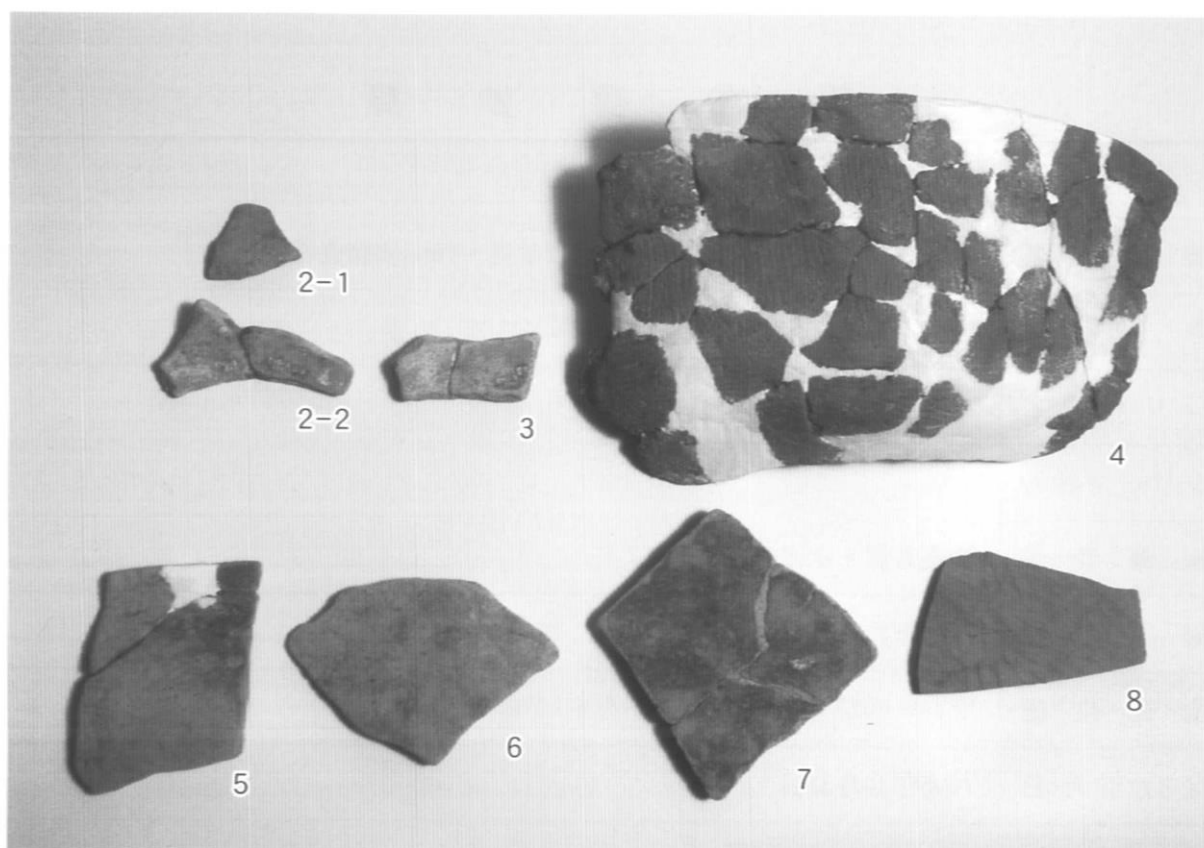
南東部 D地区
列石保護状況



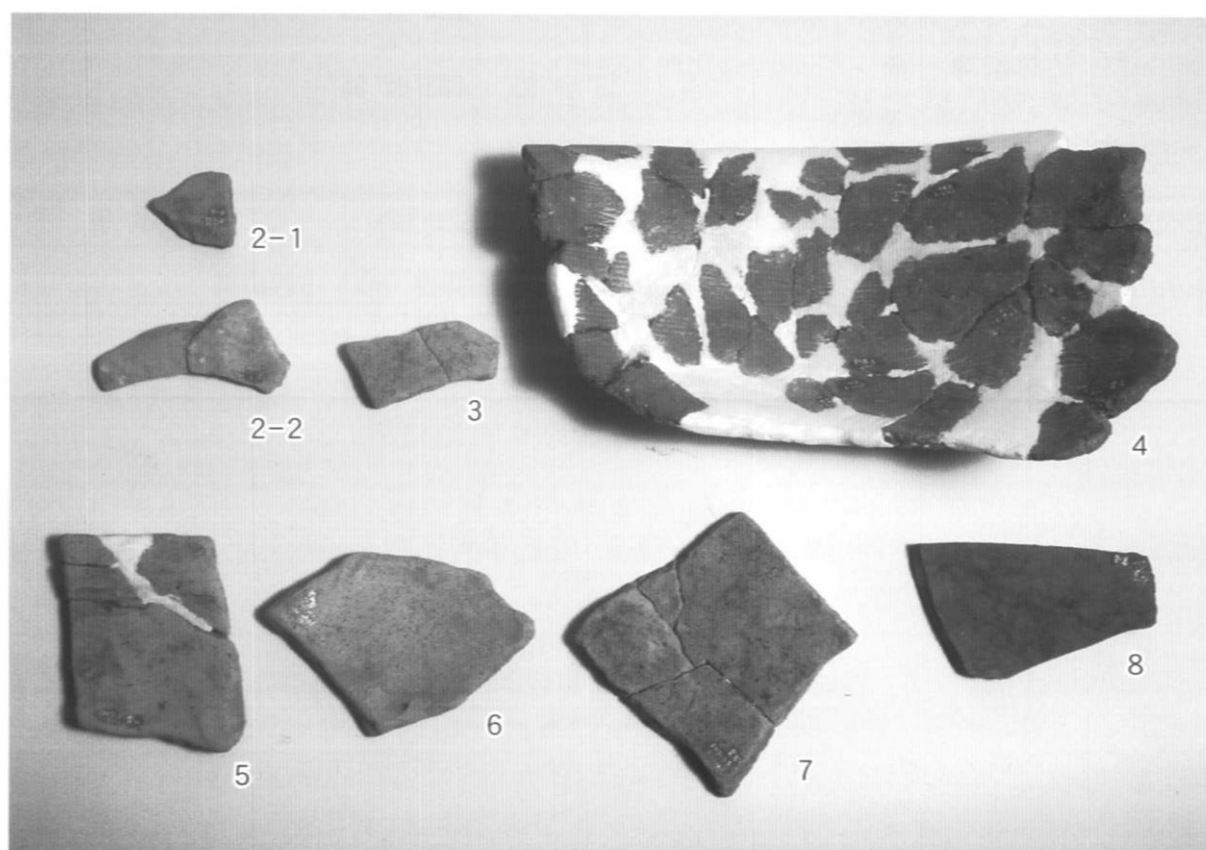
北東部
列石保護状況



(左下) H15-3トレンチ
列石崩落状況
(中下) 山頂東斜面
列石崩落状況
(右下) H16-6トレンチ
列石崩落状況



H14-2トレンチ出土土器 (外面)



H14-2トレンチ出土土器 (内面)

報 告 書 抄 録

フリガナ	エイノウサンジョウアト						
書名	永納山城跡－平成14年度～16年度調査報告書－						
巻次	西条市埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	渡邊芳貴・半沢直也						
編集機関	西条市教育委員会						
所在位置	〒793-0023 愛媛県西条市明屋敷164番地						
発行年月日	2005年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
えいのうさんじょうあと 永納山城跡	えひめけん さいじょうし 愛媛県西条市 かわらづ くす 河原津・楠・ いまばりしまごべえさく 今治市孫兵衛作	38206		33° 58′ 23″ ～ 33° 58′ 55″	133° 02′ 55″ ～ 133° 03′ 26″	約2,000㎡	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
永納山城跡	山城	古代	城壁(列石・土塁・ 石積み)		土師器・ 須恵器片	古代山城	

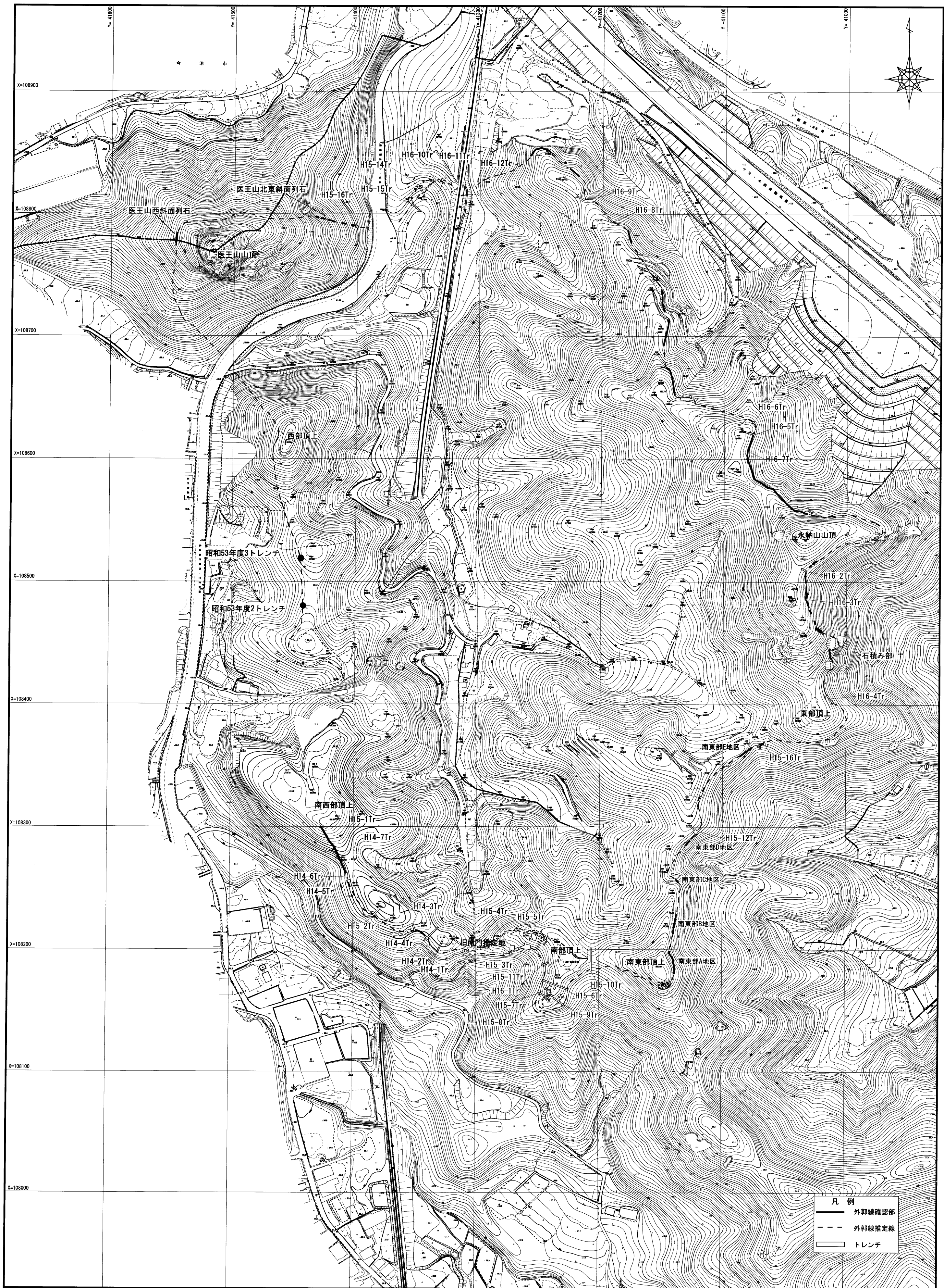
永 納 山 城 跡

平成14年度～16年度調査報告書

平成17年3月

編集・発行 西条市教育委員会
〒793-0023 愛媛県西条市明屋敷164番地
TEL (0897) 52-1254

印刷 有限会社 野口印刷所
〒791-0510 西条市丹原町丹原185
TEL (0898) 68-7053代



付図 永納山城跡 地形図

0 50 100 (m)
(S=1/2000)